

平成19年～20年度 総合科学研究部Ⅱ研究チーム研究成果報告書

研究課題番号 072001
 研究課題名 グローバル化の中の「地域」に関する基礎的研究
 研究期間 平成19年4月1日～平成21年3月31日（2年間）

はじめに

「地域」と聞いて果たして何がイメージされるだろうか？その「地域」は「東アジア」という大きな「地域」かもしれないし、ないしは「九州」、「福岡」、あるいは「七隈」という小さな「地域」かもしれない。いずれにせよ、「地域」は人の生きていくもっとも大切な場所であり、だからこそ人をひきつける。

この「地域」という問いは、学問の諸領域において「国民国家（Nation State）」という枠組みの再考が迫られるなかで、近年注目を集めつつある。その先駆的例として、ヨーロッパ連合（EU）や東アジア共同体論をはじめとする「地域主義」に関する諸研究が挙げられるし、福岡大学においても、「研究教育の理念」のひとつとして『『地域性』と『国際性』の共存』が掲げられている。ただ「地域」という概念は、ヨーロッパや東アジアといった「地域（Region）」を意味する一方で、福岡という「地域（area）」をも意味し、多様な解釈を可能とするものである。しかし、多様な「地域」概念は、逆にいえば理論的に整理されているとは言えず、使用する論者によって解釈にばらつきが出ることもあり得るのが現状である。

こうした状況に対して一定の方向性を引き出す試みとして、われわれ福岡大学研究推進部総合科学研究チーム「グローバル化の中の『地域』」（統括：人文学部教授 松塚俊三）は、平成19年から20年度にかけて、シンポジウム、調査研究、データベース作成を行ってきた。その成果のひとつとして、福岡大学「地域」叢書準備号『「地域」（七隈、福岡、東アジア）と生きる福岡大学』として平成21年3月に出版した。それには、①平成19年9月27日開催のアクセル・シルト氏の公開講演録、②平成20年11月29日開催の福岡大学75周年記念事業シンポジウムの記録、③福岡大学における「地域」研究者データベースを収録し、国際性を担保とした地域理論の整理、地域に根ざした経験交流、そして福岡大学における「地域」に取り組むマンパワーの発掘などを進めてきた。本報告書の第Ⅰ部は、その概要をまとめたものである。

さらに本研究チームは、「地域」としての福岡（あるいは九州）を「外」から再考しようという問題関心から、東アジアのなかでも特徴的な歴史をもつ地域として台湾を選定し、調査研究を行なった。日本統治や戦後の中国国民党による接収を経た台湾がどのような歴史を刻んできたのかをテーマとし、「忠烈祠」や「二二八平和記念館」などを訪問した。また一般的に親日家が多いとされる台湾において、現代において日本がどのように受容されているのかについても考察するため、「観光地」化された街（九份、金瓜石）へも赴き、調査を進めた。第Ⅱ部は、その研究成果である。第Ⅲ部では、日本史、東洋史、西洋史それぞれの専門領域から収集・構築した「地域」としての福岡に関する歴史研究データベースを収録している。データベース作成に関する視点、調査方法などについては、研究分担者の福嶋寛人講師による解題のなかで詳述されている。

研究代表者 松 塚 俊 三

平成19年～20年度総合科学研究部Ⅱ研究チーム研究成果報告書

— 目 次 —

I. 研究組織	3
II. 『『地域』と向き合う福岡大学』の諸企画	4
(1) 公開講演：アクセル・シルト（ドイツ・ハンブルク大学教授、現代史研究所所長） 「ナショナルな語り、ヨーロッパ的構造、地域の展望—1945年以降のドイツ現代史—」 （平成19年9月29日 於福岡大学）	4
(2) シンポジウム：『『地域』（七隈、福岡、東アジア）と生きる福岡大学（1） —研究・連携・創造／何をやってきたのか、何をやるべきか—」 （平成20年11月29日 於福岡大学）	4
(3) 福岡大学における「地域」研究者データベース作成	5
III. 台湾調査研究	6
(1) 調査研究行程・概要	7
(2) 調査報告	
有村奈津希「海外神社と日本帝国主義—「台湾神社」を中心に—」	13
池上 大祐「二・二八事件が語る現代史—「台湾」からみた東アジア—」	15
清原 和之「〈親日〉の理由—台湾人のアイデンティティについて—」	20
久保 知里「観光地化された台湾」	22
古城真由美「台湾における「日本」の受容」	26
松隈 達也「台湾における観光」	28
山田 雄三「台湾における日本統治時代の経験とポストコロニアルの諸問題」	31
IV. 「地域」に関する歴史研究データベース	38
【解 題】福嶋寛之	
(1) 福岡（九州）をフィールドとする研究リスト	41
(2) 外国史（西洋史・東洋史）からみた地域に関する研究リスト	62
おわりに	173

I. 研究組織

（平成21年10月1日現在の所属・資格）

研究代表者

松塚 俊三 福岡大学人文学部歴史学科教授

研究分担者

星乃 治彦 福岡大学人文学部歴史学科教授

森 丈夫 福岡大学人文学部歴史学科講師

福嶋 寛之 福岡大学人文学部歴史学科講師

研究協力者

古城真由美 福岡大学非常勤講師

池上 大祐 福岡大学人文学部ポストドクター

太田黒真美 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程後期

久保 知里 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程後期

松隈 達也 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程後期

山田 雄三 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程後期

有村奈津希 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程前期

清原 和之 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程前期

II. 「『地域』と向き合う福岡大学」の諸企画

わが福岡大学には、地域医療の領域で、市民の命を必死になって救おうとしている人々がいる。地域の教育の荒廃と向き合っている人もいる。そうかと思えば、環境は日本だけで考えることができず、少なくとも東アジアという地域で考えないと解決できるものではないと考える人々もいる。彼らは、東アジアとの環境や持続可能な(sustainable)社会で東アジアと手を結ぼうとしている。二万人の学生、千人を超すスタッフを抱える福岡大学と「地域」を論じだしたらきりが無い。ただ、問題は、その貴重な営みが有機的につながっているわけではなく、孤立していることであり、埋もれたままの状態になっていることである。小さな地域と大きな地域はどう関連するのか、といった理論的な問題の解明も遅れている。

そこで、「グローバル化の中の地域」研究チームは、「国家」に代わる新たな分析枠組みとしての「地域」に着目し、国際シンポジウムと地域シンポジウムを開催した。また福岡大学における「地域」への取り組みを発掘するための土台として、「地域」に携わる福岡大学研究者データベースを作成し、これらの成果は、福岡大学「地域」叢書『「地域」(七隈、福岡、東アジア)と生きる福岡大学(以下、地域と福岡大学)』にまとめている。以下は、上記の取り組みの概要である。詳細については『地域と福岡大学』をご参照いただければ幸いである。

(1) 公開講演：アクセル・シルト(ドイツ・ハンブルク大学教授、現代史研究所所長)「ナショナルな語り、ヨーロッパ的構造、地域的展望—1945年以降のドイツ現代史—」(平成19年9月29日 於福岡大学)

本研究チームは、多様な意味をもつ「地域」概念を理論的に整理する試みとして、七隈史学会との共催で、ドイツ・ハンブルク大学教授、現代史研究所所長アクセル・シルト(Axel Schildt)氏を招聘し、平成19年9月29日の七隈史学会大会にて「ナショナルな語り、ヨーロッパ的構造、地域的展望—1945年以降のドイツ現代史—」と題した公開講演を開催した。『地域と福岡大学』の第1章には、その講演録とあわせて、研究チームメンバーの人文学部教授星乃治彦による解題も掲載されている。

シルト氏は、まず、ナショナルな語り(ナラティブ)という概念を、客観的な歴史研究の成果からだけではなく、社会全体や社会の一部の政治的要求からも生み出されるものと意味づけたいうえで、旧西ドイツにおいてその時代その時代で支配的だった5つのナラティブ(成功の

歴史としての西ドイツ、失敗の歴史としての西ドイツ、近代化の歴史としての西ドイツ、過去の重荷を持った西ドイツの歴史、西欧化した西ドイツ)について紹介し、現実世界ではこれらが交じり合って1945年以降のドイツ現代史の叙述のなかに現れてきたと論じた。次の論点である「ヨーロッパ的構造」については、理念的には超国家的結びつきを伴ったヨーロッパを希求しながらも、経験的・具体的にヨーロッパをみれば、国民国家という枠をこえたコミュニケーションの関係は見出せないとして、超国家的視点をナショナルな現代史の補完物として捉えた。3つの目の論点として、ナショナルな語りと違ったものを示す手段として、湾港都市のハンブルクを事例として、地域的ないしローカルなレベルで歴史を叙述することの意義をシルト氏は強調した。

そして、シルト氏は「狭い意味の地域的、ないしはローカルな現代史がもつ価値の高さを強調したいと思います。地域史こそ、ナショナルなナラティブ(語り)が例示されながらも、それとは区別されるものですし、超国家的でもあるからであります」と結論づけた。この指摘はさまざまな地域活動に対する理論的支柱となりうるものである。

(2) シンポジウム：「『地域』(七隈、福岡、東アジア)と生きる福岡大学(1)—研究・連携・創造/何をやってきたのか、何をやるべきか—」(平成20年11月29日 於福岡大学)

福岡大学は、「教育研究の理念」の一つとして「『地域性』と『国際性』の共存」を掲げ、各分野において実績を蓄えてきた。問題は、そうした福岡大学における努力・成果が、孤立したものとなりがちなことであり、福岡大学全体の戦略の中に位置づけられていないことである。まずは、福岡大学の同僚が「地域」のなかで何を考え、活動しているのか、その経験を知ることから始めなければならない。このような問題意識のもと、われわれは、福岡という「地域」に根ざしたさまざまな教育、研究、実践活動の実態把握に努めた。そのためわれわれは、研究する場(=福岡大学)を基点として、学内の研究者がどのような「地域」活動を展開しているのかを披露し合う場を提供する計画に着手した。福岡大学の問題点として、学内の研究者および研究組織による「地域」に対する努力・成果を披露しあい、共有する機会がなかったからである。こうした経緯から、平成20年11月29日に、福岡大

学75周年記念事業の一環として開催された、シンポジウム「『地域』（七隈、福岡、東アジア）と生きる福岡大学（1）—研究・連携・創造/何をやってきたのか、何をやるべきか—」を開催した。ここでは、これまで「地域」と向かい合い、活動を続けてきた4つの学内組織（環境未来オフィス、都市空間情報行動研究所、福岡大学病院・地域医療連携室、NPO「健康ネット福岡」）の自己紹介も兼ねながら、福岡大学がどの地点まで到達しているのか、これから何が出来るか、確認することから始めた。

人文学部白川教授には、文化人類学の現状をおさえつつ、「ローカルな知」の拠点としての福岡大学の今後のあり方を提示していただいた。工学部今田教授からは、環境行政のあり方および大学間、都市間協力の現状と課題を、4つの地域的視点（七隈、福岡、東アジア）の視点から報告していただいた。経済学部長/都市空間情報行動研究所所長の齋藤教授は、人の移動（回遊）がもたらす経済効果、またそれによって醸成される「当該都市を訪れる来訪者の心の中の当該都市の魅力資産価値」を意味する「都市エクイティ」研究の可能性を示唆された。福岡大学病院志村英生准教授には、医療の進歩による慢性疾患の時代へと変化するなかで、人生の中で病院と関わる時間が長くなるという社会状況をふまえた福岡大学病院地域医療連携室の取り組み（インターネットサービスや糖尿病患者への指導）を紹介していただいた。瓦林副学長からは、地域完結型医療（周産期母子医療・一般急性期医療・リハビリテーション・介護医療・緩和医療・予防医学を地域のなかで完結させるもの）の取り組みに積極的に関わっている福岡大学病院の姿を披露していただいた。

ディスカッションおよびアンケート結果による反応はすこぶる好評であった。学部横断的なシンポジウム開催

自体が、福大で画期的な試みとしての評価を多くの方からいただいた。また、どのような研究者がいるのか、という情報交換の場にもなったという意見もいただき、経験交流の場としても意義あるものとなった。また福岡大学が、地域住民（市民）に対する開かれた窓口としての機能を果たすべきであり、そのために必要な組織上の運営方法のあり方にまで議論が及んだ。そして一番多くいただいた意見が「今後も継続してほしい」とのことであった。以上のようなシンポを通じて、さまざまな学部や部署を乗り越え、福岡大学のマンパワーを発掘することができ、充実した経験交流の場を提供することができたと考えられる。

（3）福岡大学における「地域」研究者 データベース作成

「地域」に関する経験交流の中で、浮上してきた問題は、地域に取り組む研究者が福岡大学にどれほどいるのかということであった。前述のシンポジウムにおいても、学部の枠を超えてしまうと、どのような研究者がいるのか、どのような活動をしているのかが見えてこないという問題点が指摘された。この点を解決するために、われわれは「地域」に取り組む福岡大学のマンパワー調査にとりくんだ。方法としては、福岡大学ホームページに公開されている研究者情報に依拠しながら、全ての研究者の調査を行い、氏名・専攻・研究テーマ・地域に関する主要業績・社会貢献の項目にそってデータを抽出した。ここに整理された情報は、地域への取り組みに関する「学内連携」を今後につなげていく可能性をもっているといえよう。

星乃治彦・池上大祐

Ⅲ. 台湾 調査 研究



「第二次大戦後の「植民地解放の時代」のなか、アジア・アフリカにおける脱植民地化は、「建国」の過程であった。植民地的残滓の払拭と同時に当該社会が自分自身を発見するという意義をも有する。しかし、その脱植民地化という社会の自己再発見の過程は複雑なものであり、必ずしも直線的に進行するものではない。他の植民地が「独立」、「解放」と表現するなかで台湾では「光復〔中国による再領有〕」と呼ばれた。ここに戦後台湾史の特殊性が表現されている。」(呉密察「台湾人の夢と二・二八事件—台湾の脱植民地化—」『近代日本と植民地 8巻』岩波書店、1993年、39-40頁。)

【調査日程】2009年2月23日(月)～25日(水)

【調査スタッフ(計9名)】

星乃 治彦¹⁾、有村奈津希²⁾、池上 大祐³⁾、太田黒真美⁴⁾、清原 和之²⁾、
久保 知里⁴⁾、古城真由美⁴⁾、松隈 達也⁴⁾、山田 雄三⁴⁾

- 1) 福岡大学人文学部歴史学科教授
- 2) 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程前期
- 3) 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程
- 4) 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程後期

（1）調査研究行程・概要

< 2月23日（月） >

【全員行動】 星乃、有村、清原、池上、山田、松隈、古城、太田黒、久保

【行き先】 忠烈祠→二二八和平公園および近辺の建築物を見学→行天宮、龍安寺

【概要】

忠烈祠は、辛亥革命・抗日戦争・国共内戦における戦没者を祀る軍管理下の施設である。両脇の部屋には、殉死した「烈士」たちの名前が刻印された札が祀られていた。さらに奥におくと、「中華民国」の戦史が、絵

や彫刻などによって描かれていた。二二八和平公園は、二二八事件の記憶をとどめておくためのモニュメントであるのと同時に、「民主化」を強調するものでもあり、1990年代に記念碑が創建された。他、二二八公園周辺の日本統治時代に建設された施設（劇場、現台湾大学付属病院）などを網羅的にめぐった。道教に関連する行天宮・龍安寺では、道教に対する信仰の厚さと、それが台湾社会に深く浸透している様子を垣間見ることができた。



左は忠烈祠本堂。右は、本堂の左右には多くの烈士たちが祀られている部屋が設置されている。



左は、二二八和平公園中央の記念碑。1995年に当時の台北市長であった陳水扁氏が設置した。中央は、日本統治時代に建設された旧台北帝国大学医学部。現在は、台湾大学付属病院となっている。右は、行天宮。

（文責 池上）

< 2月24日 (火) >

【台北調査班】星乃、池上、有村、清原

【行 き 先】 総統府→国立歴史博物館→国立台湾博物館
→二二八紀念館→孔子廟

【概 要】

総統府は日本統治時代の台湾総督府であり、児玉源太郎総督の時代に建設されたものである。彼をはじめとする幾人かの総督は、台湾に近代化をもたらした人として台湾人のなかで尊敬されているとのことであった。国立歴史博物館には、殷代からの遺品・図像などが展示されており、台湾がもつ「中華」としてのアイデンティティを感じることができる。

国立台湾博物館は、1915年の日本統治時代に建設された西洋風の建築物であることがまずは歴史的に重要である。内部の展示については、あまり歴史を感じることができなかったが、一部、「児玉・後藤展示室」が、設けられており、台湾の近代化をもたらした功績者として扱われている。なお、この博物館の入り口には、鳥居が残っており、そこには、同じく台湾に近代化をもたらしたと

される明石元二郎が祀られているという。明石は福岡出身ということで、今後具体的に掘り下げる必要があろう。

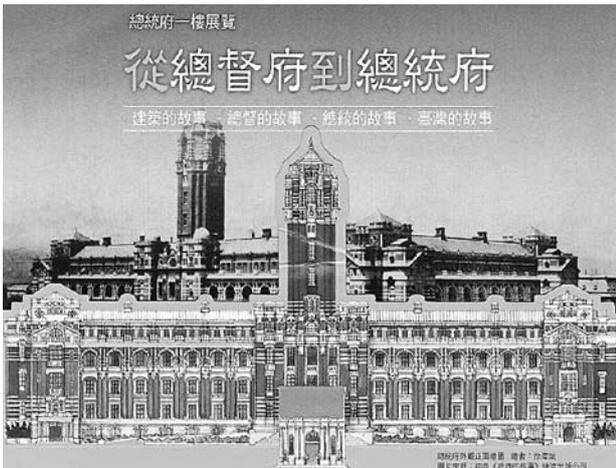
二二八紀念館は、規模は大きくないものの、内容はとても濃く、二二八事件に至る原因を、遠因・近因と段階的に説明するにあたり、当時の新聞の切り抜きを効果的に配置することで、臨場感あふれる構成となっていた。そしてただ単に事件のあらましを説明するのではなく、それがタブー化されたのち、1980年代の民主化のうねりとともに、真相究明に動き出していく過程も、館内映像で見ることができた。

孔子廟は9世紀に建立されたもので、1907年に日本によって壊され、日本人女子のための高等学校が建設された。その後、孔子廟の復興を目指して、1925年に再建されたものである。ただ、今回の調査では、日本や東アジアを読み取れるような材料はなかったように思われる。

【金瓜石・九份(チョウフン) 班】



左は総統府。パラオ大統領夫妻が台湾に滞在していたため、総統府近隣には、パラオの国旗が掲げられていた(中央)。



總統府のパフレット



台湾歴史博物館



国立台湾博物館入口付近の鳥居



台北二二八紀念館

(文責 池上)

【台北郊外調査班】山田、松隈、古城、太田黒、久保
【概要】

金瓜石は日本統治時代に金鉱で栄えた町。1987年に閉山したが、現在は「自然景観を活かした台湾初のエコミュージアム」として、金鉱時代の様々な遺物が保存されている。皇太子（のちの昭和天皇）のご来訪のために作られた「皇太子迎賓館」や、日本人社宅地区、同じく日本統治時代につくられた「黄金神社」など。また金瓜石の鉱業の歴史が学べる黄金博物館もある。これらの展

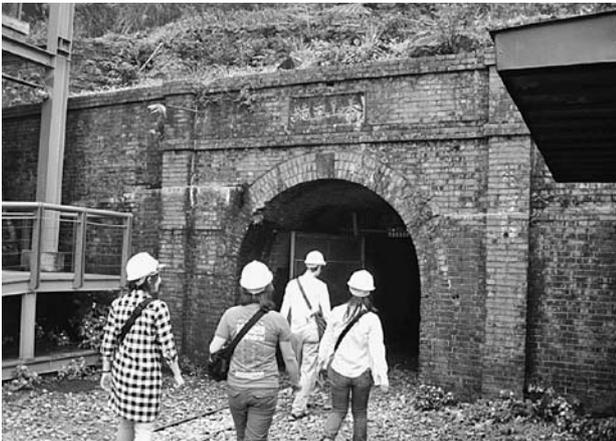
示には不思議と日本統治時代を批判するような色合いは見られず、むしろ金鉱で栄えていた「古きよき時代」としての側面に力点が置かれている。隣町の九份もかつて金鉱で栄えた町。九份をロケ地とした映画「非情城市」のヒットもあり、現在は台湾を代表する観光地となっている。金鉱時代の面影を残す古い町並みに飲食店や土産物店が立ち並ぶ。金瓜石、九份ともに、「歴史・産業遺産」（古い町並みや坑道等）を利用することで、観光地として見事な再生に成功している。



皇太子迎賓館 (金瓜石)



金神社跡 (金瓜石)



本山五坑坑道入口 (金瓜石)



本山五坑坑道内部 (金瓜石)



九份五坑坑道案内



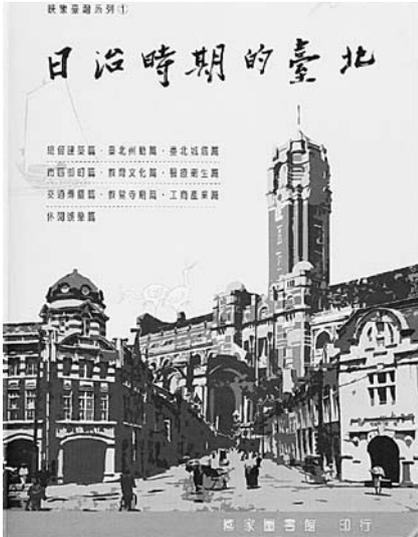
九份の町並み

(文責 山田)

<台湾大学近辺の書店めぐり> 池上、松隈、山田、清原（18：00～19：30）

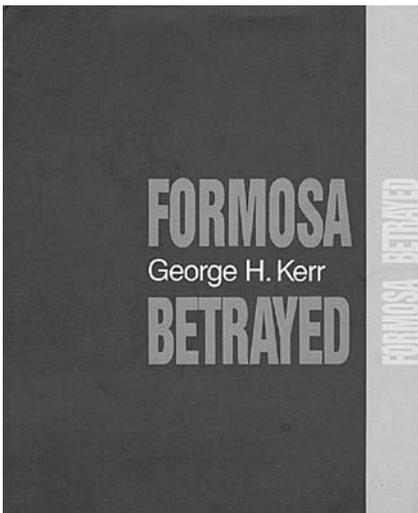
【概要】

台湾大学近辺に書店には、貴重な学術書がそろっており、台北の歴史図説（中国語）、台湾とアメリカの関係史（英語）、台湾のなかの日本建築に関する図録（中国語）などを購入した。



国家図書館閲覧組編『日治時期的台北』国家図書館、2007年

日本統治時代の台北の建築物に関する絵画・写真画像および解説をまとめたものである。その対象は、総督建築、台北州庁建築、市街地、教育施設、公園など多岐に渡っており、当時の台北の雰囲気を垣間見ることができる。



George H. Kerr, *Formosa Betrayed*, Boston, 1965.

日本統治時代の台北にて高等学校で教鞭をとっていた著者は、戦後在台湾のアメリカ領事に従事していた1947年の「2・28事件」を目の当たりにした。本書は、その展開をまとめあげたものである。



片倉佳史、姚巧梅『台湾土地。日本表情：日治時代遺跡紀行』玉山社、2004年。

日本統治時代（1895-1945年）の台湾で建造されたものを写真入りで紹介している。建築は主に日本家屋、神社建築、コロニアルスタイルの三種に焦点が当てられ、なかには駅舎など台湾の近代化を象徴するような建築も紹介されている。日本と台湾の近現代史を建築物を通して眺めることができる。

（文責 池上・松隈）

<2月25日 (水) >

【全員行動】星乃、有村、清原、池上、山田、松隈、古城、
太田黒、久保

【行き先】故宮博物院

【概要】

台湾の故宮博物院には中華民国政府が台湾へと撤退する際に故宮博物院から精選して運び出された美術品が主に展示されており、その数が合計60万8985件冊にも及ぶことから世界四大博物館のひとつに数えられている。さすが、中国数千年の歴史における文化財を並べているとあって、芸術品の鑑賞としての見ごたえは十分にある。特に、1階の「宗教芸術」においては、アジア諸国の仏像、密教の祭具、各時代の仏画などが数多く展示されている。日本と似ているようで違う、心地よい“違和感”があり

芸術的関心を大いにそそられる。しかしながら、台湾の文化ナショナリズムにおける故宮博物院の意義となるとどうか。故宮博物院に展示されているのは中国王朝の宝物ばかりである。この博物館が語るのは「中国（中華人民共和国）の歴史」であって、「台湾（中華民国）の歴史」ではないのだ。この博物館をめぐると、台湾の文化の中心がどこにあるのか分からなくなってくる。この曖昧さは台湾が辿ってきた歴史そのものであり、今なお揺らぐ台湾ナショナリズムの象徴とも言えるのではないだろうか。

(文責 太田黒)



(2) 調査報告

海外神社と日本帝国主義—「台湾神社」を中心に—

有 村 奈 津 希

1. 「台湾神社」の創建とその性格

1895年に台湾が日本の統治下に入り、翌1896年から台湾各地に神社の創建が開始された。台湾初の神社は、台南にある鄭成功を祀った廟（開山王廟）を神社として改称した開山神社であった。その後、主要な都市には神社が創建されたが、台湾にある神社のほとんどの神社が1930年代に創建され、最終的に公式な神社は66社、他に非公認の神社が200社以上あったとされている。

台湾にある数多くの神社のなかでも新領土台湾の「総鎮守」たることを目的として創建された神社である台湾神社は台湾・台北市の劍潭山に創建され、1901年10月27日から1945年に廃絶に至るまでの44年間総督府下台湾において、社格・規模的にも神社序列の頂点を画していた。台湾総督下でこれを基準点として、それ以外の格神社の格付け・序列化が為されていたと考えられる台湾神社の性格から、日本内地から台湾へ向けられるまなざしと日本帝国主義下での海外神社の役割についてみていきたい。

台湾神社における当初の祭神は、北白川宮能久と開拓三神と称される大国魂命、大己貴命、少彦名命という、合わせて二座四神であった。まず開拓三神については高木博志が、台湾神社以外に札幌神社・樺太神社がいずれも開拓三神を奉斎していることから、「北海道と台湾を共通のものとして捉える行政の認識」、つまり「『領土開拓』の神学」を指摘している。未開・未接触の地への「文明」の進出という認識により担われるこの「開拓」意識は、朝鮮にみられるような歴史的な国家間・民族間交渉の蓄積や外交の相手としての実感を資源とした「同祖」論¹とは基本的に異なる。次に北白川宮能久親王である。先行研究では、皇族そのなかでも特に四親王家の出身である能久親王を天皇崇拝と結びつける傾向が強いようであるが、天皇・皇族であっても、同時代人を「総鎮守」或いは官国弊社に祭ることは極めて異例であった。このことは能久親王が皇族であるだけでなく、「台湾平定の功

労者」と捉えられているためだと考えられている。開拓三神と能久親王は<復古>と<開化>という全く別の次元の思想信仰的要請から導かれた祭神であり、二つの性格を併せ持つてはじめて、台湾神社は「総鎮守」足りえたのである。

2. 台湾神社宮司山口と信仰の質的転換

一方、「台湾神社」を祭る側についても着目したい。44年間に及ぶ台湾神社の歴史のうち35年間宮司を務めていた山口透は、「台湾神社」の性格を考える上で注目すべき人物である。北白川宮能久親王率いる近衛師団出征の際、布教使として神宮教から派遣されてきた山口の基本的な信仰の姿勢は、中国式の寺廟（中でも特に孔子廟）に敬意を払い、尊重し、「神儒一致」を単なる信条の問題ではなく、実践しようとするものであった。その背景には山口が神宮教布教使出身であるということもある。「総鎮守」たる伊勢神宮の唯一性に尊厳を求める信仰は、この当時も神道思想において一般的であり、神宮教・神宮奉斎会も当然こうした信仰の下にあり、国家として神社に皇祖神を奉斎することは原則として伊勢以外の土地ではあり得なかったのである。事実、神宮奉斎会が台湾神社への皇祖神奉斎を求めた形跡は全くない。²

1937年、82歳の高齢を理由とした山口の台湾神社宮司引退、そして1938年の死去は皇祖神信仰のひとつの質的転換点であった。1936年と言えば二・二六事件の激動が日本をゆるがせた年であるが、この1936年7月25日に総督府の諮問機関「民風作興協議会」の答申で、国民精神振作・同化徹底のため「敬神思想普及」と並んで在来宗教・慣習の「改善・打破」が掲げられた。この時点で総督府自身はこの答申を受けた明確な方針は出していないものの、40年近く続いてき旧慣温存政策の放棄が指針として文書に名言されたのは確かである。この1936年には、朝鮮総督府下においても神社制度の大幅改正が為された。台湾・朝鮮両総督府下で同じ時期に、敬神崇祖に

¹ 朝鮮神社の祭神は天照大神（皇祖神）と明治天皇、共に朝鮮に特徴的な祭神。朝鮮神社創建の際、皇祖神は同祖である両民族共通の「国祖」たることになり、また「日韓再統合」の大業を成し遂げた明治天皇も、共々に朝鮮「総鎮守」祭神に相応しいとされた。

² 菅浩二『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神』弘文堂 2004年 358-359頁

対する行政側でのこ入れが起こったわけである。こうして台湾では、小林総督による告辞に相前後して、「政庁改善」の名の下に、中国式祖先位牌や神仏像の破却・焼納が奨励されるような在来信仰排撃が始まる。1937年7月に日華事変が始まると、在来信仰排撃より強制的同化を目指す運動と化して加速度的に激化し、1938年以降には「寺廟整理」³ 称する在来寺廟の取り潰し運動が本格化する。「皇民化」という言葉がいつ誰により使われるようになったかは不明だが、文献上の初出は昭和11年頃とされ、運動として盛んに称揚されるのは日華事変以降の戦時体制下である。⁴ このように、台湾における皇民化運動は、山口の引退・死去とほぼ同時に本格化した。皇民化が行政主導の社会運動であり、その本格化は日華事変など多数の国際的・社会的要因が重なっていたことは事実だが、台湾神職界の重鎮・山口が、在来信仰との共存を熱心に説く人物であった事は興味深い。

その後台湾神社は、1944年6月17日（台湾総督府始政記念日）、天照大神合祀が発表され「官幣大社台湾神宮」と社号が改められた。戦後、台湾各地の神社の多くは、台湾護国神社が敷地を継承され英霊の御霊を祀る国民革命忠烈祠と改変されたように、取り壊されるか改造されて忠烈祠へと姿を変えていった。そのなかでも台湾神社は忠烈祠に変わることなく、蒋介石夫人の宋美齡の勧めで広大な敷地を利用して国賓を招待する迎賓館としてのホテル・圓山大飯店となった。

3. 大日本帝国下における「神社」

明治後期から戦時体制期以前、台湾の「開拓」・朝鮮の「同祖」というように大日本帝国において、内地と「外地」各地域の間には内地社会側から見てそれぞれ固有の他者／自己認識に立脚した支配・統合イデオロギーが介在していた。つまり、内地は外地それぞれに対して異なる認識とそれに基づく支配・統合イデオロギーがあり、内地と外地ひとつひとつが個別に結びついて帝国が形成されていたのである。文化的な意味での「帝国」の全体性は、その複合的シルエットによってかろうじて示されていたに過ぎない。そこでは、内地はもちろん外地各地域も独自の文化様式の範疇を保っていたのである。山口引退から台湾神宮への改称に至る間に起こった「皇民化運動」は、それまで台湾神社などが持っていた社会的意味を大きく変質させた。それは皇祖神崇敬が、文化的ナショナリズム的社会再編期を経て「帝国」全体が戦時体制期に入る過程での、ある種の質の転化であった。この皇民化運動を経て、内地と「外地」各地域との個別的統合様態は一戦時総動員という大目的に沿う限りではあるが均質な「帝国」内部における中心と周縁の位相差として平板化、一般化されていった。皇民化とは、内地社会の文化的包括様態を一体性モデルとして、実際に「帝国」の隅々まで貼りつけていく動きであった。皇民化運動は強制的「国民」同質化を行い、その同質化の達成のモニュメントとして、総鎮守は「神宮」となったのである。

³ 寺廟整理運動については蔡錦堂が同運動の発生から収束までの過程を綿密に跡付けている。

⁴ 前掲書 319頁

二・二八事件が語る現代史—「台湾」からみた東アジア—

池 上 大 祐

はじめに

日本敗戦後、台湾は中国国民政府に接収されたが、その施政に対する不満を募らせていた台湾人（本省人）は、1947年2月28日に台北を起点として蜂起し、警察署などを襲撃した。これが「二・二八事件」である。それに対し、国民政府は、蜂起鎮圧のために大陸に援軍を要請し、3月8日に台湾へ到着した後、台湾人の弾圧、肅清を行い、多くの死者を出した。

事件収拾後、「二・二八事件」は、長年にわたって国民政府によってタブー視されてきたが、1980年代からの民主化の過程で徐々に事件の真相が明らかになってきた。こうした流れのなかで、1997年に事件後50周年を記念して、二・二八事件の背景、展開、真相解明にむけた動向を展示する台北二二八紀念館が開設された。二二八紀念館は、台湾放送協会台北支局跡に設置されたものであり、その周辺は「二二八平和紀念公園」として整備されている。

筆者は、2009年2月23日から25日にかけて福岡大学総合科学研究チーム「グローバル化のなかの地域」の研究調査に帯同し、24日に二二八紀念館を訪問した。その紀念館が発行する日本語版ガイド本文は、二・二八事件の概要を以下のように解説している。

1947年に台湾で起きた二・二八事件は、多くの一般人を巻き添えにした決して忘れ去ることのできない血で染められた歴史的事件である。その真相は現在に至ってもまだ明らかにされておらず、台湾現代史に空白の1ページを残したままとなっている。

……二・二八事件の導火線となったのはヤミタバコ取締りによる市民殺傷事件である。旧政府〔国民政府の意—筆者注〕はずで抑えきれなくなっていた民間の不満の深刻さを理解できず、曖昧なままで政府改革を引き延ばし支援部隊による武力的解決を図った。1947年3月8日、中国大陸からの支援部隊が台湾に到

着すると、北から南まで都市部でも田舎でもいたるところで軍隊による一般人の鎮圧がはじまった。これが次第にエスカレートしていき、反旧政府勢力の摘発と弾圧へと発展していくのである。

……台湾現代史に最も大きな痕跡を残したともいえる二・二八事件の背景には、第二次世界大戦後に台湾が旧政府に接収されたことで、中国大陸と台湾の長年における隔絶がもたらした文化的軋轢が表面化したことが挙げられよう。

ここで筆者が注目したいことは、台湾人（本省人）と大陸人（外省人）の関係性である。1895年の日本への台湾割譲以来、50年間の日本統治時代の台湾は、局地的な反日運動や太平洋戦争を除き、大きな戦乱に見舞われることがなかった。また児玉源太郎総督（任1898年2月～1906年4月）、後藤新平民生長官（任1898年3月～1906年11月）の植民地経営により、農業・工業の近代化、インフラ整備なども進められ、現在の台湾でも「近代化をもたらした功績者」として、国立台湾博物館内に「児玉・後藤展示室」が設けられている。一方、大陸中国では、押し寄せる外国勢力との戦い（日清戦争や義和団事件など）をへて1912年に中華民国を成立させたものの、軍閥政権の時期を経て、蒋介石が北伐を完成させる1928年までに、四川省だけで数百回以上の内戦が行われたという¹。このような歴史的過程の差異が、台湾人と国民政府側との対立の背景にあることは想像に難くないが、それが1945年の日本統治終了という事態とどのように関わるのかを整理することは、日本および東アジアのなかに生きる「わたしたち」の問題にもつながると思われる。

そこで本レポートでは、調査期間中に紀念館に付設する文献販売コーナーで入手した『二二八事件の真相』を基本資料として、二・二八事件に至る文化的社会的背景、事件の展開をまとめることを主眼とする。そして事件後の台湾社会がどのように二・二八事件と向き合ってきたのかについても若干触れておきたい。

¹ 李筱峰著、蕭錦文訳『二二八事件の真相』先鋒打字印刷有限公司、2003年、82～84頁。同書は、二・二八紀念館のボランティア解説員をつとめる蕭錦文氏が、『解説二二八』（李筱峰著、1998年出版）を日本語に翻訳したものである。本書の半分は二・二八事件の経緯（第5章「事件の爆発と経過」）に充てられているが、本書第1章「新時代を迎えて」、第2章「動揺する不安な社会」、第3章「文化の隔たりと衝突」において、日本統治から国民政府による接収へと至るなかで、台湾人がそれをどのように受け止めたのか、事件の背景として活写されている。

1. 情熱から失望へー「祖国復帰」をめぐる台湾人の動向

1945年8月以降の台湾は、日本統治が終わりをつげ大陸中国への「祖国復帰」が熱狂的に叫ばれた状況にあった。日本の高圧的な支配下に不満をもち、抗日民族運動や政治運動を展開してきた台湾人は、「そんなに日本人になるのが嫌いなら、支那に帰れ」という日本人の圧迫が強まるほど、対岸の「祖国」への思いを強くしたという。そのようななか、1945年8月15日に第二次世界大戦の終結をむかえると、台湾における日本の行政機関が行政能力を失い、政治的空白が生じた。その空白の間、「国民政府を歓迎する準備会」という民間団体が結成された。これは日本統治時代の民族運動の幹部であった林獻堂や葉榮鐘が組織したものであり、国民政府を歓迎するための準備として、民衆にたいする中国の国旗や国歌の指導・練習をおこなった。

こうしたなか10月25日、中国戦区台湾省日本軍が降伏する儀式が台北市公会堂で行われた。中国側は国民政府によって設立された「台湾省行政長官公署」の行政長官陳儀、日本側は元台湾総督安藤利吉がその降伏文書調印に署名した。その儀式には、台湾省民代表として林獻堂など数十名も参列し、会場外広場には多くの台湾人が集まった。その調印式の日の午後には、林獻堂を中心に「台湾光復慶祝大会」が開催された。そこでの林獻堂の挨拶を引用しよう。

われわれは、午前10時日本側代表が降伏文書に調印した時をもって、祖国中国に復帰した。今後は同胞各位心を合わせて、理想的新台湾建設のために努力しなくてはならない。……中国の勝利は、連合軍の正義に基づく援助を受け、わが偉大なる指導者の蔣委員長がなし遂げたものである。今後われわれは互いに助け合い、三民主義を実現する新台湾建設のため協力しなくてはならない²。

しかし、台湾人による歓迎ムードも、①「行政・司法の外省人による独占、②国民政府による経済統制、③国民政府軍人の風紀の乱れ、④外省人の生活態度の乱れなどが相まって、台湾人は、国民政府への失望感を募らせるようになった。①については、「台湾省行政長官公署」が立法・行政・司法の指揮監督権をもち、また警備総司

令も兼ねるという巨大な権限を掌握していた。国民政府が台湾にきてからは、名目上、参政の機会を台湾人に与えたことにはなっているが、「台湾人に政治がわかる人物がいない」、「台湾人は国語（中国語）がわからない」という理由で、教育を受けたものを排除した結果、1946年末の行政長官公署の高級官吏は、そのほとんどを外省人で占められた。そして彼らによる公共財産の私物化、日本財産の着服流用などが横行するなか、民族抗日運動に参加した陳逢源（台湾人）は、台湾が光復した際、「民衆は心から喜んでしたが、接收後はその汚職振りを見るに及んで失望し、接收は没収に変わった」と述べたという³。②については、行政長官の陳儀は台湾を接收したのち、旧日本企業のすべてを台湾省行政長官公署の各部署に経営させた。また日本統治時代の専売制度を継承し、樟脳、マッチ、酒、タバコ、度量衡器を専売品とした。しかし、専売局以外の機構でも、塩（台南塩業公司）、石炭（台湾省石炭調整委員会）などによる生産・消費の統制が行われており、官界の汚職を助長させることとなった⁴。

③、④については、台湾人による「日本人」イメージが大きく関わっていた。台湾に国民政府軍が到着する以前の台湾人は、士気が高く戦闘も強かった日本陸軍を打ち負かした「祖国の軍隊」はそれに勝る強さをもつと信じていた。しかし実際には、窃盗や詐欺を繰り返すなど国民軍の軍紀の乱れが、台湾社会の不安を生み出していた。軍人作家の張拓蕪は、「日本の台湾統治の最大の成果は、夜も戸をしめる必要がない程の好い治安を確立したことにある。家禽を飼うにも只一つの籠があるだけで、自宅の庭先にそれを置いていた。それが、中央軍が進駐してからは、自転車も家禽も簡単に行方がわからなくなった」⁵と記している。また「祖国」から来た教員は、教科に関する研究もせず、宿舎で酒を飲み歌を歌って、授業には遅刻し、男性教師は女生徒と恋愛事件を引き起こす、というような状況にあったという。一般生活については、バスに乗るときには並ばず、禁煙場所で喫煙し、唾をはく外省人を台湾人は目の当たりにした⁶。このような事例を背景として、台湾文化協会が編纂した「台湾文化」では、日本を主人に代わって門をまもる「犬」に、外省人を不潔でただ食べるだけの「豚」になぞらえた。戦後台湾社会で流行した「犬が去って豚がきた」という言葉は、そのとことを含意している⁷。

他方、戦後台湾にきた外省人は、台湾において、日本

² 同上、21～22頁。

³ 同上、39～41頁。

⁴ 同上、46～47頁。

⁵ 同上、69頁。

⁶ 同上、102～102頁。

⁷ 同上、103～104頁。

の気風が充満しているのを目の当たりにし、「日本の奴隷化教育の泥沼」から抜け出そうとしない台湾人に対する差別意識を増幅させた。台湾省行政長官公署による「台湾省二二八暴動事件」についての報告文では、日本の奴隷化教育について以下のように記述している。

日本統治時代の奴隷化教育は、わが国に対して極めて破壊的な宣伝を行い、台湾の青少年、中等学校の学生生徒、小学校の教員等は、祖国の歴史地理一般状況については、何も知らされておらず、その上日本人は長期にわたって、中国を中傷攻撃したため、台湾人に中国の一切の文物制度人材学術などは取るに足らずと思ひ込まされ、・・・祖国の文化と中国民族の伝統精神の偉大さを認めようとしなかった⁸。

また外省人が台湾人に対して使用する「奴隷化(奴化)」という表現については、1947年2月20日付の『民報』で以下のような記事が掲載された。

祖国から大先生たちがきて、いつも私たちは奴化されたと強調した。・・・何をさして「奴化」というのか、今だに理解できない。それが今になってやっと解った。公に奉仕し、法を守るのが奴化だと。礼儀廉恥を度外視してこそ、初めて「祖国化」の社会内では生きていけることがわかった⁹。

2. 二・二八事件へ

また、台湾人と国民政府側の相互不信感が、1947年2月28日に爆発した。きっかけは、前日27日の午後2時ごろ、台北でヤミ煙草を販売していた寡婦が、取締り担当の専売局査察員に煙草を没収されたさい、全部没収しないよう懇願したところ、その査察員に発砲されたことが引き金となった。この事件を見ていた民衆が集まり、査察員がまた発砲して民衆の一人が射殺された。それに怒りを爆発させた民衆は、査察員が没収した煙草を、公園まで運び燃やした。さらに群集は、翌日28日の午前8時ごろ、警察局や台北憲兵隊に押しかけ、市民を殺した査察員の引渡しを要求する事態にまで発展した。これを期に台北の民衆は、4～500名のデモ隊を組織し行政長官公署に向かったが、衛兵による発砲により死者20名を出す事態となった。さらに蜂起したデモ隊が28日の午後には台湾放送協会台北支局を占拠し、全体台湾に向けて事

件の内容について放送したのを契機として、3月1日以降、事件は台北だけではなく台湾全土にまで波及することになった¹⁰。

事件の収拾を図るため、台北市参議会と行政長官陳儀との間での協議の結果、「二・二八事件処理委員会」の設置を決め、3月1日の午後5時に、①軍警の発砲を禁止すること、②捕らえた市民を釈放する旨をラジオ放送した。そして3月2日には陳儀は、①[デモ]参加者に対する追及は行わない、②捕らわれたものは家に戻す、③死傷者は外省本省人の区別をせず、一律に補償する、④事件処理委員会は、官員、参政員、参議員などの人民代表を加えることを認める、という決定を行った。

そこで3月4日に事件処理委員会が中山堂で開会されたが、行政長官公署からの代表は参加せず、台北市参議員中心で進められたこともあって、その会議内容は、事件の平静化を図る決議以外に、台湾における政治改革の意図が見受けられた。そして3月5日には、事件処理委員会は、「政治改革綱領8カ条」の草案を起草した。この草案は、全省民が団結して、二二八事件の処理と政治改革を行うことを主旨とし、①公署秘書長、民政、財政、農林、教育などの各所長には、本省人が充てられること、②公営事業は本省人の責任で経営すること、③直に県市長選を行うこと、④専売制度を撤廃すること、⑤言論出版集会の自由を保障すること、などが改革綱領として挙げられた¹¹。

こうして事件処理委員会は、事件沈静化をめざす組織から、政治改革運動を進める組織へと変化したのである。3月6日の午後には、事件処理委員会は中山堂で成立大会を開催した。王添灯省参議員の司会のもと、常務委員17名(林献堂、陳逸松、徐春卿など)を選出し、以下の声明を発表した。

…今次発生した二二八事件の目標は、貪官汚吏の肅清と本省の政治改革を進めることにあったので、決して外省人を排斥するものではない。むしろ我々は外省人が我々とともに政治改革に参加してくれることを期待しているのである。…二二八事件において一部の外省人同胞が殴打されたが、これは一時の誤解で、私たちの心はそれを反省している。…我々は台湾政治の改革を願い、中華民國万歳、国民政府万歳、蔣主席万歳を唱えたい¹²。

このような動きに対し、行政長官の陳儀は、台湾全土

⁸ 同上、97頁。

⁹ 同上、104～105頁。

¹⁰ 同上、108～113頁。なお『二・二八事件の真相』翻訳者の蕭錦文氏もデモ隊に参加していたとのことである。

¹¹ 同上、122～126頁。

¹² 同上、127～129頁。

に向けたラジオ放送で、事件処理委員会の政治改革に関する提案を受け入れ、解決を目指すことを表明していた。6日の『台湾新生報』の記事によれば、台北、台中、台南でも市内の秩序は回復したり、商店が全部開店したりと日常を取り戻しており、事態は好転するかに見えた。

しかし、事件処理委員会の改革要求を受け入れ協力することを表明していた陳儀は、その裏で、3月6日に蒋介石に連絡し、台湾における兵力不足を訴え、二個師団の軍隊派遣を要請していた。そして3月8日に大陸からの援軍が到着すると、陳儀は、事件処理委員会を不法組織として肅清対象としたのである¹³。事件処理委員会の主な開催場所であった中山堂は、3月8日午後以降、大陸からの国民政府軍に包囲され、そこにいた学生200名が殺害された。9日～13日にかけては食料を買いに出かけた台北市民も次々と射殺された。また国民政府は、市民だけではなく、台湾の知識人・指導者たちの肅清も開始していた。事件処理委員会の王添灯省参議員は、憲兵に連れられガソリンをかけられ焼死した。また台湾行政長官公署の高官のなかで唯一の本省人であった教育副処長も捕殺された¹⁴。

国民政府軍は3月20日に台湾全土を掌握したあとも、「反乱分子」の摘発を継続した。このような事態を体験した台湾人は、政治的恐怖心から政治に対する関心を失い、1949年の中国大陸における中国共産党に敗北した国民党が台湾に逃げ込んできたとき、台湾人は、国民党政府を養う義務を負わされることになった。台湾人による国民党政府に対する不満と反抗は表面化しなくなり、独立運動は主に海外で展開され事件を知るものにとっては、そこが「精神的な逃げ場」となっていたし、他には大陸に渡って共産党陣営に加わったものもいたという。「中華民国」の看板をかかげ、全中国を代表すると言う国民党政府支配下の台湾では、「白色テロ」のもと、弾圧と統制の時代が続いたのである。

3. 事件後の台湾社会

二・二八事件後の台湾社会において、事件を語るものが長らくタブーとされてきたが、1980年代以降、台湾政治の民主化（民進党の結成、戒嚴令の解除、総統直選など）が進むなかで、二・二八事件が「権威主義体制における抑圧」の象徴として取り上げられるようになった。

1987年2月には事件40周年にあわせて、台湾の民間人権団体が「二二八平和日促進会」を組織し、事件の真相解明、犠牲者の復権と家族への補償、平和記念碑の建立を求めるデモや集会を行った。1995年には台北新公園内に「二二八事件記念碑」が落成し、その記念碑除幕式には本省人初の総統李登輝総が出席した。また記念碑建立にあわせて、当時台北市長であった民進党の陳水扁は、台北新公園を「二二八平和公園」と改称した。そして1997年の事件50周年記念日には、台北市政府は二二八平和公園内にある台湾放送協会台北支局跡を改造し、台北二二八紀念館を開設し、2月28日に開館した。このように二・二八事件に対して向き合おうとする試みが台湾社会のなかで進展していくこととなった¹⁵。

2007年2月28日の事件60周年記念日では、当時の台湾総統である陳水扁が出席して、「二二八国家記念館」開設式や総統府の前での1万人記念合唱などが開催された。「二二八国家記念館」は初の台湾当局運営の施設で、1931年に教育会館として建てられた建築物を改装して開設したものである。陳水扁総統は、60周年記念式典のあいさつで、「強健統治で迫害された台湾人民みんなが事件の被害者。国民党は38年間の戒嚴令統治を謝罪し、不正に築いた党の資産を人民に返すべきだ」と述べた¹⁶。これに対し一年後の総統選出馬を決めた国民党の馬英九氏は「国民党には事件の責任はない」と発言している¹⁷。しかし、翌年の2008年2月の二・二八事件の追悼集会では、翌月に総統選を控えていることから、馬英九氏は「執政者の腐敗と無能によって引き起こされたものだ」と指摘し国民党政権の過ちを認め、当選後も事件の検証をすすめることを公言した¹⁸。

そして2009年2月28日は、国民党が政権を奪還して初めての記念日となった。南部の高雄市の記念式典に出席した馬英九総統は「民衆の声に耳を傾け、二度とこのような悲劇が起こらないようにする」と式辞をのべたものの、馬政権発足後、事件の調査や遺族への補償を行う「基金会」の予算や「二二八国家記念館」建設事業が凍結されたことを背景として、一部民衆からは「事件の真相究明が不十分」との批判を受けた。馬政権は2009年2月下旬になって、基金会の予算執行や記念館建設を加速させる考えを示した¹⁹とされる。

¹³ 同上、134～136頁。

¹⁴ 同上、168、177～178頁。

¹⁵ 塚本元「二二八事件50周年と台湾社会—歴史の清算から新台湾の建設へ」『世界』1997年8月号、320～329頁。

¹⁶ 『西日本新聞』2007年3月1日。

¹⁷ 『朝日新聞』2007年3月1日。

¹⁸ 『西日本新聞』2008年2月29日。

¹⁹ 『西日本新聞』2009年3月1日。

おわりに

二・二八事件をめぐる問題は、60余年経た今も、台湾政治、大陸中国との関係、そして日本を含む東アジアとの関係のなかで、アイデンティティの問題とも絡みながら、今なおアクチュアルな問題として扱われるだろう。今後の課題としては、当然ながら、事件の真相解明も今後進められていく必要はあるが、「東アジア」という大きな地域の視点で、台湾を見る場合、1940年代において

アジア太平洋へのプレゼンスを強めようとしたアメリカとの関係も視野に入れなければならないだろう。第二次世界大戦から冷戦へと国際情勢が大きく展開していくなかで起きた1947年2月28日の事件は、まさしく台湾という小さな「地域」と東アジアという大きな「地域」の関係性を考えるための材料を提供するものとなろう。「地域」をキー概念として、二・二八事件を現代史に位置づけようとする試みは、今から始まるのである。

＜親日＞の理由—台湾人のアイデンティティについて—

清 原 和 之

台湾という地に行って私が強烈に印象づけられたのは、台湾に住む人々親日的な態度である。台湾についてほぼ白紙のまま赴いた私は、その強烈な態度に多少戸惑いを感じた。また、そうした態度に若干の居心地の良さも感じていた。このレポートでは、そうした私（日本人）と台湾人との関係性について、考察していきたい。

私は日頃、「日本人」を自覚することは少ない。意識するときといえば、サッカーのワールド・カップや、ワールド・ベースボール・クラシックのときくらいだろうか。そして、そのことは裏返せば、他者を意識せずにいられるということだ。それはなぜかといえば、それを意識せずとも、日本人であるからだ。しかし、台湾の人々はしきりに自らのアイデンティティを叫んでいた、少なくとも私にはそのように感じられた。一方で、文化は曖昧で、ちぐはぐな印象をうけた、台湾らしさというものが「創られた」ものであり、「借り物」であるように感じられた。そこに、台湾の人々が「台湾人」というアイデンティティを強く意識せざるを得ない事情があるように思う。まずは、台湾の歴史を紐解いてみることにする。

台湾は、17世紀初頭、南部はオランダの支配下に置かれ、北部はスペインによって占拠された。そのころの台湾の住民は、オーストロネシア語族に属する複数の民族であった。そして、1662年には、鄭成功が台湾に侵攻し、独立政権を打ち立てた。このころから漢人の移住が始まる。鄭氏台湾は1683年には清朝に滅ぼされ、福建省台湾府として清朝に編入される。この時期、大陸からの移民は、地理的な理由から福建の閩南人、公東の客家人であった。さらには、1895年、日清戦争後の下関条約で、台湾島は澎湖島とともに日本に割譲され、日本敗戦の1945年までの半世紀間、日本の植民地支配を受けることとなる。日本の敗戦後は、中華民国となり、蒋介石率いる国民党政府が台湾に遷った。国民党政府とともに、多くの中国人が台湾に流れ込むこととなった。

この1945年の日本の敗戦の日付は、台湾に住む人々にとっては何を意味したのだろうか。その一つは、本省人（1945年以前から台湾に住んでいる人々）と外省人（45年以後に国民党とともに台湾にやってきた人々）という台湾における主要なエスニシティーの対立点が醸成されたことであり、もう一つは、日本語から国語（標準中国

語）へと公用語が転換したことであった。そして、このことは、それまで日本語をしゃべっていた人々に公的な場において中国語を強要させることを意味した。さらに、1947年には二・二八事件が起こることとなる。この事件は、闇で煙草を売っていた老婆を外省人憲兵が殴打し、そこに野次馬としてきていた本省人男性一人が射殺されたことに端を発する。その後、この事件は一挙に台北市民を群集化させ、公的機関に押しかけた。これに対して当局は銃撃掃射を浴びせ、6人の死者と多数の傷者を出すこととなった。さらに、当局は事件の収拾のために密かに国民党の精鋭部隊を大陸から呼び出し、その圧倒的武力を背景にして多くの台湾人知識人を逮捕、処刑していったのである。このことにより、およそ一万八千人から二万八千人の死者（主に本省人男性）が出たといわれている。以降、台湾では蒋介石の国民党政府によって戒厳令が実施され（1949年）、共産党地下党員の逮捕、さらには、懲治叛乱条例が公布され、膨大かつ周密な政治警察の監視システムが築かれた。その戒厳令が解かれたのは1987年である。その間、台湾の人々には、思想・表現・言論の自由はなかった。国家の権力が私物と化していたのである。しかし、蔣経国政権が台湾化政策を進め、1988年、第七代総統・李登輝が選ばれると、大陸を架空の領土としていた統治形態を台湾大の広さに置き直す本土化（台湾化）が進展していくこととなった。

戒厳令の解除、及び、台湾の本土化とは、台湾の人々にとって何を意味していたのだろうか。まず、二・二八事件の記憶は、日本語世代の老人たちを極端な国民党嫌い、中国人嫌いにさせることとなった。そして、この二・二八事件とその後の白色テロの記憶により、それ以前の日本統治時代の記憶は幾分ましに思えるようになった。そのために、日本へのノスタルジーが醸成されることとなった¹。また、二・二八事件の解釈をめぐって主に、二つの立場からの主張がなされているという。一つ目の主張は、台湾人が中国からの独立を求めて戦った記念すべき革命闘争とする台湾独立路線の主張である。もう一方の主張は、国民党独裁による腐敗に対する反腐敗、反独裁の闘争、中華民国内部における高度の自治要求の闘争とするものである。二・二八事件から「解嚴」に至るまで、それまで日本語を話していた台湾に住む「日本

¹ 丸川哲史『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社、2000年、pp.78-92。

観光地化された台湾

久保知里

はじめに

台湾における2003年の国際観光収入は30億米ドル、2004年は41億米ドル、2005年は50億米ドルと成長を続けており、2005年には国際観光収入は世界34位となっている(ちなみに日本は2005年、世界13位、124億米ドルの収入)¹。観光客や観光による収入が増大している台湾において観光産業や観光地といったものはどのようなものであるのか。台湾の経済発展や観光産業への注目などを概観した上で、今回調査で訪れた観光地の紹介と私の感じたことを述べていくこととしたい。

1. 台湾の経済発展

第二次世界大戦後、日本による統治の手を離れた台湾は以下に挙げる三段階の発展を遂げた。

(1) 農業経済

日本統治時代の後、大陸から流入してきた国民党による農地改革を経て、農業の近代化に成功し、台湾は経済の基盤を農業として発展した。

(2) 工業経済

1960年代に入ると、アメリカや日本の援助を受けつつ工業化を図り、日本企業を誘致するなどして高度経済成長期へ突入した。「一九六三年から一九八〇年まで、台湾経済の成長は毎年一〇パーセントを越える勢いを示し」²た。この高度経済成長は、物価の安定や所得等の均等化を達成し、「台湾経験」として大きく評価を受けている。

(3) サービス経済、IT・情報経済・知識経済

1980年代、中国で改革開放政策が発表されると、経済特区をはじめ、安価な賃金による生産を求め企業が中国へ進出をし始める。台湾に進出していた外資企業も例外なく中国へ移り、台湾では産業の空洞化が問題となっていた。そこで、台湾はハイテク産業の誘致を行うなど、サービス経済、IT・情報経済への転換を図り始めたの

である。

また、その先の経済発展の一つの方向として「体験経済」³を模索している。「体験経済とは、感受性、ストーリー、高質の美感等が基盤となる文化産業のことであり、その創出を目指して『創意生活産業の発展計画』を打ち出し、『製造の台湾』から『知識の台湾』への経済的変身を遂げようとしている」⁴ものである。知識・体験経済の具体的な戦略としての文化産業(創意生活産業・生活創造型産業)は「アイデアを『ノウハウ』に生かし『深い経験』まで到達せしめ、『高品質の美感』による生活美学融合をめざすもの」⁵とされ、そのほとんどが観光文化産業に関わるものである。もともと台湾は観光地として内外から観光客を集めており、観光経済での発展が見込まれてきた。これにプラスして、文化産業を導入し、文化の産業化・商品化が行なわれている。

2. 観光へのまなざし

(1) 国内旅行地としての台湾

高度経済成長期には、市民の余剰資金が旅行・観光をはじめとする余暇への消費に使われることは少なく、台湾においてもそうであった。余暇が増え、余剰資金をそのような消費に使うようになっても、台湾の人々はもっぱら海外への旅行が主流を占めていた。台湾の国内旅行がそれほど盛んでない理由は、①自然の観光資源が豊富で人の手が加えられていない観光地が多い(インフラ整備も十分でない)。故宮博物院などは工夫を凝らさなくても集客力があつたが、それゆえにリピーターの確保は難しい。②台湾は小さな島国であり、どこも同じような文化であるため、新たな文化に触れるという旅行の楽しみが味わえない。などが挙げられる。

(2) 外国からの台湾旅行

「台湾の観光産業の萌芽は1956年ころであ」⁶り、「政府による観光産業事業の取り組みは1960年に交通部に観光課がおかれたことにはじま」⁷り、1972年に観光局が

¹ 「2005年国際観光概観」(2007年、<http://www.wto-osaka.org/>)より引用

² 後藤武秀「台湾の経済発展と観光文化産業を通じた伝統文化の維持—文化創造産業・生活創造産業の例から—」(比嘉祐典編著『地域の再生と観光文化』ゆい出版、2008年)

³ 比嘉祐典「沖縄・台湾・タイ・インドネシアの観光開発と文化変容」(前掲比嘉編著)

⁴ 同上

⁵ 同上

⁶ 松鷹彰弘「台湾における産業化の進展と観光の発展段階」『沖縄大学地域研究所年報』No7、1996年

設置され、外客誘致及び観光投資が奨励されるなどした。これらは「インフラ建設の費用をカバーする莫大な資本を必要とした」⁸ 台湾の外貨獲得の手段として政府により観光が奨励されることとなったことを表している。次第に観光局や政府の政策も変化し、外客獲得により観光産業の活発化などが目指された。前述のような国内旅行の状況にあっても、外国から台湾へ旅行に訪れる観光客はあとを絶たなかった。

(3) 観光へまなごしの転換

2003年にアジアを襲ったサーズ（SARS）の影響により台湾への観光客も激減した。これにより本格的に台湾の観光は新たな方向性を模索し始めることになった。

まず、台湾の国内旅行が盛んでない事実を打開するために、観光地（観光資源）の創出が図られた。その一例として伝統的な文化を保護しつつ、加工して観光資源として利用するものがある。原住民の文化村やその類の観光地、また日本統治時代の文化の再現をした観光地などは、台湾の人々の国内旅行地としても人気を集め始めた。伝統的なものへの回帰が、日常とは違う文化に触れることができるというものであった。

次に外客誘致が挙げられる。外国人が他国に旅行するのは、自国にないその国固有の伝統文化にふれてみたいからである。よって、最近できた高層ビルや町並みといったものは求められてはいない。台湾の伝統文化とは、漢民族の文化であるだろうし（もちろん原住民の文化もあるが）、日本統治時代のもも台湾固有の文化であるだろうと考えられる。

このように内外の観光客誘致のために観光地を整備する動きが広まってきている。

【日本人住宅概観】



黄金神社は日本人により金鉱が運営されていた頃に作られた神社であるが、現在はその跡形もわからないほど廃れてしまっている。一応黄金博物館区の一画にあるのだが、他の施設とは異質のものである雰囲気が強かった。

3. 台湾の観光地を訪れて

以上に述べたように台湾経済の中でも主軸となりつつある観光産業であるが、観光地化された場所が実際どのような場所であり、いかに手が加えられたのか。また、どのような人々が訪れているのか。以下、今回の調査で訪れた金瓜石・九份という町を取り上げてみたい。私の主観によることを先にお断りしておく。

(1) 金瓜石

金瓜石は一八九四年に金脈が発見され、その翌年に台湾は日本統治下となり、田中組によりその開発が始められた。その後も日本統治時代には、日本人によって管理・運営された金鉱の町である。現在、金鉱としての役割は果たしておらず、2004年に観光資源開発により黄金博物館区が整備された町である。黄金博物館区内では、当時の建物などを補修・整備し一般公開していた。

日本人住宅は、金鉱を運営していた日本企業の社員のために作られていた社宅を再建した建物であり、中を開放しており、見学ができる。中に入ると、まず、日本家屋の特徴や再建法などを紹介するビデオを見せられ、「敷居を踏むな」と言われた後は何の説明もなく一周する。ビデオでは日本人が去った後、台湾の役人たちが住み、持ち主が様々に変化し、その時々増築・改築などが行なわれたため本来の姿は不明であるとの説明であった。そのため家屋は日本伝統のつくりを元に再建したものである。日本家屋を見ても日本人にはなじみが深く、むしろ台湾人がその日本家屋をどのように変化させて住んでいたのかの方が興味をひかれたらと思う。

【日本人住宅内部】



少し山を登った所に鳥居があり、そこを過ぎてまた山を登ると鳥居や本堂の痕跡を見ることができる。観光客も私たちしか黄金神社へ行く人はなかった。

⁷ 松鷹彰弘「台湾における産業化の進展と観光の発展段階」『沖縄大学地域研究所年報』No7、1996年

⁸ 駄田井正編著『21世紀の観光とアジア・九州』（九州大学出版会、2001年）

【黄金神社の登り口】



【途中の鳥居】



【入り口付近】



【本堂跡】



黄金神社は全くといって良いほど整備がされており、その点に、台湾人がどのように金瓜石を観光地化し

ようとしているのかが表れている場所だと感じた。

(2) 九 份

九份は、もともと小さな村に過ぎなかったが、19世紀末に金の採掘が開始されたことに伴い徐々に町が発展し、日本統治時代に藤田組によりその最盛期を迎えた。しかし、第二次世界大戦後に金の採掘量が減り、1971年に金鉱が閉山すると町は急速に衰退した。

その後、1989年に公開された「非情城市」という映画の舞台、「千と千尋の神隠し」のモデルとなった町として有名となり、それを売りとして観光地化をしている。町自体はそれほど大きなところとは言えないが、日本の寺社の参道のように、両側に様々な商店が軒を連ねていた。主に飲食店が多く、食べ歩きができるようになっている。こちらは金瓜石に比べ、日本人観光客も多かった。日本の旅行ガイドブックにも多く紹介されている場所である。特に目立った名所のような場所は九份にはなく、地元の人々が映画の舞台となった町を作り出し、その町

並みを求めて訪れる観光客を対象とした観光地である。そのため多く日本語を目にし、耳にする。まさに日本人観光客をターゲットにしているようだ。

時期によって違うのかもしれないが、台湾人の観光客の方が多く訪れているのではないかと感じた。なぜなら、日本語でない言葉を話す観光客が大勢いたことに加え、九份の紅糟肉圓（透明のゼリー状のものの中に赤く色をつけた豚肉が入った食べ物）という名物をたくさん買ってバスに乗り込む人が多くいた。お土産として買って帰るとしても、調理されたものなので長時間保存はできないだろう。購入していた人は国内の観光客に限られるのではないか。九份は開発は国内観光地としても進んでいる。

【九份の町並み】



金瓜石は「官」が主導して整備した文化教育のための観光施設という印象であったが、九份は町を挙げて観光

を生業として町を復活させようとする地元の人々の商魂が強く感じられた。

おわりに

観光地化する台湾であるが、金瓜石などは台湾の国内旅行が、それほど盛んでない理由の一点目（自然の観光資源が豊富で人の手が加えられていない観光地が多い）の解消に向けて整備された場所であると感じた。よって、建造物の再建意図や案内方法は台湾人向けの教育や文化普及といった点に重点が置かれているのだろう。一方、九份は地元民が金鉱なき後、どのようにして生き残るかを模索している最中に、映画をきっかけとして商売に力を注いだのだろう。観光地化に際してもその主導が

「官」なのか「民」なのかによって大きな違いが見られる。

また、このように観光地化された町の裏では地元の人が暮らしていることは事実であり、四林夜市を訪れた際にそれがはっきりと見られた。夜市は様々な商店が夜遅くまで明かりをつけ営業していたが、裏路地に一本入ってしまうと住宅であるアパートが所狭しと並び、地元住民の生活があった。夜遅くまで市は開かれていたが、台湾の朝も決して遅くはない。ここに住む人々の暮らしを支える産業として観光が模索されているのだろうと痛感した。

台湾における「日本」の受容

古城 真由美

はじめに

1990年代後半、海外で日本ブームが起こったことは、我が国でも注目を集めたので、記憶に新しいところである。そのブームは台湾においても同様であり、その中心は、日本の大衆文化—マンガ、村上春樹の小説など—であった¹。しかし、それ以上に、現地を訪れて感じる興味深い点は、消費生活や観光業の目玉としての「日本」の受容である。このような台湾における「日本」の受容の実態はいかなるものであろうか。あるいは、それはなぜ生じているのであろうか。本稿では、この疑問に多少の解答を提示するために、韓国や日本との簡単な比較を行いながら、論じていきたい。

1. 消費生活における受容

台湾に滞在して気づくのは、日本で見られるのと同様の外資系カフェやファーストフード、コンビニエンスストアの進出とその多さである。戦後の冷戦構造において、台湾がアメリカに深く依存していたという関係を考えるならば、アメリカ文化の浸透は日本同様納得できる場所である。しかし、日本企業のコンビニエンスストアの多さは、眼をみはるものがあるといえよう。十数年前に日本のコンビニエンスストアが進出して以来、それは台湾の生活に深く密着するようになったという。とりわけ、商品棚に陳列されるのもまた、店内三分の一近くが日本と同じ商品であった。この点だけを見ると、迎合というレベルではなく、すでに日本発信の消費生活が台湾の人々の生活そのものに根付いていると感じられるであろう。

しかし、日本発信のコンビニエンスストアなどの消費生活の形態の台湾における受容が、日本文化や日本人の受容と一致するかどうかは、注意が必要であろう。本稿においては詳細に議論することはできないが、例えば、コンビニエンスストアに多くの日本製商品が並ぼうとも、同様に他国の輸入品もあれば台湾製商品も並んでお

り、それは選択肢の一つにすぎないのである。台湾の人々の実際の嗜好と日本の受容との関係については、さらに詳細な調査や分析が必要と思われる。

2. 植民地時代日本の観光地化

台湾における「日本」の受容において今一つ重要な点と思われるのは、植民地時代日本の観光地化の問題である。台湾の場合、首都台北における主要な観光地は、夜市や美術館などの台湾独自の文化を除くと、ほぼ戦争関連、とりわけ植民地時代の日本統治のなごりに関連する施設が多い。衛兵交代などで人気を呼ぶ観光地、忠烈祠ですら、日本の靖国神社や護国神社と比較した場合、多くの類似点が見られるという²。このような台湾における植民地時代日本の観光地化は、戦時中、同じ日本による統治を経験した韓国には見られない現象のように思われる。韓国においては、日本統治下の施設などは、その植民地時代を彷彿とさせる負の遺産である。それゆえ、日本統治に関連する施設という負の遺産を観光地化しようという動きは見られない。しかし、台湾の場合、日本統治関連の施設は負の遺産であることに変わりはないが、さほど負のイメージが強調されているようには感じられないのである。

また、戦争関連ではない観光地として、台北から日帰りで行くことが可能である九份および金瓜石は、日本による統治の際に発展した炭鉱町がもっている。近年、日本においてもかつての炭鉱は、近代産業遺産として注目され、炭鉱に携わった人々の住んでいた屋敷などが文化財として指定され、一つの町おこし的手段としての様相を呈している。とりわけ、金瓜石は台湾における日本当局によって開拓された炭鉱であり、日本人監督の屋敷などが修復保存され、公開されている。ここで興味深いのは、かつての日本人の日常という日本では特別視されないものが可能な限り再現され、おそらく日本では保存の対象になりにくいものが観光の目玉として公開されている点である。

¹ 許均瑞「現代台湾の大衆文化受容」『アジア遊学69 台湾からみる日本—進化するコラボレーション—』(2009年)、123-8頁。

² 蔡錦堂「台湾の忠烈祠と日本の護国神社・靖国神社との比較」台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』(中京大学社会科学研究所、2003年)、335-57頁。ただし、忠烈祠の場合、戦時中の権力者によって戦局に応じて作られたものであるため、中国古来の思想に基づくものではなく、台湾という土地に根ざすものでもない。したがって、靖国神社や護国神社のような宗教的色彩は極めて薄いというのが、大きな相違点であるという。

以上、台湾における植民地時代日本の観光地化において、戦争関連および関連しない施設両方に共通して言えることは、台湾では、植民地時代日本が韓国や中国ほどに負の遺産として捉えられていないという点と思われる。戦後の日台関係も深く関係していることは間違いないと思われるが、逆に、観光の目玉としての歴史的施設を他に求めると、台湾にはそれが少なく、どうしても植民地時代日本の施設など戦争関連のものに頼らざるを得ないという現状が背景にあるのであろう。

おわりに

以上、台湾における「日本」の受容について、消費生活と植民地時代日本の観光地化の2点から論じてきた。最後に私見を2点ほど述べて、稿をとじたい。

本稿において挙げた「日本」受容の背景として、近年、台湾における日本の大衆文化受容研究の中で指摘されるように、本稿において例としてあげた2点の受容形態にも、広い意味で、「台湾の文化的アイデンティティーの喪失」が関連していると思われよう³。特に、植民地時代日本の観光地化は、世界にアピールできる台湾オリジナリティの欠乏を証明しているようにも思われるし、同

時に、故宮博物館の展示品ですら、蒋介石が中国より持ち込んだ中国のものであり、台湾独自の歴史のみでの集客力の少なさを物語っているようにも思われる。しかし、台湾に全くオリジナルな観光の目玉がないというわけではなく、近年人気を集める夜市やマッサージなどはその典型ともいえるであろう。

そのなかで、「日本」を受容し一つの観光の目玉として売り出すのは一つの解決策といえるが、ただし、それは台湾の人々が日本そのものを受容していることには直結しないであろう。というのも、金花石などに顕著に見られるように、「日本」を展示していながらも、それはあくまで台湾の人々の目を通した「日本」だからである。それゆえ、かつての「日本」を目にしながらも我々は懐かしさを感じると同時にやはり異国情緒もまた感じるのである。台北における戦争関連施設も同様であり、どの程度のフィルターがかかっているかを考えることが重要であろう。つまり、本稿で例示した2つの事例において、台湾独自のローカルな部分と「日本」がいかに混合しているかという受容の程度を解明することで、今後、台湾と日本という2つの地域の関係性を解明する一助となるであろう。

³ 許前掲論文、128頁。

台湾における観光

松 隈 達 也

2009年2月23日から25日の2泊3日で台湾を訪れた。そこでの史跡や観光地などの調査をもとに、台湾における観光について報告したい¹。とりわけ今回の訪問先である台北市と九份・金瓜石を対象とする。本稿では、まず台湾における観光（観光地・観光業）の歴史を概観し、つづいて調査先の感想を述べることにする。

1. 台湾における観光の歴史

そもそも台湾で観光業に眼が向けられたのは、先人の研究によると、1920・30年代の日本統治期である²。「台湾八景」の選定がそれに当たる。これは新聞社が主催し、一般大衆に呼びかけた景勝地の人気投票であり、投票総数は3億5963万4906票に達するほどの一大センセーションとなった。この投票を機に台湾では地域や景観、そしてそれらに伴う地域文化や伝統文化に人々の注意が向けられるようになった。レジャー活動としての観光自体に人々の関心が払われるようになったのは、ヴィクトリア朝イギリスの中産階級の文化が日本経由で20世紀前半に台湾にもたらされたとされている³。しかしその後の世界大戦などのため、これが観光業という文化産業として定着するには至らなかった。

戦後の台湾経済は農業と重工業を中心に経済成長を遂げ、1980年代からはI Cチップやコンピュータ関連部品などの先端産業へと重点を移してきた。この時期の観光業は国家経済において決定的な重要性をもっているとは到底いえない状況であった。しかし、上述の戦後経済の変貌が台湾人一人当たりのG N Pを右肩上がりに成長させ、1990年代には外貨準備高においても世界有数の外貨保有国とした。このような国民生活の豊かさが、余暇の利用という観光にとっての必要条件を準備していったのである⁴。

台湾の観光業の初期段階は自然の観光資源に依存したものであった。つまり人間が観光のために何の努力をし

なくても自然そのものが集客能力をもっていたのである。代表的な観光地として阿里山やタロコ峡谷が挙げられる。鮮やかな新緑、自然の雄大さ、山頂からの雲海、また四季折々の風情ある景観は訪れた観光客を圧倒してきた。しかし、これは反面から見ると、名物料理もなければ、特産品もないということになり、リピーター観光客を呼び寄せることが難しい不安定な産業であった。故宮博物院にしても、展示は中国王朝の逸品ぞろいであるが、見せ方の工夫がなく、また土産品などを持たなかった⁵。

こうした「自然の観光資源にもたれかかった姿勢」は⁶、2000年以降、改善されていくことになった。人々が積極的に自己の文化を材料として集客するという努力が行われ始めたのである。後藤武秀は、その契機を2003年のSARS（免疫不全症候群）流行だったとしている。眼に見えないウィルスの脅威は台湾の観光業界に壊滅的な打撃を与え、事実、日本からの観光客はその年10分の1以下に減退してしまった。中小の観光業者は倒産し、フリーのガイドも仕事がない状態が続いた。この致命傷から回復するために、台湾の観光は新たな方途を模索しなければならなくなった。

2004年には、経済部工業局・中衛発展センターが創意生活産業（Creative Life Industries）発展計画を明らかにし、財団法人国家文化芸術基金会は『文化創意産業実務全書』を公刊した。これらは、従来、台湾が積極的に取り組んできた先端産業による経済発展の方向とは一線を画するものであり、台湾に現存する文化そのものに加工作を加えて、これを産業化しようとするものであった。要するに、台湾人の眼が工業発展ばかりに向けられていたときに、まったく加工されないまま放置されてきた自分たち自身の文化に眼を向けて、これを加工することによって新たな文化創造型産業を興し、雇用の確保につなげようとしたのである。文化が商業化されていく時期であったといえる。国家プロジェクトになった観光業の近

¹ 本稿では台湾国内での観光地化に関心を向けているため、台湾人の海外旅行などの観光業は扱わない。

² 曾山毅「台湾八景と植民地台湾の観光」『立教大学観光学部紀要』5、2003年、65-74頁。

³ 根橋正一「日本植民地時期台湾における国際観光の成立」『流通経済大学社会学部論叢』16（1）、2005年、41頁。

⁴ 後藤武秀「台湾の経済発展と観光文化産業を通じた伝統文化の維持－文化創造産業・生活創造産業の例から－」『アジア文化研究所研究年報』42、2007年、189頁。

⁵ 後藤武秀「台湾の経済発展」2007年、190頁。

⁶ 後藤武秀「台湾の経済発展」2007年、190頁。

年の成果としては、ブヌン族などの原住民の伝統文化や民芸品を扱ったものや、また紅樓劇場など日本統治時代の文化的利用が挙げられる。原住民の伝統文化や植民地時代の記憶・施設を動員して新たな産業を生み出していく過程は、歴史学、民俗学、人類学と観光業研究が共同参加していく可能性を大いに指し示していよう。また、観光業界から再発見された台湾の「原始的な姿」や日本の統治時代が、教科書の叙述において台湾の歴史や人々の記憶にいかなる影響を及ぼすのか、きわめて興味深い問題である。2000年以降におけるこうした自国文化の見直しは、グローバル化時代における自己認識の再検討あるいは自国文化のルーツ探しであったのかもしれない。

2. 台湾観光産業の提言

以上の台湾の観光の歴史に関連させて、私の調査報告を三点述べたい。ここでは主に観光地などのモノの調査ではなく、観光地をより広い視野で捉えた提言を行う。

一つ目は、観光地周辺の交通機関の整備がほとんどなされていないということである。観光において交通網の整備は重要である。アクセスのよさによって人々は足を運びやすくなるからである。集客向上のための絶対条件ともいえよう。しかし台北市や九份では公共交通機関の整備が行き届いておらず、タクシー移動が中心となった。これは交通渋滞を引き起こし、都市の景観を損なうイメージダウンの要因にもなろう。たしかに鉄道は走っているが、必ずしも観光地とのアクセスという利便性はよくなかった。観光地化していくためには歴史的建築物を保存していく努力とともに、いかに人々を呼ぶのかという交通などインフラ整備も欠かせない側面である。観光業という国家的な文化産業は、歴史的建築物や遺跡などにだけ目を向けるのではなく、それらを取り巻く周辺状況も同時に「加工」していかなければならない。交通、ホテル、案内サービスなど改善させるべき関連分野はさまざまであろう。結局のところ、「自然の観光資源にもたれかかったままの姿勢」であれ、歴史建造物を保存していくのであれ、いくら努力と創意を重ねても、観光客を呼べないのでは産業は成立しないのである。

二つ目は、コミュニケーションの問題である。観光に当たって言葉が通じるか否かはきわめて重要な問題である。意思疎通が上手くできないことや、展示品の内容が読めないことは観光客にとって多大なストレスと不安を与えるからである。海外への観光は言葉を含めて異文化

交流であるが、一般的に言葉が通じないことを楽しめる人は多くないだろう。展示品などの解説では複数の言語・最低限英語での解説が必要となってくる。その点で台北市内の施設や九份の博物館は日本語や英語のパンフレットが準備されており（パンフレットの掲載内容の質はまた別問題である）、サービス面に気を配っていた。上質なサービスを観光客に提供することは、観光業が成り立っていくうえで軽視できない。上質なサービスを提供することでリピーターが増え、当地の「魅力資産価値⁷」も上がるからである。経験上、現地の人とコミュニケーションができるか否かは旅の充実度と大きく関わってくる。台北市内や九份でのレストランや土産屋では容易にコミュニケーションが可能であった。これは旅行先での安心感にもつながる重要なことである。日本語のガイドや日本語の解説文などを充実させていけば、さらに多くの観光客の満足度を獲得できよう。日本人スタッフなど外国人の雇用（外国人労働者の雇用機会の拡大）が一つの解決策になるかもしれない。

三つ目は、前述の日本統治時代の文化の継承についてである。1895年から1945年の日本統治時代は、台湾においていまだに根づいている。むしろ積極的に残されているといえよう。台北市内の町並みは、たしかに中華圏の雰囲気を持っているが、しかし私はそこに大きな違和感を覚えなかった。海外の町並みとは私にとって非日常であるはずだが、そうした感覚を持たなかったのは街の隅々に日本の（文化的）遺響があったからであろう。また金瓜石での黄金博物館や黄金神社は、ともに日本統治時代の遺物であり、戦争の時代を象徴するものだが、当地の代表的観光地となっている。当地の金山では台湾人のみならず、欧米人もまた強制労働を強いられていたが、その暗い歴史を覆い隠すことなく、積極的に語り発信し、オープンにしている。そして集客の柱としている。当然ながら、こうした背後には日本統治時代の歴史の再評価や読み直しがあり、観光業という文化産業を創出するための「工夫」がなされているのだろう。日本統治時代が台湾にもたらした長所と短所を再度冷静に解明していく必要性を実感した。実際には、植民地時代の日本の文化は台湾の若者世代にとって祖先の伝統的文化の一つとなっているという見方もある⁸。逆に欧米人の観光客にとって、こうした台湾の「戦争経験」はどのように映っているのか、という疑問も生じた。

⁷ 「魅力資産価値」とは、土地や建物に関わる資産とは別の、企業・都市・大学などへの来訪者（消費者）の心のなかに醸成される資産価値をいう。なおこの用語について、本研究チームが主催したシンポジウム『「地域」（七隈、福岡、東アジア）と生きる福岡大学（1）－研究・連携・創造/何をやってきたのか、何をやるべきか－』における齊藤参郎報告「回遊まちづくりマーケティングFQBIICのこれまでとこれから」から得た知見をもとに使用した。

⁸ 後藤武秀「台湾の経済発展」2007年、193頁。



【図】黄金博物館



【図】黄金博物館での欧米人捕虜の写真

おわりに

近年本格化した台湾の観光業はマイノリティの文化を商業化していく過程、そして負の歴史と捉えられがちな戦争・植民地時代の経験を積極的に残し・語り、伝統文化の一つに組み込んでいく過程を内包していた。こうした観光業（観光地）が成立していく過程には、関係者たちの思惑や戦略、経済的利害関係などが内包されていることは言うまでもない。国家プロジェクトとして観光産業が位置づけられているならば、国益とは切り離して考

えられないだろう。観光地化において重要なことは交通網などのインフラ整備や関係者のサービスやコミュニケーション以上に、過去の記憶をどのように動員しているのか、そして記憶の動員が国益とどう繋がるのかという点かもしれない。今後は、韓国・朝鮮や中国との比較を通じて、日本の歴史と戦争が観光地化に及ぼした影響を与え、今日の景観を形成してきたのかを検討していきたい。ヨーロッパ列強の植民地だった地域やアメリカに植民地化された地域、例えばインドネシアやシンガポール、ハワイなどとの比較も興味深い研究となろう。

台湾における日本統治時代の経験とポストコロニアルの諸問題

山 田 雄 三

はじめに－現在の台湾の風景から

台北市街には、日本統治時代の建築物が数多く残っている。その代表は、旧台湾総督府（1919年竣工）である。日本統治時代に台湾統治の最高機関として設置されたこの官庁舎は、現在も総統が執務をおこなう中華民国総統府として使用されている。さらに、旧台湾総督官邸（1901年竣工、現台北迎賓館）、旧台北州庁舎（1915年竣工、現監察院）、旧台北地方法院・高等法院（1934年竣工、現司法院）、旧日本料亭「梅屋敷」（1900年竣工、現国父史蹟記念館）、旧台湾総督府医学専門学校（1907年竣工、現台湾大学医学院）、旧児玉総督・後藤民政長官記念館（1915年竣工、現国立台湾博物館）、旧建成小学校（1919年竣工、台北當代藝術館）、旧台湾放送局台北支局（1931年竣工、現二二八紀念館）など、日本統治時代に日本人建築家によって作られたこれらの建築物は、現在も公共施設として、または観光地として再利用されている。これは、朝鮮半島では日本統治時代の建築物の多くが、植民地時代を思い出させるものとして破壊されたのとは対照的である。

台北市外でも同じである。たとえば、台北から東へ40kmほどのところに金瓜石という町がある。ここはかつて日本統治時代に金鉱で栄えた町で、当時は日本人経営者のもとで東洋一の金の産出量を誇った。戦後も国民党政府のもとで採掘が続けられたが、採掘量の減少から1987年に閉山した。しかし現在、この町は金鉱時代の坑道、住宅、採掘設備群を「産業遺産」として保存・展示し、金瓜石の鉱業の歴史と文化を伝える「黄金博物館区」として台湾の新たな観光地になっている（2004年10月オープン）。この黄金博物館区はおもに6つの施設から構成されている。金瓜石の鉱業史と黄金をテーマとした「黄金博物館」。金瓜石の自然環境の特色を紹介する「環境館」。大正皇太子（後の昭和天皇）の視察時の迎賓館として建てられた「皇太子迎賓館」。当時の坑道を見学用に整備した「本山五坑坑道」。日本統治時代に建てられた神社の遺跡である「黄金神社」。日本人上級職員の社宅を修復した「日本式社宅」。これらのうち、黄金博物

館を除くすべての施設が日本統治時代のものである。日本式社宅に関しては、老朽化が進んでいたものを一度解体したのち、日本の建築技術に基づいて当時の姿を忠実に再現している。

日本統治時代の金瓜石の金鉱では、日本の職員は安全な管理・監督の仕事をおこない、台湾人は危険な坑内採掘に従事していた。また、台湾人と日本人には様々な格差や差別が存在していた¹。それにもかかわらず、これら黄金博物館区の展示には、日本統治時代の「傷跡」を想起させるものはほとんど見当たらない。黄金博物館のガイドブックでも、金瓜石での坑内作業や日常生活を当時の写真とともに淡々と紹介しているのみで、日本の植民地統治を歴史的に評価（非難）しようとする姿勢はほとんどみられない。むしろ、日本統治時代の記憶を、「傷跡」としてではなく、かつて東洋一の金鉱として繁栄していた時代の「思い出」として描きだそうとする傾向のほうが強い。さらに、ガイドブックでは日本統治時代の記述が全体の9割以上を占め、国民党時代の記述は閉山についての最後の一段落だけであることから明らかなように、黄金博物館区が中心的に「展示」しているのは日本統治時代の記憶である²。

以上のような現代台湾の風景に出会ったとき、次のような疑問がうかぶ。なぜ台湾では、政治の中心となる施設に今なお日本統治時代の建築物が使われているのか（中華民国総統府、監察院、司法院、等々）。同じく、なぜ台湾の歴史・文化の発信の場に日本統治時代の建築物が使われているのか（国立台湾博物館、台北當代藝術館、二二八紀念館、等々）。また、黄金博物館区のような日本統治時代の記憶を色濃く伝える施設が、植民地支配に対する歴史的評価（批判）を目的とするわけではなく、新たに建てられるのか。これらの疑問に答えるためには、日本の植民地統治以後に辿ってきた台湾の複雑な歴史に目を向ける必要がある。そこには「親日」という言説だけでは説明することができない、台湾の複雑なアイデンティティの問題が存在する。

¹ 林雅行『台湾・金鉱哀歌』クリエイティブ21、2009年、104～106頁。周婉窈、濱島敦俊監訳『図説 台湾の歴史』平凡社、2007年、138～140頁。

² 『黄金博物館区日本語ガイドブック 金色の光の下の山城』台北黄金博物館、2005年

1. 日本統治時代の台湾社会

台湾は1895年に下関条約にもとづいて清朝から日本に割譲された。そこから現在に至るまで台湾は二度にわたる文化的断絶を経験することになる。その第一波が、日本統治時代である。

下関条約締結後、自分たちの土地が日本の領土になることを知らされた台湾住民は、上陸してきた日本軍に対して各地で激しい抵抗運動をおこなった。日本軍はこれを武力で鎮圧し、五ヶ月のうちに台湾全島を統治下に治めた。台湾の領有に成功した日本は、以後半世紀にもわたって台湾住民に対して同化政策を行ない続けることになる。その同化政策の中核になったのが、学校教育であった。

当時の台湾社会には、大きくわけて三つのエスニック・グループが存在していた。ひとつは、特に17世紀以降に対岸の福建省南部から大量に移り住んできた福佬人。同じく、17世紀以降に主に広東省北部から移り住んできた客家人。そして、これら漢族が台湾に移住してくる以前からこの地に住んでいた先住諸民族である。これらのエスニック・グループは、それぞれ独自の文化と言語（福佬人は閩南語、客家人は客家語、先住民族は民族ごとの諸言語）を有していた。日本は統治時代の間、台湾において初等教育を中心とした近代学校教育制度の導入をすすめ、これらすべてのエスニック・グループに対して「日本化」教育をおこなった。

なかでも、とりわけ徹底されたのが「国語」教育であった。宗主国日本が導入した近代学校制度では、初等教育段階から日本語が教授用語として使われた。そのため「公学校」（小学校）に入学した児童が様々な知識を身につけるためには、まずは日本語の習得が必須となった。また、学校などの公的機関では日本語の使用しか認められていなかったため、「方言」（閩南語、客家語、先住諸民族語）の使用は家庭や商売の場に限定された。このような言語政策は台湾社会に次のような結果をもたらした。ひとつは、日本統治時代の台湾の人びとは、母語として各エスニック・グループの言語を保有する一方で、母国語（「国語」）として日本語の習得を義務付けられるという「言語の二重化」の状況に置かれるようになった。二つめは、台湾の人びとが高度な専門知識を習得し社会的上昇をとげるためには、日本語に習熟することが絶対の条件になった。そして三つめは、このような言語政策のもとで、台湾の人びとが保有していた言語が日本語よりも一段劣った言語として位置づけられるようになった。

このような「日本化」教育は授業内容においても同様

であった。公学校に通う台湾児童が授業で教えられたのは、日本の歴史や文化についてであり、自分たちの歴史や文化についてはほとんど教えられることはなかった。教科書のなかでも、台湾の歴史は、わずかに日本史の流れのなかで言及されるだけであった³。このような同化（日本化）を目的とした学校教育は、日本統治時代の半世紀に渡って徐々に進められ、1944年には台湾の学齢児童の就学率は71.1%にまで達することになる⁴。

1937年7月に日本と中華民国とのあいだで日中戦争が勃発するなか、この時期から台湾人に対する同化（日本人化）政策はより一層色濃くなった。「皇民化運動」のもとで、方言（閩南語、客家語、先住諸民族語）を抑圧・禁止した上で日本語の普及をさらに徹底させた。また、改姓名（漢式の姓名を日本式の姓名に改める）とともに、日本神道の普及も急速に進められた。確かに、日本統治時代の末期の台湾の人びとは「日本人」であった（あろうとした）のかもしれない。1941年に台湾総督と台湾軍司令官から共同声明が発表され、翌年から台湾で陸軍志願兵制度を実施することが宣告されると、これを慶祝する行事が台湾各地で行われた。台湾青年たちのあいだでも志願兵に出願するブームがおり、第一回陸軍志願兵の募集には42万人余りにもものぼる申込者が殺到した。日本統治時代の最後の8年間で、台湾では20万7183名が軍人または軍属として日本の戦争に参加し、そのうち3万304名が死亡した⁵。

1945年8月15日に日本は降伏し、台湾は約半世紀ぶりに中国領に戻るようになる。しかし、その後の台湾の歴史について考えるとき、日本の植民地支配がもたらした「傷跡」はあまりに大きい。それは次の三点にまとめることができる。ひとつは、台湾人（福佬人、客家人、先住諸民族等）としてのアイデンティティの破壊である。日本統治時代の学校教育を初めとした同化（日本化）政策は、台湾の人びとに「日本＝中心」「台湾＝周縁」という意識を根深く植えつけた。それは結果として、福佬人、客家人、先住諸民族は自らのエスニシティに基づいた言語や文化を一段劣ったものとしてみなす価値序列を内面化させることになった。二つめは、漢族（中国人）としてのアイデンティティの破壊である。台湾は半世紀にもわたって中国本土と切り離され、「日本化」教育を受けることになった。そのため復帰直後の台湾住民の多くが「祖国」中国の歴史や文化についてあまり理解していなかった。また、新しい「国語」（北京語を基礎とした中国の標準語）についても同様であり、それゆえに、戦後に台湾住民は大きな苦難を強いられることになった。三つめは、戦争の記憶である。戦時中、若者を中心

³ 周婉窈、前掲書、141頁

⁴ 周婉窈、前掲書、130頁

⁵ 周婉窈、前掲書、152頁

に多くの台湾住民が戦争に参加し、「祖国」中国を敵にまわして「日本のために」戦うという複雑な状況を経験した。戦時中の台湾の人びとの複雑なアイデンティティは、例えば、日中戦争が激化するなかで日本大蔵省の理財局及び専売局に勤めていた朱昭陽の回想のなかに端的に見出すことができる。

近代台湾人としては、アジアの孤児という運命から逃れることは難しかった。日清戦争に敗れると清朝は台湾人民の反対には目もくれず、台湾を日本に割譲した。私は台湾に生を享けた時、戸籍法の規定によってすでに日本人となっていた。しかし、私の祖父は中国大陸の福建から移民してきたため、私の体に流れるのは漢民族の血であり、台湾が割譲され捨てられたとはいえ、私は中国がやはり私の祖国であると考えていた。いま私が職に就いている国は私の祖国と戦争をしている。日本人が次々と壮行会が開かれて兵士として戦地に送り込まれるのを見、日本人がたびたび彼らの勝利に対して歓呼の声をあげるのを聞き、東京の街中の人波に身を置いた私は、無上の孤独を感じ、何も話すことができず、内心の悲痛は言葉で言い表すことができないほどだった⁶。

日本統治時代（とりわけ戦時中）の台湾人は「日本化」教育が施されながらも、権利や機会の面において「完全な日本人」になることができず、つねに「二級市民」としての立場を強いられていた。第二次世界大戦の終結とともに台湾は50年ぶりに「祖国」中国に復帰することになるが、次に彼ら／彼女らを待ち受けていたのは、「日本化された」「日本のために戦った」というかつての同胞からの差別・蔑視の視線であった。日本統治時代の半世紀の経験が、「台湾人」と「中国本土人」とを完全に「他者」にしてしまった。現代まで続く台湾のポストコロニアルの問題はここから出発することになる。

2. 国民党統治時代の台湾社会

台湾の人びとの多くが終戦後の「祖国復帰」を熱烈に歓迎した。1945年10月17日に中華民国軍が基隆港に上陸してくることを聞きつけると、台北住民は言うに及ばず、台中・台南からも多くの人びとが港に駆けつけて国軍を出迎えた。また、台湾行政長官の命をうけた陳儀の台湾到着時も同じく、台北の松山飛行場は歓迎の人波で溢れかえり、バスに乗れなかった人はわざわざ歩いてやって

きた。さらに、台湾の人びとは競って旧い「国語」（日本語）にかわる新しい「国語」（中国標準語）の勉強を始め、台湾の新生に期待を高めた。

しかし、このような高揚感はすぐに失望へと変わることになる。台湾は中華民国のひとつの省（台湾省）として編入され、陳儀のもとで台湾行政が開始されるが、行政機関や接収企業の運営の中心は「外省人」（1945年以後に国民党とともに大陸から台湾に移ってきた人びと）で固められ、「本省人」（1945年以前から台湾に住んでいる人びと）は新社会の建設・運営事業からは排除されることになった。例えば、行政長官公署においても、行政長官を初めとした21の要職のうち、外省人が20を占め、本省人では北京大学教授を務めたことのある「半山」（大陸から戻ってきた台湾人）が教育処副処長のポストにただけであった⁷。さらに、このような外省人による統治体制のもとで、公的物資の横領や横流し、縁故採用、官吏と商人との癒着などの汚職や腐敗がはびこり、社会秩序は一気に悪化した。学校の先生に学生が賄賂を贈る久しくなかった悪習も蔓延し始めた。厳しいながらも規律を保っていた日本統治時代と比べて、このような腐敗は当時の台湾の人びとの目には常軌を逸したものと映った。オーストラリアのジャーナリスト、J・ベルデンは、この時期に「島から逃げ出す一匹の犬（日本人）と入ってくる一匹の豚（外省人）」を描いたポスターをあちこちで目にし、そのポスターのキャプションには「犬はうるさいが人を守ることはできる。豚は食って寝るだけだ」とあったと証言している⁸。

台湾の人びとをとりわけ苦しめたのは、同じ漢族であるはずの外省人からの蔑視・抑圧であった。この時期に雑誌『台湾民声報』に「孝紹」という署名で掲載された次の一文は、当時の台湾住民が置かれていた状況を端的に表わしている。

50年にわたり、台湾人は祖国への復帰を熱望してきた。（中略）ただ台湾人は祖国の落ちぶれた様子を愛さないし、祖国の畸形じみた社会生活も愛さないだろう。（中略）祖国は、上下を問わず、みな「50年もの間、日本に行っていた留学生」として台湾人民をみてほしい。この見方は大変重要である。もし日本の植民地、あるいは日本の奴隷として台湾人を見るならば（台湾人は普通みな反抗精神を持ち合わせているが）、中国が台湾を接収したとしても、中国による台湾の植民地化と何ら変わることがなくなるだろう⁹。

⁶ 黄俊傑、白井進訳『台湾意識と台湾文化』東方書店、2008年、66頁

⁷ 黄俊傑、前掲書、24頁

⁸ 若林正文『台湾 変容し躊躇するアイデンティティ』2001年、67～68頁

⁹ 周婉窈、前掲書、172～173頁

¹⁰ 若林正文、前掲書、69頁。周婉窈、前掲書、174頁。黄俊傑、前掲書、23頁。

この言葉が予言しているように、台湾は国民党政府の下で第二の植民地統治時代を迎えたといってもよい。統治者側の外省人は、台湾の人びと（本省人）を「日本による奴隷化教育」を受けた者として蔑視・抑圧し、「再教育の対象」としてみなした¹⁰。

このような外省人からの視線のなかで、台湾の人びとは再び同化（「中国化」）教育を受けることになる。ここでも、その中核となったのは「国語」（中国標準語）教育であった。「国語」の補習クラスの類の施設が相次いで設立され、「国語」の普及が進められた。その一方で、日本語の使用は禁圧され、「祖国」復帰の一年後にはマスメディアでの日本語の使用が一律に禁止された。このような「日本語」から「中国標準語」への公用語の急速な転換、つまり公的な場では「中国標準語」の使用が求められたため、それまで日本語を通して知識を習得し、日本語を通して意見を表明していた本省人（とりわけインテリ、エリート層）は、突如として「言語不能者」の立場に置かれることになった。さらには、このような「国語」の未習熟を理由に、日本語世代の本省人は公務員、教師、医師、弁護士などの職業から排除されることになった¹¹。

このように、復帰直後の台湾の人びとが経験することになったのは、「祖国」中国に対する大きな失望であった。外省人の統治のもとで汚職や腐敗が蔓延し、社会風紀は乱れ、外省人に職を奪われ、日本統治時代に獲得した知識や教養は否定された。さらには、陳儀政権による経済統制の結果、深刻なインフレーションがもたらされた。このような状況のなか、本省人の不満は爆発寸前まで高まり、ついには二・二八事件と呼ばれる本省人による全国蜂起と、それに対する国民党政府による武力弾圧・虐殺事件が発生することになる。二・二八事件は、1947年2月27日、台北市内でヤミで煙草を売っていたひとりの寡婦を外省人憲兵が殴打したこと、民衆とのあいだで衝突が発生、そこに居合わせた一人の本省人男性が憲兵の威嚇射撃の流れ弾に当たって死亡したこと、端を発する。翌28日には、行政長官公署に抗議に赴いた民衆に対して警備兵は機銃掃射を浴びせ、6人の死者と多数の傷者を出す惨事に発展した。これをきっかけに暴動は台湾全島に波及する。これに対して陳儀は南京の蒋介石に援軍の派遣を要請し、3月5日にその援軍が到着すると、その武力をもって徹底的な弾圧をおこなった。この

暴動鎮圧の過程で、陳儀政府に批判的な行動や言動をとった本省人の知識人や有力者の多くが、逮捕なしで連行され、裁判なしで処刑された。1992年に李登輝政権下で発表された調査では、二・二八事件での弾圧による死亡者は1万8000人から2万8000人と推定されている¹²。

このような国民党による大虐殺は、本省人に決定的な恐怖心を植えつけた。事件後に台湾を訪れたある中国人記者は「今日の台湾の至るところで恐ろしい沈黙が現われた」と述べている¹³。また同時代を生きた作家呉濁流の言葉によれば、台湾人インテリやエリートのある者は政治に背を向けて遠ざかり、ある者は態度を一八〇度転換して政府に摺り寄り、ある者は海外に逃走し、そうでない者は沈黙を守った、一般民衆とはといえば、日本統治時期と同様に政治への無関心と日常生活への埋没に舞い戻った¹⁴。「反乱分子」が排除されたあと、残された本省人は口を閉ざすしかなかった。さらに、1949年5月19日に戒厳令が敷かれ、同年12月に中国本土での国共内戦に敗れた中華民国政府が台湾に移転してくると、より一層の沈黙を強いられることになった。二・二八事件の記憶は、1987年に戒厳令が解除されて民主化の時代になるまで長らくタブーとして封印され続けた。しかし、日本語世代の本省人（とりわけ遺族）の私的記憶のなかには生き続けることになる。この二・二八事件の経験こそが、現在に至るまで「本省人」「外省人」の区分を解消できないでいる「断絶」の出発点になっていると考えられる。二・二八事件の経験をへて、本省人は外省人が「危険な統治者」であることを認識し、虐殺の怨嗟や恐怖を抱えながらその口を閉ざすようになり、一方で、外省人は本省人が「危険な被統治者」であることを再認識し、ますます本省人に対する統治・抑圧を強めることになった。

先述したように、1949年12月、中国本土での国共内戦に敗れた蒋介石率いる中華民国政府（国民党政府）は中国本土から撤退し、台湾に中華民国政府を移転させた。これに伴い、国民党の幹部・将兵を初めとした約100万人¹⁵の人びとが大陸から台湾に移り住むことになった。このような中華民国政府の移転によって、以後、台湾の人びとは「大陸反攻」をかかげる中華民国政府（国民党政府）と「台湾解放」をかかげる中華人民共和国政府（共産党政府）とのあいだの「内戦」の真っ只中に巻き込まれることになる。そして、中華民国政府の「内戦モード」のなかで、本省人に対する政治的抑圧はますます強くな

¹¹ 丸川哲史『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社、2000年、82頁。周婉窈、前掲書、174頁

¹² 丸川哲史、前掲書、83～84頁。若林正文、前掲書、72頁

¹³ 若林正文、前掲書、72～73頁

¹⁴ 若林正文、前掲書、73頁

¹⁵ 当時のエスニック・グループ別の人口数は、1943年の総督府統計によると、総人口658万6000人のうち福佬人は499万7000人、客家人は91万3000人、先住諸民族に含まれる高砂族は16万2000人、平埔族は6万2000人であり、1945年以後に台湾にわたってきた「外省人」は台湾社会のなかではマイノリティといえる存在であった。ちなみに、民主化以降の台湾ではこれらのエスニック・グループを「四大族群」とよび、1989年時点での人口比率は、福佬人73.3%、客家人12%、外省人13%、原住民1.7%であった。若林正文、前掲書、30～31頁、49～50頁。

った。

そのひとつが、戦後から続く、国内統治における本省人の周縁化であった。まず、国民党政府は「中央民意代表」（国会議員）の任期を、「反乱鎮定動員時期」を理由に「大陸の回復」まで改選を延期することを決定した。「大陸の回復」は事実上不可能であったことから、これは議員に終身任期を与えたに等しく、これにより本省人は国政レベルの政治参加の道を封殺されることになった。さらに、国民党政府は台湾統治の諸組織・機関において、共に台湾に渡ってきた「外省人」で人員を固めていった。たとえば、1952年の国民党員総数約28万人のうち、外省人は20万人強で七割以上を占め、55年の時点では、そのうちの三分の二が軍人、警察、公務員、教員の職に就いていたことから、外省人が台湾統治の中核に置かれていたことは明らかである¹⁶。

また、戒厳令体制のもとで徹底した思想統制や弾圧も行われた。なかでも、白色テロルと呼ばれる政府による共産党員とそのシンパの摘発は、台湾の人びとに恐怖を植えつけた。これは共産主義者の弾圧だけにとどまらず、政治的危険因子とみなされた者たちも次々とその犠牲者となった。統計によると、1950年代から1987年の戒厳令解除までに、台湾では2900余件の政治事件が発生し、約14万人が連座して拷問を受け、そのうち3000人から4000人が処刑された¹⁷。白色テロルは、二・二八事件に対しての統治者側による「恐怖による政治教育」としての側面をもち、台湾の人びとに国家権力に対する恐怖感、そしてそれに抵抗することの無力感を植えつけるうえで絶大な効果を発揮した。いつ思想弾圧の標的にされるかもしれないという恐怖のなかで、政府に対して不満があってもその口を閉ざすしかなく、また不満がなくても自らのなかに政府が期待する規範から逸脱したものはないか自己検閲をおこなう視線を内面化させることになった¹⁸。

さらに、学校教育をとおした「同化」（中国化）政策も本格的に行われるようになった。言語政策に関しては、当然ながら「国語」（中国標準語）が教授用語とされた。53年からは教室では方言（閩南語、客家語、先住民諸語）を話すことを禁止され、「国語」のみの使用しか認められなかった。また、「国語」による授業ができない本省

人教師は外省人教師に代えられた。さらに、教室における母語使用を罰する慣行が生まれ、児童に母語使用者を密告させる悪習も定着していった。こうした慣行は、日本統治時代と同じく、母語が国語に対して一段劣っているという意識を児童に植え付けた¹⁹。また、次第に強まっていく進学競争のなか、半世紀ものあいだ国語文化から遠ざかっていた本省人は明らかに不利な立場に置かれることになった。たとえば、1966年の時点で、大学生のうち外省人が占める割合が34%、87年の時点でも30%で、これは外省人の人口比率の二倍を上回っている²⁰。50年代、60年代に学校に入学した本省人の多くが、小中学校における作文や口頭発表の際に外省人の同級生に劣等感を味合わされた経験を述懐しているそうであるが²¹、おそらくこのような経験も「本省人」「外省人」という区分を意識化する契機になっていたと考えられる。

学校教育の内容²²に関しては、たとえば歴史教科書では、その内容の九割以上が「中華四千年」の歴史であり、現代史は「八年抗戦」（日中戦争）までであった。また、台湾の歴史についての言及は極めて少なく、二・二八事件については全く記述されていなかった。当時は事件について言及することは社会的タブーであり、そのタブーが崩れつつあった時期の1988年時点のアンケート調査でも、全台湾人887名の回答者のうちの15%が事件の存在を知るのみであった。台湾の地理についての内容も5%にも満たず、共産党による大陸当地の不法性を強調するために、中華人民共和国成立以後の行政区画や名称の変更などは歴史教科書に反映されなかった²³。このように、日本統治時代と同じく、学校教育において、台湾の人びとは自らのエスニシティに基づいた言語や文化を「劣ったもの」として否定・抑圧され、自らの歴史や文化についても系統的に学ぶことはできなかった。それゆえ、周婉窈によれば、「本省人の子弟は往々にしてある種の劣等感を抱き、無意識のうちに「台湾に関するもの」は皆、低俗なのだと思ひ込むようになった」²⁴。このような状況は1980年代後半の民主化の時代まで続くことになる。

以上のように、第二次世界大戦の終結とともに台湾は「祖国」復帰を果たすことになるが、半世紀にもわたる日本の植民地支配の結果、中国とのあいだに決定的な「隔たり」を経験することになった。言語、慣習、経験、歴

¹⁶ 若林正文、前掲書、81～82頁

¹⁷ 周婉窈、前掲書、188頁

¹⁸ 若林正文、前掲書、101～102頁。周婉窈、前掲書、191～192頁

¹⁹ 若林正文、前掲書、110～111頁。周婉窈、前掲書、197～198頁

²⁰ 若林正文、前掲書、111頁

²¹ 若林正文、前掲書、111頁

²² 蒋介石政権下の教育内容は、当然ながら「中国化」だけでなく「国民党化」の要素も強かった。国民学校の初等国語教科書の選別基準の第一項には「国家の現下の必要性に基づき、三民主義の精神を奮い起こし、共産主義の毒素を肅清する」と定められるなど、この時期の学校教育は徹底した反共と蒋介石崇拜をその中核としていた。周婉窈、前掲書、193～199頁。

²³ 若林正文、前掲書、111～112頁

²⁴ 周婉窈、前掲書、197頁

史のすべてにおいて、もはや「台湾人」(本省人)と「中国人」(外省人)とは「他者」であった。二・二八事件も、このような「隔たり」から生じた悲劇的な事件であったと言える。同様に、国民党政府による同化(中国化)政策も、このような「隔たり」を埋めるに行われたものであった。このように日本統治時代を経ることで、台湾の人びと一世紀のあいだに二度に渡ってアイデンティティの否定と転換を強いられることになった。

3. ポスト戒厳令時代の台湾社会とポストコロナの諸問題

日本の植民地支配の経験は、台湾に何をもたらしたのだろうか。台湾の人びと(本省人)は、日本統治時代から民主化の時代を迎えるまで、一世紀にもわたって(そして二度にわたって)自らのエスニシティに基づいた言語や文化を「劣った・卑しい」ものであるという意識を植え付けられることになった。台湾の人びとは、一世紀にもわたって、自分たちの歴史や地理の知識から隔離されつづけることになった。台湾の人びとは、二度にもわたって植民地支配と同化政策を経験することになった。そして二度目は「祖国」中国から植民地支配と同化政策を受けるといふ悲劇を経験することになった。台湾の人びとは、「他者」(日本/中華民国)に抵抗し、その過程で多くの命が失われることになった。その代表が日本統治時代の抗日運動であり、国民党統治時代の二・二八事件である。いずれも、日本の植民地支配がもたらした悲劇である。また逆に、戦時中に「日本のために」戦った台湾の人びとも悲劇を経験することになった。戦争に参加した台湾の人びとの多くが戦死し、生き残った人も、戦争終結後に「祖国」中国を敵に回して戦ったという後ろめたい記憶を抱えながら生き続けることになった。そして、以上のような日本統治時代がもたらした歴史的・文化的分断の結果、台湾の人びとは一世紀にもわたって社会のなかで「周縁・従属」の位置に置かれ、機会の不平等を経験することになった。そのために、民主化が進展した現代の台湾社会でも「本省人」「外省人」という社会的区分(対立)が根深く残り続けることになった。このような、日本の植民地支配がもたらした「負の遺産」に目を向けることなく、台湾に対して「親日」という言葉を使うことなどできるだろうか？

1987年に戒厳令が解除され、翌88年から初の本省人総統となった李登輝のもとで台湾の民主化が進められた。91年には「万年国会」の改選が実施され、翌92年の選挙では国会の八割以上が本省人で占められるようになった。

た。96年からは国民投票による総統選挙も実施されるようになり、2000年には民進党の陳水扁(本省人)が総統に選出されることで、史上初めて国民党からの政権交代が行われた。また「方言」の見直しも進み、今日では外省人も含む多くの政治家が台湾語(閩南語)でも演説をするようになり、映画や音楽などでも台湾語が使われるようになった²⁵。「二・二八事件」「台湾人日本兵」「白色テロル」の記憶も民主化のなかで次々と語られるようになった。1996年には、二・二八事件の犠牲者を追悼するため二二八和平記念碑が建立され、民衆が台湾全土に向けて蜂起を呼びかけた旧台湾放送局台北支局は、事件に関する様々な資料を展示する台北二二八和平記念館として再利用されている。

このような民主化の推進者となった李登輝は、近年、「新台湾人」という言葉を頻繁に口にしていて。たとえば、1999年5月に出版された『台湾的主張』の中で、李登輝は「新台湾人」について次のように説明している。

数世紀以来、台湾は無数の心血と努力を注ぎ、多様な文化的伝統を融合させ、そしてこれを基礎に自由、民主、繁栄の「新しい台湾人」を創り出し、昂然と二一世紀を迎えるに至った。「新しい台湾」を創造した「新しい台湾人」は、先住民であり、400年前に渡台を始めた大陸からの移民であり、50年前に渡台を始めた新移民である。つまり、台湾に住んで、心が台湾に根ざし、台湾のために犠牲を払い奮闘することも厭わない者は、みな「新しい台湾人」にほかならならない²⁶。

李登輝の言葉からは、ポスト戒厳令体制のなかで、「本省人」でも「外省人」でもない、また「福佬人」「客家人」「先住諸民族」でもない、これらの対立と闘争の記憶を乗り越えて、「新しい台湾」にむけて全エスニック・グループの力を結集・融和しようとする切実な思いを感じることができる。

しかし、「新台湾人」のアイデンティティの「中身」について考えたとき、日本統治時代の経験がもたらした台湾社会の「歪み」について改めて思い知らされる。現代台湾の四大エスニック・グループとされる「福佬人」「客家人」「先住諸民族」「外省人」を結びつける共通の基盤(文化、歴史、経験)とは何であろうか。ひとつは、現在進行形の「民主化」の歴史であろう。それは1970年代の党外運動の歴史から描き出せるかもしれない。しかし、国民党とともに台湾にわたってきた戦前生まれの外省人にとって、「民主化」の歴史とは自分たちの社会的ポジションの「周縁化」の過程でもあった。現に、国民党軍の

²⁵ 丸川哲史、前掲書、27頁、35～37頁

²⁶ 黄俊傑、前掲書、29頁

老兵たちは今でも「眷村」といわれる外省人が集住する官舎に住んでいるが、台湾社会の「お荷物」としてイメージされている。彼らは、わずかな恩給と、「大陸反攻」に成功した暁に与えられるとされていた大陸の「土地手形」を抱えたまま、孤独な老後を過ごしている。また戦後生まれの外省人に関しても同じく、選挙のときには圧倒的多数の「本省人」を前にして不利な状況に置かれることが多い。かつての「外省人」と「本省人」との勢力関係は「民主化」のなかで逆転したといえる。

それでは「新台湾人」アイデンティティのなかで、「戦後」とはどのような意味をもつのだろうか。台湾社会における「戦後」とは、外省人・本省人の「支配／被支配」の歴史であったと言える。例えば、二・二八事件の記憶を外省人と本省人とのあいだでどこまで共有することが可能だろうか。この事件で国民党軍によって家族を虐殺された本省人遺族にとっての「戦後」とはどのようなものだろう。他方、この暴動の最中に本省人の暴徒たちの手によって家族を虐殺された外省人遺族にとっての「戦後」とはどのようなものだろう。戦争の記憶についても同じである。外省人は大陸で抗日戦争を戦い抜き、一方の本省人は日本国のために戦った。

それでは日本の植民地統治からの「解放」はどのような意味をもつのだろうか。外省人にとっては、大陸から台湾にわたってくる前史であり出発点であった。それは同時に、台湾という「異国」に永続的に居住することを強いられた「祖国喪失」の始まりでもあった。本省人にとっては、「解放」とはさらなる恐怖政治と思想弾圧の時代の始まりを意味した。李登輝（1923年生まれ）を初

め、戦前生まれの台湾人は「親日」であるということがよく言われる。しかし、それは国民党時代との相対的な評価の結果である。彼ら／彼女らが（「日本化」教育を受けたがゆえに）その後に辿ることになった苦難と恐怖の道のりに目を向けることなく、「親日」の背後に隠された歴史の重みを理解することはできない。また、本論ではほとんど触れることがなかったが、先住諸民族にとって「解放」とは何であったのだろうか。先住諸民族にとって、「祖国復帰」などどれほどの意味があったのだろうか。彼ら／彼女らにとって、すでに17世紀に漢族が大量に台湾に渡ってきたときから「支配／被支配」の歴史は始まっていたのではないだろうか。

「新台湾人」のアイデンティティはどこに向かうのだろうか。それは「これからの台湾」を作っていく「未来」に向けてのアイデンティティであろう。しかし、民族融和を掲げて「過去」に視線を向けるとき、あまりに「帰るべき場所」がないことに気づかされる。そこにあるのは文化的断絶と血なまぐさい闘争の歴史である。そして、台湾の人びとの「帰るべき場所」を喪失させてしまったのも、日本の植民地統治がもたらした「負の遺産」である。現在台湾は、「民主化」のなかで日本の植民地統治がもたらした「歪み」を矯正しようとしている。「新台湾人」アイデンティティもそのひとつの試みである。「敗戦」とともに植民地統治の記憶を忘却してしまったわれわれは、戦後の台湾がたどった苦難の道のりについて、そしてこれからの台湾の行く末について、共に考えていかなければならない立場に置かれている。

IV. 「地域」に関する歴史研究データベース

【解題】

1. 視点

本データベースは、福岡という「地域」をめぐって、これまでどのような主題と角度でもって研究されてきたのか、過去の研究論文を抽出することで提示しようとするものである。もとよりここでの試みは、狭義の日本史研究（者）はもちろん、広く歴史研究（者）のみを念頭においた既存のデータベースとは、視点のうえで少々趣が異なる。そこで、まずは作成者側の視点から示したい。

本プロジェクトにおける「地域」とは、様々なレベルの地域が折り重なる形で構成される、いわば重層的な「地域」として想定されたものである。例えば、ある一つの地域をとってみても、直接的な居住空間としての「ローカル」のみならず、より広域の「リージョン」、さらには「エリア」といった具合に、実態として様々なレベルの地域が折り重なる形で構成されている。そしてこれらは、現在の行政区画とも国家の輪郭とも重ならない。先行するシンポジウムや成果報告書で表現されたところに基づけば、福岡大学の位置する七隈・福岡市域を核としながら、九州さらには東アジアといった具合に、大小様々な地域を、放射線状に捉えようとするものである。もちろん、これらは内から外へ、外から内へ、と双方向の関係にある。このような視点は、本プロジェクトが日本史研究者と外国史研究者の協同により行われ、むしろ数のうえでは外国史研究者が多くを占めるといった、あまり前例のない研究体勢から半ば必然的に導き出されたものである。

こうした「中央」が前提とされた「地方」ではなく、いかようにも設定できる「地域」を前面に押し出す視角は、1990年代に進行した国民国家の相対化という内外の変化を契機としていることは今さら言うまでもない。ただ、国民国家の相対化と言うとき、かえって対抗的存在としての国民国家を常に媒介させていたとすれば、現在求められるのは、「地域」から、あるいは「地域」そのものを率直に捉える方法なのかもしれない。そのとき必要とされるのは、いわば「地域」の総合学だと思われる。

この点は、既に行われたシンポジウム『「地域」と生きる福岡大学（1）』においても明瞭に示された。詳細は「地域」叢書準備号を参照されたいが、そこで提示された地域医療問題や環境汚染問題等々といった問題は、いずれもローカル／リージョン／エリアといった「地域」の重層的構造への意識を不可欠とするものであったし、同時に、それぞれの立場から、「地域」そのものを濃密

に描くものでもあった。そしてこれらは、相互に参照可能な関係にある。実際、シンポジウムの方は経験交流の場であった。もともと「地域」という場が、われわれ日常生活の場そのものであるならば、文科系・理科系といった学問上の便宜的区分はあまり意味をもたないだろう。「地域」そのものが、いわば一つの総合的な問題領域であるならば、それへのアプローチも総合的たらざるを得ない。当然、ここから諸学問間の有機的な連携への期待と導かれる。以下に掲げる本データベースは、「地域」を考察するうえでの材料を、歴史学研究の立場から、他分野他専攻にも向けて提示しようとするものである。

2. 方法

前述したように、本データベースは、福岡という地域をめぐって、どのような主題と角度でもって扱われてきたのかという視点から作成されたものである。方法としては、主に学術雑誌『史学雑誌』に掲載された文献リストに依拠し、①明治以降の近現代を扱った、②戦後に書かれた論文に限定してピックアップするという方法をとった。このような限定は、膨大な対象を前にしての物理的理由もあるが、本プロジェクト「グローバル化の中の『地域』」に即した方法でもある。すなわち、欧米に誕生した国民国家を基準とする新たな国際秩序がグローバル化されていった19世紀半ば以降の近現代を舞台とし（①）、そのような世界史の連関のなかに組み込まれた福岡・九州・東アジアといった「地域」がどのように変容していったのか、そうした事態への認識を現在に連なる戦後の人々に即して（②）、追ったものである。その意味で、本データベースは、地域がグローバル化されていく態様を戦後日本の人々がどのように認識していったか、その軌跡を示すものとも言える。

さて、現在においても、様々な場で様々な人によって様々な観点から作成されたデータベースが存在するのはもちろんである。例えば、自ら居住する空間の歴史を知ろうとするとき、まずは手にするのが自治体史や各種記念会誌の類だろう。そして、それらの編纂にあたっては、必ずデータベースが作成されたはずである。よって、本データベースとの間で、データ上の重複が出てくることはただちに予想される。にもかかわらず、ここでの作業を遂行した理由は、以下の点にある。

第一に、各種各様のデータベースが存在することが予想されながら、それらが相互に共有される体勢が構築さ

れていない、という点である。おそらく、それぞれの場でかなり濃密で高精度の情報が収集されていると思われるが、そもそもどこに、どれだけ、どのような情報が集積されているか、すぐには把握できないのが現状である。現在、福岡県地域に関する情報センターとも言うべき役割を果たしているのは福岡県立図書館郷土資料室である。そこでは随時、オンライン化が進められてはいるものの、各地で収集された情報とつながっているわけではない。自治体史や記念誌編纂にあたって構築されたデータベースも、基本的には刊行物本巻へと反映され、データそのものを開示している例はほとんどない。そして、福岡県なら福岡県という限定を付しても、これらの刊行物を完備している機関は実は皆無である。こうした個々には存在する情報の濃密さとは裏腹に、どうしても高くなる個別性に対し、総合化の名のもとにネットワーク化を図るのは言うは易いが、かなりの困難をとまなう。本データベースには、ささやかながらその発端としての意味が付されている。

しかし、より本プロジェクトの特徴と関わり、また第二の理由として挙げられるのは、既存のデータベースにおいて想定される「地域」の範囲が、やはり限定される傾向をもつ、という点である。そこでは、自らがよって立つ居住空間から出発するがゆえに、いわば内から外へと視点が向けられる。そして、より内部でのデータは濃密になる一方で、より広域の地域から、つまりは外から内へと向かう視点は弱くなる。そこで本データベースでは、あえて外国史（西洋史・東洋史）に分類されている文献リストから、東アジア・九州・福岡に関するものを抽出する方法をとった。これは本データベースでも、最もスペースが割かれている部分である。そして、これらの作業に従事したスタッフは、いずれも日本近現代史の専攻者ではない。いわば外部の世界に慣れ親しんだ視点から、様々な「地域」が折り重なる福岡が外の世界とどのように切り結ばれるのか、抽出されたデータを通じて提示されることになるだろう。こうした試みは、これまでに無いものである。

もとより、こうした手法の採用は作業のうえでも、データの精度を高めるうえでも、かなりの困難を伴う。実際、データ採取にあたって依拠した文献リストは、ほぼ『史学雑誌』所収のリストに限定されたし、そのリストも、一九六〇年代からしか存在していない。そして、抽出にあたっては、原則、タイトルのみで依拠せざるを得なかった。よって、データの精度という面からみれば、多くの課題があることを明記しておかなければならない。とはいえ、本データベースによって俯瞰が可能となり、一定の傾向性をみてとれるのも確かである。

3. 〈読み〉の例示

前述したように、ここでは本データベースを手にする大部分が、直接的には歴史学を専攻する人々ではないことが想定されている。理科系を含め、日常的に研究に従事しない方々も、かなりおられる。そこで、本データの読み方はもとより多様であるべきなのだが、筆者が一瞥して気づいた点を述べて、導きの糸としたい。あくまで一つの〈読み〉例示である。

ここでは、植民地帝国としての日本を扱った研究の多さに即して見てみたい。数としても圧倒的に多く、さながら福岡・九州・東アジアに即して「地域」を考えることは、植民地帝国日本を考えることと同義であるかのごとくである。言うまでもなく、一九四五年以前の日本は、本国とは別に植民地をもった帝国として存在した。面積にして現在の約一・五倍である。さらに一口に植民地と言っても、公式の植民地（台湾・樺太・朝鮮）とは別に、一部行政権をもつ中国閩東州、国際連盟の委任統治区域たる南洋群島、形態としては独立国家であった満州国、さらには戦中期におけるアジア各地の占領地など、厳密には植民地とは表現されないが日本が統治権を及ぼしうる多種多様な範囲から構成されていた。ここで「地域」の問題に引きつけた場合、重要となるのが、植民地の地理的位置である。右に列挙した地名から明らかなように、日本の植民地は日本列島を取り囲む形で形成された。これは先行する欧米近代国家に対する防衛という観点が存在したためだが、近接する地域を植民地として領有した歴史にこそ、「地域」研究と「植民地」研究とが実態のうえで重なってしまう所以がある。そして、そのようななかで、九州・福岡こそが、大陸植民地の最前線に位置にあったことは言うまでもない。

さらにデータベースを一瞥していけば、こうした研究が1990年代後半以降、爆発的に増えてことが確認できよう。もとより、植民地研究そのものは、1960年代から存在する。いま両者の関係を、視点の変化という形で述べれば、「帝国主義研究から帝国研究へ」と概括できよう。前者の帝国主義研究は、資本主義の発達段階から植民地領有を説明しようとするものである。1960年代、こうした研究が盛んになったのは、当時「国家独占資本主義」と規定された日本の高度経済成長、および日米安保条約やベトナム戦争を契機とした「アメリカ帝国主義」への従属認識が背景としてあったと推測される。ただ帝国主義研究においては、その指標となる資本主義の発展段階への着目から、「日本」資本主義分析となり、結果として一國史とならざるを得なかった。植民地の問題も「日本」からの収奪過程として描かれ、実際のところ、日本本国と植民地とは切り離される傾向にあった。これに対し、1990年代後半に登場する後者の帝国史研究は、日本本国と植民地、さらには植民地相互間の「関係」を問題

にする点に特徴がある。例えば、日本本国は植民地を領有することで、いかに変容したのか、あるいは植民地を発信地として、日本本国や他の植民地へとどのように影響が波及していったのか、といった問いの提起がなされる。これは、先にも触れた1990年代の国民国家の相対化という潮流の延長線上にあることはもちろんである。国民国家日本という枠組みからの解放を目指したとき、実態のうえで「地域」と重なる形で存在した植民地が、改めて視野に入ったのだとも言える。実際、近代国家としては後進国であった日本本国からすれば、しばしば植民地には、本国では遂行しえないアイデアの「実験場」たる意味が付与されたし、そこでの「成果」は本国への還流が試みられた。こうした本国・植民地間の「関係」へと視線が開かれれば、扱われる問題領域も多様となる。従来、中心的地位を占めた経済史のみならず、衛生、医療、建築、インフラ、教育、宗教、映画等々、ここではモノや情報、技術や人間といった、まさに「地域」間の移動も主題とされうる。数のうえでも1990年代後半以降の帝国史研究が圧倒的なのは、こうした問題領域の多様化を背景としている。そして多様化された問題領域は、それぞれ直接には歴史研究に従事しない方々がもつ、多種多様な関心との接点を生み出すだろう。

また、植民地統治の「遺産」という観点に立つならば、植民地の問題は決して過去のものではない。言うまでもなく、戦後日本の出発は、かつての植民地や海外占領地からの帰還と平行に進行した。人材や技術や情報や経験が、日本列島へと一気に還流されたわけである。例えば、戦後日本の自動車産業や新幹線の技術などに、かつての帝国日本が築いた満州国の存在が影を落としていることはよく知られている。論者によっては、さらに一般化させて「戦後日本の原型は満州国にある」とすら言われるほどである。この指摘の当否はおくとして、植民地の「遺産」という観点に立つとき、かつての植民地支配の歴史だけでなく「現在（戦後）」にも継承された刻印として、問題を展開させることもできる。逆から言えば、現在の問題を歴史的に遡って捉えようとするとき、かつての日本本国を通過して、植民地へと到達することも十分あり得るのである。そして、かつての植民地が実態として「地域」と重なる形で存在したことを合わせれば、植民地を媒介として「地域」と「現在（戦後）」、この二つを切り結ぶことも可能だろう。現在のところ、こうした観点から直接に九州・福岡を扱った研究は多くはないが、今後の可能性として期待される。

4. おわりに

本データベースは、データから見れば、やはり日本の近現代が舞台となっている。しかし、それはあくまで舞台に過ぎない。それぞれの多様な関心から多様に読まれることを期待したい。ほどなく本データベースは、キーワード入力によって検索が可能となるものへと衣替えされる。便利と言えば便利なのだが、想定された検索用語の範囲内でしか情報が引き出せなくなることでもある。今回のような、あえて全データを一覧させた旧型のリストは、昨今ではあまり見られなくなったが、想定外のものとの遭遇という点では、メリットがあるのである。現在の位置を確かめるにあたって、仮に歴史的に遡ろうとする方法をとったとき、本データベースが一つの導きとなり、また問題を広げる契機となれば幸いである。そしてそのとき、我々が作成した、いまひとつのデータベース「福岡大学における『地域』研究者一覧」（準備号所収）も合わせて参照されたい。これら二つが相互に参照されることで、他分野他専攻の方々との接点が生まれるならば、我々のさしあたっての課題は達成されたことになる。

最後に、本データベースの作成に従事したのは、もっぱら以下に掲げる調査員の諸氏である。おそらくは自らの研究時間の多くを、ここでの作業に割いたはずである。筆者などは最後の段階で、この一文を添えたに過ぎない。末尾ながら謝辞を示したい。

調査員 池上大祐、太田黒真美、久保知里、古城真由美
松隈達也、宮崎慶一、山田雄三
(本学人文科学研究科院生および修了生)

文責 福嶋寛之 (人文学部歴史学科講師)

(1) 福岡（九州）をフィールドとする研究リスト

著者	論文タイトル	書名	雑誌名	出版社	巻号	頁	出版年	キーワード
宮本又次	九州経済史に於ける特殊構造		九州文化史研究所紀要(九州大学)		1		1950	九州 経済史 特殊 構造
小泉幸之輔	日本採炭機構と労働災害		経済と貿易		51		1952	日本 採炭 労働 災害 炭鉱
上妻幸英	大正十三年三池労働争議経過誌		九州史学		2		1956	大正 三池 労働 争議
九州産業史料研究会編		九州近代史料叢書一第二輯福岡県物産史					1956	九州 近代 史料 叢書 福岡 物産史
九州産業史料研究会編		九州近代史料叢書一第三・四輯明治期福岡県農業統計					1956	九州 近代 史料 叢書 明治 福岡 農業統計
師井 於菟彦	八幡製鉄所の立地決定について		史学研究		64		1956	八幡製鉄所 立地
松井 安信	九州金融史の一〇（歯に向）—明治初・中期の福岡県金融事情		西南学院大学商学論集		3-1		1956	九州 金融史 明治 初・中期 福岡 県 金融
生松 敬三	明治三十年代における森鷗外—とくに小倉時代を中心に—		東洋文化研究所紀要		11		1956	明治 三十年代 森鷗外 小倉
馬原 鉄男	自由民権運動における玄洋社の歴史的評価		日本史研究		27		1956	自由民権 運動 玄洋社 歴史的 評価
竹内理三	福岡県立図書館所蔵史料の整理「山城」「撰津」「河内」「和泉」各国荘園分		九州史学		9		1959	福岡 図書館 所蔵史料 荘園
宮本又次		九州（風土記経済史）		弘文堂			1959	九州 風土記 経済
日野尚志	福岡県内都市における通勤交通について		史学研究		77・78・79		1960	福岡県 都市 通勤 交通
大橋博	玄洋社の源流に関する一史料		日本歴史		143		1960	玄洋社 史料
中牟田作次郎	福岡地方の粥占		日本民俗学会報		12		1960	福岡 粥占
川添昭二	書評『福岡県史 第1巻 上冊・下冊』		日本歴史		173		1962	書評 福岡県史
西川俊作	九州地方の炭鉱労働市場		三田学会雑誌		55-5		1962	九州 炭鉱 労働 市場
福岡県編		福岡県史 第1巻 上冊					1962	福岡県史
福岡県編		福岡県史 第1巻 下冊					1962	福岡県史
竹内理三	九州の地方史研究(29)一朝倉山塊一		歴史評論		156		1963	九州 地方史 研究 朝倉
秀村選三	書評『福岡県史 第2巻』		日本歴史		184		1963	書評 福岡県史
福岡県編		福岡県史 第2巻					1963	福岡県史
安藤保	久留米藩の農兵—文久の農兵案と殉国隊について—		九州史学		27		1964	久留米藩 農兵 文久 農兵案 殉国隊
新藤東洋男	明治25年の選挙干渉事件と学校騒動—福岡県三池郡地方の場合—		日本歴史		196		1964	明治25年 選挙 干渉事件 学校 騒動 福岡 県 三池 郡
藤野保	地方史研究の現状 九州(一) 福岡県		日本歴史		197		1964	地方史 研究 現状 九州 福岡 県
大山敷太郎	わが国鉱業における賞罰制と親方制度—「わが国鉱業における賞金関係と親方制度」の一補論—		甲南経済学		5-1	19-	1964	鉱業 賞罰制 親方 賞金
佐々木正勇	官行鉱山と傭外国人		研究彙報(日大史学会)		8	50-67	1964	官行 鉱山 お雇い 外国人

梶井義雄	明治維新前後の三井		専修大論集		35	76-84	1964	明治 維新 三井
馬原鉄男	筑豊炭鉱における労働力の形成と部落一部落史研究の方法についての一試論		新しい歴史学のために		98	1-6	1964	筑豊 炭鉱 労働力 形成 部落
木槻哲夫	筑豊と小学校(その一) —明月清風校—		地方史研究		73		1965	筑豊 小学校 明月清風校
小島恒久	明治初期の三池炭鉱—炭鉱官営にかんする一考察—		社会科学論集		5		1965	明治 初期 三池炭鉱 炭鉱官営
新藤東洋男		三井鉱山と与論島		人権民族問題研究会			1965	三井 鉱山 与論
新藤東洋男	「冬の時代」の教育事情とその教訓 福岡県(明治末期・大正初期)の教育事情		現代と歴史教育		1		1965	冬の時代 教育事情 福岡県 明治末期 大正初期
杉原実		博多織史		校倉書房			1965	博多織
藤野達善	「福岡1960年5月～6月」—その2—ビラで見た安保闘争の側面—		現代と歴史教育		1		1965	福岡 1960年 ビラ 安保闘争
柳田東耕	豊前細川藩家老加賀隼人正興良の殉教について		地方史研究		73		1965	豊前 細川藩家老 加賀隼人 正興良 殉教
小島恒久	明治初期の三池炭鉱—炭鉱官営にかんする一考察—		社会科学論集(九大)		5	1-44	1965	明治 初期 三池炭鉱 官営
小林正彬	三池炭鉱の払下げについて		和洋女子大学紀要		10	43-57	1965	三池 炭鉱 払下げ
小林正彬	三池炭鉱の払下げについて		和洋女子大学大学紀要		10		1965	三池 炭鉱 払下げ
芝原拓自	幕末肥前藩の土地政策=「均田」制度について		経済科学(名大)		12-2	99-116	1965	幕末 肥前 土地政策 均田
新藤東洋男	明治維新と三池藩		大牟田市立教育委員会紀要		18	1-20	1965	明治 維新 三池 大牟田
竹内理三	九州の地方史研究—福岡(1)—		歴史評論		181		1965	九州 地方史 福岡
津田美年	久留米ゴム工業の生産構造		有明地歴論叢		2		1965	久留米 ゴム工業 生産構造
中村尚美	大隈財政と海運三菱の成立		早稲田大学史記要		1-1	83-94	1965	大隈 財政 海運 三菱 成立
西田豊	筑後地方における近代史研究の動向		日本近代史研究		8	39-42	1965	筑後 近代史 研究
服部一馬	日本郵船会社の成立—明治前期における三菱と三井(5)—		経済と貿易(横浜市立大)		85	1-13	1965	日本 郵船 明治前期 三菱 住友
矢野齊士	福岡県史について		九州地方史		1		1965	福岡 県史
糸園辰雄	明治30年代の地方—小銀行—無限責任 岩田銀行の記録—		八幡大学産業経済研究		2		1966	明治 地方 銀行 岩田
白井勝美	広田弘毅論		国際政治		33		1966	明治 満州事変 広田 弘毅
大牟田市史編集委員会		大牟田市史 中巻		—	中巻		1966	大牟田 市史 中
香春町誌編集委員会		香春町誌		—	—		1966	香春 町史
九州史学 編	〈近代史部会〉「士族の反乱」に関する問題点について		九州史学		41		1966	近代 士族 反乱 問題点
新藤東洋男	三池炭鉱の払下げと三池紡績会社の設立 —政商三井と在地資本—		教育研究書紀要		19		1966	三池 炭鉱 紡績 三井
新藤東洋男 池上親春		大牟田炭工業都市の歴史と現実		大牟田市教職員組合			1966	大牟田 炭鉱 工業都市 歴史 現実
高島雅明	明治十年代の私立銀行(一)—筑後国私立吉井銀行の定款と考課状の紹介—		商経論叢(九州産業大学商経学会)		8-1		1966	明治 私立 銀行 筑後 吉井 定款 考課状
竹内理三	九州の地方史研究(43)—福岡(2)—		歴史評論		187	37-39	1966	九州 地方史 福岡

竹内理三	九州の地方史研究 —福岡(3)—		歴史評論		190		1966	九州 地方史 福岡
西尾陽太郎	幕末筑前藩の動向		九州史学		40		1966	幕末 筑前 動向
福岡市		福岡市史 第4巻 昭和前編下		—	第4巻		1966	福岡 昭和 前編
山下豊治	たい二双吾智網漁業の共同経営 について—福岡県糸島の事例—		史学研究		102		1966	たい 二双 吾智 網 共同 経営 福岡 糸島
新藤東洋男	三井鉱山と学校教育—低賃金労働者の再生産—		法政史学		18		1966	三井 鉱山 学校 教育 低賃 金労働者
竹内理三	九州の地方史研究 —福岡(2)—		歴史評論		187		1966	九州 地方史 福岡
飯田 鼎	戦後炭鉱労働運動史の一齣		三田学会雑誌		60-10		1967	戦後 炭鉱 労働 運動 一齣
伊丹正博	明治期地方国立銀行の一形態 (1)—福岡第十七国立銀行の 史的分析—		香川大学経済論叢		39-5・6		1967	明治期 地方 国立銀行 福岡 第十七国立銀行
今津健治	九州における近代産業の発達		Fukuoka Unesco (福岡ユネスコ)		4	46-47	1967	九州 近代 産業 発達
加藤幸三郎	九州炭鉱部成立の諸前提—三井 財閥形成過程によせて—		三井文庫論叢 第 二号				1967	三井 九州 炭鉱 財閥 形成
上妻幸英	日本資本主義賃金史試論—三池 炭鉱における賃金形態と労働強 化の形態—		九州史研究				1967	三池 炭鉱 賃金 労働 強化
木村 礎 林 英 夫 編		地方史研究の方法		新生社			1967	地方史 研究 方法
九州大学創立 五十周年記念 会		九州大学五十年史		非売品			1967	九州大学 五十
九大農学部農 経教室		九州農業史料 第 2輯 水理考		九大農学部 農経教室			1967	九州 農業 史料 水理 農学部
九大農学部農 経教室		九州農業史料 第 3輯 肥後藩干拓 史概要		九大農学部 農経教室			1967	九州 農業 史料 水理 農学部
市史編集委員 会		大牟田市史 下巻		大牟田市			1967	大牟田 市史
杉谷 昭		明治前期地方制度 史研究		佐賀女子短 期大学研究 叢書			1967	明治 前期 地方 制度 佐賀
箭内健次、ア ルバート・ク レイグ、原口 虎雄 他	討議、西南諸藩における西欧文 明の撰取と対応		Fukuoka Unesco (福岡ユネスコ)		4	38-45	1967	西南 諸藩 西歐 文明 撰取 対応
高島雅明	明治十年代の私立銀行(二)— 筑後国私立吉井銀行の定款と考 課状の紹介—		商経論叢(九州産 業大学商経学会)		8-2		1967	明治 私立 銀行 筑後 吉井 定款 考課状
高橋正雄、原 俊之、アル バート・ク レイグ 他	シンポジウム：I 日本近代化 と九州の役割 II 世界史上にお ける日本近代化の特色		Fukuoka Unesco (福岡ユネスコ)		4	115-142	1967	日本 近代 九州 役割 近代化
戸木田嘉久	戦後労働組合運動の問題点—戦 後日本労働組合運動史の時期区 分に関して—		日本史研究		97		1967	戦後 労働 組合 運動 問題点 時期 区分
西尾陽太郎	日本近代化過程における思想と 政治		Fukuoka Unesco (福岡ユネスコ)		4	87-92	1967	日本 近代 思想 政治
福岡市		福岡市史 別巻		福岡市			1967	福岡 市史
村尾力太郎	「筑紫の野」と「筑肥の海」の懐古 —日本・海外宗教交渉略史研 究—		早稲田商学(早稲 田商学同好会)		205		1967	筑紫 筑肥 懐古 宗教 交渉
村上寅次	波多野培根における「キリスト 教と愛国」の問題		西南学院大学文理 論集		7-1・2		1967	波多野 培根 キ リスト 教 愛国
渡辺光、中野 尊正、山口恵 一郎 他編		日本地名大事典： 1 九州		朝倉書店			1967	地名 事典 九州

箭内健次		北九州一纏文より 明治維新まで		吉川弘文館			1967	北九州 纏文 明 治 維新
安部光正 編		三奈木村史資料 第1巻		西日本新聞 社出版部			1968	福岡 三奈木村
石塚裕道	近代地方史研究をめぐる二、三 の問題		地方史研究		94		1968	近代 地方 研究 問題
伊藤多三郎	文化史における地方文化の問題		日本歴史		248		1968	文化 地方 文化 問題
井上 忠	北九州における幕末の種痘法		九州史研究				1968	北九州 幕末 種 痘法
井上隆三郎		筑前宗像の定札一 健保の源流		西日本新聞 社(福岡県)			1968	福岡 筑前 宗像 定札 健康 保険
北九州市立歴史博物館 編		北九州市立歴史博 物館年報 3 (昭和 53年度)		北九州市立 歴史博物館			1968	北九州 歴史 博 物館 年報
木村 勲	戦前における思潮としての「地方 の時代」一雑誌「地方」および 新渡戸稲造、小田内通敏の著作 を通じて		地域史研究		9-2		1968	地方 戦前 思潮 新渡戸稲造 小 田内通敏
小西秀隆	「労使協調」労働組合の発展過程 一八幡製鉄所争議後の同志会		九州史学		68		1968	労使 協調 労働 組合 八幡 製鉄 所 争議 同志会
柴村一重 編		直方市史 補巻 石 炭 鋳業編 直方石 炭 鋳業史		直方市(福 岡県)			1968	福岡 直方 石炭 鋳業
末弘利人	堺利彦の社会主義運動への登場		九州史研究				1968	堺 利彦 社会主 義 運動 登場
中村正夫 ほか		九州の葬送・墓制		明玄書房			1968	九州 葬送 墓制
日本加除出版 株式会社出版 部 編		全国市町村名変遷 総覧一明治二十二 年から現在までの 新旧対照表付		日本加除出 版			1968	全国 市町村 名 変遷 総覧 明治
農林省 農務 局 篇		小作関係史料 9 地方別小作争議概 要		御茶ノ水書 房			1968	小作 史料 地方 争議 概要
秀村選三 ほか 編		九州石炭鋳業史資 料目録 1		西日本文化 協会(福岡 県)			1968	九州 石炭 鋳業 資料 目録
秀村選三 ほか 編		九州石炭鋳業史資 料目録 2		西日本文化 協会(福岡 県)			1968	九州 石炭 鋳業 資料 目録
秀村選三 ほか 編		九州石炭鋳業史資 料目録 3		西日本文化 協会(福岡 県)			1968	九州 石炭 鋳業 資料 目録
福岡県文化会 館 編		郷土史関係雑誌記 事索引		福岡県文化 会館			1968	福岡 郷土 雑誌 記事 索引
福岡市総務局 編		福岡の歴史一市制 九十周年記念		福岡市			1968	福岡 歴史 市制 90周年
吉井町誌編纂 委員会編		吉井町誌 2		吉井町(福 岡県)			1968	福岡 吉井町
岡本幸雄	産業資本成立期における地方紡 績企業の展開一三池紡績会社と 益田孝、資本調達問題等を中心 として		西南地域史研究		4	268-302	1969	産業 資本 三池 地方 紡績 益田 孝
平井陽一	三井三池炭鋳における採炭工 程・賃金形態一職場闘争の基礎 課程分析一		大学院紀要(法大)		5	137-154	1969	三井 三池 炭鋳 採炭 賃金 職場 闘争
福岡県教育百 年史編さん委 員会編		福岡県教育百年史 4 資料編 昭和2		福岡県教育 委員会			1969	福岡 教育 百年 昭和
九州大学石炭 研究資料セン ター 編		石炭研究史料叢書 第1輯		九大石炭研 究資料セン ター			1971	石炭 資料 石炭 研究 資料 セン ター
どんぐりの会 編		わたしたちの女性 史		穴生公民館 (北九州)			1973	女性史 北九州
田中瑞穂		昭代干拓誌		柳川市昭代 干拓土地改 良区			1973	昭和 干拓

北村慶子	筑前地方郷土史研究刊行書目録		歴史手帖		2-12		1974	筑前 地方 郷土史
升永政盛	樋隈騒動記		嘉穂地方誌		3		1974	樋隈 騒動 嘉穂
中島忠雄	鮭神信仰		嘉穂地方誌		3		1974	鮭神 信仰 嘉穂
秀村選三	筑前の石炭鉱業史料—「筑豊石炭鉱業史料年報」刊行その後—		歴史手帖		2-12		1974	筑前 史料 石炭 鉱業 年報
平野邦雄、飯田久雄		県史シリーズ40 福岡県の歴史		山川出版社			1974	福岡 歴史
広川禎秀	八幡製鉄所における一九二〇年のストライキ		人文研究		24-10		1974	八幡 製鉄 所一 九二 〇年 スト ライ キ
稲築町誌編集委員会編		稲築町誌		稲築町			1974	稲築 町誌
山津直子	三池炭礦の採炭労働—日清戦争後から第一次世界大戦期にかけて—		三井文庫論叢		8	87 ~ 134	1974	三池 炭礦 採炭 労働 日清 戦争 第一 次世 界大 戦
秀村選三	筑前の石炭鉱業史料		歴史手帖		2-12	15 ~ 19	1974	筑前 石炭 史料
瀬高町誌編集委員会編		瀬高町誌		瀬高町			1974	瀬高 町誌
西日本新聞社		福岡大空襲					1974	福岡 大空 襲
筑豊石炭鉱業史年表編纂委員会編		筑豊石炭鉱業史年表		田川郷土研究会			1974	筑豊 石炭 礦業 年表
福岡市		福岡市史第7巻昭和編後編第3		福岡市			1974	福岡 市史 昭和
新藤東洋男	在日朝鮮人問題と筑豊炭鉱地帯—その差別構造と日朝連帯の闘い		歴史評論		302		1975	在日 朝鮮 人問 題筑 豊炭 鉱地 帯差 別構 造日 朝連 帯
有泉貞夫		明治政治史の基礎課程—地方政治状況史論—		吉川弘文館			1975	明治 政治 基礎 過程 地方 状況
上妻幸英	三池炭鉱における納屋制度		日本歴史		324		1975	三池 炭鉱 納屋 制度
小林安司	森鷗外の小倉年譜・考証(一)		北九州大学文学部紀要		10		1975	小倉 森鷗 外
関原祐一	「筑前竹槍一揆」と一小村		九州史学		56		1975	筑前 竹槍 一揆 村
新藤東洋男	在日朝鮮人問題と筑豊炭鉱地帯—その差別構造と日朝連帯の闘い—		歴史評論		302	54 ~ 70	1975	在日 朝鮮 人筑 豊炭 鉱差 別日 朝連 帯
多比良長好	九州の防衛（第二次大戦史研究第12回）		軍事史学		11-1	74 ~ 83	1975	九州 防衛 第二 次大 戦
不破和彦	港湾労働者の同盟罷業と「組」制度—明治期・門司港の石炭仲仕の事例—		研究年報		X X III	75 ~ 140	1975	港湾 労働 者同 盟罷 業組 明治 期門 司港 石炭 仲仕
有馬学	「改造運動」の対外観—大正期中野正剛		九州史学		60		1976	改造 運動 対外 観大 正期 中野 正剛
原田勝正	北九州の鉄道網		交通史研究		1		1976	北九 州鉄 道網
今野孝	明治一五年福岡県における嘉麻組石炭売捌処に関する一考察		西南地域史研究		1	162-173	1977	明治 15年 福岡 県嘉 麻組 石炭 売捌 処
荻野喜弘	日本石炭産業における独占の形成過程—販売市場の展開過程を中心に		西南地域史研究		1	174-205	1977	石炭 産業 販売 市場
古賀良一	「門司新報」を通じて見た明治30年前後の北九州地方労働者の賃銀と労働事情(資料)		商経論集（北九州大学）		12-4	477-517	1977	門司 新報 明治 30年 北九 州地 方労 働者 賃金 労働 事情

小林正彬		八幡製鉄所		教育社			1977	八幡製鉄所
秀村選三	明治一〇年代における九州鉄道会社の胎動		西南地域史研究		1	140-161	1977	明治10年代九州鉄道会社
亀卦川 浩		明治地方制度成立史		巖南堂書店			1977	明治 地方 制度 成立
岩崎宏之	明治初年における肥前唐津石炭業と三井		三井金属修史論叢		10		1978	明治初年 肥前唐津石炭業 三井
秀村選三	九州の礦業史料について		史料館報		29		1978	九州 礦業史料
松崎武俊	近代の被差別部落の実態 福岡のばあい		歴史公論		4-11		1978	近代 被差別部落 福岡
本吉敬治・小崎文人	三池炭鉱の囚人労働——地底に埋もれた一つの歴史		福岡大学研究所報		39	79-156	1978	三池炭鉱 囚人労働
祖田 修		地方産業の思想と運動—前田正名を中心にして		ミネルヴァ書房			1978	地方 思想 運動 前田 正名
馬原鉄男	筑豊の現代史(上)		歴史公論		5-4		1979	筑豊 現代史
小田富士雄・米津三朗他		北九州の歴史		葦書房			1979	北九州
松元宏		三井財閥の研究		吉川弘文館			1979	三井財閥
三宅明正	第一次大戦後の重工業大経営労働運動——一九二〇年八幡製鉄所大争議を中心に		日本史研究		197	1-40	1979	第一次大戦後 重工業大経営労働運動 1290年八幡製鉄所大争議
安岡重明		三井財閥史 近世明治編		教育者			1979	三井財閥 近世明治
春日 豊	三池炭鉱における「合理化」の過程—反動恐慌から昭和恐慌		論叢(三井文庫)		14	173-254	1979	三池 炭鉱 合理化 恐慌 昭和 反動
嘉穂地方史編纂委員会近世部会編		嘉穂地方史 近世編 1		元野木書店			1979	福岡 嘉穂 近世
正田 健一郎編		明治中期産業運動資料14-1 農事調査14 福岡県 1		日本経済評論社			1979	明治 産業 運動 農事 調査 福岡
書誌研究懇話会 編		全国図書館案内上・下 付：地方史主要文献目録、地方史誌主要目録一覽		三一書房			1979	全国 図書館 案内 地方 文献 目録
地方史研究協議会 編		都市の地方史—生活と文化		雄山閣出版			1979	都市 地方 生活 文化
農地改革資料編纂委員会編		農地改革資料集成 11 農地改革実績篇		農政調査会			1979	農地 改革 農政
農地改革資料編纂委員会編		農地改革資料集成 12 農業委員会法・農地法成立篇		農政調査会			1979	農地 改革 農政
野田正穂 ほか編		明治期鉄道史資料 第1集 1～9		日本経済評論社			1979	明治 鉄道 資料
野田正穂 ほか編		明治期鉄道史資料 第2集 1～6		日本経済評論社			1979	明治 鉄道 資料
初瀬龍平		伝統的右翼—内田良平の研究(北九州大学法政叢書 1)					1979	伝統 右翼 内田良平 北九州
北条 浩		明治地方体制の展開と土地変革		御茶ノ水書房			1979	明治 地方 体制 展開 土地 変革
御厨 貴		明治国家形成と地方経営		東大出版会			1979	明治 国家 形成 地方 経営

百田米美 編		図説 九州の藩札 筑前の藩札		福岡地方史 懇話会・九州 貨幣史学会		1979	福岡 九州 藩札 筑前
我部政男 編		明治15・16年 地方 巡察使復命書 上・下		三一書房		1979	明治 地方 巡察 使 復命書
青山学院・ 院・仲研究室 編		近代地方教育史文 献目録		青山学院・ 院・仲研究 室		1980	近代 地方 教育 文献 目録
安部光正 編		三奈木村史資料 第2巻		西日本新聞 社出版部		1980	福岡 三奈木村
安部光正 編		三奈木村史資料 第3巻		西日本新聞 社出版部		1980	福岡 三奈木村
大橋 博 編		明治中期産業運動 資料 第14巻 4 農 事調査 福岡県		日本経済評 論社		1980	明治 産業 運動 資料 農事 調査 福岡
北九州市立歴 史博物館 編		北九州市立歴史博 物館年報 4 (昭和 55年度)		北九州市立 歴史博物館		1980	北九州 歴史 博 物館 年報
九州史学	「九州史学」論文総目録(一～ 七十号)		九州史学		70	1980	論文 目録
鞍手町誌編集 委員会		鞍手町誌 下巻		鞍手町		1980	福岡 鞍手
久留米市 編		久留米市史 第1 巻		久留米市		1980	福岡 久留米
古賀 一 ほか 編		北九州地方社会 労働史年表		西日本新聞 社(福岡県)		1980	北九州 地方 社 会 労働 年表
小西秀隆	地方無産政党の結成過程—九州 民憲党の場合—		日本歴史		397	1980	地方 無産 政党 結成 過程 九州 民憲党
新藤東洋男	九州紡績会社と大阪支店事件— 三井財閥の形成と鐘紡への併合 事情		熊本史学		54	1980	九州 紡績会社 大阪 支店 三井 財閥 鐘紡
高松光彦		九州の精神的風土		葦書房		1980	九州 精神 風土
日本赤十字社 福岡県支部		赤十字福岡90年史		日本赤十字 社福岡県支 部		1980	赤十字 福岡 90 記念
直方史 編		直方市史資料目録		直方市		1980	福岡 直方
杷木町 編		杷木町史		杷木町史刊 行委員会		1980	福岡 杷木
福岡県教育百 年史編さん委 員会編		福岡県教育百年史 第6巻 通史編 2		福岡県教育 委員会		1980	福岡 教育 百年
福岡県農業共 済組合 連合 会		福岡県農業共済史		福岡県農業 共済組合連 合会		1980	福岡 農業 共済
福岡県文化会 館 編		福岡県文化会館所 蔵郷土雑誌目録		福岡県文化 会館		1980	福岡 文化会館 郷土 雑誌 目録
福岡市教育委 員会編		飯盛神社関係史料 集		福岡市教育 委員会		1980	福岡 飯盛神社
三井文庫 編		三井事業史 本篇 第1巻～第3巻 上		三井文庫		1980	三井 事業
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 1巻 編年紀要編		国書刊行会		1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 2巻 村誌編 1		国書刊行会		1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 3巻 村誌編 2		国書刊行会		1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 4巻 村誌編 3		国書刊行会		1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 5巻 門司港編、 海上交通編		国書刊行会		1980	福岡 門司 郷土

門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 6巻 法制編、生 活編、		国書刊行会			1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 7巻 神社編、寺 院編		国書刊行会			1980	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書 刊行会編		門司郷土叢書 第 8巻 教育・文芸 編、風俗編		国書刊行会			1980	福岡 門司 郷土
八幡製鉄所所 史編さん実行 委員会編		八幡製鉄80年史		新日本製鉄 八幡製鉄所			1980	八幡製鉄所 80 年 新日本製鉄
由比章祐		筑前西郡史		福岡地方史 研究会			1980	福岡 地方 筑前 西郡
「吉富町史」編 さん室編		吉富町史		吉富町史刊 行会			1981	福岡 吉富町 町 史
甘木市史編纂 委員会編		甘木市史資料 近 世1～3		甘木市			1981	甘木 福岡 市史
荒川章二	戦時下の労働者統合—八幡製鉄 所産業報国会を事例として		日本ファシズム	大月書店	2	103-132	1981	第二次大戦 労働者 統合 八幡 製鉄所 産業報
丑木幸男	地方民会と地方自治要求		地方史研究		34-5	60-73	1981	地方 民会 地方 自治 要求
老川慶喜		明治期地方鉄道史 研究・地方鉄道の 展開と市場形成 (鉄道史叢書1)		日本経済評 論社			1981	明治 地方 鉄道 市場 形成
大津留 宏	三池闘争の今日的教訓—『資料 三池闘争史』の発刊によせて		唯物史観		22	129-137	1981	炭鉱 三池 労働 運動 闘争
荻野善弘	第1次大戦前後における筑豊炭 鉱業の労使関係(1)		経済学研究(九大)		49-4・5・ 6	279-314	1981	第一次大戦 筑 豊 炭鉱 労使
北九州		北九州市史 五市 合併以後 補稿資 料		福岡市			1981	北九州 五市 市 史
九州歴史資料 館		九州歴史資料館年 報 昭和56年度		九州歴史資 料館			1981	九州 歴史 資料 館
佐藤誠朗	明治4年7月2日の福岡藩処分 をめぐって		人文科学研究(新 潟大・人文)		65	31-55	1981	明治 福岡 処分
新谷恭明	福岡県における尋常中学校の設 立について—中学校令に対する 地方の反応—		紀要(九大・教育)		29	1-8	1981	福岡 尋常 中 学校 地方 中 学校 令
新藤東洋男	九州の石炭産業と瀬戸内塩田地 帯		地方史研究		187		1981	九州 石炭 産 業 瀬戸内 塩 田
石炭研究史料 センター	大日本鉱業株式会社社史(稿本)		石炭研究資料叢書		2		1981	大日本 鉱業 株 式会社 炭 石 炭
石炭研究史料 センター	筑豊興業鉄道会社資料(二)		石炭研究資料叢書		2		1981	筑豊 興業 鉄 道
石炭研究史料 センター	日本炭鉱労働組合総連合 福岡 労働学校資料		石炭研究資料叢書		2		1981	日本 炭 鉱 労働 組合 総連合 福 岡 労働 学校
石炭研究史料 センター	宮崎百太郎氏採集資料(二)		石炭研究資料叢書		2		1981	宮崎 百太郎
堤 啓次郎	明治初期における地方支配の形 成と士族反乱(1)		文理論集(西南学 院大)		22-2	215-256	1981	明治 地方 支 配 士族
東定宣昌	明治期肥前福母炭鉱に関する一 考察		経済学研究(九大)		49-4・5・ 6	265-277	1981	明治 肥前 福 母 炭 鉱
永江真夫	明治期貝島石炭業の経営構造— 資金調達を中心として		経済学論叢(福岡 大)		29-2・3	221-251	1981	明治 貝島 石 炭 業 経営 構 造 資金 調 達
西日本文化協 会		福岡県史 近世資 料編1 近代資料 編1 三池 鉱山 年表2 農務誌 漁 業誌		福岡県			1981	福岡 近代 三 池 鉱山 農務 漁 業
林 正登	戦前炭鉱における児童労働と小 学校就学の問題—ヤマの子ど も・学校史研究		教育学研究		49-1	110-119	1981	戦前 炭 鉱 児童 労働 就学 小 学校 教育

秀村選三ほか編		九州石炭鉱業史資料目録		西日本文化協会			1981	九州 石炭 鉱業
福岡県公共図書館協議会 福岡県立図書館編		福岡県郷土資料総合目録		福岡県公共図書館協議会			1981	福岡 郷土 資料目録
三上禮次	慶応2年—明治4年における博多の営業構造と、各町の営業的特性の分析		研究論集（一般・基礎教育系）〈九州芸術工科大〉		9	77-85	1981	慶応 明治 博多 福岡 営業 各町
門司郷土叢書刊行会編		門司郷土叢書 第9巻 雑編・趣味編		国書刊行会			1981	福岡 門司 郷土
門司郷土叢書刊行会編		門司郷土叢書 第10巻 事典・目録編・会報編		国書刊行会			1981	福岡 門司 郷土
山中永之祐	明治憲法の制定と地方自治		歴史公論		64		1981	明治 憲法 制定 地方 自治
由比章祐		筑前西郡史 2 幕末編		福岡氏地方史研究会			1981	筑前 西郡 福岡
今野 孝	明治初期筑豊炭田における石炭借区の推移—「鉱山借区一覧表」の分析—		経済学研究〈九州大学経済学会〉		59-3・4		1982	鉱山 筑豊 石炭 借区
大里仁士	官営八幡製鉄所草創期における労働関係の資料的検討(3)		論集〈八幡大〉		36-1	1-32	1982	官営 八幡 製鉄 所 労働
岡田陽一		全国地方史誌文献案内 歴史・民俗・考古 1989～1991 下		三一書房			1982	全国 地方 文献 案内 歴史 民俗 考古
荻野喜弘	1920年代前半における石炭工業連合会の活動と筑豊炭鉱業		経済学研究〈九州大学経済学会〉		59-3・4		1982	石炭 連合会 筑豊 炭鉱業
春日市史編さん委員会編		春日市史 中・下巻		春日市			1982	地方 春日 福岡
木永勝也	1930年代の無産運動戦線統一問題—福岡県地方を対象に		九州史学		83	41-66	1982	1930 無産 運動 戦線 福岡 昭和
木梨謙吉	メソジスト福岡教会設立過程とC・S・ロング		紀要〈福岡女学院短大〉		21	1-10	1982	メソジスト キリスト教 福岡 教会 ロング
クオリ 編		全国地方史誌関係図書目録 国立国会図書館納本非流通図書		クオリ			1982	全国 地方 関係 図書 国会 図書館 非流通本
島栄京一	博覧会・共進会からみた近代都市福岡の形成		福岡県地域史研究		11		1982	博覧会 共進会 都市 福岡
堤 啓次郎	向陽社—筑前共愛公衆会と九州連合会		歴史評論		417	66-78	1982	明治 向陽社 筑前 共愛公衆会 九州連合会
日本鉱業史料刊行委員会編		日本鉱業史料集 第17期 明治篇 後		白亜書房			1982	明治 鉱業 史料
藤野達善	福岡地方における反ファッション人民戦線—福博電車大争議を中心に		歴史評論		423	58-76	1982	福岡 反ファッション 人民戦線 福博電車 大争議
遠城明雄	都市における消費問題と社会政策—1920年代の福岡を事例にして—		九州文化史研究所 紀要		39		1983	都市 消費 社会 政策 福岡
大庭邦彦	明治地方自治制度導入をめぐる相克について—井上毅の『自治』を中心に		専修人文論集		57	137-189	1983	明治 地方 自治 相克 井上 毅
木永勝也	福岡県初期農民運動覚え書き—小作人組合と初期日本農民組合—		史淵〈九州大学文学部〉		131		1983	福岡 農民 運動 小作人 組合
久留米市史編さん委員会編		久留米市史 第12巻		久留米市			1983	福岡 久留米
山中永之祐 他編		近代日本地方自治立法資料集成 3		弘文堂			1983	近代 日本 地方 自治 立法 資料
張 英莉	炭鉱国管法の成立過程について		国際研究論集〈八千代国際大〉		8-3	140-169	1983	炭鉱 国管法 成立 過程

中村尚史	創立期幹線鉄道会社における重役組織の形成—九州鉄道会社の成立と地域社会—		経営史学		30-3	1-38	1983	明治 幹線 鉄道 重役 組織 九州 地域社会
西日本文化協会 編纂		福岡県史 通史編 2		福岡県			1983	福岡 県史
原 康記	明治期肥前地方における鉄道網の形成—九州鉄道長崎線延長を例として		商経論叢 (九州産業大)		36-2	173-197	1983	明治 肥前 鉄道 長崎線
福岡市水道局 編		福岡市水道七十年史		福岡市水道局			1983	福岡 水道
真木保臣、山口宗之、ふくおか人物誌編集委員会編		ふくおか人物誌 5		西日本新聞社			1983	福岡 人物
丸山擁成		九州・その歴史展開と現代		文献出版			1983	九州 歴史 現代
		九州の産業技術の発生と発展の歴史		九州商工協会			1983	九州 産業 技術 発生 発展
		九州の道 いま・むかし		葦書房			1983	九州 道
太田 孝 編著		幕末以降市町村変遷系統図総覧		東洋書林			1984	幕末 市町村 変遷 系統 総覧
春日市史編さん委員会 編		春日市史 上巻、資料編		春日市			1984	春日市 資料 歴史
九州大学石炭研究資料センター	炭鉱札(図録・論集)		石炭研究資料叢書		16		1984	炭鉱 炭鉱札 図録 論集
九電工50周年記念事業推進室 編		九電工50年史		九電工			1984	九電工 50年 歴史
クオリ		全国地方史誌関係目録		クオリ			1984	全国 地方史 図書 目録
財団法人西日本文化協会 編纂		福岡県史 近代史史料編 自由民権運動		福岡県			1984	福岡 県 歴史 自由民権 運動
総務局総務部総務課 ほか 編		北九州・戦時下の市民のくらし—戦後50周年記念・北九州平和資料展図録—		北九州市立歴史博物館			1984	北九州 戦時下 市民 戦後 歴史 博物館
内務省土木局 編纂		大日本帝国港湾統計 大正 2 年～昭和元年		雄松堂出版			1984	大日本 帝国 港湾 統計
内務省土木局 編纂		大日本帝国港湾統計 昭和 2 年～昭和16年		雄松堂出版			1984	大日本 帝国 港湾 統計
西日本新聞社		西日本新聞に見る戦後50年 1945-1994		西日本新聞社			1984	西日本 福岡 新聞 戦後 50年
福岡県行政史研究会 編		福岡県戦後50年のあゆみ 昭和20年～平成 7 年		福岡県			1984	福岡 県 戦後 50 年
福岡県立図書館・福岡県公共図書館等協議会 編		福岡県公共図書館郷土資料総合目録追録 7 (平成 7 年度版)		福岡県立図書館			1984	福岡 県 公共 図書館 郷土 総合 目録
福岡市教育委員会		福岡市文化財分布図 西部 2		福岡市教育委員会			1984	福岡 文化財 分布
宗像市史編纂委員会 編		宗像市史 史料篇 第 1		宗像市			1984	福岡 宗像 史料
宗像市史編纂委員会 編		宗像市史 史料篇 第 3		宗像市			1984	福岡 宗像 史料
宗像市史編纂委員会 編		宗像市史 史料篇 別巻		宗像市			1984	福岡 宗像 史料
柳 猛直		福岡歴史探訪 東区編		海鳥社			1984	福岡 歴史 東区
柳 猛直		福岡市歴史探訪 早良区編		海鳥社			1984	福岡 歴史 早良 区

若槻泰雄		戦後引揚げの記録		時事通信			1984	戦後 引揚げ 記録
宇佐美ミサ子	地域女性史の研究状況について		地方史研究		255		1985	地域 女性 研究
近藤典二	戦後五十年		福岡地方史研究		33		1985	戦後 50 年
中村尚史	明治期における鉄道の発達と石炭輸送 —筑豊地域を中心として—		歴史と地理		475		1985	明治 鉄道 石炭輸送 筑豊
西日本金融制度研究会・西日本銀行五十年史編集委員会編		西日本銀行五十年史					1985	西日本銀行五十年史 地方金融
大和町		親子で学ぶ大和町の歴史		大和町			1985	大和町 歴史 親子
中島昭	博多湾鉄道株式会社の成立		『西南地域史研究』		6	191～250	1988	博多湾 鉄道株式会社
福岡大学五十年史編集委員会編		福岡大学五十年史年表・資料編		福岡大学			1988	福岡大学 五十年史 年表 資料
		福岡県私学協会四十年誌		福岡県私学協会			1988	福岡県 私学協会 四十年誌
宮地米蔵	筑後平野水利秩序の形成過程(1)		久留米大学法学		4		1989	筑後平野 水利秩序
石川捷治	第1回北九州防空演習(1931年7月)地域における戦争準備体制形成史ノート		法政研究(九大)		55-2~4	1~30	1989	北九州防空演習 戦争準備体制 形成史
上杉聡・石滝豊美		筑前竹槍一揆論		海鳥社			1989	筑前竹槍一揆論
九州大学石炭研究史料センター編		石炭研究史料叢書10(1989)		九州大学石炭研究史料センター			1989	石炭 研究史料 叢書
久留米市史編さん委員会編		久留米市史5		久留米市			1989	久留米 市史
堤啓次郎	向陽社の成立		九州史学		94		1989	向陽社 成立
堤啓次郎	向陽社の成立		九州史学		94	53~74	1989	向陽社 成立
寺島敏治	三井鉱山(株)のいわゆる”持株”推移 昭和3年にいたる過程		史流		30	93~99	1989	三井鉱山 持株 昭和
西村卓	福岡県実業教師の派遣(2)明治前期農事改良運動の一コマ		経済学論叢(同志社大学)		41-2	右1~20	1989	福岡 実業教師 明治 農事改良 運動
秀村選三	九州鉄道会社創業期に関する一史料(2)		産業経済研究(久留米大)		29-4	右1~23	1989	九州鉄道会社 創業 史料
福岡県弁護士会史編集委員会編		福岡県弁護士会史		福岡県弁護士会			1989	福岡県弁護士会 会史
	筑豊炭山視察報告書(大正十二年)		石炭研究資料叢書		10		1989	筑豊 炭山 視察 報告書 大正
		西日本新聞百年史		西日本新聞社			1989	西日本新聞 百年史
宮地米蔵	明治町村制と水利慣行(筑後川水利秩序の近代化過程) —水利慣行序説(5)—		久留米大学法学		8		1990	明治町村制 水利慣行 筑後川 水利秩序 近代化過程
井奥成彦解説	三井田川炭山沿革誌		石炭研究資料叢書		11	1~57	1990	三井 田川 炭山 沿革
黒木彬文	甲申政変に対する日本の義勇軍運動についての新聞記事「福岡日日新聞」と「朝野新聞」の場合		『九州地域』			97~123	1990	甲申政変 日本 義勇軍運動 新聞記事 福岡日日新聞 朝野新聞

丁振聲	1920年代の朝鮮人鉱夫の使用状況および使用経費 筑豊地方の三菱系炭鉱を中心として		日本史学集録		10	30 ~ 47	1990	1920年代 朝鮮人鉱夫 経費 三菱系炭鉱
中村英重	福岡県と札幌移住 開墾社と報国社		札幌の歴史		18	16 ~ 30	1990	福岡 札幌 移住 開墾社 報国社
野田富男	戦後の日本石炭産業における出光興産の動向 戦後復興期を中心として		研究紀要〈麻生福岡短大〉		1	45 ~ 69	1990	戦後 日本石炭産業 出光興産 復興期
九州大学七十五年史編集委員会編		九州大学七十五年史 資料編 上巻		九州大学出版会			1991	九州大学
九州大学七十五年史編集委員会編		九州大学七十五年史 資料編 下巻		九州大学出版会			1991	九州大学
九州大学七十五年史編集委員会編		九州大学七十五年史 別巻		九州大学出版会			1991	九州大学
九州大学七十五年史編集委員会編		九州大学七十五年史 通史		九州大学出版会			1991	九州大学
宮地米蔵	岡森井堰(遠賀川)をめぐる補償関係 一水利慣行序説(6)		久留米大学法学		9.10		1991	岡森井堰 遠賀川 補償関係 水利慣行
有馬学	日中戦争と社会大衆党 1930年代における「運動」と「統合」(2)		史淵		129		1992	日中戦争 社会大衆党 1930年代
木永勝也	1920年代前半期の農村総合政策—1—福岡県における小作争議対策の始動		九州文化史研究所紀要		37	189-211	1992	1920年代前半期 農村総合政策 福岡県 小作争議対策
木下喜作	筆禍史に残る「赤穂義臣伝」の著者片島深淵		福岡地方史研究		29		1992	筆禍史 赤穂義臣伝 片島深淵
近藤典二	学校事始 一小倉県の場合一		福岡地方史研究		29		1992	学校 小倉県
坂田大	まぼろしの福岡県(筑前国)三十四区		福岡地方史研究		29		1992	福岡県 筑前国 三十四区
長野健次郎	筑前志摩の歴史探訪		歴史研究		379		1992	筑前 志摩
	筑豊五郡石炭鉱区一覧表(明治28. 32. 33. 34年)		石炭研究資料叢書		13		1992	筑豊五郡 石炭鉱区
	撫順炭鉱特別会計ノ提唱		石炭研究資料叢書		13		1992	撫順炭鉱 会計
赤司岩雄	雑餉隈郵便局史概要		福岡地方史研究		31		1993	雑餉隈 郵便局
石滝豊美	陸軍憲法学校教官(陸軍教授)中村至道について 一 部落問題にささげた半生		福岡地方史研究		30		1993	陸軍憲法学校 陸軍教授 中村至道 部落問題
今井孝	1900年頃の筑豊炭田における炭鉱労働者管理の一端 一 麻生上三積炭鉱「鉱夫技師日誌」の分析 一		福岡大学高学論叢		38-1		1993	1900年頃 筑豊炭田 炭鉱労働者管理 麻生上三積炭鉱 鉱夫技師日誌
萩野喜弘		筑豊炭鉱労資関係史		九州大学出版会			1993	筑豊炭鉱 労資関係
木永勝也	1920年代前半期の農村総合政策—2—福岡県における小作争議対策の始動		九州文化史研究所紀要		38	341-356	1993	1920年代前半期 農村総合政策 福岡県 小作争議対策
木永勝也	1920年代中期の小作争議と農民組合の組織構造——福岡県朝倉郡大福村農民組合を素材として		史淵		130	43-76	1993	1920年代中期 小作争議 農民組合 福岡県 朝倉郡 大福村 農民組合
坂田大	福岡県(筑前国)の大区小区		福岡地方史研究		30		1993	福岡県 筑前国 大区小区
清水憲一	北九州と大連(関東州)——作業の中間報告と統計		社会文化研究所紀要(九州国際大学)		30	160-122	1993	北九州 大連

地方史研究協 議会編		異国と九州 歴史 における国際交流 と地域形成		雄山閣出版		1993	九州 国際交流 地域形成	
中村尚史	第一企業勃興期における幹線鉄 道会社の設立と地方官 —九州 鉄道会社設立運動の展開過程—		九州史学		103	1993	第一企業勃興期 幹線鉄道会社 地方官 九州鉄 道会社設立運動	
白水庸三	伊藤小左衛門の技船罪の疑惑		福岡地方史研究		31	1993	伊藤小左衛門 技船罪	
平井一臣・有 馬学	陸軍の国家改造運動にみる中央 と地方—佐々木清関係文書の 検討と紹介		九州文化史研究所 紀要		38	254-370	1993	陸軍 国家改造 運動 中央 地 方 佐々木清
八木清治	18世紀後半における旅と情報の ネットワーク —橘春暉、亀井 南冥、高山彦九朗の交流をめぐ って		福岡女学院大学紀 要		3		1993	18世紀後半 旅 情報 橘春暉 亀井南冥 高山 彦九朗
吉田喜代	岩佐又兵衛と福岡 荒木弥助村 光そして三十六歌仙絵の謎		福岡地方史研究		30		1993	岩佐又兵衛 福 岡 荒木弥助村 光 三十六歌仙 絵
和田正弘	北九州と大陸の貿易 —奉益号 大連書簡の分析		社会文化研究所 紀要（九州国際大 学）		30		1993	北九州 大陸貿 易 奉益号 大 連書簡
米津三朗監修		北九州の100万年		海鳥社			1993	北九州
	赤池石炭資料（赤池炭鉱 諸規 則 明治鉱業様式）		石炭研究資料叢書		14		1993	赤池石炭
	筑豊五郡石炭鉱区一覧表（明治 35. 36. 37年）		石炭研究資料叢書		14		1993	筑豊五郡 石炭 鉱区
	筑豊炭山労働事情		石炭研究資料叢書		14		1993	筑豊 炭鉱 労 働事情
鷺山智英	明治二年福岡藩のキリシタン預 かり—真宗僧侶による教論をめぐ って		福岡地方史研究		33		1993	明治 福岡 キリ シタン 真宗教 論
筑後市史編さ ん委員会 編		筑後市史		筑後市			1993	福岡 筑後 歴史
稲葉継雄	旧韓国・朝鮮の教育と福岡県人		教育学部紀要（九 州大学）		39		1994	韓国 朝鮮 教 育 福岡県人
海老田輝巳	江戸末期から明治初期にかけて の豊前国恒遠塾における儒仏一 体思想とその影響		九共経済論集		20		1994	江戸末期 明治 初期 豊前国 恒遠塾 儒仏一 体思想
岡田陽一		全国地方史誌文 献案内 下 1989-1991		三一書房			1994	地方史誌
木永勝也	福岡県初期農民運動覚え書き —小作人組合と初期日本農民 組合		史淵		131	1-15	1994	福岡県 初期農 民運動 小作人 組合 初期日本 農民組合
新谷恭明	明治後期の中学校における生徒 指導の実態について 福岡県立 中学明善校教諭秋吉音治の講話 原稿を素材に		教育学部紀要（九 州大学）		39		1994	明治後期 中 学 校 生徒指導 明善校 秋吉音 治
丸山雍成		九州・その歴史的 展開と現代		文献出版			1994	九州 現代
	筑豊五郡石炭鉱区一覧表（明治 39. 40. 41年）		石炭研究資料叢書		15		1994	筑豊五郡 石炭 鉱区
	地方職業紹介事務局調査報告書 （筑豊炭鉱労働者出身地調査・ 鉱夫雇傭状態に関する調査・宇 部炭鉱労働事情）		石炭研究資料叢書		15		1994	筑豊炭鉱 労働 者 出身地調査 鉱夫雇傭状態 宇部炭鉱 労働 事情
安部恒久	日清戦後の地方政治状況—官僚 知事加納久宜を通して		社会科学討究		41-3	227-259	1994	日清戦争 地方 政治 知事 加納
鮎川伸夫	戦間期における採炭機構の合理 化と労働指揮権		史林		79-3	77-107	1994	戦間 採炭 合理 化 労働指揮権
九州大学石炭 研究資料セン ター編		石炭研究資料叢書 第17輯		九州大学石炭研究資料 センター			1994	石炭 研究 資料 叢書

高橋勇一	近代機械産業と地域博物館の役割—機械鑄造用木型の展示会を通じて—		地方史研究		46-4	45-50	1994	近代 機械 産業 地域 博物館
時里奉明	日露戦後における官営製鉄所と地域社会—製鉄所購買会と八幡町商業者の関係を中心に		九州史学		115	44-68	1994	日露戦争 官営 製鉄所 地域 社会
廣田 誠	大正期の福岡県における魚市場政策—地区—市場制の確立過程を中心とする一考察—		市場と経営			123-138	1994	大正 福岡 魚市 場 地区 市場
松下志朗 他	地方史研究の現状：福岡県		日本歴史		578		1994	地方 福岡 現状
柳猛直		福岡県歴史探訪 東区編		海鳥社			1995	福岡県 東区
柳猛直		福岡県歴史探訪 西区編		海鳥社			1995	福岡県 西区
J R 九州		九州旅客鉄道10年 史 総合サービス 業へ、九州新時代 に向けて		九州旅客 鉄道(JR九 州)			1995	J R 九州 旅客 鉄道
アメリカ戦略 爆撃調査団聴 取書を読む会 編		福岡空襲とアメリ カ軍調査 アメリ カ戦略爆撃調査団 聴取書を読む		海鳥社			1995	福岡 空襲 戦略 爆撃 アメリ カ 軍 米軍
宇田 正	鉄道業の会社史(西日本篇)		『日本会社史』			466-493	1995	鉄道 会社 日本 西日本
梅野初平	明治十五年・朝鮮事変記録(史料紹介)		福岡地方史研究		34		1995	明治 15年 朝鮮 事変 記録 史料
岡崎哲二	鉄鋼業の会社史		『日本会社史』			230-239	1995	鉄鋼業 会社 日 本
岡本幸雄	士族授産事業の一考察—筑前福岡「筑陽社」の創設事情と経営—		西南学院大学商学 論集		42-3・4		1995	士族 授産 事業 筑前 福岡 筑陽 社
荻野喜弘	鉱業の会社史		『日本会社史』			17-43	1995	鉱業 鉱山 会社 歴史
北九州市企画 局 企画課・ 北九州都市協 会企画		北九州市の建築 明治—大正—昭和 初期		北九州市			1995	北九州 建築 明 治 大正 昭和
九州大学石炭 研究資料セン ター	九州炭鉱労働組合運動史		石炭研究資料論叢		17		1995	九州 炭鉱 労働 運動
クオリ編		全国地方史誌関係 図書目録 国立国 会図書館納本非流 通図書		クオリ			1995	全国 地方 国会 図書館
久留米市史編 さん委員会		久留米市史 第13 巻		久留米市			1995	久留米 市史 歴 史
高木雅史	1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求 町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐって		人文論叢(福岡大)		28-4	1781- 1804	1995	地域社会 女子 中等教育 刈谷
竹森健二郎	戦後、福岡県部落解放運動史年表 稿 1945年～1955年		部落解放史・ふく おか		84	107-129	1995	戦後 福岡県 部 落 解放 運動
立花町史編さ ん委員会 編		立花町史		立花町			1995	立花町 歴史
堤 啓次郎	士族反乱の乱後処理と県治体制の再編		国際文化論集(西 南学院大)		11-2	131-168	1995	士族 反乱 県治 体制 再編
永末十四生		筑豊万華—炭鉱の 社会史—		三一書房			1995	筑豊 万華 炭鉱 社会史
中山信一	筑後地方における解放への歩み—全筑後水平社結社70周年記念集会の取り組みを通じて—		部落解放史・ふく おか		83	103-121	1995	筑後 部落 解放 歴史 福岡 水平 社
日本歴史学会 編		日本歴史地名体系 第47巻		平凡社			1995	日本 歴史 地名
原田敬一	国権派の日清戦争—『九州日日新聞』を中心に		文学部論集(仏教 大)		81	19-39	1995	国権 派 日清 戦 争 九州 日日新 聞
秀村選三 編 纂		九州史料落穂集 第11冊		文献出版			1995	九州 史料 落穂

廣田 誠	明治後期の福岡県における地域商業政策—郡是・町村是を素材として—		市場史研究		16	10-20	1995	明治 福岡 地域商業 郡是 町村是
福岡県立図書館・福岡県公共図書館等協議会編		福岡県公共図書館郷土資料総目録追録9		福岡県立図書館			1995	福岡 郷土 資料目録
福岡市 編		福岡市史 第13巻		福岡市			1995	福岡 歴史 東区
宗像市史編纂委員会		宗像市史 通史編 第4巻 美術と建築 民俗		宗像市			1995	宗像 歴史 美術 建築 民俗
森山恒雄教授退官記念論文集刊行委員会編纂		地域史研究と歴史教育		熊本出版文化会館			1995	地域史 歴史 教育 森山 恒雄
柳川市史編集委員会編		柳川歴史資料集成 第1集		柳川市			1995	柳川 歴史 資料 歴史
山田 秀	明治末期の福岡県における鉄道輸送—「駅勢一覽」の分析を通して—		福岡大学商学論叢		40-3		1995	明治 福岡 鉄道輸送 駅勢一覽
甘木歴史資料館		甘木歴史資料館報 第1集		甘木歴史資料館			1996	福岡 甘木 歴史資料館
入江寿紀	博多電気軌道株式会社、九州水力電気株式会社の合併		福岡県地域史研究		18	139-161	1996	福岡 博多 電気軌道 九州電力
大谷秀樹	創立期貝島鋳業合名会社の資金調達と石炭販売		福岡県地域史研究		18	105-138	1996	創立期 貝島 炭鋳 鋳業 石炭販売
大牟田市史編集委員会		大牟田市史		福岡県			1996	大牟田 市史
小郡市史編集委員会 編		小郡市史 第3巻 通史編		小郡市			1996	福岡 甘木 歴史資料館
小郡市史編集委員会 編		小郡市史 第4巻 資料編		小郡市			1996	福岡 甘木 歴史資料館
北九州大学		北九州大学50年史 1946-1996		北九州大学			1996	北九州大 大学
行史編纂委員会		福岡相互銀行40年史		行史編纂委員会			1996	福岡相互銀行 社史
久留米市史編さん委員会 編		久留米市史 第10巻 補遺		久留米市			1996	福岡 久留米 歴史
玄洋社社史編纂会		玄洋社社史					1996	玄洋社 社史
庄内町		庄内町誌 上巻		庄内町			1996	福岡 庄内町
庄内町		庄内町誌 下巻		庄内町			1996	福岡 庄内町
新藤東洋男	太平洋戦争下における三井鋳山と中国人・朝鮮人労働者—その強制連行と奴隷労働—		人権民族問題研究会研究報告		1	1-25	1996	三井 鋳山 中国人 朝鮮人 労働者 強制連行
大学院博士課程10年史編集委員会 編		九州工業大学大学院博士課程10年の歩み		九州工業大学			1996	九州 工業 大学 大学院
太宰府市史編集委員会 編		太宰府市史 建築・美術・工芸資料編		太宰府市			1996	福岡 太宰府 歴史 建築 美術 工芸
太宰府市史編集委員会 編		太宰府市史 近現代資料編		太宰府市			1996	福岡 太宰府 歴史 建築 美術 工芸
筑紫野市史編さん委員会		筑紫野市史 上巻 年表、民俗編		筑紫野市			1996	福岡 筑紫野 年表 民俗
筑紫野市史編さん委員会		筑紫野市史 下巻 年表、民俗編		筑紫野市			1996	福岡 筑紫野 年表 民俗
津屋崎町史編さん委員会 編		津屋崎町史 通史編		津屋崎町			1996	福岡 津屋崎 歴史

豊津町史編纂委員会編		豊津町史		豊津町			1996	福岡 豊津 歴史
西日本新聞社編		福岡県労働運動史第3巻		福岡県			1996	福岡 労働 運動 歴史 西日本新聞
西日本文化協会編纂		福岡県史 近世資料編[16]		福岡県			1996	福岡 近世 資料 歴史
西日本文化協会編纂		福岡県史 近代資料編[17]		福岡県			1996	福岡 近代 資料 歴史
橋本哲哉	三池鉱山と囚人労働		社会経済史学		32-4	44-64	1996	三池 鉱山 囚人 労働
畠山秀樹	進出期三菱筑豊石炭鉱業		三菱史料館論集		1	39-94	1996	三菱 筑豊 石炭 鉱業
福岡県立図書館・福岡県公共図書館等協議会編		福岡県公共図書館郷土資料総合目録追録10		福岡県立図書館			1996	福岡 郷土 資料 目録
福岡市総合図書館		福岡市公文書資料目録 第2集		福岡市総合図書館			1996	福岡 公文書 資料 目録
福岡町史編集委員会編		福岡町史 自然編 1		福岡町			1996	福岡 福岡 自然
福岡町史編集委員会編		福岡町史 自然編 2		福岡町			1996	福岡 福岡 自然
福岡町史編集委員会編		福岡町史 資料編 1		福岡町			1996	福岡 福岡 資料
福岡町史編集委員会編		福岡町史 資料編 2		福岡町			1996	福岡 福岡 自然
藤真沙夫		小倉戦史		豊前叢書刊行会			1996	小倉 戦争 戦史
宗像市史編纂委員会編		宗像市史 通史編 第3巻 (近現代)		宗像市			1996	福岡 宗像 歴史
宗像神社復興会		宗像神社史(下)		神社復興期成会			1996	宗像神社 神社史
大和町史編纂実務委員会編		大和町史資料編		大和町			1996	福岡 大和 歴史
朝日新聞社		博多二千年史 筑紫ものがたり		朝日新聞社			1997	博多 筑紫
朝日新聞筑豊支局編		ふるさと筑豊一民話と史実を探る一		朝日文化センター			1997	筑豊 ふるさと 民話 史実
安藤精一	福岡県の士族授産		商品流通の史的 研究	ミネルヴァ 書房			1997	福岡県 士族 授産
伊丹正博	筑後国私立草野銀行史料(1)		香川大学経済論叢		42-4		1997	筑後 草野銀行
糸園辰雄	筑豊石炭鉱業の産業金融(覚書)一明治40年代まで一		産業経済研究		5		1997	筑豊 石炭 炭坑 金融 明治
上田俊美	筑前地方の自由民権運動について		九州史学		78	23-52	1997	筑前地方 自由 民権運動
尾高煌之助	北九州における貨幣賃金の変動		経済研究 (一橋大 学)		18-3		1997	北九州 貨幣 賃金
佐々木哲哉	郷土研究がめざすもの(福岡県)		歴史手帖		10-2		1997	郷土史 福岡県
清水憲一	明治期福岡県における工場の展開		八幡大学論集		31-3		1997	明治期 福岡県 工場
新藤東洋男		部落解放運動の史的展開一九州地方を中心に一		柏書房			1997	部落解放運動
高倉金一郎		史料でつづる福岡県メーカーの歴史		電産九州不当逮捕反対同盟			1997	史料 福岡県 メーカー
高嶋雅明	明治十年代の私立銀行(1)一筑後国私立銀行の定款と考課状の紹介一		商経論叢 (九州産 業大学)		8-1	21-44	1997	明治 私立銀行 筑後
高嶋雅明	明治十年代の私立銀行(2)一筑後国私立銀行の定款と考課状の紹介一		商経論叢 (九州産 業大学)		8-2	45-70	1997	明治 私立銀行 筑後

太刀洗町郷土誌編集委員会編		太刀洗町史		太刀洗町			1997	太刀洗町 町史
田中直樹	第二次大戦前夜の炭坑における朝鮮人労働者—石炭連合資料を中心に—		朝鮮研究		72	22-36	1997	第二次世界大戦炭坑 朝鮮人労働者 石炭連合資料
鳥巣京一	筑豊興業鉄道会社資料		石炭研究資料叢書(九大石炭研究資料センター)		3		1997	炭鉱 筑豊 鉄道会社 資料
西尾陽太郎	玄洋社の成立について		九州文化史研究所紀要		14	35-64	1997	玄洋社
西川治等編		日本の文化地理第16巻 福岡・大分・佐賀・長崎		講談社			1997	日本 文化地理 福岡
能美安男	宮崎百太郎氏採集資料(三)		石炭研究資料叢書(九大石炭研究資料センター)		3		1997	炭鉱 宮崎百太郎 資料
橋本哲哉	三池炭鉱における共愛組合—その成立を中心に—		三井金属史論叢		3	49-88	1997	三池 炭鉱 共愛組合
秀村選三(他編)		九州石炭産業史資料目録(7)		西日本文化協会(福岡)			1997	九州 石炭 炭業 資料目録
福岡県総務渉外課編		福岡県の歴史		福岡県			1997	福岡県 歴史
福岡県労働部労政課編		福岡県労働運動史		福岡県			1997	福岡県 労働運動史
三宅明正	昭和恐慌期の労資関係—八幡製鉄所「製鉄業官民合同反対運動」に即して—		日本史研究		240		1997	昭和 恐慌 労資関係 八幡製鉄所
紫村一重	植木斯波炭鉱日誌		石炭研究資料叢書(九大石炭研究資料センター)		3		1997	炭鉱 植木斯波 日誌
吉岡修一郎		九州の科学者・思想家たち—現代日本文化の先駆者たち—		人間の科学者			1997	九州 科学者 思想家
読売新聞西部本社		福岡百年(上)幕末から明治へ		浪速社			1997	福岡 県史 幕末 明治
読売新聞西部本社		福岡百年(下)日露戦争から昭和へ		浪速社			1997	福岡 県史 日露戦争 昭和
新藤東洋男		自由民権運動と九州地方—九州改進黨の史的的研究—		古雅書店			1997	九州 自由民権運動 九州改進黨
田中直樹	資料「闘争日記」(1)—麻生全抗争議団本部—		朝鮮研究		70	58-63	1997	炭坑 麻生
田中直樹	資料「闘争日記」(2)—麻生全抗争議団本部—		朝鮮研究		72	60-63	1997	炭坑 麻生
朝日新聞西部本社(編)		戦後誌		石風社			1998	戦後
鮎川伸夫	戦間期筑豊炭坑における坑夫統括—納屋制度から直轄制度へ—		調査と研究(京都大学)		12	10-26	1998	戦間期 筑豊 炭坑 納屋制度
岡本幸雄	日清戦争後の地方紡績企業の展開—博多綿綿紡績会社の創設・経営事情一般—		商業論集(西南学院大学)		29-3・4	69-92	1998	日清戦争 紡績企業 博多 綿 経営
折田悦郎	九州帝国大学の創設		文明のクロスロード		55		1998	九州大学 九州帝国大学
北九州市		北九州市史		北九州市			1998	北九州市 市史
北九州市議会事務局(編)		北九州市議会史第1巻		北九州市議会事務局			1998	北九州 市議会史
九州大学石炭研究資料センター(編)		石炭研究資料叢書第18輯		九州大学石炭研究資料センター			1998	石炭 福岡
九州大学大学史料室		九州大学大学史料叢書—第5輯—		九州大学史料室			1998	九州大学 大学史
九州大学農学部附属農場		九州大学農学部附属農場75周年誌		九州大学			1998	九州大学 農学部附属農場

久留米市		久留米市史(2)		久留米市			1998	久留米 市史
久留米市史編 さん委員会 (編)		久留米市史 第10 巻		久留米市			1998	久留米市 市史
久留米市史編 さん委員会 (編)		久留米市史 第11 巻		久留米市			1998	久留米市 市史
小西秀隆	九州民権党論(1925-1926) —全 国の無産政党組織問題をめぐっ て—		史淵		120	37-78	1998	九州民権党 無 産政党
小林孝行	戦後における在日朝鮮人の教育 —福岡県の事例を中心として—		紀要(福岡教育大 学社会科)		32	11-26	1998	戦後 在日朝鮮 人 福岡県
舌間信夫		直方歴史ものがた り		直方市			1998	直方市 歴史 ものがたり
新宮町誌編集 委員会(編)		新宮町誌		新宮町			1998	新宮 町誌
須恵町		須恵町誌		須恵町			1998	須恵 町史
津屋崎町史編 さん委員会 (編)		津屋崎町史—資料 編—		津屋崎町			1998	津屋崎 町史
時里泰明	日露戦後における官営製鉄所と 地域社会—製鉄所購買会と八幡 町商業者の関係を中心に—		九州史学		115		1998	日露戦後 官営 製鉄所 地域社 会 製鉄所購買 会 八幡町 商 業者
徳本正彦	戦時下の北九州五市合併問題		社会科学論集		24	37-84	1998	戦時下 北九州 合併
永倉三郎	福岡市美術館の松永コレクション		文明のクロスロ ード		8		1998	福岡市美術館 松永コレクシ ョン
西日本文化協 会(編)		福岡県史—近代研 究編—(2)		福岡県			1998	福岡県 県史 近代
直方市		直方市史(資料編)		直方市			1998	直方 市史
比研創立40周 年記念事業実 行委員会編		比研40年のあゆみ		九州大学教 育学部附属 比較教育文 化研究施設			1998	九州大学 比研
福岡県議会議 事務局(編)		詳説福岡県議会史 —7巻—		福岡県議会			1998	福岡県 県議会 議会史
福岡市(編)		福岡市史 昭和資 料集続編1		福岡市			1998	福岡市 市史 昭和
福岡市下水道 局(編)		福岡市下水道史		福岡市下水 道局			1998	福岡市 下水道 歴史
福岡市総合図 書館編		福岡市公文書資料 目録—第1集—		福岡市総合 図書館			1998	福岡市 公文書 資料目録
福岡町史編集 委員会編		福岡町史 —資料 編—		福岡町			1998	福岡町 町史
宮本盛太郎	九大教授時代の鹿子木員信に関 する若干のメモ		政治経済史学		200	50-58	1998	九州大学 鹿子 木員信
宗像市史編纂 委員会(編)		宗像市史 通史 第1巻		宗像市			1998	宗像市 市史
宗像市史編纂 委員会(編)		宗像市史 通史 第4巻		宗像市			1998	宗像市 市史
石瀧豊美		もうひとつの自由 民権 —玄洋社発 掘—		西日本新聞 社			1999	自由民権 玄洋 社
石瀧豊美		玄洋社発掘 —も うひとつの自由 民権—		西日本新聞 社			1999	玄洋社 自由民 権
入江寿紀	福博電気軌道株式会社の設立と 開業		福岡県地域史研究		16	125-163	1999	福博電気軌道株 式会社
神山恒雄	道路整備と地方財政—福岡県 の場合—		高村論集			37-64	1999	道路整備 地方 財政 福岡県

川添昭二	宗像大社所蔵出光佐三氏奉納文書について		政治経済史学		380	34-45	1999	出光佐三 宗像大社 奉納文書
川添昭二(他)		福岡県の歴史		山川出版			1999	福岡県 歴史
小倉博	川上音二郎・貞奴の成田山信仰		成田史談		44		1999	川上音二郎 貞奴 成田山信仰
坂本悠一	筑豊石炭鉱業と被差別部落—日本資本主義と「被差別労働」をめぐって—		部落問題研究		140	82-116	1999	筑豊 石炭 被差別部落 労働
坂本悠一	九州在住朝鮮人関係新聞記事目録(その3「福岡日日新聞」下一九二七～三九年)		社会文化研究所紀要		45		1999	九州 朝鮮人 新聞記事 福岡日日新聞
新谷恭明		尋常中学校の成立		九州大学出版会			1999	尋常中学校
高向嘉昭	博多人形製造業に関する産業史的考察(2)一産地形成要因への適合と充足		商経論叢		40-2		1999	博多人形 製造業 産地 形成要因
時里奉明	官営製鉄所における労働組合の組織構造—同志会を事例として—		福岡県地域史研究		16	103-123	1999	官営製鉄所 労働組合 同志会
中村尚史	炭坑業の発達と鉄道企業—筑豊の場合—		高村論集			307-339	1999	炭坑 鉄道企業 筑豊
西日本新聞		西日本新聞120年史		西日本新聞			1999	西日本新聞 社史
日比野利信	福岡県における治水負担問題の展開		福岡県地域史研究		16	61-101	1999	福岡県 治水費用負担問題
日比野利信	明治前期治水費用負担問題の成立過程—福岡県を中心として—		九州史学		117	25-55	1999	明治前期 治水費用負担問題 福岡県
福岡市(編)		福岡市史—昭和編資料集続編2—		福岡市			1999	福岡市 市史 昭和
古園井昌喜	1920年代における企業内運動部の創設要因—八幡製鉄所野球部の事例—		論集(下関市立大)		41-3	193-206	1999	1920年代 八幡製鉄所 野球部
毎日新聞西部本社編、友田道郎取材・構成		三池閉山		葦書房			1999	三池 石炭 炭坑 閉山
久留米市教委		久留米俘虜収容所1914～1920		久留米市教委			1999	久留米 俘虜収容所 1914～1920
九州大学大学史料室		九州大学関係史料目録		九州大学大学史料室			1999	九州大学 関係史料 目録
有馬学	第二回総選挙における永江純一の遭難手記		九州文化史研究所紀要		44		2000	総選挙 永江純一 遭難 手記
井上忠	北九州における幕末の種痘		九州地方史		3・4		2000	北九州 幕末 種痘
入江寿紀	博多電気軌道株式会社の開業		福岡県地域史研究		17	97-132	2000	博多電気軌道株式会社
加藤要一	明治中後期福岡県における会社設立状況		エコノミクス		5-2		2000	明治 福岡県 会社設立
加藤要一	明治二六年、三五年、四五年時点における福岡県「統合会社表」		エコノミクス		5-2		2000	明治 福岡県 統合会社 表
近藤直也	福岡県下に於ける初誕生儀礼(一)		近畿民俗		156・157		2000	福岡県 初誕生儀礼
近藤直也	福岡県下に於ける初誕生儀礼(二)		近畿民俗		158・159		2000	福岡県 初誕生儀礼
坂本悠一	福岡県における朝鮮人移民社会の成立—戦間期の北九州工業地帯を中心として—		青丘学術論集		13		2000	福岡県 朝鮮人移民社会 戦間期 北九州工業地帯
竹内淳彦	北九州工業地域の形成—明治・大正期を中心として—		歴史地理学紀要		8		2000	北九州 工業地域 明治 大正
竹沢尚一郎・菅洋志	博多祇園山笠(都市祭礼としての博多祇園山笠)		季刊民族学		84		2000	博多 祇園山笠 都市祭礼

堤研二	近代における地方鉄道と地域構造—福岡県太宰府地域を事例として—		待兼山論叢		34		2000	近代 地方鉄道 地域構造 福岡 県 太宰府
梶嶋政司	大区小区制と地域秩序 福岡県16大区8小区の村々を中心に		七隈史学		1	49 ~ 68	2000	大区小区制と地 域秩序 福岡県 16大区8小区の 村々を中心に
近畿大学九州 工学部図書館 地域資料室編纂		筑豊近代化大年表 明治編		近畿大学九州 工学部図書			2000	筑豊 近代化 年表 明治
駄場祐司	五・一五事件時における福岡日日新聞「反軍」論説の社会的背景 (I) 三井・大牟田事件と久留米第一二師団		政治経済史学		407	33 ~ 48	2000	五・一五事件 福岡日日新聞 反軍 論説 三 井 大牟田事件 久留米第一二師 団
福岡町史編集 委員会		福岡町史通史編		福岡町			2000	福岡 町史 通 史
柳川市史編集 委員会編		柳河新報記事目録 1		柳川市			2000	柳河新報 記事 目録
入江寿紀	北筑軌道株式会社の開業と合併		福岡県地域史研究		19		2001	北筑 軌道株式 会社 開業 合 併
新鞍拓生	麻生太吉の炭業統制指向とその論理—地方企業家による地方経済の調整—		エネルギー史研究		16		2001	麻生太吉 炭業 統制 地方企業 家 地方経済
東定宣昌	筑豊選定鉱区の鉱区権者		エネルギー史研究		16		2001	筑豊 選定鉱区 鉱区権
武藤軍一郎	明治期以降、都市近郊農家における野菜作の展開過程—福岡県遠賀郡芦屋町粟屋、安高文書を中心に—		福岡県地域史研究		19		2001	明治 都市近郊 農家 野菜作 福岡県 遠賀郡 芦屋町 粟屋 安高文書
石滝豊美	「福岡地方史研究」第三九号合評会の報告		福岡地方史研究		40		2002	福岡地方史研究 合評会
石滝豊美	「福岡地方史研究」四〇号までの歩み		福岡地方史研究		40		2002	福岡地方史研究 四〇号
河村輝樹	選定坑区制の導入と炭坑投機家—石炭商中原屋の事例から—		エネルギー史研究		17		2002	選定坑区制 炭 坑投機家 石炭 商 中原屋
坂本悠一	西部軍・八幡製鉄所空襲調査報告書		九州国際大学法学 経済論集		8-3		2002	西部軍 八幡製 鉄所 空襲 調 査報告書
砂場一明、木 元富夫	津屋崎塩田(福岡県)の盛衰と現状—塩業の変遷と産業遺産—		九州産業大学経営 学論集		12-4		2002	津屋崎 塩田 福岡県 塩業 変遷 産業遺産
玉江彦太郎		小倉藩の終焉と近代化		西日本新聞 社			2002	小倉藩 終焉 近代化
新鞍拓生	本洞、藤棚炭鉱売却後の麻生商店の炭鉱業経営—明治四〇年から第一次大戦後期まで—		エネルギー史研究		17		2002	本洞 藤棚 炭 鉱 麻生商店 炭鉱業 明治 第一次大戦
深町純亮	「筑豊近代化年表」誕生記		エネルギー史研究		17		2002	筑豊 近代化 年表 誕生記
石滝豊美	絵葉書でたどる福岡の歴史 二 旧博多駅		福岡地方史研究		41		2003	絵葉書 福岡 博 多駅
入江寿紀	明治期福岡県における軌道について		福岡県地域史研究		20		2003	明治 福岡県 軌 道
後藤正明	近代における木蠟業の発展過程—明治期の福岡県木蠟業を中心として—		福岡県地域史研究		20		2003	近代 木蠟業 明 治 福岡県
近藤典二	草創期の福岡地方史研究会		福岡地方史研究		41		2003	草創期 福岡地 方史研究会
眞野修	御笠郡内の庚申塔—太宰府市域を中心として—		都府楼		35		2003	御笠郡 庚申塔 太宰府市
渡辺悦次	日中戦争後の福岡県労働組合運動覚え書—戦争の進展と運動の混迷・解体へ (一九三七年～四〇年)		福岡県地域史研究		20		2003	日中戦争 福岡 県 労働組合運 動

石滝豊美	福岡連隊の福岡城		福岡地方史研究		42		2004	福岡連隊 福岡城
大島久幸	官営八幡製鉄所における鉱石輸送		エネルギー史研究		19		2004	官営八幡製鉄所 鉱石輸送
河村輝樹	明治期における坑業災害と炭坑経営—豊国炭坑・ガス爆発事故の事例から—		エネルギー史研究		19		2004	明治期 坑業災害 炭坑経営 豊国炭坑 ガス爆発事故
副島邦弘	蜜房を割く—蜂蜜考（福岡県の場合）—		福岡地方史研究		42		2004	蜜房 福岡県
丸山雍成、長洋一		街道の日本史 博多・福岡と西街道		吉川弘文館			2004	街道 日本史 博多 福岡 西街道
東條 正	明治中期における地方財政と地方官—安場県政期の福岡県会筑後川改修工費予算案審議を事例として—		福岡県地域史研究		21		2004	明治 地方財政 地方官 安場県政期 福岡県 筑後川 改修工費
野田富男	創業期における出光佐三の理念と行動—神戸高商時代の卒業論文を中心として—		福岡県地域史研究		21		2004	創業期 出光佐三 神戸高商 卒業論文
長廣利崇	明治前期の石炭問屋—『中原嘉左右日記』の再検討—		日本歴史		688		2005	明治 石炭問屋 中原嘉左右日記
伊藤彰子	明治・大正期における沿岸漁業の展開過程—福岡県蓑島を事例に—		福岡県地域史研究		22		2005	明治 大正 沿岸漁業 福岡県 蓑島
草野真樹	明治後期から大正初期における筑豊石炭鉱業と炭鉱災害—大正三年三菱方城炭鉱炭塵ガス爆発事故の分析を中心として—		福岡県地域史研究		22		2005	明治 大正 筑豊 石炭鉱業 炭鉱災害 三菱 炭鉱炭塵ガス爆発事故
甘木市		甘木市史		甘木市史料編纂委員会			1981 ～ 1982	甘木市 市史
西日本文化協会(編)		福岡県史—近代史料編—(24)～(28)		福岡県			1995 ～ 1996	福岡県 県史 近代史料

(2) 外国史 (西洋史・東洋史) からみた地域に関する研究リスト

〈1960年代〉

著者	タイトル	雑誌名	本の場合の出版社 (発行所)	巻・号	ページ	年月	キーワード
山根幸夫	戊戌変法と日本—康有為の〈明治維新〉把握を中心として—	東京女子大史学科開設記念論文集			179～210	1962年9月	戊戌変法、康有為
青野博昭	戦後日本における東南アジア政治研究の回顧と展望	アジア研究		9(3・4)	84～106	1963年1月	戦後日本、東南アジア研究
姜徳相・琴秉嗣 (共編)	関東大震災と朝鮮人〈現代資料第6〉		みすず書房			1963年1月	関東対震災、朝鮮人
岩村三千夫	戦後日中友好運動の歩み	中国研究月報		180	1～28	1963年3月	戦後、日中友好
佐藤三郎	明治三年の厦門事件に関する考察—近代日中交渉史上の一齣として—	山形大学紀要 (人文科学)		5(2)	231～280	1963年3月	厦門事件、日中交渉史
山辺健太郎	日本帝国主義と植民地	家永三郎 ほか 編『岩波講座 日本歴史 19 巻 現代2』	岩波書店		203～246	1963年3月	日本帝国主義、植民地
安藤彦太郎	日本人の中国観と「支那浪人」	中国研究月報		181	1～15	1963年4月	中国観、日本
藤島宇内	在日朝鮮人問題と日本人の立場	朝鮮研究月報		17	1～11	1963年5月	在日朝鮮人
藤島宇内・松井勝重・姜徳相・加藤卓造(他)	(座談会)在日朝鮮人問題について—殉難の歴史と、その調査・研究を中心に(その1)—	朝鮮研究月報		17	12～33	1963年5月	在日朝鮮人
坂本義和	核時代の日中関係	世界		210	12～27	1963年6月	核時代、日中関係
近藤銀一(編)	太平洋戦時下の朝鮮 第3		朝鮮史料編纂会			1963年7月	太平洋戦争、朝鮮
飯塚浩二	アジアへの視角とヨーロッパへの視角 — 一つの覚え書 —	思想		470	1～13	1963年8月	アジア、ヨーロッパ
山田慶児	虚像の変貌—イギリス人のアジア観—	思想		470	33～47	1963年8月	アジア観、イギリス
今井清一・野沢豊	軍部の制覇と日中戦争	家永三郎 ほか 編『岩波講座 日本歴史 19 巻 現代2』	岩波書店		255～316	1963年8月	日中戦争
宇佐美誠次郎	満州侵略	家永三郎 ほか 編『岩波講座 日本歴史 19 巻 現代2』	岩波書店		211～254	1963年8月	満州、侵略
江口圭一・小野信爾	日本帝国主義と中国革命	家永三郎 ほか 編『岩波講座 日本歴史 19 巻 現代2』	岩波書店		1～50	1963年8月	日本帝国主義、中国革命
李珍珠	関東大震災における朝鮮人虐殺の真相と実態〈朝鮮に関する研究資料 第9集〉		朝鮮大学校			1963年8月	関東大震災、朝鮮人虐殺
馬場明	第一次山東出兵と田中外交	アジア研究		10(3)	50～77	1963年10月	山東出兵、田中義一
平野義太郎	国際法上よりみたる台湾の地位	中国研究月報		194	1～29	1963年10月	太平天国、明治維新、近代化
岩村三千夫	戦後の日中関係	中国研究所紀要		2	163～204	1963年10月	戦後、日中関係
野原四郎	五四運動と日本人	中国研究所紀要		2	77～116	1963年10月	五四運動
戸沢仁三郎・藤島宇内	〈対談〉関東大震災における朝鮮人虐殺の責任—自警団を中心に、日本人の立場から—	朝鮮研究月報		22	31～47	1963年10月	関東大震災、朝鮮人虐殺
遠山茂樹	東アジア世界像の検討—近現代史の立場から—	歴史学研究		281	19～23	1963年10月	東アジア世界、近現代史
中国研究所編	中国近代化と日本		中国研究所			1963年10月	中国、近代化、日本
植田捷雄	日中関係の推移と展望	季刊社会科学		1		1963年11月	日中門
江副敏生	《中国近代化と日本》を読んで	大安		9(12)	3～6	1963年12月	中国、近代化、日本

小池澄	歴史教育とアジア像の形成	歴史学研究		283	14～17	1963年12月	歴史教育、アジア像
藤間生大	東アジア世界形成の契機—1964年度大会のために—	歴史学研究		283	45～59	1963年12月	東アジア世界
満史会(編)	満州開発四十年史(上)		謙光社			1964年1月	満州、歴史
満史会(編)	満州開発四十年史(下)		謙光社			1964年1月	満州、歴史
松尾尊兌	関東大震災下の朝鮮人虐殺事件(下)	思想		476		1964年2月	関東大震災、朝鮮人
植田捷雄	満州事変をめぐる日本の外交	東洋文化研究紀要		33	1～44	1964年3月	満州事変
飯塚浩二	戦争末年の南満州における経済事情と労務管理—密輸、行政供出と攤派、把握制度、その他—	東洋文化研究所紀要		32	189～270	1964年3月	満州、太平洋戦争
石田興平	満州における植民地経済の史的展開		ミネルヴァ書房			1964年3月	満州、植民地
田保橋潔	近代日鮮関係の研究 下巻		文化資料調査会			1964年3月	近代、日鮮関係
東洋史研究論文目録編集委員会(編)	日本における東洋史論文目録(I)		日本学術振興会			1964年3月	日本、東洋史研究
青野博昭・原覚天	戦後日本における東南アジア政治研究とマルクス主義	アジア研究		11(1)	117～125	1964年4月	戦後日本、東南アジア研究
岸幸一	戦後日本における東南アジア研究—近代政治学的研究分野の業績について	アジア研究		11(1)	107～116	1964年4月	戦後日本、東南アジア研究
栗本弘	戦後における日本の東南アジア経済の研究	アジア研究		11(1)	126～141	1964年4月	戦後日本、東南アジア研究
宮下忠雄	戦後日本における中共経済の研究	アジア研究		11(1)	62～80	1964年4月	戦後、日本、中共経済
大河内輝声(著) さねとうけい しゅう(編訳)	大河内文書—明治日中文化人の交遊—〈東洋文庫18〉		平凡社			1964年5月	大河内文書、日中交流
楠原利治	「アジア主義」と朝鮮—判沢弘「東亜共栄圏の思想」について	歴史学研究		289		1964年6月	アジア主義、朝鮮
江原正昭	日本国際政治学会編「日韓関係の展開」	東洋文化(東京大学東洋文化研究所)		36	71～74	1964年6月	日韓関係
野間清	日清貿易研究所の性格とその業績—わが国の組織的な中国問題研究の第一歩—	歴史評論		167	68～77	1964年7月	日清貿易
島田俊彦・稲葉正夫(編)	日中戦争1 現代史資料8		みすず書房			1964年7月	日中戦争
清水潤三	蝦夷種族論序説(上)	史学(三田史学会)		37(2)	141～166	1964年8月	蝦夷、種族
野間清	満鉄経済調査会設置前後	歴史評論		169	67～76	1964年9月	満州鉄道
伊藤武雄	満鉄に生きて		勁草書房			1964年9月	満州鉄道
白井勝美・稲葉正夫(編)	日中戦争2 現代史資料9		みすず書房			1964年9月	日中戦争
松尾尊兌	関東大震災下の朝鮮人暴動流言に関する二三の問題	朝鮮研究		33	44～48	1964年10月	関東大震災、朝鮮人
鈴木隆史	「満州国」と王道政治—「満州国」の評価をめぐって—	歴史評論		170	16～23	1964年10月	満州国
旗田巍	日本の東洋史家の朝鮮観—「満鮮史」の虚像—	朝鮮研究		34	73～79	1964年11月	日本、東洋史家、朝鮮観
藤島宇内	中国核実験を南北統一への与件とみる南朝鮮人民の主体性と日本	朝鮮研究		34	19～25、72	1964年11月	中国、核実験、朝鮮、日本
我部政男	「琉球処分」(1872-1879)の一考察—支配階級の反応の分析を中心に—	人文社会科学研究		3	109～194	1964年12月	琉球処分
寺尾五郎	解放運動における日・朝・中の連帯の問題	朝鮮研究		35	5～9、49	1964年12月	日本、朝鮮、中国

植田捷雄	日中相互理解のために	自由		6(12)	102 ~ 111	1964年12月	日中関係
在日朝鮮人の人権を守る会(編)	在日朝鮮人と法的地位		在日朝鮮人の人権を守る会			1964年12月	在日朝鮮人
角田順(解説)	日中戦争3 現代史資料10		みすず書房			1964年12月	日中戦争
江上波夫	アジア文化史研究 論考編		山川出版社			1965年	アジア 文化
東洋史研究論文目録編集委員会(編)	日本における東洋史論文目録(Ⅱ)		日本学術振興会			1965年	日本、東洋史研究
満史会(編)	満州開発四十年史(補)		謙光社			1965年1月	満州、歴史
矢内原忠雄	満州・朝鮮・沖縄		岩波書店			1965年1月	満州、朝鮮、沖縄
清水潤三	蝦夷種族論序説(下)	史学(三田史学会)		37(4)	365 ~ 386	1965年2月	蝦夷
中塚明	日本帝国主義の朝鮮支配—その善意とは何か—	朝鮮研究		37	3 ~ 9	1965年2月	日本帝国主義、朝鮮
権寧旭	朝鮮における日本帝国主義の植民地的山林政策	歴史学研究		297	1 ~ 17	1965年2月	日本帝国主義、朝鮮、植民地
朴慶植	太平洋戦争時における朝鮮人強制連行	歴史学研究		297	30 ~ 46	1965年2月	太平洋戦争、朝鮮人、強制連行
宮田節子	1930年代日帝下朝鮮における「農村振興運動」の展開	歴史学研究		297	18 ~ 29	1965年2月	日本帝国主義、朝鮮
中村菊男	満州事変		日本教文社			1965年2月	満州事変
朴慶植	朝鮮人強制連行の記録		未来社			1965年5月	朝鮮人、強制連行
遠山茂樹	世界史における地域史の問題点	歴史学研究		301	1 ~ 7	1965年6月	世界史、地域史
植田捷雄	竹島の帰属をめぐる日韓紛争	一橋論叢		54(1)	19 ~ 34	1965年7月	竹島、日韓関係
権寧旭	日本帝国主義下の朝鮮労働事情—1930年代を中心として—	歴史学研究		303	25 ~ 39	1965年8月	日本帝国主義、朝鮮
中村栄孝	日鮮関係史の研究 上		吉川弘文館			1965年9月	日鮮関係
本田喜代治	アジアの生産様式の問題—社会発展における特殊=日本的なものへの志向—	思想		496	77 ~ 88	1965年10月	アジアの生産様式
小林高寿	竹島の帰属をめぐる(1)	歴史教育		13(10)	69 ~ 77	1965年10月	竹島
浅田喬二	旧植民地・朝鮮における日本人大地主階級の変貌過程—上—	農業総合研究		19(4)		1965年10月	朝鮮、日本人
楠原利治	日本帝国主義統治時期の朝鮮米搬出について	朝鮮史研究会論文集		1	137 ~ 155	1965年11月	日本帝国主義、朝鮮
中瀬寿一	日本独占の新植民地主義的進出—「日韓交渉」をめぐるイデオロギー状況の分析—	朝鮮史研究会論文集		1	172 ~ 200	1965年11月	日韓交渉、日本
中塚明	日本帝国主義の形成と朝鮮問題	朝鮮史研究会論文集		1	94 ~ 117	1965年11月	日本帝国主義、朝鮮
小林高寿	竹島の帰属をめぐる(2)	歴史教育		13(11)	73 ~ 81	1965年11月	竹島
姜在彦	朝鮮問題における内田良平の思想と行動—大陸浪人における「アジア主義」の一典型として—	歴史学研究		307	13 ~ 22	1965年12月	朝鮮問題、内田良平、アジア主義
小林高寿	竹島の帰属をめぐる(3・完)	歴史教育		13(12)	58 ~ 64	1965年12月	竹島
齊藤孝・藤島宇内(編)	日韓問題を考える		太平出版社			1965年12月	日朝関係
近藤釵一(編)	太平洋戦時下の朝鮮 第4		朝鮮史料編纂会			1966年	太平洋戦争、朝鮮
近藤釵一(編)	太平洋戦時下の朝鮮 第5		朝鮮史料編纂会			1966年	太平洋戦争、朝鮮

東洋史研究論文目録編集委員会(編)	日本における東洋史論文目録(Ⅲ)		日本学術振興会			1966年	日本、東洋史研究
山本四郎	辛亥革命と日本の動向	史林		49(1)	31～56	1966年1月	辛亥革命、日本
浅田喬二	旧植民地・朝鮮における日本人大地主階級の変貌過程—下—	農業総合研究		20(1)	115～161	1966年2月	朝鮮、日本人
崔泰鎮	1920年代における日本帝国主義の「産米増殖」計画の略奪の本質	朝鮮学術通報		3(1)	42～50	1966年3月	日本帝国主義
鈴木隆史	日本帝国主義と満州(中国東北)(一)—満州国の成立およびその統治について—	徳島大学教養学部紀要		1	47～63	1966年3月	満州
権寧旭	旧植民地経済研究ノート—日本帝国主義下の朝鮮を中心として—	歴史学研究		310	45～52	1966年3月	日本帝国主義、朝鮮
植田捷雄	日韓関係史	国際法外交雑誌		64(4・5)	1～27	1966年3月	日韓関係
日本中国友好協会	日本中国友好運動の歴史—日本中国友好協会16年の歩み—		日本中国友好協会			1966年3月	日中関係
山下竜三	抗日戦時期の人民戦争	中国研究月報		218	1～26	1966年4月	抗日
寺尾五郎	「日韓新関係」と日本軍国主義の復活	朝鮮研究		49	3～13	1966年4月	日韓関係、日本軍国主義
太田秀通・椽川一郎・長倉保・金原左門(他)	「東アジア歴史像の検討」の前進のために	歴史学研究		311	28～37	1966年4月	東アジア像
浅田喬二	旧植民地・台湾における日本人大地主階級の存在形態	農業総合研究		20(1)	109～169	1966年4月	台湾、日本人
和田春樹	第二次大戦後の東アジア—日本・朝鮮・中国の民衆—	歴史学研究		312	73～79	1966年5月	戦後、東アジア、日本、朝鮮、中国
伊藤武雄・藤井満州男・萩原極(解説)	満鉄1 〈現代史資料31〉		みすず書房			1966年5月	満州鉄道
義井博	第一次世界大戦中の山東および南洋諸島に関する日本の秘密協定についての一考察	軍事史学		6	56～72	1966年8月	第一次世界大戦、山東、南洋諸島、日本
吉岡吉典	日朝連帯の歴史研究によせて(上)	朝鮮研究		53	14～22	1966年8月	日本、朝鮮、歴史研究
八木昇	日中交渉秘史—日中戦争への道		桃源社			1966年8月	日中交渉史、日中戦争
山辺健太郎	日本における朝鮮史研究—その歴史と課題—	思想		507	64～76	1966年9月	日本、朝鮮史研究
吉岡吉典	日朝連帯の歴史研究によせて(下)	朝鮮研究		54	11～21	1966年9月	日韓、歴史研究
曾村保信	日本の近代化と中国の近代化	東洋学術研究		5(6)	102～114	1966年9月	日本、中国、近代化
荒井信一	戦後東アジア史の起点—「連合国」と東アジア—	歴史学研究		316	41～59	1966年9月	戦後、東アジア
緒方貞子	満州事変と政策の形成過程		原書房			1966年9月	満州事変
姜在彦	朝鮮における抗日武装闘争と人民政府路線の確立—朝鮮民主主義人民共和国の歴史的基盤として—	仁井田陸博士追悼論文集編集委員会編『現代アジアの革命と法(仁井田陸博士追悼論文集 第2巻)』	勁草書房		221～241	1966年10月	朝鮮、抗日
植田捷雄	日清戦役をめぐる国際関係	東洋文化研究所紀要		41	1～54	1966年10月	日清戦争
大山梓	日露戦争と安東占領	軍事史学		7	53～66	1966年11月	日露戦争、安東
吉田和起	日本帝国主義の朝鮮併合—国際関係を中心に—	朝鮮史研究会論文集		2	95～104	1966年11月	日本帝国主義、日韓併合
松本信広	日本のアジア研究—東洋学の確立へ—アジアの現実(30)	朝日ジャーナル		8(53)	74～78	1966年12月	日本、アジア研究
伊藤武雄・藤井満州男・萩原極(解説)	満鉄2 〈現代史資料32〉		みすず書房			1966年12月	満州鉄道

石田保昭	東アジアをどう見るか(座談会)	歴史評論		197	1 ~ 21	1967年1月	東アジア
田中正俊	清仏戦争と日本人の中国観	思想		512	14 ~ 34	1967年2月	清仏戦争、日本、中国観
加藤マユミ	「東亜日報」に現われた日本の植民地政策に対する批判	歴史学研究		321	25 ~ 33	1967年2月	日本、植民地政策
山口重次	消えた帝国満州		毎日新聞社			1967年2月	満州国
中野良介	日韓問題の研究—成果と課題—	朝鮮研究		59	7 ~ 11	1967年3月	日韓問題
鈴木隆史	日本帝国主義と満州(中国東北)(二)—満州国の成立およびその統治について—	徳島大学教養学部紀要		2	47 ~ 63	1967年3月	日本帝国主義、満州
中塚明	日本帝国主義とアジア—「明治百年」論批判—	歴史学研究		322	29 ~ 35	1967年3月	日本帝国主義、アジア
東洋史研究論文目録編集委員会(編)	日本における東洋史論文目録(IV)		日本学術振興会			1967年3月	日本、東洋史研究
中塚明	日清戦争	エコノミスト		45(17)	84 ~ 89	1967年4月	日清戦争
さねとうけいしゅう	近代日中交渉史の研究について	東洋文学研究		15	1 ~ 16	1967年4月	近代、日中交渉史
荒井信一	三国干渉—近代日本の争点—47—	エコノミスト		45(18)	80 ~ 85	1967年5月	三国干渉
山崎三雄	朝鮮戦争と日本経済	朝鮮研究		62	6 ~ 16	1967年6月	朝鮮戦争、日本経済
田北亮介	日中戦争とアメリカ極東外交(1)—反日・反ファッショ政策の形成をめぐって—	法学論叢		81(3)	36 ~ 66	1967年6月	日中戦争、アメリカ、極東外交、反日
山辺健太郎	韓国併合	エコノミスト		45(28)	84 ~ 89	1967年7月	日韓併合
藪内吉彦	朝鮮植民地支配と日本郵便機関の役割について(上)	日本史研究		92	52 ~ 65	1967年7月	朝鮮、植民地、日本郵便機関
田北亮介	日中戦争とアメリカ極東外交(2)—反日・反ファッショ政策の形成をめぐって—	法学論叢		81(5)	71 ~ 90	1967年8月	日中戦争、アメリカ、極東外交、反日
吉岡吉典	「朝鮮併合」と日本の世論(上)	朝鮮研究		65	19 ~ 27	1967年9月	日韓併合、日本、世論
藪内吉彦	朝鮮植民地支配と日本郵便機関の役割について(下)	日本史研究		93	50 ~ 59	1967年9月	朝鮮、植民地、日本郵便機関
伊藤武雄・藤井満州男・萩原極(解説)	満鉄3 〈現代史資料33〉		みすず書房			1967年9月	満州鉄道
相原光	東南アジアにおける日本の企業進出(1)	経済と貿易		94	49 ~ 86	1967年10月	東南アジア、日本、企業
嶋本信子	五四運動と日本人—同時代の反応と研究史—	思潮		100	222 ~ 231	1967年10月	五四運動、日本
旗田巍	近代における朝鮮人の日本観—衛生斥邪論を中心に—	思想		520	59 ~ 73	1967年10月	近代、朝鮮、日本観
梶村秀樹	日帝時代(前半期)平壤メリヤス工業の展開過程—植民地経済体制下の朝鮮人ブルジョアジーの対応の一例—	朝鮮史研究会論文集		3	114 ~ 140	1967年10月	日本帝国主義、朝鮮、平壤
安藤久美子	同時代にける日本人の辛亥革命観	思潮		100	231 ~ 236	1967年10月	日本、辛亥革命
梶村秀樹	1930年代満州における抗日闘争にたいする日本帝国主義の諸策動—「在満朝鮮人問題」と関連して—	日本史研究		94	25 ~ 55	1967年11月	日本帝国主義、満州、在日満朝鮮人
遠山茂樹	戦後歴史学と東アジア視点	日本史研究		94	1 ~ 7	1967年11月	戦後歴史学、東アジア
荒井信一	対華21ヶ条要求(利権独占か、機会均等か—中国植民地化の主導権をめざして)—近代日本の争点—76—	エコノミスト		45(50)	84 ~ 89	1967年12月	中国、植民地化
池田佑(編)	大東亜戦史1 太平洋編		富士書苑			1968年	大東亜戦争 中国

池田佑(編)	大東亜戦史2 ビルマ・マレー編		富士書苑			1968年	大東亜戦争 中国
山田昭次	8. 15 をめぐる日本人と朝鮮人の断層	朝鮮研究		69	4～12、23	1968年1月	八・一五、日本、朝鮮
丸山静雄	東南アジアと日本〈アジアを見る眼15〉		アジア経済研究所			1968年1月	東南アジア、日本
相原光	東南アジアにおける日本の企業進出(2)	経済と貿易		95	77～98	1968年2月	東南アジア、日本、企業
相原光	東南アジアにおける日本の企業進出(3)完	経済と貿易		96	99～112	1968年3月	東南アジア、日本
寺延澄子	日本帝国主義下の朝鮮における教育—3.1運動と日本帝国主義の教育政策	寧楽史苑		16	19～42	1968年3月	日本帝国主義 朝鮮 教育
黒羽茂	日英同盟と日本の参戦—グレーと加藤高明—(第一次世界大戦前後(特集))	歴史教育		16(3)	17～23	1968年3月	日英同盟、
浅田喬二	旧植民地日本人大地所有論		農林省農業総合研究所			1968年3月	日本、植民地
中塚明	日清戦争の研究		青木書店			1968年3月	日清戦争
吉岡吉典	「朝鮮併合」と日本の世論(下)	朝鮮研究		72	4～11	1968年4月	日韓併合、日本、世論
畑田重夫・川越敬三	朝鮮問題と日本		新日本出版社			1968年4月	朝鮮問題、日本
安藤実	近代史部会——日本帝国主義と東アジア・日本帝国主義の中国侵略の形態について(「明治百年祭」反対・1968年度[歴史学研究会]大会——帝国主義とわれわれの歴史学・国家と人民(特集))	歴史学研究		336	42～49	1968年5月	日本帝国主義、東アジア
大江志乃夫	近代日本とアジア		三省堂			1968年5月	近代、日本、アジア
筆谷稔・三宅正彦・藤原康晴	アジアの近代化		汐文社			1968年5月	アジア、近代化
中村菊男	東アジアを訪ねて		現代史研究所			1968年6月	東アジア
友邦協会	明治日本の対韓政策〈友邦シリーズ11〉		友邦協会			1968年6月	明治日本 対韓政策
藤井昇三	日中戦争中の和平工作と中国の対応—日中関係史の一側面—	外務省調査月報		9(7)	17～49	1968年7月	日中戦争 和平 日中関係
森田芳夫	戦前における在日朝鮮人の人口統計	朝鮮学報		48	63～77	1968年7月	在日朝鮮人 人口
荒井信一	「明治百年祭」の問題点	日本の科学者		3(1)	27～33	1968年7月	明治百年祭
吉岡吉典	植民地朝鮮における一九一八年—米騒動と朝鮮—	歴史評論		216	35～44	1968年8月	朝鮮、植民地、米騒動
許世楷	台湾統治確立過程における抗日運動(1895-1902)(1)	国家学会雑誌		81(3・4)	45～116	1968年9月	台湾統治 抗日運動
仁井田陸	東洋とは何か		東京大学出版会			1968年9月	東洋
平野健一郎	満州における日本の教育政策—1906～1931年—	アジア研究		15(3)	24～52	1968年10月	満州 教育政策
許世楷	台湾統治確立過程における抗日運動(1895-1902)(2)	国家学会雑誌		81(5・6)	79～127	1968年10月	台湾 抗日運動
入江昭	極東新秩序の模索—近代日本外交史叢書8—		原書房			1968年10月	極東新秩序 近代日本 外交
松尾尊兌	三・一運動と日本プロテスタント	思想		533	45～66	1968年11月	三・一運動 プロテスタント
相田洋	日本の大陸侵略と東洋史学—満蒙史研究を中心に—(明治百年と史学史検討)	思潮		105	26～40	1968年11月	満蒙 大陸侵略
角田玲子	抗日武装闘争をめぐる諸問題—1930年前半の間島—	朝鮮研究		79	7～12	1968年11月	間島 抗日運動

梶村秀樹	日帝時代(後半期)平壤メリヤス工業の展開過程——植民地経済体制下の朝鮮人ブルジョアジーの対応の一例(朝鮮と帝国主義)	朝鮮史研究会論文集		5	145 ~ 168	1968年11月	植民地 朝鮮
寺広映雄	満州における抗日統一戦線の形成について—朝鮮人民の闘いをめぐって—	歴史研究(大阪教育大)		6	23 ~ 46	1968年11月	満州 抗日統一戦線
邵毓麟・本郷賀一(訳)	抗日戦勝利の前後—中国から見た終戦秘話		時事通信社			1968年11月	抗日 終戦
三輪公忠	環太平洋関係史 国際紛争の中の日本(講談社現代新書)		講談社			1968年11月	環太平洋 国際紛争
許世楷	台湾統治確立過程における抗日運動(1895-1902)(3)	国家学会雑誌		81(7・8)	95 ~ 139	1968年12月	台湾 抗日運動
嶋本信子	上海における五四運動(上)—各階級の対応ならびに指導と同盟の関係—	史論		20	1 ~ 32	1968年12月	五・四運動
中村栄孝	日鮮関係史の研究 中		吉川弘文館			1969年	日鮮関係
中塚明	近代日本と朝鮮		三省堂			1969年2月	近代日本 朝鮮
中塚明	朝鮮の民族運動と日本の朝鮮支配	思想		537	32 ~ 46	1969年3月	朝鮮 民族運動
渡部学	三・一運動の思想的位相	思想		537	1 ~ 15	1969年3月	三・一運動
中山一郎	近代中国の対日観(アジア・アフリカ文献解題4)		アジア経済研究所			1969年3月	近代中国 対日観
満州帝国政府(編)	満州建国十年史(明治百年史叢書)		原書房			1969年3月	満州
陸軍省朝鮮憲兵隊司令部(編)	朝鮮三・一独立運動騒擾事件—概況・思想及運動		巖南堂書店			1969年3月	三・一独立運動
尾高煌之助	日本統治下における台湾の労働経済	経済研究		20(2)	128 ~ 139	1969年4月	台湾 労働 日本統治
金井圓	アメリカに於ける日本史研究の現況	日米フォーラム		15(4)	1 ~ 13	1969年4月	アメリカ 日本史研究
田中信一	中共の国連観と日中国交回復	海外事情		17(5)	62 ~ 71	1969年5月	日中国交回復 中国共産党
梅原末治	日韓併合の期間に行なわれた半島の古蹟調査と保存事業にたずさわった—考古学徒の回想録	朝鮮学報		51	95 ~ 148	1969年5月	日韓併合 考古学
中西功	中国革命の嵐の中で(4)—日中戦争(7・7)のはじまるまで	歴史評論		225	80 ~ 95	1969年5月	中国革命 日中戦争
丸山松幸	五四運動(紀伊国屋新書)		紀伊国屋書店			1969年6月	五・四運動
岩波徹	日本の韓国併合—英国の外交文書に基づいて	歴史教育(大阪教育大)		17(3)	85 ~ 90	1969年7月	韓国併合 外交文書
白井勝美(編)	日中戦争5(現代史資料)		みすず書房			1969年7月	日中戦争
中西功	中国革命の嵐の中で(5)—一七・七前後の華北	歴史評論		227	80 ~ 94	1969年7月	中国革命 日中戦争
関東憲兵隊司令部(編)	在満日系共産主義運動(満州共産主義運動叢書3)		極東研究所出版会			1969年8月	満州 日系 共産主義
飯塚浩二	増補 アジアの中の日本		中央公論社			1969年9月	アジア 日本
今井武夫	満州事変激発に対する一考察	季刊東亜		108	73 ~ 85	1969年9月	満州事変
佐藤徳太郎	明治時代の兵制に及ぼした外国軍事思想の影響—徴兵制、軍紀および用兵思想について	防衛大学紀要人文・社会科学編		19	637 ~ 707	1969年9月	明治 兵制
松永秀夫	南海の「日本人一人」	海事史研究		13	61 ~ 65	1969年10月	南海 日本
樋口雄一	日本独占資本の対韓経済進出と南朝鮮人民の闘争	朝鮮研究		89	16 ~ 27	1969年10月	日本 資本 韓国 南朝鮮
井上秀雄編	セミナー日朝関係史		桜楓社			1969年10月	日朝関係

梨本祐平	中国のなかの日本人		同成社			1969年10月	中国 日本人
外務省条約局法規課	日本統治下の樺太〈外地法制史7〉		外務省			1969年11月	樺太
山口弥一郎	東南アジアの民族・文化の複合性と朝鮮・日本文化伝承の地理学的対比論	亜細亜大学教養学部紀要		4	97 ~ 119	1969年11月	東南アジア 民族
伊藤昭雄	五・四運動の思想史的意義—丸山松幸著『五・四運動』をめぐって—	歴史学研究		355	37 ~ 45	1969年12月	五・四運動
嶋本信子	五・四運動の継承形態—湖南の駆張運動を中心に—	歴史学研究		355	16 ~ 36	1969年12月	五・四運動 湖南
中村栄孝	日鮮関係史の研究 下		吉川弘文館			1969年12月	日鮮関係
南満州鉄道株式会社	北京満鉄月報						満鉄
南満州鉄道株式会社	満鉄第三次十年史						満鉄
南満州鉄道株式会社	満鉄経営営業報告書・株主姓名表						満鉄

〈1970年代〉

著者	タイトル	雑誌名	本の場合の出版社 (発行所)	巻・号	ページ	年月	キーワード
池田佑(編)	大東亜戦史5 中国編		富士書苑			1970年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史10 東京裁判編		富士書苑			1970年	大東亜戦争 中国
池井優	山東問題・五四運動をめぐる日 中関係	法学研究		43(1)	215～234	1970年1月	山東問題 五・四 運動
荒川久寿男	明治開化期の史学とフランス史 学	歴史教育		18(1)	16～21	1970年1月	明治 史学
中西功	中国革命の嵐の中で(9) —上海 の日本人の革命的組織の歴史—	歴史評論		233	98～117	1970年1月	中国革命 上海
山田一哉	70年代日中関係における台湾の 位置—日台関係の現状と国府体 制	中国研究月報		265	1～19	1970年3月	日中間系 台湾
川田俊昭	アジアに関わる研究、一体系— K・A・ウィットフォーゲル の場合—	東南アジア研究年報 (長崎大学)		11	127～150	1970年3月	アジア研究
ジームス、J・ 本間英世(訳)	日本国家の近代化とロエスラー		未来社			1970年3月	日本 近代化 ロエスラー
何応欽	世界革命と日本—中日関係講演 集—		時事通信社			1970年3月	世界革命 中日関 係
蠟山道雄(編)	日本と核時代1 核時代と国際 政治 (朝日市民教室)		朝日新聞社			1970年3月	日本 核
朴慶植	三・一独立運動の歴史的前提— 主体的条件の把握のために—	思想		550	37～55	1970年4月	三・一独立運動
鈴木隆史	総力戦体制と植民地支配—「満 州」の場合—	日本史研究		111	91～105	1970年4月	総力戦体制 植民 地 満州
西尾陽太郎	玄洋社の大陸政策	歴史教育		18(4)	66～72	1970年4月	玄洋社
外務省アジア局 中国課(監修)	日中関係基本資料 1949-69年		霞山会			1970年4月	日中関係
コンテ・山折哲 雄(訳)	日本占領下の朝鮮 1875～ 1945		太平出版社			1970年4月	日本統治 朝鮮
黄昭堂	日本の台湾接収と対外措置(1)	国際法外交雑誌		69(1)	63～93	1970年5月	台湾接収
梶村秀樹・姜徳 相	日帝下朝鮮の法律制度について	仁井田陞博士追悼 論文集編集委員会 編『日本法とアジア (仁井田陞博士追悼 論文集 第3巻)』	勁草書房		319～337	1970年5月	朝鮮 法律
利谷信義	「東亜新秩序」と「大アジア主義」 の交錯—汪政権の成立とその思 想的背景—				99～132	1970年5月	東亜新秩序 大ア ジア主義
光岡玄	中国の日本軍国主義論—その視 点とそれがえがく“立体像”につ いて—	中国研究月報		268	1～18	1970年6月	日本軍国主義
松村高夫	日本帝国主義下における「満州」 への朝鮮人移動について	三田学会雑誌		63(6)	61～87	1970年6月	日本帝国主義 満 州
山名正孝	〈資料〉中国のみた日本軍国主義 にかんする資料(1)	アジア経済旬報		794	12～29	1970年6月	日本軍国主義
山名正孝	〈資料〉中国のみた日本軍国主義 にかんする資料(2)	アジア経済旬報		795	16～25	1970年6月	日本軍国主義
山田一哉	戦後日台関係—その問題状況—	アジア経済旬報		798	1～11	1970年7月	日台関係
黄昭堂	日本の台湾接収と対外措置 (2・完)	国際法外交雑誌		69(2)	76～99	1970年7月	台湾接収
金原左門	J. W. ホールの「日本近代 化」分析方法の提案をめぐつ て(上) —“Reflections on a Centennial” —	日本歴史		266	97～110	1970年7月	日本 近代化
横山英	五・四運動の思想とその継承に ついて	歴史学研究		362	41～48	1970年7月	五・四運動

鹿島守之助	支那における列強の角逐（日本外交史5）		鹿島研究所出版会			1970年7月	中国分裂
山名正孝	〈資料〉中国のみた日本軍国主義にかんする資料(3)	アジア経済旬報		796	21～25	1970年7月	日本軍国主義
山名正孝	〈資料〉中国のみた日本軍国主義にかんする資料(4)	アジア経済旬報		798	22～28	1970年7月	日本軍国主義
江口朴郎	世界史の新段階とアジアの民族運動（第一次世界大戦直後のアジアの民族運動・1）	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代2：第一次世界大戦直後』	岩波書店	25	291～309	1970年8月	アジア 民族運動
姜徳相	日本の朝鮮支配と三・一独立運動	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代2：第一次世界大戦直後』	岩波書店	25	310～345	1970年8月	三・一独立運動
小野信爾	五・四運動と民族革命運動	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代2：第一次世界大戦直後』	岩波書店	25	346～402	1970年8月	五・四運動
関寛治・藤井昇三	日本帝国主義と東アジア	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代2：第一次世界大戦直後』	岩波書店	25	517～564	1970年8月	日本 帝国主義 東アジア
木野順三	日「韓」経済協力—新植民地主義の実態—	中国研究月報		270	1～17	1970年8月	日韓 植民地
金原左門	J. W. ホールの「日本近代化」分析方法の提案をめぐって（下）—“Reflections on a Centennial” —	日本歴史		267	62～74	1970年8月	日本 近代化
鎌田正二	北鮮の日本人苦難記—日室興南工場の最後—		時事通信社			1970年8月	日室興南工場
小林文男	日本統治下台湾におけるナショナルな思考—「中国改造論争」の意味と周辺—（1）	アジア経済		11(9)	40～51	1970年9月	日本統治 台湾 ナショナル
堀敏一	東アジア世界の形成2 総説	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：古代5：東アジア世界の形成2』	岩波書店	5	3～22	1970年9月	東アジア
石川忠雄・中嶋嶺雄・池井優（編）	戦後資料日中関係		日本評論社			1970年9月	日中関係 資料
福富正実	アジア的生産様式の再検討	現代の眼		11(10)	56～65	1970年10月	アジア的生産様式
朴慶植	三・一独立運動研究の諸問題—民族主義者の評価について—	思想		556	66～85	1970年10月	三・一独立運動 民族主義
田中正俊	世界市場の形成と東アジア	歴史学研究会、日本史研究会編『講座日本史』	東京大学出版会	5	23～52	1970年11月	世界市場 東アジア
塩沢君夫	アジア的生産様式論		御茶の水書房			1970年11月	アジア的生産様式
山辺健太郎	日本の韓国併合		太平出版社			1970年11月	韓国併合
中村義・倉橋正直	帝国主義世界の成立と東アジア	歴史学研究会、日本史研究会編『講座日本史』	東京大学出版会	6	63～94	1970年12月	帝国主義 東アジア
姫田光義	満州事変と中国共産党	国際政治		43	119～135	1970年12月	満州事変 中国共産党
平野健一郎	満州事変前における在満日本人の動向—満州国性格形成の要因—	国際政治		43	51～76	1970年12月	満州事変 在満日本人
嶋本信子	上海における五四運動（下）—各階級の対応ならびに指導と同盟の関係—	史論		21・22	25～40	1970年12月	上海 五・四運動
宮本英三郎	日独労働運動の史的展望と異質性	横浜商大論集		4(1)	33～49	1970年12月	日独 労働

池田佑(編)	大東亜戦史3 フィリピン編		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史4 蘭印編		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史6 満洲編上		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史7 満洲編下		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史8 朝鮮編		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
池田佑(編)	大東亜戦史9 国内編		富士書苑			1971年	大東亜戦争 中国
金原左門	東アジア問題とアメリカのアジア研究者—CCASを中心に	歴史学研究		368	46～61	1971年1月	東アジア アメリカ
山辺健太郎	日本統治下の朝鮮		岩波書店			1971年1月	日本統治 朝鮮
小林文男	日本統治下台湾におけるナショナルな思考—「中国改造論争」の意味と周辺—(2)	アジア経済		12(2)	14～30	1971年2月	台湾 ナショナル
田村実造	日本文化の醗酵と中国文化—「東アジア世界の形成」に関連して—	史窓		29	1～22	1971年3月	日本文化 中国文化 東アジア
梶井義雄	三井物産における山本条太郎と森恪—その中国での活動を中心に—	社会科学年報		5	105～136	1971年3月	三井物産 山本条太郎 森恪
彭澤周	日中両国の初期民権思想と進化論	史林		54(2)	1～27	1971年3月	日中 民権思想
浅田喬二	大正末期—昭和十年代初期—朝鮮における抗日農民運動の地域的特徴(1920-1939年)—統計的分析を中心として—	朝鮮史研究会論文集		8	68～98	1971年3月	抗日 農民運動
窪徳忠	沖縄の習俗と信仰：中国との比較研究		東大出版会			1971年3月	沖縄 中国
今堀誠二	日中戦争の段階における国共両政権のナショナリズムについて	史学研究		110	1～20	1971年4月	日中戦争 ナショナリズム
徳毛和子	五四運動と上海労働者	史学研究		110	21～37	1971年4月	五・四運動 労働者
許世楷	日本統治下台湾における近代政治運動—1913～1937年—(上)	津田塾大学紀要		3	1～37	1971年4月	台湾 近代 政治運動
胡慶鈞・楊樹標・鍵本一美・吉田令子(訳)	五四運動史研究における主要な論争点	史学研究		111	88～94	1971年6月	五・四運動
今井駿	抗日根拠地の形成過程についての一考察—冀南根拠地を中心に—	史潮		108	22～60	1971年6月	抗日 冀南
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(1)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		1	195～217	1971年6月	抗日 ソ連
古厩忠夫	戦後におけるアジア史研究総括のために	歴史評論		250	72～85	1971年6月	アジア研究
細谷千博他訳	陸海軍と経済官僚〈日米関係史2〉		東京大学出版会			1971年6月	日米関係
谷川栄彦	東南アジアにおける民族運動(1930年代の民族運動)	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代5：1930年代』	岩波書店	28	353～380	1971年7月	東アジア 民族運動
野沢豊	中国の抗日民族統一戦線	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代5：1930年代』	岩波書店	28	305～338	1971年7月	中国 抗日民族統一戦線
福田茂夫	太平洋戦争の開始—アメリカの対日政策を中心に—	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代5：1930年代』	岩波書店	28	494～526	1971年7月	太平洋戦争 アメリカ
藤原彰	日本ファシズムと日中戦争	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代5：1930年代』	岩波書店	28	273～304	1971年7月	日本 ファシズム 日中戦争

阿部洋	日本統治下朝鮮の高等教育—京城帝国大学と国立大学設立運動をめぐって—	思想		565	56～77	1971年7月	朝鮮 高等教育 京城帝国大学
戴国輝	日本人との対話 日本・中国台湾・アジア		社会思想社			1971年8月	日本 中国 台湾
吉沢南	日本＝フランス支配下のベトナムにおける民族統一戦線運動史(1)	アジア・アフリカ研究		11(8)	7～29	1971年8月	日本 フランス ベトナム 民族統一戦線
今堀誠二	抗日戦争期における辺区の動向と現実 —労働英雄の記録の分析—	アジア経済		12(8)	2～27	1971年8月	抗日 労働
佐伯有一	アジアにおける近代	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：近代8：近代世界の展開5』	岩波書店	21	3～17	1971年8月	アジア 近代
東京歴史科学研究会アジア史部会報告者集団	東アジア現代における帝国主義と人民闘争	歴史評論		253	39～61	1971年8月	東アジア 帝国主義
古島和雄	東アジアにおける民族革命運動	岩波講座世界歴史編集委員会編『岩波講座世界歴史：現代6：第二次世界大戦』	岩波書店	29	61～103	1971年9月	東アジア 民族革命運動
ロコバント(エルンスト), ロコバント(ヤスコ)(訳)	ドイツにおける日本研究	国史学		85	50～69	1971年9月	ドイツ 日本研究
松村高夫	日本帝国主義下における「満州」への朝鮮人移動について—「満州国」成立以降における対満中国人移動政策史—	三田学会雑誌		64(9)	39～51	1971年9月	日本帝国主義 満州
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(2)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		2	187～207	1971年9月	抗日 ソ連
吉沢南	日本＝フランス支配下のベトナムにおける民族統一戦線運動史(2)	アジア・アフリカ研究		11(10)	23～47	1971年10月	日本 フランス ベトナム 民族統一戦線
伊藤成彦	日本社会主義運動とローザ・ルクセンブルク	思想		568	39～55	1971年10月	日本 社会主義 ローザ・ルクセンブルク
安井三吉	中国抗日民族統一戦線の展開過程—晋察冀辺区の形成・発展—	歴史学研究		別冊	152～165	1971年10月	抗日民族統一戦線 晋察冀辺区
吉沢南	日本＝フランス支配下のベトナムにおける民族統一戦線運動史(3)	アジア・アフリカ研究		11(11)	27～52	1971年11月	日本 フランス ベトナム 民族統一戦線
安東義良	第二次世界大戦後の大東亜新秩序(前編)	拓殖大学論集		80	1～33	1971年11月	大東亜新秩序
石島紀之	抗日民族統一戦線と知識人—「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐって—(前篇)	歴史評論		256	22～50	1971年11月	抗日統一戦線 満州事変 鄒韜奮
テーケイ・羽仁協子(訳)	アジアの生産様式		未来社			1971年11月	アジアの生産様式
歴史学研究会(編)	太平洋戦争史1 満州事変：1905-1932		青木書店			1971年11月	太平洋戦争 日中戦争
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(3)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		3	191～214	1971年12月	抗日 ソ連
東京歴史科学研究会アジア史部会報告者集団	1930年代東アジアにおける統一戦線の形成	歴史評論		257	64～92	1971年12月	東アジア 統一戦線
満州史研究会(編)	日本帝国主義下の満州—「満州国」成立前後の経済研究—		御茶の水書房			1972年1月	日本帝国主義 満州
歴史学研究会(編)	太平洋戦争史2 日中戦争		青木書店			1972年1月	太平洋戦争 日中戦争
泉武夫	日本紡績資本の中国市場進出に関する一考察—1920年前後のいわゆる「在華紡」について—	専修経済学論集		7(1)	43～124	1972年2月	日本 紡績 中国 在華紡
家坂和之	日本人から見たマレーシア マレーシアから見た日本	文化(東北大学)		35(3)	1～44	1972年2月	日本 マレーシア

石島紀之	抗日民族統一戦線と知識人— 「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる—(後篇)	歴史評論		259	81 ~ 92	1972年 2月	抗日統一戦線 満州事変 鄒韜奮
桜井浩	日本植民地下朝鮮農業の封建制論について	アジア経済		13(3)	46 ~ 56	1972年 3月	日本 植民地 朝鮮 農業
飯沼二郎	3・1万歳事件と日本組合教会	人文学報(京大人文学研究所)		34	86 ~ 144	1972年 3月	三・一万歳事件 日本組合
吉沢南	日本=フランス支配下のベトナム経済と階級関係の変動—ベトナム独立同盟(ベトミン)の形成・発展の背景—	人文学報(都立大)		89	263 ~ 308	1972年 3月	日本 フランス ヴェトナム
黄福慶	清末における留日学生の特質と派遣政策の問題点	東洋学報		54(4)	33 ~ 57	1972年 3月	清 留日学生
北山康夫	抗日軍政大学について	東洋史研究		30(4)	93 ~ 121	1972年 3月	抗日 軍制大学
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(4)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		4	199 ~ 228	1972年 3月	抗日 ソ連
西尾陽太郎	日韓合邦運動と孫秉熙	九州史学		48	17 ~ 27	1972年 4月	日韓合邦 孫秉熙
平岡正明	日本人は中国で何をしたか 中国大量虐殺の記録		潮出版社			1972年 4月	中国 日本 大量 虐殺
山本登	南北問題の進展とアジアの地域主義	三田学会雑誌		65(5)	1 ~ 13	1972年 5月	南北問題 アジア 地域主義
歴史学研究会(編)	太平洋戦争史3 日中戦争		青木書店			1972年 5月	太平洋戦争 日中戦争
沢田勲	日本における「アジア的生産様式」論争の展開(1)—戦前における論争	金沢経済大学論集		6(1)	77 ~ 101	1972年 6月	日本 アジア的 生産様式
涂照彦	日本統治下における台湾植民地経済—研究蓄積の再検討にあたって—	思想		576	1 ~ 25	1972年 6月	日本統治 台湾
清水良三	日独伊三国同盟についての若干の考察	政経論叢(国士舘大)		16	99 ~ 119	1972年 6月	日独伊三国軍事同盟
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(5)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		5	177 ~ 193	1972年 6月	抗日 ソ連
里井彦七郎	近代中国における民衆運動とその思想		東京大学出版会			1972年 6月	近代 中国 民衆 運動
黄福慶	清末における留日学生派遣政策の成立とその展開	史学雑誌		81(7)	37 ~ 65	1972年 7月	清 留日学生
依田憲家	第二次大戦下、日本の満州移民の実態—移民団関係の犯罪を中心に—	社会科学討究		18(1)	41 ~ 78	1972年 7月	満州 移民
歴史学研究会(編)	太平洋戦争史4 太平洋戦争		青木書店			1972年 7月	太平洋戦争 日中戦争
大畑篤四郎	日本の近代化と韓国—外交史の視角から—	韓(韓国研究院)		1(8)	95 ~ 104	1972年 8月	日本 近代化 韓国
松沢哲成	「満州国」の形成—日中関係史の一断面—	社会科学研究所(東大社会科学研究所)		24(1)	131 ~ 150	1972年 8月	満州国
林直道	アジア的生産様式概念について(上)	歴史評論		266	60 ~ 71	1972年 8月	アジア的 生産様式
以羣選	南京的虐殺 抗戦以来報告選集(民国35年上海作家書屋刊の複製)		龍溪書舎			1972年 8月	南京 虐殺
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(6)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		6	167 ~ 201	1972年 9月	抗日 ソ連
臼井勝美	日本と中国 大正時代〈近代日本外交史叢書〉		原書房			1972年 9月	日本 中国 大正 時代 外交
本多勝一	中国の日本軍		創樹社			1972年 9月	中国 日本軍
林直道	アジア的生産様式概念について(下)	歴史評論		268	17 ~ 30	1972年 10月	アジア的 生産様式
江良弘	「満州事変」と中国民衆の抵抗—反満抗日統一戦線の民衆的基礎—	〈季刊〉現代史		1	28 ~ 45	1972年 11月	満州事変 抗日統一戦線

虎口余生・竹内実訳	日軍侵襲東北記（1931年11月）	〈季刊〉現代史		1	128～143	1972年11月	日軍
中塚明	朝鮮支配の矛盾と「満州事変」	〈季刊〉現代史		1	20～27	1972年11月	朝鮮支配 満州事変
渡辺和男	日本の満蒙併呑秘密計画 1930年12月7日満蒙鉄道問題を議した拓務省会議の報告と議決（資料）	〈季刊〉現代史		1	158～169	1972年11月	日本 満蒙鉄道
安東義良	第二次世界大戦後の大東亜新秩序（後編）	拓殖大学論集		87	1～28	1972年11月	第二次世界大戦 大東亜新秩序
吉村武彦	「アジア的生産様式」とその社会構成—塩沢君夫『アジア的生産様式論』に寄せて—	歴史学研究		390	46～51	1972年11月	アジア的生産様式
西秀成	中国における日本軍国主義の残虐事件をめぐる二・三の著作について	歴史評論		269	118～123	1972年11月	中国 日本軍国主義
野沢豊	日中戦争のなかの難民問題	歴史評論		269	49～58	1972年11月	日中戦争 難民
安井三吉	抗戦初期華北の抗日民族統一戦線—晋察冀辺区軍政民代表大会をめぐる—	歴史評論		269	59～79	1972年11月	抗日民族統一戦線 晋察冀辺区
入江昭	日中関係と英米の「見えざる」協調	国際政治		47	17～32	1972年12月	日中関係 英米
市川健二郎	日中戦争と東南アジア華僑	国際政治		47	75～87	1972年12月	日中戦争 東南アジア 華僑
具島兼三郎	日中戦争とイギリス	国際政治		47	1～16	1972年12月	日中戦争 イギリス
平野武	日本統治下の朝鮮の法的地位	阪大法学		83	33～82	1972年12月	日本統治 朝鮮法
山根幸夫	外国史研究に関する意見—東アジア史への私の歩み	歴史評論		270	80～82	1972年12月	東アジア
稲葉継雄	日本統治時代末期の朝鮮教育における民族主義	韓（韓国研究院）		2(8)	77～99	1973年	日本統治 朝鮮教育 民族主義
小松良郎	十五年戦争を考える：歴史認識の問題点1	歴史地理教育		219	4～15	1973年	帝国主義
朝鮮文化社	日本文化と朝鮮 1		新人物往来社			1973年	朝鮮
朝鮮文化社	日本文化と朝鮮 2		新人物往来社			1973年	朝鮮
朝鮮文化社	日本文化と朝鮮 3		新人物往来社			1973年	朝鮮
歴史学研究会編	太平洋戦争史5 太平洋戦争		青木書店			1973年3月	太平洋戦争 日中戦争
山本有造	日本の植民地投資—朝鮮・台湾に関する統計的観察—	社会経済史学		38(5)	80～97	1973年1月	日本 植民地 朝鮮 台湾
飯田鼎	1905年のロシア革命と日本の社会主義—ヨーロッパ労働運動の日本の社会主義への影響—	三田学会雑誌		66(1)	1～19	1973年1月	ロシア革命 日本社会主義 ヨーロッパ労働運動
吉沢南	日本＝フランス支配時期のベトナム知識人—『タインギ』誌同人の動向を中心に—	歴史評論		272	53～76	1973年1月	日本 フランス ベトナム
増田与	インドネシアの近代化と日本	社会科学討究(早大)		18(2)	121～179	1973年2月	インドネシア 近代化 日本
中川信夫	日本軍国主義と朝鮮		田畑書店			1973年2月	日本軍国主義 朝鮮
平岡正明編	中国人は日本で何をされたか—中国人強制連行の記録—		潮出版社			1973年3月	中国 強制連行
竹之内安巳	日本における中国革命運動	鹿児島短期大学研究紀要		11	1～12	1973年3月	日本 中国革命運動
金竜徳、渡部学(訳)	三一運動と国際環境	韓（韓国研究院）		2(3)	3～41	1973年3月	三・一独立運動
鄭世鉉、阿部洋(訳)	日帝下の婦女運動小考—民族運動との関連を中心に—	韓（韓国研究院）		2(3)	46～76	1973年3月	婦女運動 民族運動
高橋茂夫	明治三十三年厦門事件の一考察—山本海軍大臣の態度を中心として—	軍事史学		8(4)	33～44	1973年3月	厦門事件 山本五十六

井上学	日本帝国主義と間島問題	朝鮮史研究会論文集		10	35～83	1973年3月	日本帝国主義 東アジア 間島問題
桜井浩	「日韓体制」下の「財閥」形成—「新進財閥」の場合—	朝鮮史研究会論文集		10	84～109	1973年3月	日韓体制 財閥
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(7)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		8	165～194	1973年3月	抗日 ソ連
市川泰治郎	福田徳三博士と「アジア的生産様式」	海外事情		24(4)	33～40	1973年4月	アジア的生産様式
古厩忠夫	中国における初期労働運動の性格(上)—五・四運動期の湖南省を中心に—	歴史評論		275	20～31	1973年4月	中国 労働運動 五・四運動
平田清明ほか	(シンポジウム)「アジア的生産様式論」をめぐって(Ⅰ)	アジア経済		14(5)	2～32	1973年5月	アジア的生産様式
金敏洙	日帝の対韓侵略と言語政策	韓(韓国研究院)		2(5)	81～102	1973年5月	日帝 言語政策
林鳳	「戦後」朝日関係史(7)	朝鮮研究		126	30～43	1973年5月	日朝関係
溝口敏行	日本統治下における台湾および朝鮮の貿易物価指数の推計	一橋論叢		69(5)	17～28	1973年5月	日本統治 台湾 朝鮮 貿易
古厩忠夫	中国における初期労働運動の性格(下)—五・四運動期の湖南省を中心に—	歴史評論		276	63～76	1973年5月	中国 労働運動 五・四運動
平田清明ほか	(シンポジウム)「アジア的生産様式論」をめぐって(Ⅱ)	アジア経済		14(6)	2～34	1973年6月	アジア的生産様式
宇多正	日本資本主義の満州経営—南満州鉄道株式会社の役割を中心に—	社会経済史学		39(2)	1～27	1973年6月	日本 資本主義 南満州鉄道
竹之内安巳	五四学生運動の史的展望	地域研究		3(1)	13～21	1973年6月	五・四運動 学生
溝口敏行	日本統治下における台湾・朝鮮の貿易物価の分析	一橋論叢		69(6)	1～13	1973年6月	日本統治 台湾 朝鮮 貿易
朴慶植	日本帝国主義の朝鮮支配 上		青木書店			1973年6月	日本帝国主義 朝鮮
朴慶植	日本帝国主義の朝鮮支配 下		青木書店			1973年6月	日本帝国主義 朝鮮
実藤恵秀	近代日中交渉史話		春秋社			1973年7月	近代 日中交渉
林鳳	「戦後」朝日関係史(8)	朝鮮研究		128	50～67	1973年7月	日朝関係
平田清明ほか	(シンポジウム)「アジア的生産様式論」をめぐって(Ⅰ)(Ⅱ)	アジア経済		14(8)	2～50	1973年8月	アジア的生産様式
小野和子	五・四運動期の婦人解放思想—家族制度イデオロギーとの対決—	思想		590	103～120	1973年8月	五・四運動 婦人解放 家族制度
ア・カリヤギン、中山一郎(訳)	抗日の中国にて(8)—中国の対日戦争を助けたソ連技術将校の回想録	ユーラシア		9	160～180	1973年8月	抗日 ソ連
田所恭介他	東アジアを考える(座談会)	歴史地理教育		214	26～41	1973年8月	東アジア
山根幸夫	五四運動文献目録	史論		26・27	94-107	1973年9月	帝国主義
林鳳	「戦後」朝日関係史(9)	朝鮮研究		130	48～61	1973年10月	日朝関係
洞富雄	日中戦争史資料8：南京事件Ⅰ		河出書房新社			1973年11月	帝国主義
歴史学研究会(編)	太平洋戦争史6 サンフランシスコ講和：1945-1952		青木書店			1973年11月	太平洋戦争 日中戦争
洞富雄	日中戦争史資料9：南京事件Ⅱ		河出書房新社			1973年11月	帝国主義
林鳳	「戦後」朝日関係史(10)	朝鮮研究		131	34-51	1973年12月	日朝関係
安秉珪	朝鮮の経済的開化運動と日本帝国主義形成の一特質：朝鮮の官僚・商人と政商ブルジョア・居留日本商人の活動を中心に	龍谷大学経済学論集		13(3)	52-109	1973年12月	帝国主義

藤村道生	日清戦争：東アジア近代史の転換点		岩波書店			1973年12月	帝国主義、アジア
朴春錫	日本文化と東アジア：李朝と江戸時代を中心に	学術論文集（朝鮮奨学会）		4	5～12	1974年	東南アジア
方用賢	わが国における日本の植民地教育政策について：第一次朝鮮教育令と寺内総督を中心に	学術論文集（朝鮮奨学会）		4	43-51	1974年	帝国主義
阿部洋	旧韓末の日本留学（Ⅰ）：資料的考察	韓（韓国研究院）		3	63～83	1974年	日韓関係
阿部洋	旧韓末の日本留学（Ⅱ）：資料的考察	韓（韓国研究院）		4	95-116	1974年	日韓関係
阿部洋	旧韓末の日本留学（Ⅲ）：資料的考察	韓（韓国研究院）		5・6・7	103-127	1974年	日韓関係
大畑篤四郎	『日本外交文書』日韓関係文書（一）	韓（韓国研究院）		3(3)	123-41	1974年	日韓関係
朴来鳳	日本統治下書堂教育の具体相（Ⅱ）：全羅北道を中心に	韓（韓国研究院）		3(12)	27-80	1974年	帝国主義
羅賓燕	新四軍は日本兵捕虜をどう扱ったか	季刊現代史		4	80-85	1974年	帝国主義
山村暁夫	日本帝国主義成立期における植民地政策の展開：朝鮮鉄道建設との関連で	商経論集（早大）		26	187-203	1974年	帝国主義
依田憲家	日本帝国主義における「満州」：資源問題と産業計画	人文社会科学研究（早大）		10	33-64	1974年	帝国主義
浅田喬二	1920年代台湾における抗日民族運動の展開過程：「台湾文化協会」の活動を中心にして	歴史学研究		414	3～18	1974年	帝国主義
小松良郎	十五年戦争を考える：歴史認識の問題点2	歴史地理教育		220	78-85	1974年	帝国主義
小松良郎	十五年戦争を考える：歴史認識の問題点3	歴史地理教育		221	44-50	1974年	帝国主義
岡野加穂留	光の国とやみの国：北欧、日本、東南アジアの比較政治		経済往来社			1974年	東南アジア
佐藤三郎	中国を歩き日本を考える		筑摩書房			1974年	日中関係
渋沢雅英・斎藤志郎	東南アジアの日本批判		サイマル出版会			1974年	東南アジア
竹内好・橋川文三	近代日本と中国（上）		朝日新聞社			1974年	近代、日中関係
竹内好・橋川文三	近代日本と中国（下）		朝日新聞社			1974年	近代、日中関係
鄭敬護	日本人と韓国		新人物往来社			1974年	日韓関係
林鳳	「戦後」朝日関係史(11)	朝鮮研究		132	50-64	1974年1月	日韓関係
石原道博	黄遵憲の日本国志と日本雑事詩（上）：清代の日本研究・第三部	紀要（茨城大・人文・文学科論集）		7	51-80	1974年2月	日中関係
中塚明	日本近代史の展開と「朝鮮史像」：とくに参謀本部と歴史研究のかかわりについて	朝鮮史研究会論文集		11	137-54	1974年3月	近代
多胡圭一	日本による朝鮮植民地化過程についての一考察（一）：1904～1910年における	阪大法学		90	39-68	1974年3月	帝国主義
岡田西次	日中戦争裏方記		東洋経済新報社			1974年3月	帝国主義
岡部達味	中華人民共和国の対日政策（1）：「軍国主義」非難から国交正常化まで	アジア研究		21(1)	1-67	1974年4月	帝国主義
吉田宗茂	近代における日本人の対鮮連帯意識の限界と優越感の成立	社会文化史学		10	20-34	1974年4月	近代
中村菊男	日本の政治と中国の政治：政治文化の視角からの比較	法学研究（慶応大）		47(4)	1～21	1974年4月	日中関係
中村尚美	19世紀末の極東情勢と日清戦争	歴史評論		288	1～16	1974年4月	帝国主義
高峻石	戦後朝・日関係史		田畑書店			1974年4月	日朝関係

平田賢一	「朝鮮併合」と日本の世論	史林		57(3)	103～23	1974年5月	帝国主義
小島晋治・伊東昭雄・光岡玄	中国人の日本人観100年史		自由国民社			1974年6月	日中関係
中塚明	近代における日朝両国研究の課題：藤村道生『日清戦争』の書評をかねて	史学研究(広大)		123	61-70	1974年8月	近代、日朝関係
中下正治	日本人経営新聞小史	現代中国		11	22-37	1974年9月	日中関係
岡部達味	中華人民共和国の対日政策(1)：「軍国主義」非難から国交正常化まで	アジア研究		21(3)	27～84	1974年10月	日中関係
三木亘	19世紀の日本、エジプトにおける郷紳：豪農とA'yanの比較研究	アジア・アフリカ言語文化研究		9	25-40	1974年11月	日本、エジプト、比較研究
池井優	戦後日中関係の一考察：石橋・岸内閣時代を中心として	国際法外交雑誌		73(3)	44～87	1974年11月	日中関係
白井勝美	満州事変		中央公論社			1974年11月	帝国主義
遠藤三郎	日中十五年戦争と私		日中書林			1974年11月	帝国主義
吉野裕子	伊勢神宮考：日本に生きる中国の哲理	民族学研究		39(3)	209-32	1974年12月	日中関係
竹内好・野村浩一・大塚久雄・武田清子	シンポジウム・歴史的に見た中国と日本人	アジア文化研究		8	57-75	1975年	日中関係
判沢弘・安宇植・菊池昌典	座談会：近代日本とアジア	伝統と現代		32	26～50	1975年	近代、アジア
三枝充恵・今井淳	東洋文化と日本		ぺりかん社			1975年	東アジア
矢野暢	日本の「南進」と東南アジア		日本経済新聞社			1975年	帝国主義、東南アジア
立田三也	日中経済成長過程の対比	東洋研究		39	107-36	1975年1月	日中関係
服部民夫	日本・朝鮮における同族概念の比較試論：養子と相続を中心として	アジア経済		16(2)	60-72	1975年2月	日朝関係
佐藤三郎	日本人が中国を「支那」と呼んだことについての考察：近代日中交渉史上の一齣として	紀要(山形大)		8(2)	1-41	1975年2月	帝国主義
藤井隆至	柳田国男のアジア意識	アジア経済		16(3)	68～77	1975年3月	アジア
石原道博	黄遵憲の日本国志と日本雑事詩(中)：清代の日本研究・第四部	紀要(茨城大・人文・文学科論集)		8	1～26	1975年3月	日中関係
駒井洋	日本人のアジア観：東洋大学社会学部1974年度調査報告	紀要(東洋大・社会)		11・12	173-88	1975年3月	アジア
大畑篤四郎	日本帝国主義とアジア	社会科学討究(早大)		20(2・3)	353～371	1975年3月	帝国主義、アジア
河原宏	日本人のアジア観：大東亜共栄圏の思想と政策	社会科学討究(早大)		20(2・3)	245～266	1975年3月	帝国主義、アジア
後藤乾一	日本人のインドネシア観：市木龍夫論序説	社会科学討究(早大)		20(2・3)	267～298	1975年3月	東南アジア
中村尚美	日本の近代化とアジア	社会科学討究(早大)		20(2・3)	337～351	1975年3月	近代、アジア
藤井昇三	中国人の日本観：第一次大戦直後から幣原外交まで	社会科学討究(早大)		20(2・3)	5～42	1975年3月	日本観
増田与	インドネシア人の日本観：ジョセフ・ハッサン論序説	社会科学討究(早大)		20(2・3)	97-133	1975年3月	日本観
馬淵貞利	第一次大戦期朝鮮農業の特質と三・一運動—農民的商品生産と植民地型地主制	朝鮮史研究会論文集		12	129-73	1975年3月	帝国主義
明石岩雄	第一次世界大戦後の中国問題と日本帝国主義	日本史研究		150・151	208～23	1975年3月	帝国主義
多胡圭一	日本による朝鮮植民地化過程についての一考察(二)：1904～1910年における	阪大法学		94	1～23	1975年3月	帝国主義

依田憲家	日中戦争史資料4：占領地区支配1		河出書房新社			1975年3月	帝国主義
林健太郎他	アジアの中の日本（東京大学公開講座20）		東大出版会			1975年3月	アジア
後藤乾一	イワ・クスマ・スマントリの日本軍政観と独立観：1940年代のインドネシア知識人の政治体験と関連して	アジア経済		16(4)	63-76	1975年4月	帝国主義
李淑子	日本統治下朝鮮における日本語教育：朝鮮教育会との関連において	朝鮮学報		75	97-114	1975年4月	帝国主義
秦郁彦	アメリカの極東軍事政策：1945-1955年	国際問題		182	11～16	1975年5月	帝国主義
朴宗根	日清開戦における日本軍の朝鮮王宮占領事件の考察(上)	歴史評論		302	33-53	1975年6月	帝国主義
長谷部楽爾	中国陶磁の輸出と日本	東京国立博物館研究誌		291	4～10	1975年6月	日中関係
池端雪浦	フィリピンにおける日本軍政の一考察：リカルテ将軍の役割をめぐって	アジア研究		22(2)	40～74	1975年7月	東南アジア、帝国主義
朴宗根	日清開戦における日本軍の朝鮮王宮占領事件の考察(下)	歴史評論		304	74-83	1975年8月	帝国主義
喜多村浩	アジアの経済開発よりみた中国と日本	アジア文化研究		8	13～26	1975年9月	日中関係
日本中国友好協会(正統)中央本部	日中友好運動史		青年出版社			1975年9月	日中関係
小島清	東アジア経済と日本（アジア太平洋問題研究3）		日本国際問題研究所			1975年10月	東南アジア
森山茂徳	近代日韓関係史研究の動向と史料および文献：甲午改革研究を中心として	国家学会雑誌		88(11・12)	66-98	1975年11月	近代、日韓関係
村上勝彦	日本産業革命期における植民地支配の経済過程	歴史学研究		別冊特集	150-59	1975年11月	帝国主義
浅田喬二	日本植民地史研究の課題と方法	歴史評論		308	63-83	1975年12月	帝国主義
菅野正	安奉綿問題をめぐる対日ボイコットの一考察	紀要(東海大・文)		26	9～18	1976年	対日
朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所	日本軍国主義の朝鮮侵略(1)	月刊朝鮮資料		16(9)	78-88	1976年	帝国主義
朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所	日本軍国主義の朝鮮侵略(2)	月刊朝鮮資料		16(10)	71-84	1976年	帝国主義
朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所	日本軍国主義の朝鮮侵略(3)	月刊朝鮮資料		16(11)	76-88	1976年	帝国主義
朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所	日本軍国主義の朝鮮侵略(4)	月刊朝鮮資料		16(12)	62-75	1976年	帝国主義
河原宏	近代日本のアジア認識		第三文明社			1976年	近代、アジア
姜渭祚（沢正彦・轟勇一訳）	日本統治下朝鮮の宗教と政治		聖文舎			1976年	帝国主義
中村新太郎	日本と朝鮮の二千年 上		東邦出版社			1976年	日朝関係
日本史料集成編纂会	中国・朝鮮の史籍における日本史料集成：季朝実録之部1		国書刊行会			1976年	中国、韓国、史料
日本史料集成編纂会	中国・朝鮮の史籍における日本史料集成：正史之部2・清史		国書刊行会			1976年	中国、韓国、史料
日本史料集成編纂会	中国・朝鮮の史籍における日本史料集成：清実録之部1, 2		国書刊行会			1976年	中国、韓国、史料
朴慶植	在日朝鮮人関係資料集成 第1巻		三一書房			1976年	韓国、史料
朴慶植	在日朝鮮人関係資料集成 第2巻		三一書房			1976年	韓国、史料

朴慶植	在日朝鮮人関係資料集成 第3巻		三一書房			1976年	朝鮮、史料
朴慶植	在日朝鮮人関係資料集成 第4巻		三一書房			1976年	朝鮮、史料
朴慶植	在日朝鮮人関係資料集成 第5巻		三一書房			1976年	朝鮮、史料
山口一郎	中国と日本		潮出版社			1976年1月	日中関係
松本繁一	日本軍政期の香港経済	アジア経済		17(1・2)	42-56	1976年2月	帝国主義
山根幸夫	論集近代中国と日本		山川出版社			1976年2月	近代、日中関係
石原道博	黄遵憲の日本国志と日本雑事詩(下)清代の日本研究・第五部	紀要(茨城大・人文)		9	1～22	1976年3月	日中関係
佐々木隆爾	朝鮮における日本帝国主義の養蚕業政策：第一次大戦期を中心に	人文学報(都立大)		114	107-34	1976年3月	帝国主義
白石愛子	日本軍政期のインドネシア反日運動の一考察：レンガスデンクロック事件における「サブ・マス」の役割	アジア経済		17(4)	68-75	1976年4月	帝国主義、東南アジア
小島晋治	「大東亜共栄圏」のある実態：シンガポール、マレーシアの旅から	野原四郎ほか編『近代日本における歴史学の発達(上)』	青木書店		58-77	1976年5月	帝国主義
石井正敏・川越泰博	日中・日朝関係研究文献目録		国書刊行会			1976年6月	日中関係、日韓関係
本多健吉	東南アジア経済と日本：ベトナム解放後の国際政治状況の中で	世界		368	158-69	1976年7月	東南アジア
池間誠	日本の対マレーシア直接投資：輸出志向型対現地市場指向型	一橋論叢		76(2)	208～221	1976年8月	東南アジア
竹内実	紀行・日本のなかの中国		朝日新聞社			1976年10月	日中関係
依田熹家	戦前の日本と中国		三省堂			1976年11月	帝国主義
連温卿	日本帝国主義の台湾における土地収奪の過程(一)	史苑		37(1)	36-57	1976年12月	帝国主義
緑間栄	尖閣列島の歴史と法的地位(上)	沖縄法学		5	17-60	1977年	日中関係
佐藤三郎	明治時代における中国人の明治維新観について	紀要(亜細亜大・アジア研)		4	1～23	1977年	中国
	明治初期における中国人の明治維新政治に対する見方について：近代日中交渉史上の一齣として	紀要(山形大・人文科学)		8(4)	1～24	1977年	日中関係
安坂和之	韓国知識人における反日本化の問題	研究年報(東北大・文)		27	1～33	1977年	反日
菅野正	民国二年、満州における対日ボイコット	東海史学		12	1～60	1977年	対日
別技篤彦	東南アジアにおける自然と人間：人文地理学を中心として	歴史と地理		257	1～10	1977年	東南アジア
中村新太郎	日本と朝鮮の二千年 下		東邦出版社			1977年	日朝関係
多胡圭一	日本による朝鮮植民地化過程についての一考察(三・完)：1904～1910年における	阪大法学		101	175～205	1977年1月	帝国主義
中塚明	近代日本と朝鮮(新版)		三省堂			1977年2月	近代、日朝関係
白石愛子	日本軍政期におけるスマトラの義勇軍	アジア経済		18(3)	24-44	1977年3月	帝国主義
片岡一忠	民国初期留日学生の対日観について	歴史研究(大阪教大)		14	20～36	1977年3月	中国
曾村保信	近代史研究：日本と中国(改訂新版)		小峰書店			1977年4月	近代、日中関係
増田弘	日米関係史概説：ペリーからカーターまで		南窓社			1977年4月	外交史

南満州鉄道株式会社	満鉄附属地経営沿革全史(上)		龍溪書舎			1977年4月	満鉄
南満州鉄道株式会社	満鉄附属地経営沿革全史(中)		龍溪書舎			1977年4月	満鉄
南満州鉄道株式会社	満鉄附属地経営沿革全史(下)		龍溪書舎			1977年4月	満鉄
後藤乾一	日本・インドネシア経済関係史研究の序説にむけて：第一次日蘭印会商前夜の蘭領東インド市場における日本綿布(試論)	社会科学討究(早大)		22(3)	323～373	1977年5月	東南アジア
東京大学法学部近代立法過程研究会	日中・日韓関係資料目録(1)	国家学会雑誌		90(7・8)	116～144	1977年7月	日中関係、日韓関係
藤原彰・野沢豊	日本ファシズムと東アジア		青木書店			1977年7月	帝国主義
田中慎一	朝鮮における土地調査事業の世界史的位置(一)：帝国主義、植民地的土地政策の特殊日本＝朝鮮的性格	社会科学研究(東大・社会科学研)		29(3)	1～84	1977年10月	朝鮮、帝国主義
高橋八郎	親日ビルマから抗日ビルマへ	史録		10	99-126	1977年11月	日本、ビルマ
長島修	日本帝国主義下朝鮮における鉄鋼業と鉄鉱資源(上)	日本史研究		183	1～32	1977年11月	帝国主義
森嶋通夫	イギリスと日本：その教育と経済		岩波書店			1977年11月	外交史
岡野昌子	秀吉の朝鮮侵略と中国	明清史論叢刊行会編『明清史論叢：中山八郎教授頌壽記念』	療原書店		141-66	1977年12月	朝鮮
長島修	日本帝国主義下朝鮮における鉄鋼業と鉄鉱資源(下)	日本史研究		184	30～47	1977年12月	朝鮮、帝国主義
加藤章	日本の歴史教育における韓国史	韓(韓国研究院)		7(1)	85～94	1978年	韓国
金雲泰	日帝植民統治史研究序論	韓(韓国研究院)		7(6)	40-51	1978年	帝国主義
南都泳	韓国の歴史教育における日本史	韓(韓国研究院)		7(1)	95～98	1978年	韓国
石川昌	中国・吉林の朝鮮人：少数民族政策と日本	季刊三千里		15	206-13	1978年	朝鮮
梶井陟	植民地統治下における警察官と朝鮮語	季刊三千里		13	170-79	1978年	帝国主義
梶井陟	朝鮮人児童の日本語教科書	季刊三千里		15	92-101	1978年	帝国主義
平田賢一	明治期の朝鮮人留学生：大韓興学会を中心に	季刊三千里		13	204～13	1978年	朝鮮
水野直樹	日本における新幹会運動：東京支会の活動について	季刊三千里		15	41-47	1978年	日朝関係
飯野正子	米国における排日運動と1924年移民法制定過程	紀要(津田塾大)		10	1～41	1978年	移民
金曜顕	日帝統治期の宗教政策について	統一評論		156	86-95	1978年	帝国主義
東京大学法学部近代立法過程研究会	日中・日韓関係資料目録(2)	国家学会雑誌		91(1・2)	116～144	1978年1月	日中関係、日韓関係
窪徳忠	台湾の土地公信仰と沖縄	星博士退官記念中國史論集編集委員会編『中国史論集：星博士退官記念』	星叔夫先生退官記念事業会		397-420	1978年1月	台湾、沖縄
渡辺龍策	近代日中政治交渉史		雄山閣			1978年1月	外交史
アジア経済研究所	特集70年代日本における発展途上地域研究(地域編、テーマ編)	アジア経済		19(1・2・3)		1978年2月	アジア、地域
松野周治	1910年代東北アジアの経済関係と日本の対満州通貨金融政策	経済論集(京大・経済学会)		121(1・2)	81-103	1978年2月	東アジア、満州
大谷正	満州金融機関問題と朝鮮総督府	日本史研究		186	1～30	1978年2月	朝鮮、帝国主義

朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所近代史研究室編(金曜顕訳)	日本帝国主義統治下の朝鮮		朝鮮青年社			1978年2月	帝国主義
国立教育研究所	アジアにおける教育交流：アジア人日本留学の歴史と現状	紀要(国立教育研)		94	1-328	1978年3月	アジア
浅田喬二	旧植民地(朝鮮)における日本人大地主の存在形態—石川農業株式会社の事例分析—	朝鮮歴史論集	龍溪書舎	下巻	331～362	1978年3月	植民地
伊藤隆・鳥海靖	日中和平工作に関する一史料(一)：松本歳次関係文書から	歴史学研究報告(東大・教養・人文科学科)		16	227～292	1978年3月	日中関係
木山英雄	北京苦住庵記—日中戦争時代の周作人		筑摩書房			1978年3月	日中戦争
金頭約(大村益夫・南里智樹編)	ある抗日運動家の軌跡—“不逞鮮人”の証言—		龍溪書舎			1978年3月	抗日
若林正文	1920年代台湾抗日運動に関する抗日側文献(資料案内)	流溪		38	4～15	1978年3月	台湾、抗日
原覚天	日本におけるアジア研究の歴史(1)	アジア経済		19(4)	67～84	1978年4月	アジア
ジャンセン・マウリス・B(芳賀徹訳)	「近代化」論と東アジア：アメリカの学界の場合	思想		646	25-37	1978年4月	東アジア、近代化
原覚天	日本におけるアジア研究の歴史(2)	アジア経済		19(5)	76～82	1978年5月	アジア
東京大学法学部近代立法過程研究会	日中・日韓関係資料目録(3)	国家学会雑誌		91(5・6)	111-21	1978年5月	日中関係、日韓関係
市井三郎	竹内好と明治維新	思想の科学		91	37～43	1978年5月	近代日本
原覚天	日本におけるアジア研究の歴史(3)	アジア経済		19(6)	61～75	1978年6月	アジア
吉川利治	「アジア主義」者のタイ国進出—明治中期の一局面	東南アジア研究		16(1)	78～93	1978年6月	近代日本の南方関与
原覚天	日本におけるアジア研究の歴史(4)	アジア経済		19(7)	49～54	1978年7月	アジア
市川慎一	ヴォルテールにおけるシナと日本の幻影	思想		694	154～171	1978年7月	日本観、中国観
田中慎一	朝鮮における土地調査事業の世界史的位罫(一)：帝国主義、植民地的土地政策の特殊日本＝朝鮮的性格	社会科学研究(東大・社会科学研)		30(2)	1～99	1978年8月	帝国主義
高橋満	近代アジア社会の性格規定：小谷汪之氏の問題提起によせて	歴史学研究		459	46-52	1978年8月	アジア
岡部牧夫	満州国(三省堂選書)		三省堂			1978年8月	満州国
栗原純	台湾事件(1871年-1874年)—琉球政策の転機としての台湾出兵—	史学雑誌		87(9)	60～85	1978年9月	台湾事件、台湾出兵
大江志乃夫	植民地領有と軍部：とくに台湾植民地征服戦争の位置づけをめぐって	歴史学研究		460	10～22	1978年9月	帝国主義
永井陽之助	冷戦の期限—戦後アジアの国際環境		中央公論社			1978年9月	戦後アジア
野原四郎	中国革命と大日本帝国		研文出版			1978年9月	大日本帝国
岩壁義光	日清戦後の南清経営に関する一考察—南清鉄道敷設要求を中心に—	紀要(法政大・院)		1	59～72	1978年11月	日清戦争
連温卿(戴国輝校訂)	日本帝国主義の台湾に於る土地収奪の過程(二)	史苑(立教大)		39-1	51～77	1978年11月	台湾
尾形洋一	1927年の臨江日本領事館設置事件—中国東北における反日運動の転機—	東洋学報		60(1・2)	132～165	1978年11月	反日
岡部牧夫	日本帝国主義と満鉄—一五年戦争期を中心に—	日本史研究		195	66～87	1978年11月	満鉄、十五年戦争

河村一夫	明治30年代初期の韓国各地日本人居留民営業表戸口月表（資料紹介）	朝鮮学報		90	223～230	1979年1月	日朝関係
河村一夫	斎藤実総督の朝鮮総督府中枢院官制改革関係史料（資料紹介）	朝鮮学報		90	217～222	1979年1月	朝鮮総督府
武仲弘明	清末の対アジア認識をめぐって	研究紀要（安田学園）		19	41～53	1979年2月	アジア認識
中村尚美	日露戦後のアジア情勢と日本帝国主義	社会科学討究（早大・社会研）		24(2)	1～33	1979年2月	アジア情勢
山口正之	中国の近代化と日本の資本	中国研究（日中出版）		100	92～106	1979年2月	日中関係
姜東鎮	日本の朝鮮支配政策史研究—1920年代を中心として—		東京大学出版会			1979年2月	帝国主義
増田与	戦後の日本とインドネシアの関係について—「椰椗模コレクション」をめぐって—	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		24(3)	69～142	1979年3月	インドネシア
後藤乾一	戦前期インドネシアにおける日本人ジャーナリストの活動—「南方関与」の一事例—	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		24(3)	441～460	1979年3月	インドネシア
内海愛子	太平洋戦争下における朝鮮人軍属—蘭印法廷における朝鮮人戦犯問題—	旗田巍先生古稀記念会編「朝鮮歴史論集」	竜溪書舎	下巻	445～466	1979年3月	太平洋戦争
梶井陟	植民地統治下の日本人の朝鮮語学習書	旗田巍先生古稀記念会編「朝鮮歴史論集」	龍溪書舎	下巻	557～590	1979年3月	植民地
朴宗根	日清戦争下の日本の対朝鮮政策—朝鮮における日本の経済的「利権」を中心として—	旗田巍先生古稀記念会編「朝鮮歴史論集」	龍溪書舎	下巻	99～132	1979年3月	日清戦争
山田昭次	朝鮮人・中国人強制連行研究史試論	旗田巍先生古稀記念会編「朝鮮歴史論集」	龍溪書舎	下巻	491～515	1979年3月	強制連行
小島麗逸（編）	日本帝国主義と東アジア〈研究参考資料277〉		アジア経済研究所			1979年3月	日本帝国主義、東アジア
山根幸夫（編）	近代日中関係史文献目録		東京女子大学東洋史研究室			1979年3月	日中関係
大竹慎一	上海悪性インフレと物資流通—日中戦争期の軍票・儲備券インフレの分析—	アジア研究		26(3)	53～82	1979年4月	日中戦争
市川正明	安重根と日韓関係史〈明治百年叢書〉		原書房			1979年4月	安重根
市川正明（編）	日韓外交史料（明治百年史叢書）1 開国外交 2 壬午事変		原書房			1979年5月	日韓関係
市古宙三（編）	近代中国・日中関係図書目録		汲古書房			1979年5月	日中関係
阿部洋	日本の「対支文化事業」と中国教育文化界	韓（韓国研究院）		8(5・6)	213～278	1979年6月	日中関係
黒羽清隆	日中15年戦争 下〈教育社歴史新書〉		教育社			1979年6月	日中戦争、十五年戦争
田保橋潔	近代日支鮮関係の研究—天津条約より日支開戦いたる〈明治百年叢書〉		原書房			1979年7月	日支鮮関係
小島麗逸	日本帝国主義の台湾山地支配—対高山族調査史—その1	台湾近現代史研究		2	5～29	1979年8月	台湾
桑原哲也	日清戦争直後の日本紡績業の直接投資計画—東華紡績会社の事例を中心として—	経済経営論叢（京都産業大）		14(2)	95～131	1979年9月	日清戦争
草柳大蔵	実録満州調査部 上・下		朝日新聞社			1979年9月	満州
黒羽清隆	十五年戦争史序説		三省堂			1979年9月	十五年戦争
味岡徹	第一次世界大戦初期の中国民族運動—二十一条の要求と中国民衆—	歴史学研究		別冊	131～141	1979年10月	二十一条の要求
石島紀之	第二次大戦末期の中国戦線	歴史学研究		別冊特集	179～187	1979年10月	戦争、中国
野沢豊	シベリア戦争と五四運動	歴史学研究		別冊特集	13～21	1979年10月	五四運動
久保田文次	袁世凱の帝制計画と二十一条の要求	史艸（日本女子大）		20	95～110	1979年11月	二十一条の要求

康成銀	戦時下日本帝国主義の朝鮮農村 労働力収奪政策	歴史評論		355	24 ~ 42	1979年11月	日本帝国主義
喜安幸夫	台湾島抗日秘史—日清・日露戦 間の隠された動乱		原書房			1979年11月	日清・日露戦
秦郁彦	日中戦争史 新装版		原書房			1979年12月	日中戦争史

(1980年代)

著者	タイトル	雑誌名	本の場合の出版社 (発行所)	巻・号	ページ	年月	キーワード
河原宏	アジア主義の制度化—対満事務局、興亜院、大東亜省の設置	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		25(2)	193～221	1980年1月	大東亜省
高村直助	中国における日本紡績業の形成	社会経済史学		45(5)	565～594	1980年2月	中国、日本紡績業
田中宏己	東シナ海と対島・沖縄	紀要（人文・社会科学）（防衛大）		40	35～58	1980年3月	東シナ海
後藤乾一	インドネシア知識人と日本軍政—スラン・アブドウルガニ論文をめぐって	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		25(3)	529～549	1980年3月	インドネシア、日本軍政
金原左門	三・一運動と日本	朝鮮史研究会論文集		17	129～137	1980年3月	三一運動
小島晋治	三・一運動と五・四運動—その関連性	朝鮮史研究会論文集		17	115～128	1980年3月	三一運動、五四運動
馬淵貞利	現代歴史学における三・一運動	朝鮮史研究会論文集		17	101～114	1980年3月	三一運動
長久保宏人	二・八独立宣言への道—1910年代後半の在日朝鮮人留学生運動	福大史学（福島大）		29	19～32	1980年3月	二・八独立宣言、在日朝鮮人
永野善子	19世紀フィリピン社会経済史研究の状況—地方史への傾斜	歴史学研究		479	45～53	1980年4月	フィリピン
今井武夫	支那事変の回想（新版）					1980年4月	支那事変
増田四郎	地域の思想（筑摩叢書）		筑摩書房			1980年4月	地域
崔書勉（西川孝雄訳）	日本人がみた安重根	韓		9(4・5)	80～95	1980年5月	安重根
判沢純太	東支鉄道をめぐる日中ソの角逐と地域ナショナリズムの昂揚	三輪公忠編『日本の一九三〇年代』	創流社			1980年5月	日中ソ、地域ナショナリズム
後郷吉彦	満鉄・鉄道警察の闘い—満州建国時代史の一証言		大湊書房			1980年5月	満鉄
富村順一	アジアの民衆と皇民化教育		JCA出版			1980年5月	皇民化教育
古関彰一	朝鮮戦争と日本再軍備	歴史評論		362	37～50	1980年6月	朝鮮戦争
涌井秀行	朝鮮戦争と日本独占資本—「高度経済成長」の準備階梯の検討	歴史評論		362	51～62	1980年6月	朝鮮戦争
姜在彦	日朝関係の虚構と実像		竜溪書舎			1980年6月	日朝関係
増田与	太平洋共同体—環太平洋連帯の黎明		霞山会			1980年6月	太平洋共同体
小泉親種	1860年代前後の東アジア—日本の「開国」と朝鮮をめぐる世界の動向	响沫集（学習院大・文）		2	70～82	1980年7月	東アジア、朝鮮
桑原重夫	日韓連携への道—在日韓国人「政治犯」救援運動から		ユニウス			1980年7月	日韓連携、在日韓国人
ソシンスキー他（川内唯彦監訳）	「日ソ」戦争と外交—1 関東軍壊滅と中立条約		世紀社			1980年7月	関東軍
畑中幸子	太平洋と日本		現代研究会			1980年7月	太平洋
浅田喬二	日本の朝鮮土地支配の実態と抵抗運動	歴史公論		57	106～112	1980年8月	抵抗運動、朝鮮
宇野俊一	日清戦争と朝鮮問題	歴史公論		57	65～72	1980年8月	日清戦争
姜在彦	朝鮮からみた日本の征韓外交	歴史公論		57	50～57	1980年8月	朝鮮、征韓
姜東鎮	日本の植民地統治政策	歴史公論		57	99～105	1980年8月	植民地
中塚明	近代における日本と朝鮮—「日韓併合」から71年の歴史をかえりみて	歴史公論		57	31～40	1980年8月	日韓併合

山田昭次	近代日本の朝鮮侵略の展開	歴史公論		57	58～64	1980年8月	朝鮮侵略
満州と日本人編集委員会(編)	満州・敗戦記録珠玉集		大湊書房			1980年8月	満州
野沢豊	日露戦争と東アジア—とくに満蒙問題を中心として	史潮		7	41～52、64	1980年9月	日露戦争、東アジア
北沢文武編著	大正の朝鮮人虐殺事件		鳩の森書房			1980年9月	朝鮮人虐殺
日本中国友好協会全国本部(編)	日中友好運動史		青年出版社			1980年9月	日中
阿部洋	1920年代満州における教育権回収運動—中国近代教育におけるナショナリズムの一側面	アジア研究		27(3)	1～40	1980年10月	満州
村上誠	アジアにおける近代綿工業の発展—第二次世界大戦までの印・日・中の比較	広島史学研究会編『史学研究五十周年記念論集』		世界篇	479～504	1980年10月	アジア
ウ・フラ(土橋泰子訳)	ビルマ=日本、経済見聞録	史録(鹿児島大・教養)		13	57～96	1980年10月	ビルマ
吉川洋子	日比賠償交渉—1953年5月～1953年4月—官僚的積極外交と現実的政治外交	論集(国際関係系列)(京都産業大)		8	40～83	1980年10月	日比賠償交渉
香島明雄	日中戦争と中ソ連携	論集(京都産業大)		8	84～117	1980年10月	日中戦争
高瀬保	アジア・太平洋地域における経済安全保障	論集(京都産業大)		10(1)	215～224	1980年10月	アジア
尾崎庄太郎	アジアの生産様式、アジアの専制主義ならびにアジアのプロ独裁	中国研究(日中出版)		117	64～74	1980年11月	アジア
島田正郎	私立明治大学経緯学堂始末記—清朝の対日学生政策をめぐって	法律論叢(明大・法律研)		別冊	429～458	1980年11月	対日学生政策
高網博文	日本紡績資本の中国進出と「在華紡」における労働争議—5.4～5.30時期を通じて	歴史学研究		別冊特集	138～148	1980年11月	日本紡績
中村平治	現代アジアにおける地域と民衆—パシトゥーンの分断と「統一」	歴史学研究		別冊特集	9～19	1980年11月	現代アジア、地域
井上源吉	戦地憲兵		図書出版社			1980年11月	
大塚博久	〈5・4運動〉研究史試探	中国哲学論集(九大)		6	51～67	1980年12月	五四運動
小島勝	南洋における日本人学校の動態	東南アジア研究(京大・東南アジア研究所)		18(3)	460～475	1980年12月	日本人学校
三谷太郎	国際金融資本とアジアの戦争—終末期における対中四国借款団	年報・近代日本研究		2	114～158	1980年12月	アジア
森山茂徳	朝鮮における日本とベルギー・シンディケート—その経済的共同行動の挫折	年報・近代日本研究		2	28～54	1980年12月	朝鮮
中村隆英	日本の華北経済工作—塘沽協定から盧溝橋事件まで	年報・近代日本研究(近代日本研究会)		2	159～204	1980年12月	華北経済、日本
青山明哲・若林正丈	日本植民地主義の政治的展開1895～1934年—その統治体制と台湾の民族運動		アジア政経学会			1980年12月	植民地
近代日本史研究会編	近代日本と東アジア(年報・近代日本史研究2)		山川出版社			1980年12月	近代日本、東アジア
百瀬宏	戦間期の日本の対東欧外交に関する覚書	国際関係学研究(津田塾大)		8	27～44	1981年	対東欧外交
小川哲雄	日中戦争秘史—陳公博亡命事件(其之六)	海外事情(拓殖大・海外事情研究所)		29(1)	81～104	1981年1月	日中戦争
戴国輝	資料紹介 日本の植民地支配と台湾籍民	台湾近現代史研究		3	105～128	1981年1月	植民地、台湾
金子文夫	井手季和太と日本の南進政策	台湾近現代史研究		3	67～85	1981年1月	南進政策
小島麗逸	日本帝国主義の台湾山地民支配—対高山族調査史 その2	台湾近現代史研究		3	5～22	1981年1月	日本帝国主義、台湾
浅田喬二編	日本帝国主義下の中国—中国占領地経済の研究		楽遊書房			1981年1月	日本帝国主義

落合淳隆	日本をめぐるアジアの国際環境		敬文堂			1981年1月	日本、アジア
金子文夫	1920年代における日本帝国主義と「満州」—鉄道・金融問題を中心に(一)	社会科学研究(東大)		32(4)	149～224	1981年2月	日本帝国主義、満州
長久保宏人	二・八独立宣言から三・一独立運動へ—ソウルを舞台とした朝鮮人日本留学生の動きを中心に	福大史学(福島大)		31	61～72	1981年2月	三・一運動
井上勇一	ロシアの京奉鉄道占領とイギリス対応—日英同盟の性格をめぐって	法学研究(慶大)		54(2)	199～225	1981年2月	日英同盟
本庄比佐子	日本陸軍と中国—資料紹介：福嶋安正宛書簡3通	近代中国研究彙報(東洋文庫)		3	1～15	1981年3月	日本陸軍
小倉芳彦	抗日戦下の顧頡剛—「西地考察日記」を手にして	思想		681	107～132	1981年3月	抗日戦
金子文夫	1921年代における日本帝国主義と「満州」—鉄道・金融問題を中心に(二)	社会科学研究(東大)		32(6)	195～286	1981年3月	日本帝国主義、満州
西川洋	在日朝鮮人共産党員・同調者の実態—警保局資料による1930年代前半期の統計学的分析	人文学報(京大・人文研)		50	31～53	1981年3月	在日朝鮮人
多胡圭一	日露戦争前後における植民地経営の一斑について	阪大法学		116・117	107～124	1981年3月	植民地、日露戦争
原田敬一	日貨ボイコット運動と日支銀行設立構想—1910年代大坂ブルジョワジーの立場	ヒストリア		90	63～88	1981年3月	日支銀行
大森實	日蘭関係の史料と史蹟を求めて	法制史学		33	69～77	1981年3月	日蘭関係史料
吉田裕	日本帝国主義のシベリア干渉—前線と国内状況との関連で	歴史学研究		490	1～14	1981年3月	日本帝国主義
長谷川潔	北満州抑留日本人の記録—五星紅旗の下で		波書房			1981年3月	満州
河村一夫	日英同盟の危機の際の小村駐英大使	政治経済史学		179	1～13	1981年4月	日英同盟
矢沢康祐	日朝関係の歴史—金大中間問題から学ぶもの	歴史評論		372	74～80	1981年4月	日朝関係
宇野重昭	中国と国際関係		晃洋書房			1981年4月	中国
滝田賢治	「台湾問題」をめぐる日米の対応	国際問題		254	50～61	1981年5月	台湾
森田明彦	日中経済関係の再構築	国際問題		254	40～49	1981年5月	日中関係
新藤東洋男	在朝日本人教師—反植民地教育運動の記録		白石書店			1981年5月	在朝日本人
鈴木啓介	第26回党大会の対外経済路線と日ソ関係	国際問題		255	55～66	1981年6月	日ソ関係
判沢純太	孫文の容共にいたる過程と日本の対応	政治経済史学		181	1～27	1981年6月	孫文
田淵幸親	「大東亜共栄圏」とインドシナー食料獲得のための戦略	東南アジア		10	39～68	1981年6月	大東亜共栄圏
戴国輝編著	台湾霧者蜂起事件—研究と資料		思想出版社			1981年6月	台湾
ミッチェル, R. H. (金容権訳)	在日朝鮮人の歴史		彩流社			1981年6月	在日朝鮮人
小谷汪之	「アジア的共同体」概念の成立根拠—大塚久雄氏の所説によせて	思想		685	13～32	1981年7月	アジアの共同体
久保田文次	孫文のいわゆる「満蒙譲与」論について	中嶋敏先生古稀記念事業会記念論集編集委員会編『中嶋敏先生古稀記念論集』	汲古書院	下巻	601～624	1981年7月	孫文
鈴木健一	満州国における教育政策の展開	中嶋敏先生古稀記念事業会記念論集編集委員会編『中嶋敏先生古稀記念論集』	汲古書院	下巻	803～830	1981年7月	満州
喜安幸夫	台湾統治秘史—霧社事件に至る抗日の全貌		原書房			1981年7月	台湾

中嶋嶺雄解説	日本共産党と中国共産党一和解への道程 記録		日中出版			1981年7月	日本共産党、中国共産党
福永安祥編著	現代アジア社会の研究		明星大学出版部			1981年7月	アジア
板垣雄三・中村平治	20世紀アジアにおける帝国主義世界体制の衰退と平和の問題	歴史学研究		495	9～14	1981年8月	アジア、帝国主義
江口朴郎・西川正雄	20世紀のアジアにおける平和と民衆	歴史学研究		495	2～9	1981年8月	アジア
柳沢遊	「満州事変」をめぐる社会経済史研究の諸動向	歴史評論		377	50～59	1981年8月	満州事変
芝原拓自	日本近代化の世界史的位置		岩波書店			1981年8月	日本、近代化
坂本夏男	盧溝橋事件に関する二つの通説への疑問	藝林		30(3)	2～23	1981年9月	盧溝橋事件
風間秀人	日本帝国主義下における「満州」土着流通資本の存在形態—「満州国」建国期の「北満」を中心として	歴史評論		377	32～49	1981年9月	日本帝国主義、満州
富田晶子	準戦時下朝鮮の農村振興運動	歴史評論		377	76～98	1981年9月	朝鮮
河村一夫	小村外相の満韓に関する日露交渉関係意見書について	朝鮮学報		101	109～117	1981年10月	日露交渉
楠瀬正明	梁啓超のアジア観—とくに日本観を中心として	東洋史研究室報告(広島大)		3	1～9	1981年10月	アジア
宮嶋博史	植民地下朝鮮人大地主の存在形態に関する理論の方法と問題	学術論文集(朝鮮奨学会)		11	87～101	1981年11月	植民地
ウ・フラ(土橋泰子訳)	ビルマ=日本、経済見聞録(その2)	史録(鹿児島大・教養)		14	39～78	1981年11月	ビルマ
歴史学研究会編	地域と民衆—国家支配の問題をめぐって(『歴史学研究』別冊特集1981年度歴史学研究会大会報告)		青木書店			1981年11月	地域
菅野正	五・四運動と南洋華僑	紀要(奈良大)		10	71～83	1981年12月	五・四運動
白石昌也	東遊運動期のファン・ボイ・チャウ—渡日から日・中革命家との交流まで	永積昭編『東南アジアの留学生と民族主義運動』	巖南堂書店		229～310	1981年12月	日中
小泉親種	1860年代前後の東アジア—ロシアの東アジアへの「南下」	响沫集		3	47～55	1981年12月	東アジア
レブラ、J. C. (村田克己・近藤正臣他訳)	東南アジアの解放と日本の遺産		秀英書房			1981年12月	東南アジア
小野信爾	三一運動と五四運動	朝鮮史叢(青丘文庫(神戸))		5・6	57～90	1982年1月	三一運動、五四運動
韓哲曦	戦時下朝鮮の神社参拝強要とキリスト者の抵抗	朝鮮史叢(青丘文庫(神戸))		5・6	351～407	1982年1月	朝鮮
姜在彦	思想史からみた三・一運動	朝鮮史叢(青丘文庫(神戸))		5・6	5～56	1982年1月	三・一運動
堀和生	朝鮮における植民地財政の展開—1910～30年代初頭にかけて	朝鮮史叢(青丘文庫(神戸))		5・6	151～194	1982年1月	植民地
阿部洋	東亜同文会の中国人教育事業—1920年代前半期における中国ナショナリズムとの対応をめぐって	阿部洋編『日中関係と文化摩擦』	巖南堂書店		1～97	1982年1月	教育
楊天喩	中国における日本紡績業(「在華紡」)と民族紡との相克	阿部洋編『日中関係と文化摩擦』	巖南堂書店		245～331	1982年1月	日本紡績業
阿部洋編	日中関係と文化摩擦(叢書・アジアにおける文化摩擦)		巖南堂書店			1982年1月	日中関係
飯沼二郎・姜在彦(編)	植民地期朝鮮の社会と抵抗		未来社			1982年1月	植民地
加藤豊隆(編)	満州国警察重要写真文献資料集成		元在外公務員援護会			1982年1月	満州
加藤豊隆(編)	満鉄調査部総合調査報告集		亜紀書房			1982年1月	満鉄調査部
和田洋一・朴誠宏	「甘やかされた」朝鮮—金日成主義と日本		三一書房			1982年1月	朝鮮

柳生正文	蒙古借款問題について—東部内 蒙古への日本の選出	史学論集(駒沢大)		12	11～23	1982年2月	蒙古、日本
太田弘毅	日本軍政下フィリピンにおける 各種住民対策	政治経済史学		189	64～91	1982年2月	フィリピン
河合俊三	日露戦争前における中国をめぐる 国際関係	東洋研究(大東文化 大)		62-64	25～38	1982年2月	日露戦争
森山茂徳	日清・日露戦間期における日韓 関係の側面—在日朝鮮人亡命 者の処遇問題	紀要(東大・東文研)		88	195～221	1982年3月	日清・日露戦争
井星英	張作霖爆殺事件の真相(一)	芸林		31(1)	2～43	1982年3月	張作霖
黒羽清隆	日本人の「団匪」観—日本側史料 による義和団運動史の側面	史潮		新11	98～118	1982年3月	義和団
片山邦雄	大坂商船南洋線の前史—航路視 察復命書を中心として	東南アジア研究(京 大・東南アジア研究 所)		19(4)	388～411	1982年3月	大阪商船
楠井敏朗	アメリカ資本主義と日本開港 南北戦争前期のアメリカの対ア ジア(中国貿易)戦略との関連で	横浜経営研究(横国 大)		2(4)	237～261	1982年3月	対アジア戦略
藤本博生	日本帝国主義と五四運動		同朋舎出版			1982年3月	日本帝国主義、 五四運動
名古屋大学文学 部東洋史研究室 (編)	地域社会の視点—地域社会と リーダー(1981・中国史シンポ ジウム)		名古屋大学文学部 東洋史学研究室			1982年3月	地域
狭間直樹・片岡 一忠・藤本博生	五四運動の研究 第一函(京都 大学人文科学研究所共同報告)		同朋舎出版			1982年3月	五四運動
宮田節子	「内鮮一体」の構造—日中戦争下 の朝鮮支配政策についての一考 察	歴史学研究		503	1～15、 24	1982年4月	日中戦争
山崎カヲル	〈アジア型〉国家の成立条件	思想		695	128～147	1982年5月	アジア
中兼和津次	旧満州(現東北三省)の地域別農 業生産構造—地域別中国研究へ の一接近	一橋論叢		87(5)	68～90	1982年5月	満州、地域
井星英	張作霖爆殺事件の真相(二)	芸林		31(2)	29～62	1982年6月	張作霖
村山良忠	両大戦間期日本綿織物の東南ア ジア進出—蘭領東インドを中心 に	東南アジア 歴史と 文化		11	37～63	1982年6月	日本綿織物、東南 アジア
風間秀人	華中抗日根拠地における土地政 策の展開—蘇北解放区を中心と して	歴史評論		386	45～63	1982年6月	抗日
高村直助	近代日本綿業と中国(歴史学選 書)		東京大学出版会			1982年6月	日本綿業、中国
佐々木揚	ロシア極東政策と日清開戦	研究論文集(佐賀大・ 教育)		30(1-1)	208～192	1982年7月	日清戦争
秋山輝晃	日本・東南アジアの交渉史の一 事例—タイ国司法省顧問政尾藤 吉について	総合歴史教育(総合 歴史教育研究会)		18	1～6	1982年8月	日本、東南アジア
上垣外憲一	日本留学と革命運動		東京大学出版会			1982年8月	日本留学
白井勝美	満州事変と若槻内閣	軍事史学		18(2)	2～22	1982年9月	満州事変
河村一夫	満州国承認問題と斎藤首相、内 田外相	軍事史学		18(2)	23～35	1982年9月	満州国
清水秀子	日本外交文書「満州事変」につ いて	軍事史学		18(2)	36～53	1982年9月	満州事変
井星英	張作霖爆殺事件の真相(三)	芸林		31(3)	24～66	1982年9月	張作霖
阿部洋ほか	戦前「満州」における日本人の教 育活動—三宅俊成氏のインタ ビュー記録	研究集録(国立教育 研)		5	69～80	1982年9月	満州、教育
ウ・フラ(土橋 泰子訳)	ビルマ=日本、経済見聞録(そ の3)	史録(鹿児島大・教 養)		15	95～133	1982年9月	ビルマ
渡辺節夫	フランスの文書館制度と地域史 研究	歴史評論		389	44～65	1982年9月	地域

鈴木健一	満州国の国民教育と教員養成問題	酒井忠夫先生古稀祝賀記念の会編『歴史における民衆と文化：酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』	国書刊行会		645 ~ 661	1982年9月	満州国
太田弘毅	戦前海南島における日本海軍の統治組織	アジア文化（アジア文化総合研）		7	107 ~ 113	1982年10月	日本海軍
鄭正浩	犬養毅あて孫文・康有為ら書簡について	アジア文化（アジア文化総合研）		7	53 ~ 68	1982年10月	孫文、康有為
太田弘毅	フィリピンにおける日本軍政の産業政策	政治経済史学		197	16 ~ 41	1982年10月	フィリピン
佐口透	日・中の中央アジア史学	創文		225	12 ~ 15	1982年10月	中央アジア
池田敏雄（池田麻奈解題）	植民地下台湾の民俗雑誌	台湾近現代史研究		4	109 ~ 151	1982年10月	植民地、台湾
横森久美	台湾における神社—皇民化政策との関連において	台湾近現代史研究		4	187 ~ 221	1982年10月	台湾、皇民化政策
平智之	日本帝国主義成立期、中国における横浜正金銀行	経済学研究（東大）		25	67 ~ 81	1982年11月	日本帝国主義
田中仁	王朝の抗日統一戦線論に関する資料上の若干の問題について	東洋史研究室報告（広大）		4	10 ~ 17	1982年11月	抗日
大畑篤四郎	辛亥革命と日本の対応—権益擁護を中心として	日本歴史		414	57 ~ 75	1982年11月	辛亥革命
藤岡喜久男	張謇と日清戦争	法学研究（北海学園大）		18(2)	1 ~ 37	1982年11月	日清戦争
坂野良吉	アジア近代における民中と帝国主義	歴史学研究会編『帝国主義と現代民主主義（現代歴史学の成果と課題Ⅱ）』	青木書店		23 ~ 46	1982年11月	帝国主義
小林英夫	戦間期の東アジア—植民地研究を中心に	歴史学研究会編『帝国主義と現代民主主義（現代歴史学の成果と課題Ⅱ）』	青木書店		99 ~ 117	1982年11月	植民地
大形孝平編	日中戦争とインド医療使節団（三省堂選書91）		三省堂			1982年11月	日中戦争
津田多賀子	1880年代における日本政府の東アジア政策展開と列強	史学雑誌		91(12)	1 ~ 33	1982年12月	東アジア、日本
白石昌也	明治末期の在日ベトナム人とアジア諸民族連携の試み—「東亞同盟会」ないしは「亞州和睦会」をめぐって	東南アジア研究		20-3	335 ~ 372	1982年12月	在日ベトナム人
朴宗根	日清戦争と朝鮮〈歴史学研究叢書〉		青木書店			1982年12月	日清戦争
片桐裕子	「満州国」の合作社政策—農産物流通機構からみた農民動員の破綻	アジア経済		24(1)	47 ~ 59	1983年1月	満州国
エディ・ヘルマワン	日本軍制期の西部ジャワにおける華僑政策	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		28(2)	293 ~ 325	1983年2月	ジャワ、華僑
姜在彦	日本による朝鮮支配の40年〈朝日カルチャーブックス17〉		大阪書籍			1983年2月	日本、朝鮮支配
古川万太郎	日中戦後関係史ノート		三省堂			1983年2月	日中戦後
細谷千博編	太平洋・アジア圏の国際経済紛争史—1922-1945		東京大学出版会			1983年2月	太平洋、アジア
稲生典太郎・大山梓	近代東アジアにおける不平等条約体制の成立	紀要（史学科）（中央大・文）		108	61 ~ 81	1983年3月	不平等条約
山中速人	朝鮮「同化政策」と社会学的同化・下—ジャーリズムをとおしてみた日韓併合時の民族政策論の構造	紀要（関西学院大・社会）		46	297 ~ 308	1983年3月	同化政策
原田正己	康有為と日本・東南アジア	紀要（早大・院・文学研究科）		28	37 ~ 53	1983年3月	康有為
太田弘毅	海軍の海南島統治について	史滴（早大）		4	51 ~ 70	1983年3月	（日本）海軍
山本治夫	18世紀東アジアの開明思潮の隆替と現代意識（A）—燕行録類を基軸にして	所報（福岡大・総合研）		61	1 ~ 43	1983年3月	東アジア

吉村道男	日露戦争後における北満州・沿海州視察報告の特質—特に斎藤秀治郎大佐の報告書をめぐって	政治経済史学		200	129 ~ 140	1983年3月	日露戦争、満州
家永三郎	日中戦争についての中西功書簡	近きに在りて		3	49 ~ 55	1983年3月	日中戦争
安井三吉	抗日戦争時期解放区における日本人の反戦運動	近きに在りて		3	37 ~ 48	1983年3月	抗日、反戦
橋谷弘	両大戦間の日本帝国主義と朝鮮経済	朝鮮史研究会論文集		20	25 ~ 60	1983年3月	日本帝国主義
井上勇一	安奉鉄道をめぐる日清交渉—滿韓一体化政策と日英同盟の変質	法学研究(慶大)		56(3)	557 ~ 584	1983年3月	日英同盟
山根幸夫	廿一箇条交渉と日本人の対応	佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集編集委員会編『中国史・陶磁史論集：佐久間重男教授退休記念』	療原		307 ~ 329	1983年3月	二十一箇条交渉
河村一夫	近代日中関係史の諸問題		南窓社			1983年3月	日中関係
田中宏編	日本軍政とアジアの民族運動(研究双書316)		アジア経済研究所			1983年3月	日本軍政、アジア
岩武照彦	抗日根拠地における通貨および通貨政策—晋察冀辺区および晋冀魯予辺区の実例	史学雑誌		92(4)	415 ~ 448	1983年4月	抗日
笠原十九司	日中軍事協定と北京政府の「外蒙自治取消」—ロシア革命がもたらした東アジア世界の変動の一側面	歴史学研究		515	18 ~ 33、 49	1983年4月	日中
阿部洋	清末における学堂教育と日本人教育—直隸省の場合	磯辺武雄編著『アジアの教育と社会：多賀秋五郎博士古稀記念論文集』	不昧堂出版		335 ~ 352	1983年5月	教育
内田知之	閩錫山の民衆統制と抗日民族統一戦線	増淵龍夫先生退官記念論集刊行会『中国史における社会と民衆：増淵竜夫先生退官記念論集』	汲古書院		233 ~ 264	1983年5月	抗日民族統一戦線
兪辛焯	中国における日本外交史研究	紀要(愛知大・国際問題研)		73	175 ~ 178	1983年6月	日本外交史
浜下武志	近代アジア市場とイギリス	史海(東京学芸大)		30	2 ~ 13	1983年6月	アジア、イギリス
田中彰	日本人と東南アジア		小学館			1983年6月	東南アジア
富久俊一	在フィリピン日本関係資料について	アジア・アフリカ資料通報		21(4)	26 ~ 36	1983年7月	フィリピン
朴忠錫(佐々恵子訳)	韓・日両国の国際秩序観に対する比較研究—特に19世紀中葉の華夷観念の変容を中心に	国際学論集(上智大・国際関係研)		11	39 ~ 58	1983年7月	日韓
笠原十九司	日中軍事協定反対運動—五四運動戦後における中国民族運動の展開	人文研紀要(中央大)		2	89 ~ 142	1983年7月	五四運動
野沢豊	五四運動と省議会—民族運動の内部構造の検討にむけて	人文研紀要(中央大)		2	35 ~ 87	1983年7月	五四運動
黒羽清隆	日中戦争前史(三省堂選書100)		三省堂			1983年8月	日中戦争
向山寛夫	日本統治下における台湾の法と政治—民族法学の視点に立って	国学院法学		21(2)	61 ~ 106	1983年9月	台湾
水羽信男	近年日本における抗日民族統一戦線史研究について	東洋史研究室報告(広大)		5	38 ~ 43	1983年9月	抗日
兪辛焯	満州事変と幣原外交	日本史研究		253	30 ~ 60	1983年9月	満州事変
白井勝美	中国をめぐる近代日本外交		筑摩書房			1983年9月	日本外交
浅井得一	ビルマにおける花谷正中将の行動—大東亜戦争公刊戦史の限界について	政治経済史学		207	1 ~ 11	1983年10月	ビルマ、大東亜戦争

曾田三郎	五・四運動と国共関係の展開	今堀誠二編『中国へのアプローチャー—その歴史的展開』	勁草書房		253 ~ 287	1983年10月	五四運動
ウ・フラ (土橋泰子訳)	ビルマ=日本、経済見聞録 (その四)	史録 (鹿児島大・教養)		16	47 ~ 85	1983年11月	ビルマ
旗田巍	朝鮮と日本人		勁草書房			1983年11月	朝鮮
姜徳相	日本の朝鮮支配と民衆意識	歴史学研究		523	26 ~ 29	1983年12月	朝鮮支配
内海愛子・田辺寿夫	アジアからみた「大東亜共栄圏」(教科書に書かれなかった戦争2)		梨の木舎			1983年12月	大東亜共栄圏
萩原弘明・和田久徳・生田滋	ビルマ・タイ (世界現代史8、東南アジア現代史4)		山川出版社			1983年12月	ビルマ、タイ
森時彦他	五四運動の研究 第二函 (京都大学人文科学研究所共同研究報告)		同朋舎出版			1983年12月	五四運動
若林正文	台湾抗日ナショナリズムの問題 状況・再考	紀要 (東大・教養教養)		17	85 ~ 97	1984年	台湾、抗日
稲葉昭二	金沢に於ける清国人留学生の記録 (資料Ⅲ)	論集 (人文科学篇) (金沢大・教養)		22(2)	188 ~ 171	1984年	清国人留学生
西里善行	東アジア世界史研究の視点・方法・論点—諸説の検討	紀要 (琉球大・教育)		27	95 ~ 123	1984年1月	東アジア
来新夏 (幸田隆信・渡昌弘訳)	地方志研究の状況と趨勢	東洋史論集 (東北大)		1	219 ~ 238	1984年1月	地方志
任東権	日・韓文化交流の諸問題	社会科学研究 (中京大)		4(1)	1 ~ 23	1984年2月	日韓
根無喜一	日英同盟路線選択とイギリス外務省 ランズダウン外相とイギリス外務省	人文論究 (関学大)		33(4)	34 ~ 47	1984年2月	日英同盟
太田弘毅	日本軍制下フィリピンの地方行政制度	政治経済史学		211	22 ~ 40	1984年2月	フィリピン
芳賀登	中国と帝国主義—阿片戦争・太平天国・日本	田中正美先生退官記念論集刊行会編『中国近現代史の諸問題: 田中正美先生退官記念論集』	国書刊行会		87 ~ 123	1984年2月	帝国主義、中国、日本
周君適 (鄭然権訳)	悲劇の皇帝溥儀 偽満州国宮廷秘史		恒文社			1984年2月	満州国
若林正文	1923年東宮台湾行啓の〈状況的脈絡〉—天皇制の儀式戦略と日本植民地主義・その1	紀要 (東大・教養学科)		16	23 ~ 37	1984年3月	植民地
島川雅史	現人神と八紘一宇の思想—満州国建国神廟	史苑 (立教大)		43(2)	51 ~ 93	1984年3月	満州国
馬場毅	山東抗日根拠地における財政問題	史観 (早大)		110	43 ~ 60	1984年3月	抗日
堀口修	「日清通商航海条約」締結交渉について	中央史学		7	21 ~ 72	1984年3月	日清通商航海条約
田中美智子 (南塚信吾補筆)	三・一運動と日本人—日本国内の新聞報道をめぐって	朝鮮史研究会論文集		21	181 ~ 199	1984年3月	三一運動
金文子	三・一運動と金允植—独立請願書事件を中心に	寧楽史苑 (奈良女子大)		29	40 ~ 55	1984年3月	三一運動
平川祐弘	イタリア的特性とはなにか—地域研究者に求められる総合的判断の一例として	比較文化研究 (東大)		22	1 ~ 23	1984年3月	地域
岩壁義光	日清戦争と居留清国人問題—明治27年「勅令第137号」と横浜居留地	法政史学		36	61 ~ 79	1984年3月	日清戦争
小島晋治	中国からみた明治期の日本	歴史公論		10(3)	110 ~ 116	1984年3月	中国、日本
吉沢南	「大東亜共栄圏」とベトナム知識人	歴史公論		10(3)	117 ~ 124	1984年3月	大東亜共栄圏
李元淳	日本と韓国における歴史教育の問題点	史境		8	94 ~ 100	1984年4月	教育
太田弘毅	軍政下フィリピンにおける教育制度	政治経済史学		213	1 ~ 21	1984年4月	フィリピン

浅田喬二	最近における日本植民地の研究動向	土地制度史学		26(3)	58～63	1984年4月	植民地
兒嶋俊郎	日本帝国主義下の「満州」鉄道問題—「納付金」をめぐる関東軍と「満鉄」	三田学会雑誌		77(1)	111～122	1984年4月	日本帝国主義、満州、満鉄
徐建東・王維遠 (福地圭子訳)	九・一八事変発生地名考	歴史評論		408	68～71	1984年4月	満州事変
小林共明	初期の中国対日留学生派遣について—戊辰政変期を中心として	辛亥革命研究		4	1～16	1984年5月	中国対日留学生
井上久士	日本における抗日根拠地研究の動向	近きに在りて		5	63～72	1984年5月	抗日
笠原十九司	地域からみた教科書問題—ゼミ討議をとおして考えたこと	近きに在りて		5	26～34	1984年5月	地域
波多野澄雄	日独伊三国同盟に関する若干の史料	軍事史学		20(1)	51～62	1984年6月	日独伊三国同盟
後藤乾一	日本軍制期のインドネシアにおける「労務者問題」覚書	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		29(3)	607～640	1984年6月	インドネシア
後藤乾一	海軍南進論と「インドネシア問題」（上）	アジア研究		31(2)	1～38	1984年7月	（日本）海軍、インドネシア
佐々木太郎	抗日民族統一戦線運動の一考察—1930年代「満州」を中心として（上）	月刊アジア・アフリカ研究		24(7)	42～59	1984年7月	抗日、満州
佐々木太郎	抗日民族統一戦線運動の一考察—1931年代「満州」を中心として（中）	月刊アジア・アフリカ研究		24(8)	31～40	1984年8月	抗日、満州
宮嶋博史	方法としての東アジア—東アジア三国における近代への移行をめぐって	歴史評論		412	9～23、39	1984年8月	東アジア
鈴木静夫・横山真佳編著	神聖国家日本とアジア—占領下の反日の原像		勁草書房			1984年8月	反日
佐々木太郎	抗日民族統一戦線運動の一考察—1932年代「満州」を中心として（下）	アジア・アフリカ研究		24(9)	53～69	1984年9月	抗日、満州
市川信愛・吉田藤一	日本の華僑学校・覚え書き—その沿革と存在形態に関する一考察	紀要（社会科学）（宮崎大・教養）		56	1～24	1984年9月	日本、華僑
三宅正樹	政軍関係理論から見た二・二六事件とカップ—揆	軍事史学		20(2)	36～50	1984年9月	二・二六事件
後藤乾一	日本軍政とインドネシア独立問題—日本側関係者の回想録を手掛かりに	社会科学討究（早大アジア太平洋研究センター）		30(1)	99～134	1984年9月	インドネシア
河村一夫	盛京將軍趙爾巽と日本との関係（上）	政治経済史学		218	1～9	1984年9月	趙爾巽、日本
真鍋篤行	天津の五四運動における指導と同盟	東洋史研究室報告（広大）		6	11～23	1984年9月	五四運動
水羽信男	抗日知識人の対国民党認識に関する覚書—抗日をめぐる内外政策を中心として	東洋史研究室報告（広大）		6	24～33	1984年9月	抗日
堀和生	植民地期朝鮮の電力業と統制政策—一九三〇年以降を中心に	日本史研究		265	1～36	1984年9月	植民地
金泰燁	抗日朝鮮人の証言		不二出版			1984年9月	抗日
後藤乾一	海軍南進論と「インドネシア問題」（下）	アジア研究		31(3)	33～69	1984年10月	（日本）海軍、インドネシア
井上久士	抗日根拠地に関する国際シンポジウムと最近の抗日根拠地研究	近きに在りて		6	54～58	1984年11月	抗日、植民地
丁日初杜恂成 (中国現代史研究会池田誠監訳)	19世紀中国・日本における資本主義的近代化の成否の原因に関する初歩的分析—『歴史研究』1983年第1期所収	立命館法学		174	282～309	1984年11月	中国、日本
愛新覚羅浩	「流転の王妃」の昭和史—幻の「満州国」		主婦と生活社			1984年11月	満州国
志水速雄	日本人のロシア・コンプレックス		中央公論社			1984年11月	ロシア
森山茂徳	日韓併合—日本の朝鮮保護政治について	紀要（東大・東文研）		96	1～52	1984年12月	日韓併合

白取道博	「滿蒙開拓青少年義勇軍」の創設過程	紀要(北大・教育)		45	189 ~ 222	1984年12月	滿蒙
河村一夫	盛京將軍趙爾巽と日本との関係(中)	政治経済史学		221	22 ~ 31	1984年12月	趙爾巽
朴宗根	日清戦争と朝鮮貿易—日本による朝鮮対外貿易の支配過程	歴史学研究		536	1 ~ 17	1984年12月	日清戦争
小林英夫	戦後世界と日本・東アジア	歴史評論		416	80 ~ 104	1984年12月	日本、東アジア
有馬勝良(編)	満鉄の設立命令書と定款〈満鉄研究資料シリーズ第1巻〉		竜溪書舎			1984年12月	満鉄
石島紀之	中国抗日戦争史		青木書店			1984年12月	抗日
久保田文次	孫文と日本の政治家・軍人・右翼	紀要(日本女大・文)		35	25 ~ 34	1985年	孫文
郭大鈞(安井三吉訳解説)	「九・一八」から「八・一三」に至る国民党政府の対日政策の変遷	立命館法学		181	324 ~ 360	1985年	抗日
西村成雄・池田誠訳解説	華北抗日根拠地における経済繁栄への道	立命館法学		182	564 ~ 578	1985年	抗日
井上勇一	錦愛鉄道をめぐる国際関係—日露通商の展開と日英同盟の変質	法学研究(慶大)		58(1)	62 ~ 91	1985年1月	日英同盟
渋沢雅英	日本はアジアか—変革の航路を求めて		サイマル出版会			1985年1月	日本、アジア
竹内実他	五四運動の研究 第三函〈京都大学人文科学研究所共同報告〉		同朋舎出版			1985年1月	五四運動
津野梅太郎	物語・日本人の占領〈朝日選書269〉		朝日新聞社			1985年1月	日本帝国主義
西嶋定生	日本歴史の国際環境〈UP選書235〉		東京大学出版会			1985年1月	日本
副島昭一	戦前期中国在留日本人職業別人口統計—1889年~1929年	紀要(人文科学)(和歌山大・教育)		34	1 ~ 63	1985年2月	中国在留日本人
日本土地法学会(編)	ヨーロッパ・近代日本の所有観念と土地公有論		有斐閣			1985年2月	ヨーロッパ、日本
清水元	戦前期シンガポール・マラヤにおける法人経済進出の形態—職業別人口調査を中心として	アジア研究		26(3)	13 ~ 32	1985年3月	シンガポール
橋谷弘	戦前期東南アジア在留邦人人口の動向—他地域との比較	アジア研究		26(3)	7 ~ 12	1985年3月	東南アジア、在留邦人
橋谷弘	戦前期フィリピンにおける法人経済進出の形態—職業別人口調査を中心として	アジア研究		26(3)	33 ~ 51	1985年3月	フィリピン
村山良忠	戦前期オランダ領東インドにおける邦人経済進出の形態—職業別人口調査を中心として	アジア研究		26(3)	52 ~ 69	1985年3月	オランダ領、東インド
稲生典太郎・大山梓	東アジアにおける不平等条約の改正と解消	紀要(史学科)(中央大・文)		116	1 ~ 16	1985年3月	不平等条約、東アジア
村井友秀	明治前期日本における中国脅威論	紀要(社会科学分冊)(防衛大)		50	63 ~ 124	1985年3月	日本、中国
馬場明	対中国借款と原内閣一財政援助問題	紀要(国学院大)		23	36 ~ 64	1985年3月	対中国借款
増田史郎亮	「長崎華僑時中小学校」沿革小史—その1	教育科学研究報告(長崎大・教育)		32	9 ~ 14	1985年3月	長崎、華僑
安井三吉	講演「大亜細亜問題」について—孫文と神戸(1924年)	近代(神戸大)		61	103 ~ 134	1985年3月	大亜細亜問題
平井廣一	日本植民地地下における朝鮮鉄道財政の展開過程	経済学研究(北大)		34(4)	12 ~ 32	1985年3月	植民地
宇野重昭	日本における地域研究の一考察—東南アジア研究と中国研究の対比の視点から	所報(成蹊大・アジア太平洋研究センター)		1	1 ~ 9	1985年3月	地域
広瀬貞三	19世紀末日本の朝鮮鉱山利権獲得について—忠清道稷山金鉱を中心に	朝鮮史研究会論文集		22	167 ~ 187	1985年3月	朝鮮
香島明雄	旧満州産業をめぐる戦後処理—中ソ合弁交渉の挫折を中心に	論集(国際関係系列)(京都産業大)		12	1 ~ 50	1985年3月	満州
吉川洋子	日比賠償外交交渉	論集(国際関係系列)(京都産業大)		12	186 ~ 225	1985年3月	フィリピン

工藤美知尋	日ソ中立条約の研究		南窓社			1985年3月	日ソ
慶応国際シンポジウム編集委員会(編)	アジアと日本—近代化への道とアイデンティティを求めて〈創立125周年記念慶応国際シンポジウム〉		勁草書房			1985年3月	アジア、近代化
横山英	アジア史における地域と国家的統一の研究—昭和59年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書					1985年3月	地域
中村治	紅軍東征—抗日民族統一戦線形成への一考察	茅茨(青山学院大)		1	79～88	1985年4月	抗日
広沢吉平	太平天国、その土地政策と明治維新—清朝末期	紀要(旭川大)		20	1～44	1985年4月	太平天国
山根幸夫	袁世凱と日本人たち—坂西利八郎を中心として	社会科学討究(早大アジア太平洋研究センター)		30(3)	49～67	1985年4月	日中関係
浜下武志	近代アジア貿易圏における銀流通—アジア経済史像に関する一構想	社会経済史学		51(1)	54～90	1985年4月	近代アジア、銀
浅田喬二	日本知識人の植民地認識		校倉書房			1985年4月	植民地
新保満	カナダ移民排斥史—日本漁民移民		未来社			1985年4月	排日
藤原彰	南京大虐殺〈岩波ブックレットNo.43〉		岩波書店			1985年4月	南京大虐殺
太田弘毅	日本軍政下のフィリピン経済—通貨・財政・金融	政治経済史学		226	30～51	1985年5月	フィリピン
河村一夫	盛京將軍趙爾巽と日本との関係(下)	政治経済史学		226	52～56	1985年5月	日中関係
半沢純太	田中義一内閣期を中心とする北東アジア	政治経済史学		226	1～29	1985年5月	北東アジア
小川哲雄	日中戦争史話		原書房			1985年5月	日中戦争
古屋哲夫	日中戦争〈岩波新書黄版302〉		岩波書店			1985年5月	日中戦争
平野蕃	満鉄の中国東北における農村・農業調査	アジア経済		26(6)	83～102	1985年6月	満鉄
判沢純太	「北伐」武断政策と日本外交—幣原外交と田中を繋ぐもの	軍事史学		21(1)	14～28	1985年6月	北伐
奈倉文二	旧「満州」鞍山製鉄所の経営発展と生産技術—原料資料条件の関連を中心	政経雑誌(茨城大)		50	19～40	1985年6月	満州
飯沼二郎・韓哲曦	日本帝国主義下の朝鮮伝道		日本基督教団出版			1985年6月	日本帝国主義
武田英克	満州脱出—満州中央銀行幹部の体験(中公新書769)		中央公論社			1985年6月	満州
和田春樹	金日成と満州の抗日武装闘争	思想		733	55～83	1985年7月	抗日
田中仁	抗日民族統一戦線をめぐる王明と中国共産党	歴史評論		423	35～47	1985年7月	抗日
江口圭一編者	資料日中戦争阿片政策—蒙疆政権資料を中心に		岩波書店			1985年7月	日中戦争
李景珉	朝鮮総督府終焉期の政策	思想		734	98～121	1985年8月	朝鮮総督府
坂本夏男	盧溝橋事件の通説に関する一考察「七七事変紀実」の検討を中心として	皇学館論叢		18(4)	1～27	1985年8月	盧溝橋事件
半沢純太	蒙疆銀行に為替管理政策—日華事変をめぐり地域運命共同体の建設を挫折	政治経済史学		231	1～28	1985年8月	日華事変、地域運命共同体
堀口修	日清講和条約案の起草過程について(I)	政治経済史学		230	33～50	1985年8月	日清講和条約
堀口修	日清講和条約案の起草過程について(II)	政治経済史学		231	49～70	1985年8月	日清講和条約
宍倉壽郎	関東軍参謀部		PHP研究所			1985年8月	関東軍

譚□(王偏に略) 美	遙かなる広州一日中近代史のは ざまにて		六興出版			1985年8月	日中関係
芝原拓自	日中両国の近代化をめぐる一 19世紀後半における対比的分析	オイコノミカ(名古 屋市大)		22-2	113 ~ 120	1985年9月	日中関係
和田春樹	金日成と満州の抗日武装闘争 (続)	思想		735	38 ~ 71	1985年9月	抗日
久保田文次	孫文の対日観	辛亥革命研究会編 『中国近現代史論集: 菊池貴晴先生追悼論 集』	汲古書院		393 ~ 412	1985年9月	対日観
小島淑男	辛亥革命期中国留日学生の動向 武昌蜂起から中華民国成立まで	辛亥革命研究会編 『中国近現代史論集: 菊池貴晴先生追悼論 集』	汲古書院		311 ~ 328	1985年9月	辛亥革命
松本武彦	対日ボイコットと在日華僑 第二辰新丸事件をめぐる	辛亥革命研究会編 『中国近現代史論集: 菊池貴晴先生追悼論 集』	汲古書院		221 ~ 250	1985年9月	華僑
山根幸夫	中国の共和制と日本の対応 辛亥革命の際における	辛亥革命研究会編 『中国近現代史論集: 菊池貴晴先生追悼論 集』	汲古書院		351 ~ 370	1985年9月	辛亥革命
石田喜與司	帰らざるノモンハン一日満ソ蒙 国境確定交渉秘話		芙蓉書房			1985年9月	ノモンハン
中村平治・きり 山昇(編)	アジア1945年—「大東亜共栄圏」 壊滅のとき		青木書店			1985年9月	大東亜共栄圏
林懐秋・石山正 夫編	中国少年の見た日本軍 日本語 で綴る10人の証言		青木書店			1985年9月	日中関係
永末嘉孝	魯迅と長崎	未名		5	77 ~ 93	1985年10月	長崎
弘谷多喜夫	台湾の植民地支配と天皇制	歴史学研究		547	163 ~ 173	1985年10月	台湾、植民地
黄自進	吉野作造と中国一五四運動を中 心に	論文集(慶大・院・法)		22	81 ~ 100	1985年10月	五四運動
陳徳仁・安井三 吉	孫文と神戸(シリーズ兵庫の歴 史3)		神戸新聞出版セン ター			1985年10月	孫文
溝口房雄	華北農業に関する満鉄の調査研 究活動	アジア経済		26(11)	72 ~ 93	1985年11月	満鉄
中村哲	歴史学におけるアジア認識の課 題—小谷汪之氏の近業をめぐる て	新しい歴史学のため に		181	1 ~ 16	1985年11月	アジア認識
洞富雄編	日中戦争・南京大虐殺事件資料 集(全2巻)		青木書店			1985年11月	日中戦争、南京大 虐殺
歴史学研究会 (編)	アジア現代史(別巻現代アジア への視点)		青木書店			1985年11月	アジア
太田弘毅	フィリピンにおける日本軍政と 宗教政策	政治経済史学		236	42 ~ 60	1985年12月	フィリピン
小島淑男	辛亥革命と千葉医専 留日学生 同盟中国紅十字隊を中心に	千葉史学		7	36 ~ 55	1985年12月	辛亥革命
アウイヘッパハ (許介麟訳)	証言霧社事件—台湾山地人の抗 日蜂起		草風館			1985年12月	台湾、抗日
比較史・比較歴 史教育研究会 (編)	共同討議日本・中国・韓国—「自 国史と世界史」東アジア歴史 教育シンポジウム記録		ほるぷ出版			1985年12月	教育
三枝壽勝	八・一五以後における親日派問 題—解放後の朝鮮文学	朝鮮学報		118	65 ~ 114	1986年1月	朝鮮文学
石島紀之	南京事件をめぐる新たな論争点	日本史研究		281	149 ~ 161	1986年1月	南京事件
安井三吉	日中戦争史研究ノート—「抗日 戦争と世界反ファシズム戦争勝 利40周年」に寄せて	日本史研究		281	141 ~ 148	1986年1月	日中戦争
吉田裕	天皇の軍隊と南京事件—もうひ とつの日中戦争		青木書店			1986年1月	南京事件、日中戦 争
副島昭一	朝鮮における日本の領事館警察	紀要(人文科学)(和 歌山大・教育)		35	148 ~ 125	1986年2月	日朝関係
金子文夫	第一次大戦後の対植民地投資— 中小商工業者の進出を中心に	社会経済史学		51(6)	720 ~ 767	1986年2月	植民地

大豆生田稔	日中戦争開戦当初における対植民地・「満州」米政策	城西人文研究		13	380～357	1986年2月	日中戦争
太田弘毅	フィリピンにおける日本軍政と日本語教育	政治経済史学		238	28～41	1986年2月	フィリピン
李良志（田中仁訳解説）	抗日戦争勝利の偉大な意義	立命館史学		180	218～236	1986年2月	抗日
浅田喬二・小林英夫編	日本帝国主義の満州支配		時潮社			1986年2月	日本帝国主義、満州
秦郁彦	南京事件「虐殺」の構造（中公新書795）		中央公論社			1986年2月	南京事件
波田野勝	辛亥革命と日本海軍の対応（上）	軍事史学		21(4)	14～22	1986年3月	辛亥革命
義井博	1940年における政戦略決定過程と日独伊三国同盟	人文社会研究（名古屋大・教養）		30	217～272	1986年3月	日独伊三国同盟
清水良三	日独伊三国同盟とソ連邦との関係	政経論集（国士館大）		55	1～45	1986年3月	日独伊三国同盟
伊東昭雄	清仏戦争と東アジア・試論—日本人の反応について	大学論集（人文科学系列）（横浜市大）		37(2・3)	73～130	1986年3月	清仏戦争、東アジア
山根幸夫	女子大生は日中戦争をこう考える—再び女子大生の中国観について	中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢編集委員会編『東洋史論叢：中村治兵衛先生古希記念』	刀水書房		484～499	1986年3月	日中戦争
岩間一雄	西洋の衝撃と日本・中国	法学会雑誌（岡山大）		35(3・4)	473～503	1986年3月	西洋の衝撃
国家資本輸出研究会（編）	日本の資本輸出—対中国借款の研究		多賀出版			1986年3月	日中関係
後藤乾一	昭和期日本とインドネシア—1930年代「南進」の論理・「日本観」の系譜		勁草書房			1986年3月	インドネシア、南進
清水元編	両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相（研究叢書346）		アジア経済研究所			1986年3月	東南アジア
洞富雄	南京大虐殺の証明		朝日新聞社			1986年3月	南京大虐殺
鈴木晟	日中戦争期におけるアメリカ対日経済制裁と対華援助	アジア研究		33(1)	41～74	1986年4月	日中戦争
徐新吾（奥村哲訳・解説）	中国・日本の綿紡織業における資本主義萌芽の比較研究	歴史の理論と教育		66・67	1～15	1986年4月	日中関係
笠原十九司	「南京大虐殺」に対する中国学生の意識	歴史評論		432	42～48	1986年4月	南京大虐殺
君島和彦・井上久士	「南京大虐殺」評価に関する最近の動向	歴史評論		432	29～41、106	1986年4月	南京大虐殺
公平愼策	東南アジアと日本人		サイマル出版会			1986年4月	東南アジア
小林正弘	シンガポールの日本軍—日本人の東南アジア観にふれながら		平和文化			1986年4月	シンガポール
寺本康俊	満州占領地軍政への清国官民の抗議と日本の対応	政治経済史学		241	53～73	1986年5月	満州
白石昌也	第二次大戦期の日本の対インドネシア経済政策	東南アジア 歴史と文化		15	28～62	1986年5月	インドネシア
浅野孝夫	アジアと日本100年の経済ドラマ—マレー半島興隆記		東洋経済新報社			1986年5月	アジア、マレー半島
高興祖（牧野篤訳）	南京大虐殺—日本軍の中国侵略と暴行		日本教職員組合国民教育研究所			1986年5月	南京大虐殺
吉沢南	戦争拡大の構図—日本軍の「仏印進駐」		青木書店			1986年5月	仏印進駐
波多野勝	辛亥革命と日本海軍の対応（下）	軍事史学		22(1)	45～56	1986年6月	辛亥革命
柳沢遊	1910年代日本人貿易商人の青島進出	産業経済研究（久留米大）		27(1)	203～239	1986年6月	青島
橋本寿朗	世界大恐慌と日本資本主義	経営志林（法大）		23(2)	39～58	1986年7月	世界大恐慌
平野正	1947年の対日講和論議における中国の琉球帰属論	国際文化論集（西南学院大）		1(1)	83～112	1986年7月	琉球、中国

芳井研一	「満蒙」鉄道問題の展開と田中内閣	人文科学研究 (新潟大)		69	1 ~ 46	1986年7月	満鉄
平木実	明治期における天理教の朝鮮・韓国伝教史	朝鮮学報		119・120	1 ~ 40	1986年7月	十五年戦争
須藤真志	日米通商条約(1911年)廃棄の背景	論集(京都産業大)		13	119 ~ 139	1986年7月	日米関係
原覺天	満鉄調査部とアジア		世界書院			1986年7月	満鉄調査部
六角恒廣	東亜同文書院の中国語教育	早稲田商学		318	303 ~ 339	1986年8月	教育
易顕石他(早川正訳)	九・一八事変史 中国側からみた「満州事変」		新時代社			1986年8月	満州事変
許雲樵・蔡史君原編(田中宏他訳)	日本占領下のシンガポール—華人虐殺事件の証明		青木書店			1986年8月	シンガポール
永井和	東アジアにおける国際関係の変容と日本近代—(中華帝国体制)の解体と(近代帝国支配体制)	日本史研究		289	102 ~ 129	1986年9月	東アジア
小林一美	義和団戦争と明治国家		汲古書院			1986年9月	義和団
兪幸焯	満州事変期の中日外交史研究		東方書店			1986年9月	満州事変
吉沢南	私たちの中のアジアの戦争—仏領インドシナの「日本人」(朝日選書314)		朝日新聞社			1986年9月	インドシナ
依田憲家	日中両国の近代化の比較研究序説		竜溪書舎			1986年9月	日中関係、近代化
松本武彦	日本における辛亥革命の史蹟と史料(3)	辛亥革命研究		6	67 ~ 78	1986年10月	辛亥革命
李廷江	辛亥革命と日本の対応 中央銀行設立構想について	辛亥革命研究		6	25 ~ 44	1986年10月	辛亥革命
梶村秀樹	近代朝鮮の商人資本等の外圧への諸対応—甲午以降(1894 ~ 1904年)期の「商権」問題と生産過程	歴史学研究		560	148 ~ 158	1986年10月	日朝関係
杉山伸也	東アジアにおける「外圧」の構造	歴史学研究		560	128 ~ 138	1986年10月	東アジア
宮嶋博史	近代アジアの政治変革と君主制	歴史評論		438	1 ~ 9	1986年10月	近代、アジア
石堂清倫他	十五年戦争と満鉄調査部		原書房			1986年10月	十五年戦争、満鉄調査部
上村希美雄	戦後史のなかのアジア主義—竹中好を中心に	歴史学研究		561	41 ~ 53	1986年11月	アジア主義
江口圭一	十五年戦争小史		青木書店			1986年11月	十五年戦争
佐藤宏	抗日根拠地に関する最近の資料概観	アジア経済		27(12)	66 ~ 75	1986年12月	抗日
藤維藻・奥崎裕司・王仲華・小林一美編	東アジア世界史探求					1986年12月	東アジア
藤間生大	東アジア世界史の研究と現代の歴史認識	藤維藻他編『東アジア世界史探求』	汲古書院		66 ~ 83	1986年12月	東アジア
小島晋治・小林一美・久保田文次	日中両国の専制体制と農民闘争(座談会)	藤維藻他編『東アジア世界史探求』	汲古書院		344 ~ 367	1986年12月	日中関係
小林一美	明治期日本参謀本部の対外諜報活動—日清・義和団・日露三大戦争に向けて	藤維藻他編『東アジア世界史探求』	汲古書院		387 ~ 406	1986年12月	日清・日露戦争
魏宏運(丸山朋之訳)	第一次大戦期における中国の協業化と日本帝国主義	藤維藻他編『東アジア世界史探求』	汲古書院		451 ~ 464	1986年12月	日本帝国主義
仁明・呂偉俊(中村浩訳)	抗日戦争期の中国人民の山東地区における反戦活動	藤維藻他編『東アジア世界史探求』	汲古書院		496 ~ 511	1986年12月	抗日
井上久士	国民政府と抗日民族統一戦線の形成 第二次国共合作論への一視角	中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』	汲古書院		317 ~ 342	1986年12月	抗日

今井駿	対抗日戦と蒋介石	中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』	汲古書院		343～372	1986年12月	抗日
坂本夏男	ソ連の対日参戦についての一考察—ヤルタ協定を中心として	紀要(皇学館大)		25	171～189	1987年1月	日ソ
澤護	箱館戦争に荷担した10人のフランス人	研究論集(千葉敬愛経済大)		31	259～307	1987年1月	箱館戦争
山田辰雄	廖仲愷の二度の訪日について—一九二二・二三年	法学研究(慶大)		60(1)	79～105	1987年1月	日中関係
遠藤光正	山本梅崖の見た日清戦争後の中国—『燕山楚水紀遊』を中心として	東洋研究(大東文化大)		82	57～88	1987年2月	日清戦争
吉田裕	一五年戦争史研究と戦争責任問題—南京事件を中心に	一橋論叢		97(2)	196-215	1987年2月	十五年戦争
ヒュー・ポートン(堀真訳)	降伏前におけるアメリカの対日戦後計画(上)	法学論集(西南学院大)		19(3)	95～115	1987年2月	日米関係
平野健一郎	アジアにおける〈中央と地方〉—歴史と展望	アジア研究		33(3・4)	1～17	1987年3月	アジア
田嶋信雄	日独防共協定像の再構成(一)	成城法学		24	139～188	1987年3月	日独防共協定
藤永壮	植民地下日本人漁業資本家の存在形態—李垰家漁場をめぐる朝鮮人漁民との葛藤	朝鮮史研究会論文集		24	127～154	1987年3月	植民地
細谷正宏	アメリカの対日占領政策の“緩和”について—集中排除審査委員会とサルウィン・メモ	同志社アメリカ研究		23	71～76	1987年3月	日米関係、対日占領政策
北政巳	朝鮮半島の紛争解決と日本の役割—歴史的アプローチ	平和研究(創価大・平和問題研)		8	37～54	1987年3月	朝鮮
谷川榮彦	太平洋戦争と東南アジア民族独立運動	法学研究(九大)		53(3)	361～398	1987年3月	東南アジア、独立
田中明	ある朝鮮知識人の対日誤判	報告(拓殖大・海外事情研)		21	117～128	1987年3月	朝鮮、知識人
妻向哲	日本と直隸派軍閥集団	立命館法学		188～190	653～659	1987年3月	日中関係
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会(編)	アジアの声 第1集		東方出版			1987年3月	アジア総論 侵略戦争
永積昭	月は東に日は西に—東南アジアと日本の間		同文館出版			1987年3月	東南アジア
藤間生大	壬午事変と近代東アジア世界の成立(東アジア世界の形成第三卷)		春秋社			1987年3月	東アジア
松浦玲	明治の海舟とアジア		岩波書店			1987年4月	アジア
河村一夫	青木周蔵外相の対韓政策	韓		106	96～144	1987年5月	日韓関係
旗田巍編	朝鮮の近代史と日本		大和書房			1987年5月	近代史
ルベン・アビト	これからのフィリピンと日本		亜紀書房			1987年5月	フィリピン
ポール・W. シュレーダー(永橋弘价訳)	日独伊枢軸同盟と日米関係(1)	政経論集(国土館大)		60	63～95	1987年6月	日独伊枢軸同盟
明石書店編	資料中国人強制連行		明石書店			1987年6月	強制連行
河野健二編	近代革命とアジア		名古屋大学出版会			1987年6月	アジア
桜本富雄	満蒙開拓青少年義勇軍		青木書店			1987年6月	満州
旗田巍編	日本は朝鮮で何を教えたか		あゆみ出版			1987年6月	日朝関係
清水元	近代日本における「東南アジア」地域概念の成立(Ⅱ)—小・中学校地理教科書にみる	アジア経済		28(7)	22～38	1987年7月	東南アジア地域概念

深澤安博	スペイン内戦と日中戦争一日・ 西外務省文書を中心に	歴史評論		447	42 ~ 53	1987年7月	日中戦争
洞健二・藤原 彰・本多勝一編 著	南京事件を考える		大月書店			1987年8月	南京事件
佐古丞	松岡洋右の中国認識と対応—満 州事変まで	法学論叢(京大)		121(6)	82 ~ 115	1987年9月	満州事変
黄自進	犬養毅と中国—北清事変を中心 に	論文集(慶大・院・ 法学研究科)		26	47 ~ 63	1987年9月	日中関係
高坂晶子	幣原・モーリス会談—排日移民 問題に関する一考察	論文集(慶大・院・ 法学研究科)		26	129 ~ 146	1987年9月	排日
浅古弘	日清修好条規に於ける観審の成 立	島田正郎博士頌壽記 念論集刊行委員会編 「東洋法史の探究： 島田正郎博士頌壽記 念論集」	汲古書院		533 ~ 586	1987年9月	日清修好条規
永野慎一郎	日本の朝鮮半島政策—その変遷 と展望	経済論集(大東文化 大)		44	155 ~ 188	1987年10月	朝鮮
王曉秋・清水 稔・里見信也・ 劉健強(編)	近代における中日交流文化につ いて	鷹陵史学		13	57 ~ 83	1987年10月	日中関係
島田虔次他	五四運動の研究 第四函		同朋舎出版			1987年10月	五四運動
宓汝成(依田憲 家訳)	帝国主義と中国の鉄道		竜溪書舎			1987年10月	帝国主義
飯島渉	辛亥革命と日本—東京商業会議 所「支那動乱ニ関スル調査書類」 を中心に	辛亥革命研究		7	81 ~ 92	1987年11月	辛亥革命
姜東鎮(高崎宗 司訳)	韓国から見た日本近代史 上		青木書店			1987年11月	韓国、近代
坂元一哉	アイゼンハウアーの外交戦略と 日本—1953 ~ 1954年(1)	法学論叢(京大)		122(3)	59 ~ 77	1987年12月	日米関係
姜東鎮(高崎宗 司訳)	韓国から見た日本近代史 下		青木書店			1987年12月	韓国、近代
東史郎	わが南京プラトーン—召集兵の 見た南京大虐殺		青木書店			1987年12月	南京大虐殺
竹中亨	第一次大戦前の日本市場におけ るジューメンス社の営業活動	紀要(東海大・文)		50	79 ~ 94	1988年	第一次大戦
中達啓示	アイゼンハワー政権と朝鮮停戦 「大量報復」戦略を軸に	社会文化研究(広島 大・総合科学)		14	29 ~ 53	1988年	米朝関係
川成洋	スペイン戦争と日本人—ブルネ テの戦闘とジャック白井の戦死	紀要(法大・教養)		67	45 ~ 73	1988年1月	スペイン戦争
水羽信男	抗日言論の一潮流 「自由評論」 誌上にみえる抗日論	史学研究		178	23 ~ 42	1988年1月	日中関係
西修	極東委員会と日本国憲法(1)	法学論集(駒沢大・ 法)		36	1 ~ 50	1988年1月	占領史
朴来鳳・松嶋光 保訳	日帝統治下の書堂教育の実態 濟州島(1)	韓		109	77 ~ 119	1988年2月	濟州島
荒木重雄(編)	アジアへの視点		勁草書房			1988年2月	アジア
安藤彦太郎	中国語と近代日本		岩波書店			1988年2月	中国語、近代日本
波多野勝	フィリピン独立運動と日本の対 応	アジア研究		34(4)	69 ~ 95	1988年3月	フィリピン
海野福寿	朝鮮人軍夫の沖縄戦	駿台史学		73	125 ~ 141	1988年3月	朝鮮、沖縄
白井勝美	1937年日中関係瞥見	筑波法政(筑波大)		11	4 ~ 20	1988年3月	日中関係
細谷正宏	アメリカの対日占領政策の「転 換」—改革から復興へ	同志社アメリカ研究		24	135 ~ 152	1988年3月	日米関係、対日占 領政策
川本勉	戊戌政変に対する日本の認識と 対応	法政史論		14	37 ~ 55	1988年3月	日中関係
三輪隆	アメリカ国務省における戦後天 皇制構想	歴史学研究		591	10 ~ 19	1988年3月	日米関係
宮川謙三・徳永 正二郎編	アジア経済の発展と日本の対応		九州大学出版会			1988年4月	アジア

家永三郎	正木ひろしの見た日本の中国侵略 正木所蔵の「捕虜処刑」写真及び解説	近きに在りて		13	2～5	1988年5月	日中関係
姜在彦	玄界灘に架けた歴史—日朝関係の光と影		大阪書籍			1988年5月	日朝関係
吉留路樹	日韓併合の真相		世論時報社			1988年5月	日朝関係
平野正	抗日民族統一戦線への視角をめぐって 中国共産党の指導性に関連して	中国 社会と文化		3	184～190	1988年6月	日中関係
石井明	日華平和条約の交渉過程 日本側第一次条約草案をめぐって	中国 社会と文化		3	203～210	1988年6月	日中関係
平野健一郎	米国における日中関係史研究の近況一瞥	中国 社会と文化		3	277～280	1988年6月	日中関係
大和和明	植民地期朝鮮地方行政に関する一試論—面制の確立過程を中心に	歴史評論		458	40～61	1988年6月	植民地
檜山真一	日本におけるネボガートフ提督	ロシア史研究		46	71～86	1988年6月	日露関係
坂本一哉	アイゼンハウアーの外交戦略と日本 1953-1954年(二)・完	法学論叢(京大)		123(3)	71～94	1988年6月	日米関係
佐々木隆爾	世界史の中のアジアと日本—アメリカの世界戦略と日本戦後史の視座		御茶の水書房			1988年6月	日米関係
古川万太郎	改訂・増補新装版 日中戦後関係史		原書房			1988年6月	日中関係
松本雅明	松本雅明著作集 東アジアにおける文化の交流		弘生書林			1988年6月	東アジア総論
矢内原忠雄	帝国主義下の台湾		岩波書店			1988年6月	台湾
藤原彰・今井清一(編)	十五年戦争史 1 満州事変		青木書店			1988年6月	十五年戦争史
藤原彰・今井清一(編)	十五年戦争史 2 日中戦争		青木書店			1988年7月	十五年戦争史
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第2集		東方出版			1988年7月	アジア総論 侵略戦争
江口圭一	日中アヘン戦争(岩波新書赤版29)		岩波書店			1988年7月	日中関係
古澤健一	昭和秘史 日中友好条約		講談社			1988年7月	日中関係
吉沢南	ベトナム戦争と日本(岩波ブックレット シリーズ昭和史)		岩波書店			1988年7月	ベトナム戦争
眞鍋俊二	ドイツ占領研究の現代的課題 日本占領との比較を念頭におきつつ	法政論集(名大)		121	133～160	1988年8月	占領史研究
内海愛子	日本の戦争責任とアジア	歴史評論		460	40～50	1988年8月	戦争責任
小林英夫	大東亜共栄圏(岩波ブックレット シリーズ昭和史)		岩波書店			1988年8月	大東亜共栄圏
許南英	族譜 日本のなかの朝鮮		平凡社			1988年8月	日朝関係
竹中亨	第一次大戦前におけるジューメンズ社の対日業績	紀要(東海大・文)		49	1～16	1988年9月	第一次大戦
永橋弘价	アメリカの対日政策 1931-1941	政経論叢(国士館大)		65	1～44	1988年9月	日米関係
江口圭一	十五年戦争の開幕(昭和の歴史4)		小学館			1988年9月	十五年戦争
武藤富男	私と満州国		文藝春秋			1988年9月	日中関係
石坂浩一	日本人社会主義者の朝鮮認識 1910年代についての考察	史苑		48(2)	44～64	1988年10月	日朝関係
春山明哲	台湾旧慣調査と立法構想 岡松参太郎による調査と立案を中心に	台湾近現代史研究		6	81～114	1988年10月	台湾関係

森久男	田口卯吉の台湾統治政策批判	台湾近現代史研究		6	57 ~ 80	1988年10月	台湾関係
豊下楯彦	日本占領管理体制の形成過程 問題の「特異性」とロンドン外相 会議	法学論叢(京大)		124(1)	1 ~ 39	1988年10月	占領史研究
藤原彰	新版 南京大虐殺		岩波書店			1988年10月	日中関係
依田憲家	日本帝国主義と中国		龍溪書舎			1988年10月	日中関係
梶原あい	1930年代、上海ブルジョワジー の「抗日」運動 上海市徐匯区工 商連合会訪問記	近きに在りて		14	53 ~ 64	1988年11月	日中関係
岡崎邦彦	1950年代の日中関係	東洋研究 (大東文化 大・東洋研)		88	63 ~ 118	1988年11月	日中関係
高橋秀直	1880年代の朝鮮問題と国際政治 日清戦争への道をめぐって	史林		71(6)	29 ~ 69	1988年11月	日朝関係
田中正俊	清仏戦争と日本の帝政党系新聞 の論調	榎博士頌寿記念東洋 史論叢編纂委員会編 『東洋史論叢：榎博 士頌寿記念』	汲古書院		511 ~ 540	1988年11月	日中関係
韓哲曦	日本の朝鮮支配と宗教政策		未来社			1988年11月	日朝関係
シェネー (金森 誠也訳)	「満州国」見聞記 リットン調査 団同行記		新人物往来社			1988年11月	日中関係
黄完晟	植民地朝鮮における戦時財政の 展開	経済論叢(京大)		142(5・6)	569 ~ 592	1988年12月	日朝関係
上杉允彦	日本統治期の「高砂族」の高等教 育と社会教育について	総合研究 (高千穂商 科大)		2	93 ~ 192	1989年	台湾関係
小松教之	旧満州国赤十字社新京聾啞学 院・初代学院長「田代清雄」につ いて	紀要 (宮城教大・自 然科学・教育科学)		24	127 ~ 140	1989年	日中関係
駒込武	日中戦争期文部省と興亜院の日 本語教育政策構想 その組織と 事業	紀要(東大・教育)		29	179 ~ 188	1989年	日中関係
森山昭郎	日本統治下台湾の婦人解放運動 「台湾民報」と女性解放	紀要 (東京女大・比 較文化研)		50	101 ~ 112	1989年 1月	台湾関係
古賀邦子	アメリカ合衆国における日系人 と第二次世界大戦	研究紀要 (香蘭女子 短大)		31	55 ~ 70	1989年 1月	日系人
笠原十九司	中国・東アジア史研究をめぐる 歴史学交流 第2回日米歴史学 会議から	歴史学研究		589	39 ~ 47	1989年 1月	東アジア総論
中嶋嶺雄編著	地域研究の現在		大修館書店			1989年 2月	総論
雨宮昭一	体制移行と社会 ドイツ・イタ リア・日本の戦前と戦後	紀要(茨城大・教養)		21	127 ~ 145	1989年 2月	第二次大戦
野村章	旧「満州」在住日本人子弟の初等 教育	国際教育研究		9	9 ~ 21	1989年 2月	日中関係
船木繁	皇弟溥儀の昭和史		新潮社			1989年 2月	日中関係
油井大三郎	未完の占領改革 アメリカ知識 人と捨てられた日本民主化構想		東京大学出版会			1989年 2月	日米関係
石川友紀	ブラジルにおける日本移民の地 域的分布と職業構成の変遷 第 二次世界大戦前を中心に	紀要(琉球大・法文)		32	1 ~ 56	1989年 3月	日系移民
石井明	日華平和条約締結交渉をめぐる 若干の問題	教養学科紀要(東大・ 教養)		21	77 ~ 94	1989年 3月	台湾関係
岩壁義光	幕末・明治初期の在留清国人取 締関係史料について 外務省記 録「条約未済国及清国人取締方 参考書」	研究報告 (神奈川県 立博)		15	43 ~ 77	1989年 3月	日中関係
森田英之	アメリカ経済急進派知識人の戦 後対日構想 (上) 延安情報と の関連で	人文科学論集 (鹿児 島大・法文)		29	35 ~ 56	1989年 3月	日米関係
池田十吾	石井・ランシング協定をめぐる 日米関係(二) 中国に関する日 米両国の交換公文の成立過程から 破棄に至るまで	政経論叢(国士館大)		67	1 ~ 27	1989年 3月	日米関係

高橋秀直	形成期明治国家と朝鮮問題 甲申事変期の朝鮮政策の政治・外交史的検討	史学雑誌		98(3)	1 ~ 37	1989年3月	日朝関係
野村乙二郎	戦後アメリカの対日占領行政について	政治経済史学		275	37 ~ 46	1989年3月	日米関係
園部裕之	在朝日本人の参加した共産主義運動 1930年代における	朝鮮史研究会論文集		26	213 ~ 239	1989年3月	日朝関係
月脚達彦	愛国啓蒙運動の文明観・日本観	朝鮮史研究会論文集		26	63 ~ 91	1989年3月	日朝関係
並木真人	植民地期民族運動の近代観 その方法論的考察	朝鮮史研究会論文集		26	93 ~ 124	1989年3月	日朝関係
五百旗頭真・宮里政玄・佐藤英夫	戦後日米関係の研究	年報（東大・アメリカ研究資料センター）		11	39 ~ 82	1989年3月	日米関係
鄭楽重	朝鮮開花運動と福沢諭吉	歴史人類（筑波大）		17	157 ~ 174	1989年3月	日朝関係
安藤彦太郎編	近代日本と中国		汲古書院			1989年3月	日中関係
衛藤藩吉	アジアの曙		亜細亜大学亜細亜研究所			1989年3月	アジア総論
本多勝一（編）	裁かれた南京大虐殺		晩聲社			1989年3月	日中関係
阪東宏	第2次世界大戦の評価をめぐって 日本およびドイツの論争について	歴史評論		468	56 ~ 65	1989年4月	第二次大戦
阪東宏	第2次世界大戦の評価をめぐって 日本およびドイツの論争について	歴史評論		468	56 ~ 65	1989年4月	第二次大戦
青野正明	旧朝鮮総督府中枢院と朝鮮と儀礼	韓		114	182 ~ 211	1989年5月	日朝関係
朴来鳳（稲葉継雄訳）	日帝統治下における書堂教育の実態 濟州島を中心として	韓		114	147 ~ 181	1989年5月	日朝関係
趙景達	朝鮮における日本帝国主義批判の論理の形成 愛国啓蒙運動期における文明観の相克	史潮		25	59 ~ 82	1989年6月	日朝関係
盛邦和	ある清末外交官の日本研究	紀要（愛知大・国際問題研）		89	73 ~ 100	1989年7月	日中関係
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第3集		東方出版			1989年7月	アジア総論 マレーシア
河村一夫	日清戦争と陸奥外交 金玉均暗殺事件の処理をめぐって	韓		115	29 ~ 80	1989年8月	日中関係
檜山幸夫	七・二三京城事件と日韓外交	韓		115	81 ~ 139	1989年8月	日朝関係
磯野富士子	オーエン・ラティモアについて	みすず		342	8 ~ 11	1989年8月	米中関係
塚瀬進	上海石炭市場をめぐる日中関係 1896 ~ 1931年	アジア研究		35(4)	47 ~ 76	1989年9月	日中関係
上杉允彦	皇民奉公会について(3) 植民地台湾における大政翼賛運動	高千穂論叢		24(2)	59-134	1989年9月	台湾関係
安井三吉	盧溝橋事件についての一考察 「兵1名行方不明」問題をめぐって	東洋史研究		48(2)	158 ~ 179	1989年9月	日中関係
遠藤興一	植民地支配下の朝鮮社会事業(1)	論叢(明治学院大)		449	107 ~ 178	1989年9月	日朝関係
陳徳仁・安井三吉	孫文・講演「大アジア主義」資料集 1924年11月 日本と中国の岐路	陳徳仁, 安井三吉編 『孫文・講演「大アジア主義」資料集: 1924年11月日本と中国の岐路』	法律文化社			1989年9月	日中関係
朝日新聞社(編)	近くて近いアジア		学陽書房			1989年9月	アジア総論
趙利済	アジア太平洋地域経済の将来		時潮社			1989年9月	アジア総論

平和・安全保障 研究所(編)	アジアの安全保障 1989-1990		朝雲新聞社			1989年10月	アジア総論
堀本尚彦	上海の抗日運動と日本人居留民 918事変前後を中心に	信大史学		14	22 ~ 52	1989年11月	日中関係
今井清一	戦時下日本の中国論	近きに在りて		16	26 ~ 32	1989年11月	日中関係
伊原沢周	近衛内閣と汪精衛の重慶脱出	東洋文化学科年報 (追手門学院大・文)		4	1 ~ 13	1989年11月	日中関係
田嶋信雄	日独軍事協定問題 1936-1937 年	年報近代日本研究		11	268 ~ 294	1989年11月	第二次大戦前夜
松本武彦	辛亥革命と九州の華僑	研究紀要(大分県立 芸術短大)		27	9 ~ 26	1989年12月	日中関係
芳井研一	第1次北伐の進展と日本陸軍 張作霖爆殺事件の一前提	人文科学研究(新潟 大)		76	59 ~ 94	1989年12月	日中関係
小林輝行	旧日本植民地下諸学校への「御 真影」下付(Ⅱ)	紀要(信州大・教育)		67	109 ~ 117	1989年12月	植民地
高橋秀直	壬午事変と明治政府 江華条約 より壬午事変までの朝鮮政策の 展開	歴史学研究		601	1 ~ 17、 63	1989年12月	日中関係
五百旗頭真	日米戦争と戦後日本		大阪書籍			1989年12月	日米関係

〈1990年代〉

著者	タイトル	雑誌名	本の場合の出版社 (発行所)	巻・号	ページ	年月	キーワード
猪木正道	日華平和条約の締結	青山国際政経論集		15	1～26	1990年1月	台湾関係
細野浩二	「西洋の衝撃」をめぐる日本と中国の態様(上) 国際法の法的規範への対応の条理とその特質	紀要(哲学・史学、早大・院・文学研究科)		36	141～159	1990年1月	日中
古賀邦子	アメリカ合衆国における日系人と第二次世界大戦(二)	研究紀要(香蘭女子短大)		32	95～106	1990年1月	日系人
稲葉継雄	旧韓末の日語学校(補遺)	文芸言語研究(筑波大)		17	99～132	1990年1月	日朝関係
浅田喬二	1930年代植民地(朝鮮)地主制の存在形態 全羅北道地主の事例分析	経済学論集(駒沢大)		21(3)	1～36	1990年2月	日朝関係
遠藤興一	植民地支配下の満州社会事業	論叢(明治学院大)		454	53～125	1990年2月	日中関係
鄭俊坤	アメリカの占領政策とその対応 日本と韓国の政治風土の比較のために	紀要(政治経済、明大・院)		27	213～232	1990年2月	日米関係 日朝関係
清水稔	中国と日本の近代 近代中国の日本理解をめぐって	研究紀要(仏教大・院)		18	1～15	1990年2月	日中関係
趙建民	中日両国における外来文化摂取の歴史的考察 近代ヨーロッパの文化摂取を中心として	史学論叢(別府大)		20	1～19	1990年2月	ヨーロッパと中国の関係
伊藤昭雄編著	アジアと近代日本 思想の海へ—解放と変革—11		社会評論社			1990年2月	アジア総論
金子敬生・安元泰共(編)	東アジアの経済発展		溪水社			1990年2月	東アジア総論
越田稜編著	アジアの教科書に書かれた日本の戦争 東アジア編		梨の木舎			1990年2月	東アジア総論
菅英輝	朝鮮戦争とアメリカ合衆国	紀要(北九大・外国語)		68	1～50	1990年3月	米朝関係
渡辺善雄	日中戦争期の反戦文学 呂元明の「戦争捕虜による日本反戦文学」を読む	紀要(人文科学・社会科学・宮城教大)		24	113～126	1990年3月	日中関係
久武哲也	歴史地理学への序説 C.O.SauerのLand and Lifeより	紀要(文学、甲南大)		75	1～41	1990年3月	地域総論
久保文克	台湾製糖株式会社の創立 植民地期台湾における「準国策会社」の誕生	研究年報(中央大・商・院)		19	105～116	1990年3月	台湾関係
岩壁義光	明治初期における在留清国人籍牌関係史料(1) 外務省記録「在留清国人民籍牌規則並に実施一件」	研究報告(神奈川県立博)		16	1～77	1990年3月	日中関係
蔵田雅彦	日本統治下朝鮮における灯台社の活動と弾圧事件	国際文化論集(桃山学院大)		1	109～122	1990年3月	日朝関係
森田英之	アメリカ経済急進派知識人の戦後対日構想(下) 延安情報との関連で	人文科学論集(鹿児島大・法文)		31	75～101	1990年3月	日米関係
山田敦	日本植民地時代台湾における手押軌道の普及とその影響	台湾史研究		8	77～82	1990年3月	台湾関係
稲葉継雄	旧韓末の「日本語学校」の諸特徴	地域研究(筑波大)		8	63～84	1990年3月	日朝関係
原正敏	戦時下、旧満州における技術員・技術工養成	調査研究報告(学習院大・東洋文化研究所)		30	18～109	1990年3月	日中関係
石田真	戦前・日本における「アジア法」研究の一断面 華北農村慣行調査を中心として	法政研究(名大)		132	35～80	1990年3月	日中関係
山村睦夫	日清戦後における三井物産会社の中国市場認識と「支那化」 総合商社の形成と中国市場	和光経済		22(3)	85～141	1990年3月	日中関係
斎藤利彦	「満州国」建国大学の創設 調査研究報告と展開 「総力戦」下における高等教育の「革新」	調査研究報告(学習院大・東文研)		30	110～132	1990年3月	日中関係

田中宏巳	清仏戦争と日本海軍の近代化	栃木史学 (国学院大 栃木短大)		4	107 ~ 128	1990年 3月	日中関係
丁振聲	1920年代の朝鮮人鉱夫の使用状況および使用経費 筑豊地方の三菱系炭鉱を中心として	日本史学集録 (筑波大)		10	30 ~ 47	1990年 3月	日朝関係
慶應義塾大学地域研究センター (編)	地域研究と第三世界 地域研究講座		慶應通信			1990年 3月	地域理論
池川英勝	日韓同志会について	朝鮮学報		135	103 ~ 155	1990年 4月	日朝関係
日本経済新聞社 (編)	アジアの世紀 世界を変える巨大経済圏の勃興		日本経済新聞社			1990年 4月	アジア総論
藤井昇三	孫文と日本 孫文の対日認識を中心に	アジア文化		15	4 ~ 14	1990年 5月	日中関係
陳水逢	中国の辛亥革命運動と日本の中国に対する態度	アジア文化		15	15 ~ 24	1990年 5月	日中関係
陳鵬仁	孫文の大アジア主義と日本	アジア文化		15	25 ~ 34	1990年 5月	日中関係
趙軍	アジア主義と孫文	アジア文化		15	55 ~ 69	1990年 5月	日中関係
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第4集		東方出版			1990年 5月	アジア総論 フィリピン
具仙姫	福沢諭吉の対朝鮮文化戦略	季刊コリアナ		3-2	47 ~ 62	1990年 6月	日朝関係
上杉允彦	皇民化運動期の植民地の初等教育状況(1) 台湾における一公学校の歴史と状況	高千穂論叢		25(1)	19 ~ 48	1990年 6月	台湾関係
小林英夫	近代東アジア史像の再検討	歴史評論		482	1 ~ 14、 46	1990年 6月	東アジア総論
並木真人	戦後日本における朝鮮近代史研究の現段階 「内在的發展論」再考	歴史評論		482	15 ~ 30	1990年 6月	日朝関係
青野正明	植民地朝鮮における農村再編成政策の位置づけ 農村振興運動期を中心に	朝鮮学報		136	19 ~ 60	1990年 7月	日朝関係
西嶋有厚	原爆投下の政治目的は何だったか	科学と思想		77	137 ~ 159	1990年 7月	日米関係
中野毅	アメリカの対日宗教政策の形成	比較文化研究 (創価大)		7	100 ~ 135	1990年 7月	日米関係
姜徳相	皇民化政策下の呂運亨	調査研究報告 (学習院大・東文研)		24	37 ~ 59	1990年 8月	日朝関係
中野茂樹	植民地朝鮮の残影を撮る		岩波書店			1990年 9月	日朝関係
波多野勝	中国第三革命と日本外交	アジア研究		36(4)	77 ~ 113	1990年 9月	日中関係
吉野誠	梶村秀樹の朝鮮史研究 内在的發展論をめぐって	商経論叢 (神奈川大)		26(1)	175 ~ 191	1990年 9月	日朝関係
森田芳夫	朝鮮における日本統治の終末と文化面の推移	調査研究報告 (学習院大・東洋文化研)		26	23 ~ 53	1990年 9月	日朝関係
牛大勇著・飯島渉 (訳)	北伐戦争時期、日・米・英の国民革命に対する政策 中国における研究状況と筆者の意見	辛亥革命研究		9	31-36、74	1990年10月	日中関係、ヨーロッパとアジア
平井廣一	日清・日露戦後の台湾植民地財政と専売事業 阿片と樟腦を中心に	土地制度史學		33(1)	18 ~ 32	1990年10月	台湾関係
松村高夫	第2次世界大戦期の朝鮮人強制連行・強制労働	三田学会雑誌		83(3)	264 ~ 282	1990年10月	日朝関係
小島淑男	辛亥革命時期日本財界の留日中国学生に対する経済援助	辛亥革命研究		9	65 ~ 73	1990年10月	日中関係
川崎高志	抗日戦初期の中国共産党の武漢における活動	紀要 (創価大・院)		12	161 ~ 173	1990年11月	日中関係
伊原沢周	汪精衛と近衛首相 ハノイの滞在とその苦悩	年報 (追手門学院大・東洋文化)		5	17 ~ 37	1990年11月	日中関係

宮嶋博史	植民地朝鮮	板垣雄三ほか『歴史のなかの地域』	岩波書店		137～163	1990年12月	日朝関係
上杉允彦	日本統治完成期の「高砂族」支配政策と村落—『須知簿』史料から見た—(1)	高千穂論叢		25(3)	81-150	1990年12月	台湾関係
橋谷弘	植民地都市としてのソウル	歴史学研究		614	7～15、63	1990年12月	日朝関係
小林文男・柴田巖	強制連行と原爆災害 長崎における中国人死没者の遺族調査を終えて	広島平和科学		14	23～46	1991年	日中関係 原爆
山本有造	日本における植民地統治思想の展開 (I) 「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」	アジア経済		32(1)	2～20	1991年1月	日朝関係
日中戦争史研究会(編・訳)	日中戦争史資料 八路軍・新四軍		龍溪書舎			1991年1月	日中関係
山本有造	日本における植民地統治思想の展開 (II) 「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」	アジア経済		32(2)	34～53	1991年2月	日朝関係
朴魯保	日本統治時代の朝鮮地方財政に関する考察	紀要(政治経済、明大・院)		28	125～147	1991年2月	日朝関係
浅川道夫	抗日戦争と中国革命 新民主主義的革命段階の検討	国際関係研究(日大)		11(3)	417～435	1991年2月	日中関係
添谷芳秀	東アジアの「ヤルタ体制」	法学研究(慶大)		64(2)	32～76	1991年2月	東アジア総論
青木健	アジア太平洋経済の成熟 日本とアジア太平洋地域のネットワーク形成		勁草書房			1991年2月	アジア総論
西村成雄	20世紀中国東北地域史と個人史 張作霖・張学良をめぐる政治家群像	アジア学論叢(大阪外大)		1	3～31	1991年3月	東アジア
鈴木健一	日中戦争時中国の『戦時読物』について 社会科教育的性格を中心に	アジア教育史研究			75～81	1991年3月	日中関係
郷田正萬	アメリカのアジア政策の転換とウェドマイヤ報告書 朝鮮問題(1945-1947)との関連で	神奈川法学		26(2・3)	1～160	1991年3月	アメリカのアジア政策
杜石然	日中近代化過程の比較研究 科学技術史の視点から	研究報告(東北大・日本文化研)		27	109～126	1991年3月	日中関係
山岡由美	アメリカの戦後朝鮮政策 モスクワ協定の崩壊を中心に	国際関係学研究(津田塾大)		17(別冊)	21～46	1991年3月	米朝
林敏	伊藤博文とアジア 対清認識及びその対応策を中心として	史学研究		191	20～33	1991年3月	日中関係
山室信一	「満州国」の法と政治 序説	人文学報(京大)		68	129～152	1991年3月	日中関係、満州
東田雅博	ヴィクトリア時代における日本と中国のイメージ、1850-1900年 「文明化の使命」と東アジア	西洋史学		160	218～234	1991年3月	ヨーロッパとアジア
森山茂徳	日本の朝鮮統治政策(1910～1945年)の政治史的研究	法政理論(新潟大)		23(3・4)	66～111	1991年3月	日朝関係
肥田進	戦後アメリカ外交とアジア政策 1947年から49年に至る政策を中心として	名城法学		40(4)	63～120	1991年3月	アメリカのアジア外交
長岡新吉	「満州国」臨時産業調査局の農村実態調査について	経済学研究(北大)		40(4)	1～25	1991年3月	日中関係、満州
西尾達雄	朝鮮における1914年『学校体操教授要目』制定期の体育政策について(上) 在朝鮮日本人諸学校に関して	研究紀要(日本社会事業大)		37	127～143	1991年3月	日朝関係
外村大	1930年代中期の在日朝鮮人運動 京阪神地域・『民衆時報』を中心に	朝鮮史研究会論文集		28	89～115	1991年3月	日朝関係
長田彰文	「桂・タフト協定」に関する一考察 韓国との関係を中心に	朝鮮史研究会論文集		28	59～88	1991年3月	日米関係、日朝関係、米朝関係
松本武祝	植民地期朝鮮の水利組合事業		未来社			1991年3月	日朝関係

上杉允彦	日本統治完成期の「高砂族」支配政策と村落—『須知簿』史料から見た— (2)	高千穂論叢		25(4)	33 ~ 100	1991年3月	台湾関係
駒込武	植民地教育と異文化認識「呉鳳伝説」の変容過程	思想		802	104 ~ 126	1991年4月	植民地教育
小林啓治	満州事変とイギリスの東アジア政策	日本史研究		344	162 ~ 189	1991年4月	ヨーロッパとアジア、満州
大林太良(他編)	日中文化研究 1		勉誠出版			1991年4月	日中関係
中野謙二	北東アジアの新風 環日本海新時代の原点をさぐる		情報企画出版			1991年4月	東アジア総論
祁建民	十五年戦争と満鉄調査部	紀要(愛知大・国際問題研)		94	83 ~ 105	1991年5月	日中関係、満州
伊香俊哉	日中戦争前夜の中国論と佐藤外交	日本史研究		345	1 ~ 24	1991年5月	日中関係
平間洋一	対華21ヶ条の要求と日英関係シンガポール駐屯インド兵の反乱を軸として	史学雑誌		100(6)	65 ~ 76	1991年6月	日中関係、日英関係
上杉允彦	日本の「高砂族」への医療政策	高千穂論叢		26(1)	1 ~ 110	1991年6月	台湾関係
山田昭次・高崎宗司・鄭章淵・趙景達	近現代史のなかの「日本と朝鮮」		東京書籍			1991年6月	日朝関係
上杉允彦	日本の「高砂族」教化政策	総合研究(高千穂商大)		4	39 ~ 171	1991年7月	台湾関係
比較史・比較歴史教育研究会(編)	アジアの「近代」と歴史教育続・自国史と世界史		未来社			1991年7月	アジア総論、歴史教育
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第5集		東方出版			1991年8月	アジア総論 朝鮮支配
渡辺順一	日本植民地統治下での東アジア布教 台湾・朝鮮・満州での布教の軌跡とその問題	金光教学		31	1 ~ 56	1991年9月	台湾関係、日中関係、日朝関係、満州
松田利彦	日本統治下の朝鮮における警察機構の改編 憲兵警察制度から普通警察制度への転換をめぐる	史林		74(5)	67 ~ 102	1991年9月	日朝関係
上杉允彦	日本の「高砂族」への授産政策 稲作を中心として	高千穂論叢		26(2)	1 ~ 99	1991年9月	台湾関係
渋沢雅英他(渋沢雅英訳)	太平洋アジア 危険と希望		サイマル出版会			1991年9月	アジア総論
仁木ふみ子	関東大震災 中国人大虐殺		岩波書店			1991年9月	日中関係
林えいだい	証言・樺太朝鮮人虐殺事件		風媒社			1991年9月	日朝関係
飛田雄一	日帝下の朝鮮農民運動		未来社			1991年9月	日朝関係
益田実	極東におけるイギリスの宥和外交(1) 対日中関係をめぐる議論と対応 1933 ~ 39年	法学論叢(京都大学法学会)		130(1)	56 ~ 83	1991年10月	ヨーロッパとアジア
糟谷憲一	朝鮮の抗日運動	板垣雄三『国家と革命』	岩波書店		137 ~ 164	1991年10月	日朝関係
大林太良(他編)	日中文化研究 2 江南の文化と日本		勉誠出版			1991年10月	日中関係
諏訪哲郎	アジア・太平洋新時代		古今書院			1991年10月	アジア総論
判澤純太	日華通商航海条約(第三次)改訂交渉と日本外交 幣原外交と田中外交の条約論	外交時報		1283	75 ~ 90	1991年11月	日中関係
明石岩雄	日中戦争論ノート	奈良史学		9	65 ~ 82	1991年11月	日中関係、満州
内海愛子	朝鮮人(皇軍)兵士たちの戦争		岩波書店			1991年11月	日朝関係

河合和男・尹明憲	植民地期の朝鮮工業		未来社			1991年11月	日朝関係
平和・安全保障研究所(編)	アジアの安全保障 1991-1992		朝雲新聞社			1991年11月	アジア総論
磯田一雄	植民地教育と新教育 「満州」・「朝鮮」における国史と地理の統合と作業教育化を中心に	成城文藝		137	35～53	1991年12月	日中関係、満州
江間信之	対日経済制裁問題とイギリス 日中戦争の勃発から九カ国条約締結国際会議まで	西洋史論叢		13	15～29	1991年12月	ヨーロッパとアジア
藤井高美	抗日戦争に対する中国共産党の戦略戦術について(1)	論集(松山大)		3(5)	1～20	1991年12月	日中関係
鈴木裕子	朝鮮人従軍慰安婦		岩波書店			1991年12月	日朝関係
斎藤志郎	東アジア新秩序と環日本海経済圏の構図 辺境に見る多角的地域主義の連動	紀要(亜細亜大・アジア研)		19	187～212	1992年	東アジア
細野浩二	「西洋の衝撃」をめぐる日本と中国の態様(下) 国際法の法的規範への対応の条理とその特質	紀要(哲学・史学、早大・院・文学研究科)		37	95～112	1992年1月	日中関係
伊藤一彦	日本の在満朝鮮人政策	紀要(東京女大・比較文化研)		53	65～83	1992年1月	日中関係、日朝関係、満州
森山昭郎	日本統治下台湾のキリスト教	紀要(東京女大・比較文化研)		53	39～49	1992年1月	台湾関係
水野明	張作霖爆殺と日本軍事顧問 町野武馬政治談話録を中心に	東洋史論集(東北大)		5	235～251	1992年1月	日中関係
朴ソプ	植民地朝鮮における小作関係政策の展開 「朝鮮農地令」を中心として	日本史研究		353	38～61	1992年1月	日朝関係
益田実	極東におけるイギリスの宥和外交(2)完 対日中関係をめぐる議論と対応 1933～39年	法学論叢(京都大学法学会)		130(4)	61～91	1992年1月	ヨーロッパとアジア
李春柱	植民地台湾における製糖資本の成立と展開 1900～1930年の台湾製糖を中心に	経済論叢(京大)		4	71～86	1992年2月	台湾関係
遠藤輝明	地域と国家 フランス・レジオナリズムの研究		日本経済評論社			1992年2月	地域総論
山根幸夫・藤井昇三・中村義・太田勝洪	近代日中関係史研究入門		研文出版			1992年2月	日中関係
深堀道義	中国海軍の対日作戦計画	海軍史研究		2	77～83	1992年3月	日中関係
石井均	太平洋戦争下日本の対南方教育政策 大東亜建設審議会の答申とその実践をめぐって	紀要(国立教育学研)		121	303～314	1992年3月	第二次大戦
稲葉継雄	甲午改革期の朝鮮教育と日本	紀要(国立教育学研)		121	17～38	1992年3月	日朝関係
大塚豊	「満州国」高等教育への日本の関与 哈爾濱工業大学の事例を中心に	紀要(国立教育学研)		121	199～214	1992年3月	日中関係、満州
上沼八郎	台湾における植民地教育行政史の一考察「芝山巖事件」について	紀要(国立教育学研)		121	111～122	1992年3月	台湾関係
弘谷多喜夫	日本統治下台湾の民族運動と民族主義教育要求の展開	紀要(国立教育研究所)		121	93～110	1992年3月	台湾関係
久保文克	日本統治下の植民地農村経済(1) 台湾・朝鮮の産米増殖計画期を中心に	研究年報(中央大・院・商学研究科)		21	39～54	1992年3月	台湾関係、日朝関係
深川博史	植民地政策とインフラストラクチュア 朝鮮半島の経験	社会科学論集(九大・教養・社会科学研究室)		32	55～72	1992年3月	日朝関係
遠藤興一	植民地支配期の朝鮮社会事業(2)	社会学・社会福祉学研究(明治学院大)		89	1～60	1992年3月	日朝関係
栗原純	日清戦争と講和交渉	史論		45	1～20	1992年3月	日中関係
上沼八郎	台湾総督府学務隈本繁吉「部務二関する日誌」について	総合研究		5	45～76	1992年3月	台湾関係
稲葉継雄	旧韓国の日本語教育	地域研究(筑波大)		10	33～56	1992年3月	日朝関係

伊藤英治	日中交流史における琉球所属問題 分島改約交渉を中心として	茅茨(青山学院大)		6	36 ~ 46	1992年3月	日中関係 沖縄
樺山紘一	地域からの世界史 19		朝日出版社			1992年3月	地域総論
東京大学東洋文化研究所(編)	アジアの文化と社会		汲古書院			1992年3月	アジア総論
金洛卑	植民地期における朝鮮、日本間の資金流出入	土地制度史学		135	48 ~ 67	1992年4月	日朝関係
辛島昇	地域からの世界史 5		朝日出版社			1992年4月	地域総論
洞富雄・藤原彰・本多勝一	南京大虐殺の研究		晩聲社			1992年4月	日中関係
山川暁	皇帝溥儀と関東軍 満州帝国復辟の夢		フットワーク出版社			1992年4月	日中関係、満州
林博史	華僑虐殺 日本軍支配下のマレー半島		すずさわ書店			1992年5月	第二次大戦、華僑、日中関係
井上薫	日本帝国主義の朝鮮における植民地教育体制形成と日本語普及政策 韓国統監府時代の日本語教育を通じた官吏登用と日本人配置	紀要(北大・教育)		58	163 ~ 195	1992年6月	日朝関係
天見慧	台頭する地域主義の政治構図	現代中国		66	4 ~ 10	1992年6月	地域主義
馬場明	満州懸案解決交渉と伊集院彦吉	國學院雑誌		93(6)	47 ~ 62	1992年6月	日中関係、満州
松本俊郎	侵略と開発 日本資本主義と中国植民地化		御茶の水書房			1992年6月	日中関係
長沢秀編解説	復刻版 戦時下朝鮮人中国人連合軍俘虜強制連行資料集 1-4 石炭統制会極秘文書		緑蔭書房			1992年6月	日中関係
黄武達・小川英明・山根正彦・内藤昌	日本植民地時代における台北市都市構造の復元的研究	技術と文明		8(1)	49 ~ 78	1992年7月	台湾関係
有山輝雄	占領直後の米国の言論政策 占領期メディア史研究	成城文芸		139	1 ~ 35	1992年7月	占領史研究 日米関係
袁克勤	日華講和に於けるアメリカの役割	一橋論叢		108(1)	60 ~ 82	1992年7月	台湾関係
晋林波	原内閣における対中国政策の新展開(1) 南北妥協問題を中心として	法政論集(名大)		143	123 ~ 171	1992年7月	日中関係
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第6集		東方出版			1992年7月	アジア総論 戦後補償
大林太良(他編)	日中文化研究 3 神話と祭祀		勉誠出版			1992年7月	日中関係
木畑洋一	アジア太平洋戦争を世界はどう見たか	歴史評論		508	12 ~ 20	1992年8月	第二次大戦
坂本夏男	盧溝橋事件における日中両軍衝突時の一検証	皇學館論叢		25(4)	1 ~ 22	1992年8月	日中関係
古庄正	朝鮮人強制連行問題の企業責任	経済学論集(駒沢大・経済学会)		24(2)	1 ~ 66	1992年9月	日朝関係
増田弘	石橋湛山の「日中米ソ平和同盟」構想(1) 脱冷戦論者の思想と行動	法学研究		65(9)	27 ~ 57	1992年9月	日中関係 思想史
小沼通二・高田容土夫	日本の原子核研究についての第2次世界大戦後の占領軍政策	科学史研究		31(183)	138 ~ 146	1992年9月	日米関係 原子力
佐藤彰一・松村尙	西ヨーロッパ(上) (地域からの世界史13)		朝日新聞社			1992年9月	ヨーロッパ地域
森田芳夫	日韓国交正常化交渉に関する韓国外交官の著述	調査研究報告(学習院大・東洋文化研)		34	1 ~ 24	1992年9月	日朝関係
越田稜	政治文化摩擦の一要因としての日韓教科書問題	調査研究報告(学習院大・東洋文化研)		34	47 ~ 69	1992年9月	日朝関係
姜在彦	日本による朝鮮支配の40年		朝日新聞社			1992年9月	日朝関係

穴戸寛	日中戦争史研究会編訳（編集代表・馬場毅）『日中戦争史資料』八路軍・新四軍	史潮		31	107～111	1992年10月	日中関係
増田弘	石橋湛山の「日中米ソ平和同盟」構想（2）脱冷戦論者の思想と行動	法学研究		65(10)	51～98	1992年10月	日中関係 思想史
中村孝志	台湾総督府華南新聞工作の展開	学報(天理大)		171	1～17	1992年10月	台湾関係
崔碩堯	甲申政変期の井上角五郎 日本の甲申政変企図説の再検討	日本歴史		533	62～76	1992年10月	日朝関係
普林波	原内閣における対中国政策の新展開（2・完）南北妥協問題を中心として	法政論集(名大)		144	355～399	1992年10月	日中関係
地方史研究協議会(編)	異国と九州 歴史における国際交流と地域形成		雄山閣出版			1992年10月	地域と九州
猿谷要	北アメリカ（地域からの世界史15）		朝日新聞社			1992年11月	北米地域
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地1 植民地帝国日本		岩波書店			1992年11月	日本植民地
工藤章	イー・ゲ・ファルベンの対日戦略 戦間期日独企業関係史		東京大学出版会			1992年11月	日独関係
吉見義明(編)	従軍慰安婦資料集		大月書店			1992年11月	従軍慰安婦
鈴木隆史	日本帝国主義と満州 上・下		塙書房			1992年11月	日中関係、満州
朴燮	植民地朝鮮における小作関係政策の展開 「朝鮮農地令」を中心として	学術論文集（朝鮮奨励会）		21	55～67	1992年12月	日朝関係
海野福寿	朝鮮植民地における農業政策の展開 とくに労働力政策との関連について	紀要（明大・人文科学研）		32	255～310	1992年12月	日朝関係
古賀邦子	第二次世界大戦下のアメリカ合衆国日系人 「強制収容」にかかわる資料集	西洋史学論集		30	43～54	1992年12月	日系人
井尻秀憲	冷戦後の世界とアジアの分析枠組	問題と研究		22(3)	80～96	1992年12月	アジア総論
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地2 帝国統治の構造		岩波書店			1992年12月	日本植民地
浅田喬二	戦前日本における植民政策研究の二大潮流 矢内原忠雄と細川嘉六の植民理論	歴史評論		513	16～31	1993年1月	思想史
富山一郎	ミクロネシアの「日本人」 沖縄からの南洋移民をめぐって	歴史評論		513	54～65	1993年1月	移民 沖縄
石剛	植民地支配と日本語		三元社			1993年1月	日本植民地
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地7 文化のなかの植民地		岩波書店			1993年1月	日本植民地
朴魯保	日本統治時代の道(道地方費)行財政に関する研究	紀要(明大・院)		30	43～68	1993年2月	日朝関係
久保文克	日本統治下の植民地農村経済(2) 台湾・朝鮮の産米増殖計画期を中心に	研究年報(商学、中央大・院)		22	27～47	1993年2月	台湾関係 日朝関係
丸田孝志	抗日戦争期における中国共産党の鋤奸政策	史学研究		199	88～111	1993年2月	日中関係
竹中憲一	日本の関東州、満鉄付属地における中国人教育 「満州国」成立以前	人文論集		31	1～24	1993年2月	日中関係、満州
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地3 植民地化と産業化		岩波書店			1993年2月	日本植民地
中塚明	近代日本の朝鮮認識		研文出版			1993年2月	日朝関係
浜口裕子	「満洲国」の中国人官吏と関東軍による中央集権化政策の展開	アジア経済		34(3)	52～75	1993年3月	日中関係、満州
千葉浩美	占領後期におけるアメリカ人の対日意識 1950年の国会代表団訪米に対する反応を手がかりとして	アメリカ研究		27	133～150	1993年3月	占領史研究 日米関係

大澤博明	日清共同朝鮮改革論と日清開戦	熊本法学		75	1 ~ 50	1993年 3月	日中関係
白水繁彦	ハワイ日系社会の文化変化 第二次大戦下 2世の米化運動	コミュニケーション紀要(成城大・院・文)		7	159 ~ 198	1993年 3月	日系人 ハワイ
宇田川知己	済南事件と排日運動	史学研究論集		18	63 ~ 76	1993年 3月	日中関係
稲葉継雄	旧韓国官公立普通学校の日本人教員 教員人事を中心として	地域研究(筑波大)		11	1 ~ 24	1993年 3月	日朝関係
朴ソプ	植民地期朝鮮における米穀の共同販売	農業経済研究		64(4)	195 ~ 204	1993年 3月	日朝関係
天見慧	歴史的転換期におけるアジアと日本	調査研究報告(学習院大・東洋文化研)		38	53 ~ 64	1993年 3月	アジア
竹中佳彦	帝国主義下の矢内原忠雄 1931-1937年	法政論集(北九州大・法学)		20(4)	129 ~ 186	1993年 3月	思想史
濱下武志	東アジアにおける「ひと」の移動と琉球	沖縄県立図書館史料編集室編『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』			105 ~ 126	1993年 3月	アジア
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の論理		岩波書店			1993年 3月	日本植民地
沼野誠介	孫文と日本		キャロム			1993年 3月	日中関係
山本有造(編)	「満州国」の研究		京都大学人文科学研究所			1993年 3月	日中関係、満州
楊思偉	戦後台湾人の日本留学	アジア文化		18	24 ~ 38	1993年 4月	台湾関係
長谷川孝治	地図史研究の現在 1980年代以降の英米の動向を中心に	人文地理		45(2)	156 ~ 177	1993年 4月	地図史
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地 5 膨張する帝国の人流		岩波書店			1993年 4月	日本植民地
大林太良(他編)	日中文化研究 4 海と山の文化		勉誠出版			1993年 4月	日中関係
樋口陽一	「二つの戦後・ドイツと日本」を考える 大嶽秀夫氏の近作を読んで	創文		343	1 ~ 5	1993年 5月	戦後日本とドイツ
渋谷由里	近現代東北アジア地域史研究会と若干の私見	近きにありて		23	60 ~ 61	1993年 5月	東アジア
武田幸男・宮嶋博史・馬淵貞利	朝鮮(地域からの世界史 1)		朝日新聞社			1993年 5月	朝鮮地域
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第7集		東方出版			1993年 5月	アジア総論 戦後処理
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地 6 抵抗と服従		岩波書店			1993年 5月	日本植民地
磯田一雄・野村章	中国・東北の日本植民地教育実態調査「満州国・関東州」における植民地教育に関する第一次調査中間報告	成城芸芸		143	105 ~ 175	1993年 6月	日中関係、満州
古川宣子	植民地期朝鮮における初等教育就学状況の分析を中心に	日本史研究		370	31 ~ 56	1993年 6月	日朝関係
石井貫太郎	脱冷戦時代の到来とアジアの国際関係 社会主義の溶解と今後の研究課題	法学研究(慶大・法)		63(6)	55 ~ 80	1993年 6月	アジア
益田実	イギリスの戦後対中政策構想 1942年~1945年(1) イギリス対中権益と極東における「非公式」の帝国の将来	法学論叢(京都大学法学会)		133(3)	83 ~ 103	1993年 6月	ヨーロッパとアジア
古庄正	日本製鉄株式会社の朝鮮人強制連行と戦後処理 「朝鮮人労務者関係」を主な素材として	論集(駒沢大・経済学会)		25(1)	1 ~ 83	1993年 6月	日朝関係
中生勝美	植民地主義と日本民族学	中国 社会と文化		8	231 ~ 242	1993年 6月	日中関係
大江志乃夫・浅田喬二	岩波講座 近代日本と植民地 8 爾垂の冷戦と脱植民地化		岩波書店			1993年 6月	日本植民地

上沼八郎	台湾総督府学務隈本繁吉「部務二関する日誌」について	総合研究（高千穂商科大）		6	43～81	1993年7月	台湾関係
楊合義	日華断交20年の実務的關係	問題と研究		22(12)	50～77	1993年7月	台湾関係
慎蒼健	植民地朝鮮と科学(1) 恩賜記念科学館の戦略	科学史・科学哲学(東大)		11	58～69	1993年7月	日朝関係
宋連玉	朝鮮植民地支配における公娼制	日本史研究		371	52～66	1993年7月	日朝関係
山室信一	キメラ 満州国の肖像		中央公論社			1993年7月	日中関係、満州
猪口孝(編)	アジア太平洋の戦後政治		朝日新聞社			1993年8月	アジア
大林太良(他編)	日中文化研究 5 アジアの中の沖縄文化		勉誠出版			1993年8月	日中関係
中見立夫	地域概念の政治性	溝口雄三ほか編『アジアから考える(1) 交錯するアジア』	東京大学出版会		273～295	1993年9月	地域
上杉允彦	日本の「高砂族」への授産政策 授産機関の設置を中心としえ(1)	高千穂論叢		28(2)	1～84	1993年9月	台湾関係
在日朝鮮人社会・教育研究所(編)	東北アジアの新しい秩序について 3		晩声社			1993年9月	アジア
溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史	アジアから考える(1) 交錯するアジア		東京大学出版会			1993年9月	アジア
安井三吉	盧溝橋事件		研文出版			1993年9月	日中関係
濱下武志	アジア研究の現在	溝口雄三ほか編『アジアから考える(1) 交錯するアジア』	東京大学出版会		1～12	1993年10月	アジア
西川正雄	20世紀とは何だったのか	板垣雄三編『世界史の構想 地域からの世界史21』	朝日新聞社		71～90	1993年10月	地域
松田利彦	朝鮮植民地化の過程における警察機構(1904～1910年)	朝鮮史研究会論文集		31	127～156	1993年10月	日朝関係
益田実	イギリスの戦後対中政策構想 1942年～1945年(2)・完 イギリス対中権益と極東における「非公式」の帝国の将来	法学論叢(京都大学法学会)		134(1)	54～76	1993年10月	ヨーロッパとアジア
奥村哲	抗日戦争と中国社会主義	歴史学研究		651	171～179	1993年10月	日中関係
君島和彦	歴史教科書をめぐる日本＝韓国の対話	歴史学研究		651	205～212	1993年10月	日朝関係
朝鮮民主主義人民共和国「日本帝国主義」による朝鮮占領被害調査委員会	日本帝国主義の「従軍慰安婦」犯罪事件にたいする真相調査中間報告書	月刊 朝鮮資料		33(10)	10～24	1993年10月	従軍慰安婦
板垣雄三(編)	地域からの世界史21		朝日新聞社			1993年10月	地域
濱下武志	地域研究とアジア	溝口雄三ほか編『アジアから考える(2) 地域システム』	東京大学出版会		1～12	1993年11月	アジア
佐藤幸男	アジア地域国際関係の原像	溝口雄三ほか編『アジアから考える(2) 地域システム』	東京大学出版会		15～50	1993年11月	アジア
前田均	日本統治下台湾の教師たち	南方文化		20	154～169	1993年11月	台湾関係
小林英夫	日本軍政下のアジア 「大東亜共栄圏」と軍票	岩波新書	岩波書店			1993年11月	第二次大戦 大東亜共栄圏
中見立夫	“北東アジア”からみた“東アジア”	国際交流		62	76～80	1993年11月	アジア
小林一美	アジアにおける近代 中国の反近代、超近代、近代化論をめぐって	神奈川大学評論		16	81～89	1993年11月	アジア 近代
秋元英一・廣田功・藤井隆至	市場と地域 歴史の視点から		日本経済評論社			1993年11月	地域

中村哲・安秉直 (編)	日韓共同研究 植民地期の朝鮮 経済 近代朝鮮工業化の研究		日本評論社			1993年11月	日朝関係
大村益夫	旧「満州」朝鮮人のアイデンティ ティ	社会科学討究		39(2)	159 ~ 202	1993年12月	日朝関係、満州
菅野正	1900年春、後藤新平長官の福建 訪問について	奈良史学		11	50 ~ 71	1993年12月	日中関係
小川英子	中国人強制連行調査訪中国参加 報告	論集(人間・言語・ 情報、東北学院大)		106	117 ~ 143	1993年12月	日中関係
宋志勇	終戦前後における中国の対日政 策 戦争犯罪裁判を中心に	史苑		54(1)	63 ~ 80	1993年12月	日中関係
多仁照廣	日本統治下台湾の青年団	敦賀論叢		8	41 ~ 56	1993年12月	台湾関係
李亀烈(南永昌 訳)	失われた朝鮮文化 日本侵略下 の韓国文化財秘話		新泉社			1993年12月	日朝関係
朱慧玲	日本華僑社会の変貌とその将来 国籍変化と文化変容を中心に	アジア発展研究		2	55 ~ 74	1994年	華僑
西川博史	アメリカの対日政策の転換と中 国の動向	経済学研究		43(4)	73 ~ 92	1994年	日米関係 アメリカ のアジア政策
濱下武志	周縁からのアジア史	溝口雄三ほか編『ア ジアから考える(3) 周縁からの歴史』	東京大学出版会		1 ~ 12	1994年1月	アジア
T・マコーミッ ク(杉田米行訳)	新共栄圏の形成 米国、日本、 アジア、1945-1954年	アジア学論叢(大阪 外大)		4	3 ~ 13	1994年1月	第二次大戦 大東 亜共栄圏
森山昭郎	日中戦争と台湾の皇民化	紀要(東京女大・比 較文化研)		55	1 ~ 11	1994年1月	台湾関係
朝日新聞社(編)	世界史を読む辞典(地域からの 世界史20)		朝日新聞社			1994年1月	地域
「文明のクロス ロード・ふく おか」地域文化 フォーラム実行 委員会(編)	福岡からアジアへ		西日本新聞社			1994年1月	アジア
溝口雄三・浜下 武志・平石直 昭・宮嶋博史	アジアから考える(3) 周縁か らの歴史		東京大学出版会			1994年1月	地域
李鍾元	アイゼンハワー政権の対韓政策 と「日本」(1)	国家学会雑誌		107(1・2)	1 ~ 105	1994年2月	日米関係 米朝関 係
殷燕軍	カイロ会談と中国国民政府の対 日賠償政策	一橋論叢		111(2)	170 ~ 191	1994年2月	日中関係
崔長根	明治政府の朝鮮東海にける領土 政策	研究年報(中央大・ 院・法)		23	209 ~ 221	1994年2月	日朝関係
川勝守	東アジアにおける生産と流通の 歴史社会学的研究		中国書店			1994年2月	アジア
溝口雄三	アジアにおける社会と国家形成	溝口雄三ほか編『ア ジアから考える (4) 社会と国家』	東京大学出版会		1 ~ 14	1994年3月	アジア
永井和	戦後マルクス主義史学とアジア 認識 「アジア的停滞性」論のア ポリア	古屋哲夫編『近代日 本のアジア認識』	京都大学人文科学 研究所		641 ~ 704	1994年3月	アジア
岡村敬二	満州国立奉天図書館の歴史	紀要(大阪府立図書 館)		30	11 ~ 42	1994年3月	日中関係 満州
伊藤之雄	日清戦争以後の中国・朝鮮認識 と外交論	研究論集(名大・院)		119	263 ~ 305	1994年3月	日中関係 日朝関 係
海野福寿	1905年「第二次日韓協約」	駿台史学		91	1 ~ 34	1994年3月	日朝関係
秦郁彦	盧溝橋事件の再検討(1) 7月 7日夜の現場	政治経済史学		333	1 ~ 16	1994年3月	日中関係
伊藤徳也	民族主義ふたたび 周作人の排 日と「溥儀出宮」事件	東洋文化		74	35 ~ 54	1994年3月	日中関係
清水稔	近代日中関係史の一断面 21か 条の要求をめぐって	紀要(仏教大・総合 研)		1	312 ~ 330	1994年3月	日中関係
近藤淳子	ジョン・フォスター・ダレスの 中国政策	史苑		54(2)	97 ~ 117	1994年3月	米関係
高村直助	近代日本綿業と韓国	朝鮮文化研究		1	165 ~ 178	1994年3月	日朝関係

今井弘道他	東アジア文化と近代法 日本と韓国の比較研究を通じて(3)	法学論集		44(6)	437～468	1994年3月	日朝関係
比屋根照夫	近代沖縄とアジア 『琉球新報』論説を手がかりにして	琉球法学		52	69～86	1994年3月	アジア 沖縄
青木健	アジア太平洋経済圏の生成 その動態と統合メカニズムの解明		中央経済社			1994年3月	アジア
青山学院大学東洋史論集編集委員会(編)	東アジア世界史展開 青山学院大学東洋史論集		汲古書院			1994年3月	アジア
大林太良(他編)	日中文化研究 6 古代伝承と考古学		勉誠出版			1994年3月	日中関係
日本国際問題研究所	アジア太平洋の地域主義と日本外交		日本国際問題研究所			1994年3月	アジア
木村隆俊	1920年代植民地台湾糖業分析	経済集志		64(1)	1～18	1994年4月	台湾関係
秦郁彦	盧溝橋事件の再検討(Ⅱ) 7月8日夜の現場	政治経済史学		334	15～34	1994年4月	日中関係
今永清二(編)	アジアの地域と社会		勁草書房			1994年4月	アジア
田中拓男	アジア太平洋の地域協力 米国の新通商戦略とアジア経済の新展開		中央経済社			1994年4月	アメリカのアジア政策
水岡不二雄	英国人による香港植民地統治と空間の包摂 序説	経済学研究(一橋大)		35	105～206	1994年5月	日中関係
M.S.ドブス・ヒギンソン国際金融事情センター	アジア太平洋の時代		ジャパンタイムズ			1994年5月	アジア
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第8集		東方出版			1994年5月	アジア総論 七三一部隊
白石孝編	新時代のアジア経済と日本		中央経済社			1994年5月	アジア
平石直昭	アジアの近代 民衆運動と体制構想	溝口雄三ほか編『アジアから考える(5) 近代化像』	東京大学出版会		1～16	1994年6月	アジア 近代
平石直昭	近代日本の「アジア主義」 明治期の諸理念を中心に	溝口雄三ほか編『アジアから考える(5) 近代化像』	東京大学出版会		265～291	1994年6月	アジア 思想史
堀和生	両大戦間期の東アジア地域社会	溝口雄三ほか編『アジアから考える(6) 長期社会変動』	東京大学出版会		265～308	1994年6月	アジア
伊藤幹彦	台湾抗日運動史の研究 林献堂の政治思想を中心に	アジア文化研究		1	89～98	1994年6月	台湾関係
山岡道男	東アジア地域における近代化の特徴 ヨーロッパ社会と比較して	アジア文化研究		1	2～10	1994年6月	アジア 近代
李鍾元	アイゼンハワー政権の対韓政策と「日本」(2)	国家学会雑誌		107(5・6)	476～547	1994年6月	日米関係 米朝関係
區建英	近代中国の福沢諭吉観 異文化理解の角度から	中国		9	51～59	1994年6月	日中関係
北住炯一	欧州連合とドイツ連邦制モデル「諸地域からなるヨーロッパ」形成に向けて	法政論集(名大)		156	1～36	1994年6月	ヨーロッパ地域
在日本韓国文化院(編)	日韓文化論 日韓文化の同質性と異質性		学生社			1994年6月	日朝関係
山極晃(編)	東アジアと冷戦		三嶺書房			1994年6月	アジア
油井大郎・中村政則・豊下楯彦(編)	占領改革の国際比較 日本・アジア・ヨーロッパ		三省堂			1994年6月	占領史研究
C.J.エッカート	植民地末期朝鮮の総力戦・工業化・社会変化	思想		841	28～56	1994年7月	日朝関係

加藤公一	アジア太平洋戦争末期の中国論争 「大國化」構想の空洞化とアメリカ知識人	アメリカ史研究		17	35 ~ 48	1994年 8月	アメリカのアジア政策
秦郁彦	盧溝橋事件から日中戦争へ(1)	法学論集(千葉大)		9-1	149 ~ 184	1994年 8月	日中関係
大谷正	旅順虐殺事件と国際世論をめぐって	歴史評論		532	44 ~ 49	1994年 8月	日中関係
山腰敏寛	アメリカの対中宣伝活動と五四運動	東洋文化		73	49 ~ 63	1994年 9月	日中関係
小林正晃	「十五年戦争」の落とし穴 日清戦争100周年によせて	歴史科学と教育		14	51 ~ 68	1994年 9月	日中関係
笠原十九司	アジアの中の日本軍 (大正時代)とシベリア出兵		大月書店			1994年 9月	アジア
宮嶋博史	東アジアの経済社会	溝口雄三ほか編『アジアから考える(6) 長期社会変動』	東京大学出版会		1 ~ 12	1994年10月	アジア
川勝平太	東アジア経済圏の成立と展開 アジア間競争の500年	溝口雄三ほか編『アジアから考える(6) 長期社会変動』	東京大学出版会		13 ~ 66	1994年10月	アジア
宮嶋博史	東アジア小農社会の形成	溝口雄三ほか編『アジアから考える(6) 長期社会変動』	東京大学出版会		67 ~ 98	1994年10月	アジア
金鳳珍	欧米国際秩序と東アジア地域秩序	紀要(北九州大・外国語)		81	1 ~ 70	1994年10月	アジア
金秀姫	朝鮮開港以後に於ける日本漁民の朝鮮近海業の展開	朝鮮学報		153	123 ~ 156	1994年10月	日朝関係
穎原義徳	日清戦争期日本の対外観	歴史学研究		663	16 ~ 33	1994年10月	日中関係
小林隆夫	台湾事件と琉球処分(Ⅰ) ルジャンドルの役割再考	政治経済史学		340	1 ~ 16	1994年10月	台湾関係
青柳正規・西野嘉明(編)	東アジアの形態世界		東京大学出版会			1994年10月	アジア
古川万太郎	中国残留日本兵の記録		岩波書店			1994年10月	日中関係
吉川利治	泰緬鉄道 機密文書が明かすアジア太平洋戦争		同文館出版			1994年10月	第二次大戦
中村哲(編)	東アジア資本主義の形成		青木書店			1994年10月	アジア
朝見英吉	日本の朝鮮支配と朝鮮社会 「文化政治」とキリスト教	信大史学		19	24 ~ 64	1994年11月	日朝関係
前田均	日本統治下台湾の教師たち(2)	南方文化		21	159 ~ 166	1994年11月	台湾関係
小林隆夫	台湾事件と琉球処分(Ⅱ) ルジャンドルの役割再考	政治経済史学		341	13 ~ 32	1994年11月	台湾関係
クリストファー・ソーン(市川洋一訳)	満州事変とは何だったのか 国際連盟と外交政策の限界 上・下		草思社			1994年11月	日中関係 満州
浅田喬二(編)	「帝国」日本とアジア(近代日本の軌跡10)		吉川弘文館			1994年12月	アジア
堀和生	植民地期京城府の都市構造 産業分布の分析	経済論叢(京大)		154(6)	24 ~ 48	1994年12月	日朝関係
クリスチャン・ボラック	フランスの極東政策と日仏経済関係史 2 1914年-1925年	同志社アメリカ研究		31	79 ~ 87	1994年12月	ヨーロッパとアジア
小林英夫	太平洋戦争下の香港 香港軍政の展開	経済学論集(駒沢大)		26(3)	209 ~ 281	1994年12月	日中関係
志賀勝	民族問題と国境 (環日本海)の向こう岸		研文出版			1994年12月	アジア
平野健一郎(編)	講座現代アジア4 地域システムと国際関係		東京大学出版会			1994年12月	地域
馬淵貞利	朝鮮信託統治問題についての一考察 その発生過程を中心にして	紀要(社会科学、東京学芸大)		46	293 ~ 321	1995年 1月	日朝関係

渋谷由里	「9.18」事変直後における瀋陽の政治状況 奉天地方維持委員会を中心として	史林		78(1)	138 ~ 158	1995年1月	日中関係
金洛年	植民地期朝鮮の産米増殖計画と工業化	土地制度史学		146	1 ~ 16	1995年1月	日朝関係
浅野和生	満州事変勃発と英国議会	法学研究(慶大・法)		68(1)	395 ~ 418	1995年1月	日中関係
滝田賢治	米国のアジア政策史 「太平洋国家アメリカ」への夢と現実	海外事情		43(1)	39 ~ 59	1995年1月	アメリカのアジア政策
西川潤	内地雑居論から対外膨張へ 帝国主義期日本人の対外意識形成考	早稲田政治経済学雑誌		321	118 ~ 135	1995年1月	思想史
関礼雄	日本占領下の香港		御茶の水書房			1995年1月	日中関係
井上薫	第一次朝鮮教育令下における日本語普及・強制政策 「国語講習会」「国語講習所」による日本語普及政策とその実態	紀要(北大・教育)		66	33 ~ 56	1995年2月	日朝関係
洪詩鴻	日本植民地期の台湾人産業資本に関する一考察	経済論争(京大)		155(2)	59 ~ 77	1995年2月	台湾関係
松田吉郎	日本植民地時代台湾における小作慣行改善事業について	研究紀要(兵庫教大)		15(2)	77 ~ 86	1995年2月	台湾関係
「文明のクロスロード・ふくおか」地域文化フォーラム実行委員会(編)	福岡からアジアへ 2		西日本新聞社			1995年2月	アジア
藤村道生	日清戦争前後のアジア政策		岩波書店			1995年2月	日中関係
飯島渉	コレラ中興と東アジアの防疫システム 香港・上海・横浜、1919年	「横浜と上海」共同編集委員会編『横浜と上海：近代都市形成史比較研究』	横浜開港資料普及協会		463 ~ 490	1995年3月	日中関係
加藤祐三	二つの居留地 19世紀の国際政治、二系統の条約および居留地の政策をめぐって	「横浜と上海」共同編集委員会編『横浜と上海：近代都市形成史比較研究』	横浜開港資料普及協会		69 ~ 100	1995年3月	日中関係
亜細亜大学アジア研究所(編)	東アジア経済圏研究 平成4・5年度研究プロジェクト「東アジア経済圏研究」(〈アジア研究所・研究プロジェクト報告書10〉)		亜細亜大学アジア研究所			1995年3月	アジア
亜細亜大学アジア研究所(編)	日本とアジア 冷戦を超えて(1)平成4・5年研究プロジェクト「日本とアジア」(〈アジア研究所・研究プロジェクト報告書11〉)		亜細亜大学アジア研究所			1995年3月	アジア
加藤正男	1950年代前半のアメリカのアジア政策 ソ連脅威論から中国脅威論へ	紀要(愛知大・国際問題研)		102	59 ~ 113	1995年3月	アメリカのアジア政策
山本四郎	日中関係の一断面 1918年5月在華陸軍武官情報	紀要(文学、神女大)		28	163 ~ 179	1995年3月	日中関係
山田昭次	近代日本の朝鮮観 その研究課題と方法	史苑		55(2)	4 ~ 17	1995年3月	日朝関係
姜雄	植民地期朝鮮における送電技術	人文論叢		20	157 ~ 169	1995年3月	日朝関係
辛美善	在朝日本人の意識と行動 「韓国併合」以前のソウルの日本人を中心に	日本学報(阪大・文)		14	43 ~ 62	1995年3月	日朝関係
金子文夫	日本の植民地主義：台湾・朝鮮・満州 1980年代後半から90年代前半の研究動向	論叢(人文・横浜市立大)		46(1・2・3)	35 ~ 46	1995年3月	日本植民地
ジョージ・R・ハラダ	アメリカ法におけるアジア系アメリカ人(上) 正義への闘い	研究論集(経済・広島経済大)		17(4)	13 ~ 49	1995年3月	移民
長野雅史	日本占領期香港における人口疏散政策	史苑		55(2)	37 ~ 52	1995年3月	日中関係
鄭友揆・単冠初(訳)	日本占領下の東北の工業と対外貿易(1932年~1945年)	中国と東アジア		35	20 ~ 56	1995年3月	日中関係

中京大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委員会(編)	台湾総督府文書目録 2		ゆまに書房			1995年3月	台湾関係
朴鐘鳴	在日朝鮮人—歴史・現状・展望		明石書店			1995年3月	日朝関係
畑中一男	アジア・太平洋戦争の淵源		アイ・エス・シー			1995年3月	第二次大戦
本多健吉(他)	北東アジア経済圏の形成		新評論			1995年3月	アジア
浅井良純	日帝侵略時期における朝鮮人官吏の形成について 大寒帝国官吏出身者を中心に	朝鮮学報		155	47～90	1995年4月	日朝関係
広瀬貞三	植民地朝鮮における官斡旋土建労働者 道外斡旋を中心に	朝鮮学報		155	1～46	1995年4月	日朝関係
入江昭著・興梠一郎訳	日中関係この百年		岩波書店			1995年4月	日中関係
鹿児島経済大学地域総合研究所	近代東アジアの諸相		勁草書房			1995年4月	アジア
梶原弘和	アジアの発展戦略 工業化波及と地域経済圏		東洋経済新報社			1995年4月	アジア
富士信夫	「南京大虐殺」はこうして作られた 東京裁判の欺瞞		展転社			1995年4月	日中関係
田中宏・松沢哲成(編)	中国人強制連行資料		塙書房			1995年4月	日中関係
大澤博明	明治外交と朝鮮永世中立化構想の展開 1882～84年	熊本法学		83	289～341	1995年6月	日朝関係
寺地功二	戦後合衆国外交文書とアジア・太平洋	歴史学研究		672	37～50	1995年6月	アメリカとアジア
クリストファー・ソーン(市川洋一訳)	米英にとっての太平洋戦争 上・下		草思社			1995年6月	第二次大戦
津田道夫	南京大虐殺と日本人の精神構造		社会評論社			1995年6月	日中関係
やまだあつし	日本植民地時代初期台湾における米穀業 1900年代の台湾中部を中心にして	現代中国		69	158～166	1995年7月	台湾関係
正村公宏	世界史のなかの日本とアジアの近代化	専修経済学論集(専修大学経済学会)		30(1)	65～96	1995年7月	アジア
正村公宏	世界史のなかの日本とアジアの近代化	専修経済学論集(専修大学経済学会)		30(1)	65～96	1995年7月	アジア
石井修	大恐慌期における日豪通商問題	一橋論叢		114(1)	1～22	1995年7月	日本とオセアニア
清水さゆり	日中民間貿易と日米外交 1952～1955年	一橋論叢		114(1)	80～98	1995年7月	日中関係
石子順	日本の侵略中国の抵抗 漫画に見る日中戦争時代		大月書店			1995年7月	日中関係
大林太良(他編)	日中文化研究 7 長江文明		勉誠出版			1995年7月	日中関係
加藤祐三編著	近代日本と東アジア 国際交流再考		筑摩書房			1995年7月	アジア
横山宏章(編)	東アジアはひとつになれるか ポスト冷戦と東アジアの進路		同文館出版			1995年7月	アジア
吉見義明・林博史(編)	日本軍慰安婦		大月書店			1995年7月	従軍慰安婦
中村義編	新しい東アジア像の研究		三省堂			1995年7月	アジア
須永徳武	「近現代東北アジア地域史研究会大会」参加記	歴史学研究		674	57～61	1995年8月	アジア
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第9集		東方出版			1995年8月	アジア総論 南京大虐殺 原爆
白井勝美	満州国と国際連盟		吉川弘文館			1995年8月	日中関係 満州

水羽信男	抗日統一戦線運動史	野澤豊編『日本の中華民国史研究』	汲古書院		99 ~ 122	1995年9月	日中関係
飯島みどり	ある「親日家」の誕生 「満州国」問題と1930年代エル・サルバドル外交の意図 その1	研究報告（岐阜大・教養）		32	59 ~ 78	1995年9月	満州 日本 中米
小林多加士	東アジアの新しい歴史像 東アジア世界の軸心を変える海域経済の発展	論叢（東京国際大学・人間社会）		1	1 ~ 15	1995年9月	アジア
余竜瑞	日韓関係の再構築とアジア		九州大学出版会			1995年9月	アジア 日朝関係
海野福寿	韓国併合		岩波書店			1995年9月	日朝関係
波多野勝	近代東アジアの政治変動と日本の外交		慶応通信			1995年9月	アジア
林えいだい(編)	台湾植民地統治史		梓書院			1995年9月	台湾関係
日高六郎(編)	日本と中国 若者たちの歴史認識		梨の木舎			1995年9月	日中関係
李圭洙	植民地朝鮮における集団農業移民の展開過程 不二農村を中心に	朝鮮史研究会論文集		33	203 ~ 227	1995年10月	朝鮮
木畑洋一	戦後帝国主義とアジア太平洋国際秩序	歴史学研究		677	9 ~ 14	1995年10月	アジア
千田剛道	植民地朝鮮の博物館 慶州古蹟保存会と博物館	紀要（帝塚山大・教養）		44	1 ~ 10	1995年10月	日朝関係
小島淑男	東アジアと日本	歴史学研究会編『講座世界史5 強者の論理』	東京大学出版会		147 ~ 180	1995年10月	アジア
高成鳳	朝鮮鉄道の植民地的性格についての一考察	朝鮮史研究会論文集		33	171 ~ 202	1995年10月	日朝関係
海野福寿(編)	日韓協約と韓国併合		明石書店			1995年10月	日朝関係
笠原十九司	南京難民区の百日		岩波書店			1995年10月	日中関係
戦争犠牲者を心に刻む南京集会(編)	中国人強制連行		東方出版			1995年10月	日中関係
増田弘・波多野澄雄(編)	アジアのなかの日本と中国 友好と摩擦の現代史		山川出版社			1995年10月	日中関係
江口圭一	日本の侵略	歴史学研究会編『講座世界史6 必死の代案』	東京大学出版会		303 ~ 332	1995年11月	日本侵略
松田利彦	日本統治下の朝鮮における憲兵警察機構(1910 ~ 1919年)	史林		78(6)	30 ~ 65	1995年11月	日朝関係
伊原周沢	抗日戦争期における日本人民の反戦運動	年報(追手門大・文・東洋文化)		10	33 ~ 56	1995年11月	日中関係
森本豊富	第二次世界大戦前における米国日系二世の日本留学事情	論叢(駿河台大)		11	43 ~ 65	1995年11月	日系人
「文明のクロスロード・ふくおか」地域文化フォーラム実行委員会編	福岡からアジアへ 3		西日本新聞社			1995年11月	アジア
大江志乃夫	岩波講座 近代日本と植民地7 文化のなかの植民地		岩波書店			1995年11月	日本植民地
長谷川直子	近代日本における東アジア世界再編の論理 井上毅の「琉球」・朝鮮論を通じて	総合研究(津田塾大・国際関係研)		3	161 ~ 188	1995年12月	思想史
濱下武志	地域研究と地域構想	総合地域研究		11	3 ~ 6	1995年12月	地域
早瀬晋三	近現代日米貿易のあかの東・東南アジア	総合地域研究		11	22 ~ 25	1995年12月	アジア
大江志乃夫	岩波講座 近代日本と植民地8 アジアの冷戦と脱植民地化		岩波書店			1995年12月	日本植民地
大林太良(他編)	日中文化研究 8 東アジアの祭りと芸能：日本芸能の源流		勉誠出版			1995年12月	日中関係

小林文男・柴田巖	日中戦争期・中国「抗戦文化」の研究 文化工作員会の組織と活動を中心に	広島平和科学		19	73 ~ 92	1996年	日中関係
日高一宇	日中戦争下の抗日宣伝	研究報告 (北九州工業高等専門学校)		29	77 ~ 96	1996年1月	日中関係
岡本真希子	アジア・太平洋戦争末期における朝鮮人・台湾人参政権問題	日本史研究		401	53 ~ 67	1996年1月	台湾関係
李鍾元	50年代東アジア冷戦の変容と米韓関係 「マグサイサイ現象」と李承晩	法学(東北大)		59(6)	129 ~ 162	1996年1月	アメリカとアジア
菊池一隆	抗日戦争期の華僑と中国工業合作運動	歴史評論		549	28 ~ 43	1996年1月	日中関係
上坂冬子	三つの祖国 満州に嫁いだ日系アメリカ人		中央公論社			1996年1月	日系人 満州
笠原十九司	南京事件	歴史学研究会編『講座世界史8 戦争と民衆』	東京大学出版会		109 ~ 124	1996年2月	日中関係
古賀邦子	第二次世界大戦下のアメリカ合衆国日系人 トゥールレーク隔離収容所	研究紀要 (香蘭女短大)		38	1 ~ 17	1996年2月	日系人
松本武祝	植民地権力と朝鮮農村社会	商経論叢(神奈川大)		31(2)	53 ~ 92	1996年2月	日朝関係
高橋実	台湾総督府文書の伝来と現状	地方史研究		46(1)	60 ~ 68	1996年2月	台湾関係
浜口裕子	日本統治と東アジア社会 植民地期朝鮮と満州の比較研究		勁草書房			1996年2月	日朝関係 満州
原ひろ子・前田瑞枝・大沢真理(編)	アジア・太平洋地域の女性政策と女性学		新曜社			1996年2月	アジア 女性
吉岡吉典	日本の侵略と膨張		新日本出版社			1996年2月	日本侵略
近藤正己	総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究		刀水書房			1996年2月	台湾関係
東中野修道	南京事件の真相	紀要(亜細亜大・日本文化研)		2	1 ~ 86	1996年3月	日中関係
水野直樹	在日朝鮮人・台湾人参政権「停止」条項の成立 在日朝鮮人参政権問題の歴史的検討(1)	研究紀要(世界人権問題研究センター)		1	43 ~ 66	1996年3月	日朝関係 台湾関係
和田春樹	特別講演 東北アジア戦争としての朝鮮戦争	史苑		56(2)	101 ~ 133	1996年3月	アジア 朝鮮
三宅正樹	第一次世界大戦下の日本とロシア 駐日ロシア大使マレフスキーと雑誌『太陽』	政経論叢(明大)		64(3・4)	57 ~ 87	1996年3月	日朝関係
李相陸	第二次世界大戦後アメリカの対韓[朝鮮]政策[信託統治構想]に関する一考察	法政論集(名大)		164	219 ~ 268	1996年3月	米朝関係
J. F. モリス	スミソニアン博物館の原爆展はなぜ潰されたか	宮城歴史科学研究		40	1 ~ 35	1996年3月	原子力
近藤高史	欧米のアジア観と現代アジアの政治分析の再検討	社会文化論集		4	177 ~ 190	1996年3月	日中関係
小野賢二・藤原彰・本多勝一	南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち 第13師団山田支隊兵士の陣中日記		大月書店			1996年3月	日中関係
片山邦雄	近代日本海運とアジア		御茶の水書房			1996年3月	アジア
駒込武	植民地帝国日本の文化統合		岩波書店			1996年3月	日本帝国
田中直毅	アジアの時代 日本の孤立は避けられるか		東洋経済新報社			1996年3月	アジア
日本国際問題研究所(編)	中国とポスト冷戦期のアジア・太平洋地域		日本国際問題研究所			1996年3月	アジア
東田雅博	大英帝国のアジア・イメージ		ミネルヴァ書房			1996年3月	ヨーロッパとアジア
三宅正樹	日独政治外交史研究		河出書房新社			1996年3月	日独関係
山田千秋	日本軍制の起源とドイツ		原書房			1996年3月	日独関係

樺山紘一	ヨーロッパがアジアを見るととき イサベラ・バードを読む	国際交流		71	26～35	1996年4月	ヨーロッパとアジア
宮嶋博史	朝鮮におけるアジア認識の不在	国際交流		71	66～69	1996年4月	日朝関係 アジア
沈潔	日中戦争前後における「満州国」 の婦人活動について	歴史評論		552	67～76	1996年4月	日中関係 台湾
蛭名保彦	地域経済の空洞化と東アジア		日本評論社			1996年4月	アジア
西川吉光	戦後アジアの国際関係		晃洋書房			1996年4月	アジア
鶴見和子	内発的発展論の展開		筑摩書房			1996年4月	日朝関係？
大林太良(他編)	日中文化研究 9 環東シナ海 の比較文化		勉誠出版			1996年5月	日中関係
姜在彦	「在日」からの視座		新幹社			1996年5月	在日 日朝関係
中村勝範	満州事変の衝撃		勁草書房			1996年5月	日中関係 満州
紀学仁主(編) (村田忠禧訳)	日本軍の化学戦 中国戦場にお ける毒ガス作戦		大月書店			1996年6月	日中関係
マイケル・シャ ラー(立川京一 他訳)	アジアにおける冷戦の起源		木鐸社			1996年6月	アジア アメリカ とアジア
杉谷滋編著	アジアの近代化と国家形成		御茶の水書房			1996年7月	アジア
浅野豊美	日本帝国最後の再編 「アジア 諸民族の解放」と台湾・朝鮮統 治	早稲田大学社会科学 研究所編『戦間期の アジア太平洋地域 国際関係とその展 開』	早稲田大学社会科学 研究所		247～296	1996年8月	日朝関係 台湾関 係
里深文彦	東アジアの科学・技術・社会 「技術移転」から「技術自立」へ	早稲田大学社会科学 研究所編『戦間期の アジア太平洋地域 国際関係とその展 開』	早稲田大学社会科学 研究所		297～310	1996年8月	アジア
岩崎信夫	津田左右吉の中国・アジア観に ついて 公共的国民論の成立事 情の視点から	史潮		39	46～64	1996年8月	思想史 日中関係
大畑篤四郎	日清戦争後の東アジア国際秩序 の変動 不平等条約体制を中心 に	史潮		39	4～17	1996年8月	日中関係
上杉允彦	日本統治完成期の「高砂族」の生 活状況について	高千穂論叢		31(2)	71～98	1996年8月	台湾関係
波多野澄雄	戦時「アジア新秩序論」と戦後構 想	南海研		29	29～40	1996年8月	アジア 思想史
早瀬晋三	明治期「南進論」と「大東亜共栄 圏」	南海研		29	19～28	1996年8月	大東亜共栄圏
アジア・太平洋 地域の戦争犠牲 者に思いを馳せ・心に刻む集 会実行委員会編	アジアの声 第10集		東方出版			1996年8月	アジア総論 戦争 責任
大林太良(他編)	日中文化研究 10 長江文明Ⅱ		勉誠出版			1996年8月	日中関係
久保井規夫	日本の侵略とアジアの子ども		明石書店			1996年8月	日本侵略 アジア
肥沼茂	盧溝橋事件嘘と真実		叢文社			1996年8月	日中関係
李登輝・加瀬英 明	これからのアジア		光文社			1996年8月	アジア
村田真昭	奉天票暴落問題と日本	國學院雑誌		97(9)	12～23	1996年9月	日中関係
「文明のクロス ロード・ふく おか」地域文化 フォーラム実行 委員会編	福岡からアジアへ 4		西日本新聞社			1996年9月	アジア

朝桂玉	「征韓論」の系譜		三一書房			1996年10月	日朝関係
河合文化教育研究所(編)	東アジア史を問い直す		河合文化教育研究所			1996年10月	アジア
環日本海経済研究所(編)	北東アジア		毎日新聞社			1996年10月	アジア
林銑十郎	満州事件日誌		みすず書房			1996年10月	日中関係 満州
中野泰雄	安重根と伊藤博文		恒文社			1996年10月	日朝関係
上杉允彦	日本統治完成期の「高砂族」の経済状況について(1)	高千穂論叢		31(3)	48～72	1996年11月	台湾関係
北村嘉恵	台湾人の日本植民地教育認識 日本統治下における公学校教育 についての聞き取り調査	南方文化		23	57～66	1996年11月	台湾関係
清水信明	冷戦下における米中関係 アイ ゼンハワー時代を通して	紀要(創価大・院)		18	55～74	1996年11月	アメリカとアジア
玉真之介	「満州移民」から「満蒙開拓」へ 日中戦争開始後の日満農政一体化 について	経済研究(弘前大)		19	61～74	1996年11月	日中関係 満州
上垣外憲一	ある明治人の朝鮮観 半井桃水 と日朝関係		筑摩書房			1996年11月	日朝関係
大林太良(他編)	日中文化研究 11 良渚文化		勉誠出版			1996年11月	日中関係
川上憲三	竹島の歴史地理学的研究		古今書院			1996年11月	日朝関係
小林英夫・柴田 善雅	日本軍政下の香港		社会評論社			1996年11月	日中関係
波多野澄雄	太平洋戦争とアジア外交		東京大学出版会			1996年11月	アジア 第二次大戦
守屋敬彦	アジア太平洋戦争下の朝鮮人強 制労働と遺家族援護	紀要(道都大・教養)		15	81～138	1996年12月	日朝関係
溝口雄三	もう一つの「五・四」	思想		870	53～76	1996年12月	日中関係
姜尚中	植民地と近代日本 台湾・朝鮮 半島から	日本学報(阪大)		20周年 特集号	41～56	1996年12月	日朝関係 台湾関係
内藤正中	竹島問題考	海外事情		44(12)	2～22	1996年12月	日朝関係
鈴木祐二	尖閣諸島領有権問題の発生	海外事情		44(12)	36～46	1996年12月	日中関係
小島勝・陳謙 臣・馬洪林他	第二次世界大戦前の上海におけ る日本人社会の宗教と教育(1)	紀要(龍谷大・仏教 文化研)		35	63～100	1996年12月	日中関係
須藤真志	ハル・ノートと満州問題	法学研究(慶大)		69(12)	163～180	1996年12月	日中関係 満州
木畑洋一	帝国のたそがれ 冷戦下のイギ リスとアジア		東京大学出版会			1996年12月	ヨーロッパとアジア
秦郁彦	盧溝橋事件の研究		東京大学出版会			1996年12月	日中関係
マーク・ピー ティー(浅野豊 美訳)	植民地 帝国50年の興亡		読売新聞社			1996年12月	日本植民地
今西一	帝国「日本」の自画像 1920年代 の朝鮮同化論	言語文化研究(立命 館)		8(3)	5～22	1997年1月	日朝関係
小井川広忠	香港における教育制度の展開と 経済発展 制度・歴史編	論集(社会科学、名 古屋学院大)		33(3)	169～200	1997年1月	香港地域
土屋六郎(編)	アジア太平洋経済圏の発展		同文館出版			1997年1月	アジア
古賀邦子	第二次大戦下のアメリカ合衆国 日系人 戦略情報活動と忠誠心	研究紀要(香蘭女短 大)		39	1～12	1997年2月	日系人
金英達	創始改名の研究		未来社			1997年2月	日朝関係
楠原俊代	日中戦争期における中国知識人 研究 もうひとつの長征・国立 西南聯合大学への道		研文出版			1997年2月	日中関係

田嶋信雄	ナチズム極東戦略 日独防共協定を巡る謀報戦		講談社			1997年2月	日独
遼寧省档案馆(編)	満鉄と盧溝橋事件		柏書房			1997年2月	日中関係
崔碩莞	日清戦争への道程		吉川弘文館			1997年2月	日中関係
福岡啓子	関東大震災時豊橋における朝鮮人暴動に関する流言報道	愛大史学		6	113 ~ 152	1997年3月	日朝関係
磯田一雄	日本の植民地教育における教師と子ども	紀要(コミュニケーション)〈成城大・院〉		11	27 ~ 62	1997年3月	日本植民地 教育
今泉裕美子	矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究 講義ノートを読む	国際関係学研究(津田塾大)		23	137 ~ 148	1997年3月	思想史
依田憲家	日本の植民地支配 その形成と役割	社会科学討究		42(3)	227 ~ 274	1997年3月	日本植民地
松田利彦	植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動 姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動	人文学報(京大、人文科学研)		79	131 ~ 161	1997年3月	日朝関係
水野直樹	戦時期の植民地支配と「内外地行政一元化」	人文学報(京大・人文科学研)		79	77 ~ 102	1997年3月	日朝関係
やまだあつし	植民地時代末期台湾工業の構造 国民党の接収記録を利用して	人文学報(京大・人文科学研)		79	59 ~ 76	1997年3月	日朝関係
安 秉	日本の朝鮮統治における開発行政の歩み 交通・河川開発を中心として	筑波法政		22	135 ~ 151	1997年3月	日朝関係
安井三吉	盧溝橋事件再考 中国における「日本軍計画」説をめぐって	東洋史研究		55(4)	102 ~ 130	1997年3月	日中関係
原田敬一	国権派の日清戦争 「九州日日新聞」を手がかりとして	文学部論集(佛教大・文学部)		81	19 ~ 40	1997年3月	日中関係
鄭鳳輝	熊本県人の韓国における新聞経営 安達謙蔵と徳富蘇峰を中心に	海外事情研究		24(2)	1 ~ 18	1997年3月	日朝関係
塚瀬進	中国東北地域における日本商人の存在形態	紀要(史学、中央大・文)		42	19 ~ 44	1997年3月	日中関係 満州
中沢忠保	ヒロシマとナガサキ 原爆投下決定をめぐる諸問題の再検討	国際関係学研究(津田塾大)		23	47 ~ 60	1997年3月	原子力
西岡達裕	F. D. ローゼヴェルトと原子爆弾の投下 「弾み説」の批判的再検討	政治学論集(学習院大・院)		10	1 ~ 32	1997年3月	原子力
柴田幹夫	康有為の日本認識 『日本変政考』を中心として	龍谷史壇		108	44 ~ 62	1997年3月	日中関係
小此木政夫・小島朋之	東アジア危機の構図		東洋経済新報社			1997年3月	アジア
アジア女性資料センター(編)	「慰安婦」問題Q&A(「自由主義史観」へ女たちの反論)		明石書店			1997年4月	従軍慰安婦
姜徳相	朝鮮人学徒出陣 もう一つのわだつみのこえ		岩波書店			1997年4月	日朝関係
並木真人	植民地期後半朝鮮における民衆統合の一断面 ソウルの事例を中心に	武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』	山川出版社		527 ~ 562	1997年4月	日朝関係
上杉允彦	日本統治時代の蕃地視察について(1)	高千穂論叢		32(1)	20 ~ 48	1997年5月	台湾関係
北島平一郎	朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解 二世界大戦と植民地主義の終焉	法学論集(大坂経法大)		38	61 ~ 96	1997年5月	日朝関係 日中関係
馬場明	日露戦争と満州に関する日清条約	國學院雑誌		98(5)	1 ~ 16	1997年5月	日中関係 満州
中名生正昭	アジア史の真実 変革と再生の近現代		南雲堂			1997年5月	アジア
吉見義明	「従軍慰安婦」問題と日本近代	アジア女性史国際シンポジウム実行委員会編『アジア女性史:比較史の試み』	明石書店		397 ~ 405	1997年6月	従軍慰安婦
廖秀真・森若裕子・洪郁如訳	日本植民統治下の台湾における公娼制度と娼妓に関する諸現象	アジア女性史国際シンポジウム実行委員会編『アジア女性史:比較史の試み』	明石書店		414 ~ 428	1997年6月	台湾関係

白井勝美	昭和12年「関東軍」の対中国政策について	外交史料館報		11	63 ~ 83	1997年 6月	日中関係
井上薫	日本統治下末期朝鮮における日本語普及・強制政策 徴兵制度導入に至るまでの日本語常用・全解運動への動員	紀要(北大・教育)		73	105 ~ 154	1997年 6月	日朝関係
姜範錫	江華島条約と東アジア新秩序の形成 宮本・趙交換公文の“フロート”について	広島国際研究		3	1 ~ 18	1997年 6月	日中関係
鈴木健一	太平洋戦争後の満州在留日本人学校	歴史学と歴史教育		52	11 ~ 23	1997年 6月	日中関係 満州
西村喜憲	地域と東アジアの視点から 日本史教育における現状と課題	大隅和雄、村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』	山川出版社		191 ~ 202	1997年 7月	アジア
荒木和博	北朝鮮の対南政策と「日本人拉致事件」	海外事情		45(7・8)	103 ~ 112	1997年 7月	日朝関係
姜再鎬	植民地朝鮮における地方制度と初頭教育	研究論集(群馬大・社会情報)		4	191 ~ 214	1997年 7月	日朝関係
小池聖一	経済提携の蹄鉄 満州事変前の債務整理問題をめぐって	史学研究		216	20 ~ 39	1997年 7月	日中関係 満州
小風秀雅	台湾資料調査報告および国史館所蔵対日関係資料リスト	市史研究よこはま		10	57 ~ 74	1997年 7月	台湾関係
山本真	抗日戦争期から国共内戦期にかけての郷村建設運動 中華平民教育促進会の郷村建設学院と華西実験区を中心として	史學		66(4)	81 ~ 108	1997年 7月	日中関係
山口一郎	孫文の革命思想、明治維新観と「上李鴻章書」	孫文研究		22	1 ~ 7	1997年 7月	日中関係
上杉允彦	日本統治時代の蕃地視察について(2)	高千穂論叢		32(2)	1 ~ 32	1997年 7月	台湾関係
西村成雄	1945年東アジアの国際関係と中国政治 ヤルタ「密約」の衝撃と東北接収	現代中国		71	6 ~ 19	1997年 7月	アジア
小林英夫	盧溝橋事件をめぐって 盧溝橋事件60周年によせて	歴史学研究		699	30 ~ 35、55	1997年 7月	日中関係
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第11集		東方出版			1997年 7月	アジア総論 慰安婦
浜下武志・辛島昇(編)	地域の世界史1 地域史とは何か		山川出版社			1997年 7月	地域
松原正毅	地域研究序説	地域研究論集(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)		1(1)	6 ~ 18	1997年 8月	地域
立本成文	地域研究の構図 名称にこだわって	地域研究論集(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)		1(1)	19 ~ 33	1997年 8月	地域
笠原十九司	日中全面戦争と海軍 パナイ号事件の真相		青木書店			1997年 8月	日中関係
藤原彰	南京の日本軍 南京大虐殺とその背景		大月書店			1997年 8月	日中関係
松村高夫(他)	戦争と疫病 七三一部隊のもたらしたもの		本の友社			1997年 8月	日中関係
東アジア近代史学会(編)	日清戦争と東アジア世界の変容 上巻		ゆまに書房			1997年 9月	日中関係
東アジア近代史学会(編)	日清戦争と東アジア世界の変容 下巻		ゆまに書房			1997年 9月	日中関係
檜山幸夫	日清戦争の歴史的位 置 「五十年戦争」としての日清戦争	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		11 ~ 38	1997年 9月	日中関係
濱下武志	東アジア史のなかの日清戦争	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		39 ~ 66	1997年 9月	日中関係

井口和起	日清戦争をめぐる国際環境	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		67～84	1997年9月	日中関係
戴逸（川上聡史訳）	日清戦争と極東の国際情勢	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		85～100	1997年9月	日中関係
原田環	日清戦争による朝清関係の変容	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		135～156	1997年9月	日中関係
佐々木揚	英露の極東政策と日清開戦	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		207～226	1997年9月	ヨーロッパとアジア
広瀬靖子	日清戦争前朝鮮条約関係考	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		227～256	1997年9月	日中関係
中見立夫	近代東アジア国際関係における「宗主権」〈日中国際シンポジウムにおけるジャムスラン報告に寄せて	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		265～276	1997年9月	アジア
姜昌一・森山茂徳補記	東学農民軍の日清戦争への対応	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		277～284	1997年9月	日中関係
戚其章（柴田高志訳）	甲午戦争と近代中国人の世界認識	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		285～314	1997年9月	日中関係
佐藤三郎	日清戦争が清国人心に及ぼした影響について	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		315～336	1997年9月	日中関係
呉密察（酒井郁訳）	日清戦争と台湾	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』	ゆまに書房		337～370	1997年9月	台湾関係 日中関係
大澤博明	日清開戦論	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		7～34	1997年9月	日中関係
檜山幸夫	日清戦争にける外交政策	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		35～88	1997年9月	日中関係
原剛	軍事的視点からみた日清戦争	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		89～102	1997年9月	日中関係
関捷（周晨娟訳）	甲午中日戦争期における東アジアの国際関係	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		103～134	1997年9月	日中関係
栗原純	日清戦争と李鴻章	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		151～174	1997年9月	日中関係
堀口修	「日清講和条約」及び「日清通商航海条約」について 条文の背後にあるものを求めて	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		175～207	1997年9月	日中関係
岩壁義光	日清戦争時法下の在中中国人問題	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		208～242	1997年9月	日中関係
秦郁彦	旅順虐殺事件 南京虐殺と対比しつつ	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		285～298	1997年9月	日中関係

松村正義	日清戦争と黄禍論	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		299 ~ 320	1997年9月	日中関係
大谷正	日清戦争と従軍記者	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		347 ~ 370	1997年9月	日中関係
原田敬一	軍夫の日清戦争	東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』	ゆまに書房		453 ~ 482	1997年9月	日中関係
樋口秀実	満州事変と日本海軍	紀要(国学院大・日本文化研)		80	217 ~ 243	1997年9月	日中関係 満州
湯浅成大	「強力で統一」か「弱体で分裂」か第二次大戦中戦後における日米両国の中国観の比較考察	紀要(東京女子大)		48(1)	27 ~ 52	1997年9月	日中関係
上沼八郎	植民地「教育令」の公布について(台湾・朝鮮の比較) 植民地教育史研究ノート・その11	高千穂論叢		32(2)	33 ~ 56	1997年9月	日朝関係 台湾関係 教育
菊池一隆	日中15年戦争論再考 中国近現代史研究者の視点から	歴史評論		569	2 ~ 13	1997年9月	日中関係
水羽信男	抗日戦争と中国の民主主義 章乃器の民衆動員論を素材として	歴史評論		569	26 ~ 37	1997年9月	日中関係
植田敦	原子爆弾と第二次世界大戦の終了	名城商学		47(2)	61 ~ 85	1997年9月	原子力
馬場明	日露戦争後の満州問題	國學院雑誌		98(9)	42 ~ 59	1997年9月	日中関係 満州
辛島昇・高山博(編)	地域の世界史 2 地域のイメージ		山川出版社			1997年9月	地域
高蘭	日清戦後の対清国経済進出構想 伊藤博文を中心に	日本歴史		593	49 ~ 64	1997年10月	日中関係
小瀬一	「アジア間貿易」論と近代アジア経済圏研究	歴史評論		570	53 ~ 60	1997年10月	アジア
「文明のクロスロード・ふくおか」地域文化フォーラム実行委員会編	福岡からアジアへ 5		西日本新聞社			1997年10月	アジア
肥塚文博・清水俊夫	「アジア学」の事始		晃洋書房			1997年10月	アジア
大西北呂志・李圭倍	昭和期の朝鮮総督府支配 宇垣一成を中心に	青丘学術論集		11	219 ~ 282	1997年11月	日朝関係
木村幹	日本統治期における韓国民衆運動と経済の論理 東亜グループ研究(1)	国際協力論集(神戸大)		5(2)	1 ~ 30	1997年11月	日朝関係
武島良成	ビルマ・ラカイン地域の反植民地運動 アラカン・ディフェンス・フォースの分析	史林		80(6)	70 ~ 86	1997年11月	ビルマ、日本
川田文字	「従軍慰安婦」問題の歴史と事実	評論(神奈川大)		28	80 ~ 86	1997年11月	従軍慰安婦
中野裕也	植民地統治下の台湾原住民村落における日本語教育	紀要(慶大・日吉)		19	34 ~ 53	1997年11月	台湾関係
小島勝・陳謙臣・馬洪林[他]	第二次世界大戦前の上海における日本人社会の宗教と教育(2)	紀要(龍谷大・仏教文化研)		36	30 ~ 71	1997年11月	日中関係
木村靖二・上田信(編)	地域の世界史 10 人と人の地域史		山川出版社			1997年11月	地域
吉川春子(編)	従軍慰安婦 新資料による国会論戦		あゆみ出版			1997年11月	従軍慰安婦
上杉允彦	日本統治時代の蕃地視察について(3)	高千穂論叢		32(3)	72 ~ 112	1997年11月	台湾関係
水岡不二雄	英国人植民地支配に内面化した空間の矛盾 香港の観塘開発における戦後工業化と官有地政策	アジア研究		44(1)	1 ~ 40	1997年12月	ヨーロッパとアジア
土屋忍	大東亜戦争の物語と抗日「自由タイ」の記憶:「クーカム」をめぐって	国際文化研究(東北大・国際文化学会)		4	45 ~ 57	1997年12月	大東亜戦争、タイ

グレゴリー・ガーリ	植民都市上海における身体 横光利一『上海』の解説	思想		882	242 ~ 261	1997年12月	日中関係
松本武祝	植民地下の朝鮮人はいかに統治されたか 日本「帝国」の意図せざる統合原理	情況(第二期)		8(10)	25 ~ 38	1997年12月	日朝関係
平賀明彦	日中戦時下の農村文化問題 巡回映画の活動を手がかりに	中国21		2	61 ~ 92	1997年12月	日中関係
山田朗・江口圭一・三好章	東アジア近代の中での日中戦争	中国21		2	1 ~ 26	1997年12月	日中関係
窪田祥宏	日中戦争期における興亜青年勤労報国隊(学生隊)の大陸派遣(第1回)	紀要(日大・大学史編纂室)		4	61 ~ 138	1998年1月	日中関係
王偉彬	「政経分離」政策の登場から中日関係の断絶へ 1958年中日関係断絶原因の再考を中心に	社会システム研究(京大・院)		1	159 ~ 176	1998年1月	日中関係
私市正年	新しい地域研究論の模索 歴史学は何をなすうのか	ソフィア		46(4)	36 ~ 55	1998年1月	地域
宮田節子	日本の朝鮮支配を考える	朝鮮学報		166	1 ~ 20	1998年1月	日朝関係
横手慎二	第二次大戦期のソ連の対日政策 1941-1944	法学研究(慶応大)		71(1)	201 ~ 227	1998年1月	第二次大戦 日露関係
北島平一郎	朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解(2) 駁逆の明治維新—侵略植民地主義の発足	法学論集(大坂経法大)		38(4)	37 ~ 52	1998年1月	日本植民地
添谷芳秀	国際政治のなかの日中関係 国交正常化後25年の軌跡	国際問題		454	40 ~ 56	1998年1月	日中関係
青木保・佐伯啓思編著	「アジア的価値」とは		TBSブリタイカ			1998年1月	アジア
上杉允彦	日本統治時代の蕃地視察について(4)	高千穂論叢		32(4)	16 ~ 44	1998年2月	台湾関係
上沼八郎	植民地「教育令」の公布について(台湾・朝鮮の比較「承前」植民地教育史研究ノート・その12)	高千穂論叢		32(4)	45 ~ 66	1998年2月	日朝関係 台湾関係 教育
帆刈浩之	広東華人ネットワークによる横浜華僑救済 関東大震災時の横浜・神戸・香港・広東	人間社会文化研究(徳島大・総合科学)		5	95 ~ 106	1998年2月	日中関係
塚本元	北京政府期における中央外交と地方外交(1919~20) 湖南に日中両国人衝突事件の外交的処理を事例に	法学志林		95(3)	1 ~ 35	1998年2月	日中関係
田村紀雄	在米日系新聞の発達史研究(23)戦時・日系人移動と世論形成過程 The Vancouver Sun と The New Canadian	人文自然科学論集(東京経大)		105	79 ~ 94	1998年2月	日系人
アジアに愛する戦争責任を民主憲法を問う民衆法廷準備会編纂	戦争背金		緑風出版			1998年2月	アジア 戦争
岩崎育夫(編)	アジアと市民社会		アジア経済出版会			1998年2月	アジア
横田豊	大島町事件再考 関東大震災下の中国人・朝鮮人虐殺事件の真因をめざして	青山史学		16	57 ~ 74	1998年3月	日朝関係
岸田文隆	漂流民の伝えた朝鮮語 島根県高見家文書「朝鮮人見聞書」について	紀要(富山大・人文)		30	113 ~ 143	1998年3月	日朝関係
広川佐保	1940年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙	紀要(日本モンゴル学会)		28	29 ~ 41	1998年3月	日本、モンゴル
朴己煥	旧韓末と併合初期における韓国人の日本留学	近代日本研究(慶大・福澤研究センター)		14	254 ~ 194	1998年3月	日朝関係
中村哲	20世紀初—30年代の東アジアと日本資本主義	言語文化研究(立命館大)		9(5・6)	3 ~ 42	1998年3月	東アジア
胎中千鶴	日本統治期台湾の仏教勢力 1921年南瀛仏教会成立まで	史苑		58(2)	23 ~ 45	1998年3月	台湾関係
金哲秀・野村博	朝鮮総督府の宗教政策 「朝鮮神宮」の設立をめぐる	社会学部論集(仏教大・社会学)		31	17 ~ 34	1998年3月	日朝関係
栗原純	植民地台湾における初等教育政策	史論		51	1 ~ 20	1998年3月	

三浦滋子	梁啓超の対日認識：日本亡命から日露戦争まで	史論		51	43～63	1998年3月	
松田利彦	日本統治下の朝鮮における「警察の民衆化」と「民衆の警察化」植民地における民衆統合政策	人文論集（兵庫県立大）		33(4)	27～70	1998年3月	日朝関係
松田吉郎	日本統治時代台湾における農業実行小団体について 台南州の例	東洋史訪		4	61～69	1998年3月	台湾関係
田中正敬	朝鮮開港後の日本塩輸入とその影響 研究史整理を中心に	日本塩業の歴史		26	327～351	1998年3月	日本、朝鮮、経済
高成風	日本植民地鉄道と東アジアの近代(1) 朝鮮・台湾・中国東北(「満州」)の比較	法学志林		95(4)	151～198	1998年3月	東アジアと日本
松尾展成	ザクセンの森鷗外	経済学会雑誌（岡山大）		29(4)	87～124	1998年3月	日本
松尾展成	ザクセンにおける日本人(1)	経済学会雑誌（岡山大）		29(4)	187～210	1998年3月	日本
高橋秀直	江華条約と明治政府	研究紀要(京大・文)		37	45～110	1998年3月	日朝関係
東敏雄教授 退官 記念論文集編集 委員会(編)	地域社会の歴史と構造		御茶の水書房			1998年3月	地域
飯田順三	日・タイ条約関係の史的展開過程に関する研究		創価大学アジア研究所			1998年3月	日タイ関係
大胡欽一	アジア世界・おの構造と原義を求めて		八千代出版			1998年3月	アジア
大林太良(他編)	日中文化研究 12 民俗学再生の道		勉誠出版			1998年3月	日中関係
松本宣郎・山田 勝芳	地域の世界史(5) 移動の世界史		山川出版社			1998年3月	地域
袁克勤	米華相互防衛条約の締結と「二つの中国」問題	国際政治		118	60～83	1998年5月	台湾関係
松本はる香	台湾海峡危機(1954-55)と米華相互防衛条約の締結	国際政治		118	84～102	1998年5月	台湾関係
湯浅成大	冷戦初期アメリカの中国政策における台湾	国際政治		118	46～59	1998年5月	台湾関係
青木得三	太平洋戦争前史 第1巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
大江志乃夫	東アジア史としての日清戦争		立風出版			1998年5月	日中関係 アジア
金城康全	琉球の郵便物語		ポーターインク			1998年5月	琉球
天見慧編著	アジアの21世紀的転換の歴史的位相		紀伊国屋書店			1998年5月	アジア
青木得三	太平洋戦争前史 第2巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
青木得三	太平洋戦争前史 第3巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
青木得三	太平洋戦争前史 第4巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
青木得三	太平洋戦争前史 第5巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
青木得三	太平洋戦争前史 第6巻		ゆまに書房			1998年5月	太平洋戦争
陳建安	日本企業の対中国直接投資と中日の産業協力	産業経済研究（久留米大）		39(1)	73～89	1998年6月	日中関係
黄東蘭	民国期山西省の村制と日本の町村制	中国		13	171～192	1998年6月	中国、日本
松尾展成	ザクセンにおける日本人(2)	経済学会雑誌（岡山大）		30(1)	183～200	1998年6月	日本
松尾展成	来日したザクセン関係者	経済学会雑誌（岡山大）		30(1)	117～158	1998年6月	日本
アジア経済研究所(編)	アジア動向年報 1998年版		アジア経済研究所			1998年6月	アジア

吉田裕	新装版 天皇の軍隊と南京事件		青木書店			1998年6月	南京事件
桃木至朗	東・東南アジアの歴史・地域・時代 「日本史」の位置と方法をめぐる評論の試み	新しい歴史学のために		230・231	38～47	1998年7月	東アジアと日本
董守義	清朝末期における日本留学の回顧	史泉		88	15～27	1998年7月	日中関係
藤本博	ヴェトナム戦争と日米関係 1965年～1967年 アジアにおける「冷戦」史の文脈の中で	社会科学論集（愛知教大）		37	137～171	1998年7月	ヴェトナム、日本、アメリカ
安達宏昭	1930年代日本のインドシナ鉱物資源進出 鉄鉱石を中心に	日本植民地研究		10	48～65	1998年7月	日本、インドシナ
井村哲郎	各地「档案馆指南」指南 日本関係档案を中心に	日本植民地研究		10	91～99	1998年7月	日中関係
河路由佳	日本統治下における台湾公学校の日本語教育と戦後台湾におけるその展開 当時の台湾人教師・日本人教師・台湾人児童からの証言	人間と社会（東京農工大）		9	263～284	1998年7月	台湾関係
ウォン・ユー・チン	日本の多国籍企業の東アジアにおける所有形態とその決定要因の実証分析	三田学会雑誌		91(2)	52～70	1998年7月	東アジア、日本
禹守根	竹島に対する韓国側の領有権の見解の考察 韓国の国際法学者の主張とその根拠	論文集(慶応大・院・法学)		39	151～172	1998年7月	日朝関係
田中隆一	韓国併合と天皇恩赦大権	日本歴史		602	78～96	1998年7月	日朝関係
伊波晋猷	沖縄歴史物語〈平凡社ライブラリー 252〉		平凡社			1998年7月	沖縄
大江志乃夫	日本植民地探訪		新潮社			1998年7月	日本植民地
小野稔	汪兆銘名古屋に死す		東京ジャーナルセンター			1998年7月	日中関係
藤原彰(編)	南京事件をどうみるか 日・中・米研究者による証言		青木書店			1998年7月	日中関係
吉田実	日中報道回想の三十五年		潮出版社			1998年7月	日中
東田雅博	『図像の中の中国と日本—ヴィクトリア朝期のオリент幻想』		山川出版社			1998年7月	日本
金賛汀	戦前、大阪で発行された『民衆時報』に見る在阪朝鮮人の実態(3)	東アジア研究(大阪経法大)		21	85～108	1998年8月	日本、朝鮮
葛本一雄	朝鮮通信使の廃絶と中井竹山 徳川中期に見る日本的華夷思想	東アジア研究(大阪経法大)		21	25～40	1998年8月	日朝関係
高秉雲	日本の朝鮮火田民政策	東アジア研究(大阪経法大)		21	53～68	1998年8月	日朝関係
大林太良(他編)	日中文化研究 13 年中行事と祭祀		勉誠出版			1998年8月	日中関係
河地重蔵藤本昭 上野秀夫	中国経済と東アジア圏		世界思想社			1998年8月	アジア
榊原政春	一中尉の東南アジア軍政日記		草思社			1998年8月	軍事
堤智子	台湾における「日本精神」という言葉 その意味と使用状況の変遷	学報(天理大)		50(1)	1～11	1998年9月	台湾
糟谷政和	1850年代朝鮮船の琉球漂着と朝鮮通事	コミュニケーション学科論集(茨城大・人文)		4	83～94	1998年9月	琉球、朝鮮
松尾展成	ザクセンの森鷗外 補遺	経済学会雑誌(岡山大)		30(2)	87～124	1998年9月	日本
松尾展成	ザクセンにおける日本人(完)	経済学会雑誌(岡山大)		30(2)	221～242	1998年9月	日本
川島真	日本台湾学会の設立	アジア経済		39(10)	75～88	1998年10月	台湾

グエン・ティエン・ルック	1930-1940年代仏印・日本貿易関係の研究 日本軍の北部仏印進駐前後の仏印・日本貿易の変遷に関する分析	史学研究		222	1 ~ 23	1998年10月	日印関係
浅野豊美	「満州国」における治外法権問題と国籍法	渋沢研究		11	17 ~ 40	1998年10月	満州
池田龍紀	孫文「大亜細亜主義」の影響 日中関係に見る相互誤解の発端の有力例として	台湾青年		456	1 ~ 7	1998年10月	日中関係
上杉允彦	日本統治時代の台湾における「防蕃制」について(1)	高千穂論叢		33(2)	16 ~ 59	1998年10月	台湾
内田知行	重慶国民政府の抗日政治宣伝政策と日本人反戦運動	中国研究月報		52(10)	1 ~ 16	1998年10月	日中関係
高瀬要一	ベトナムホイアン市日本人墓の発掘調査と保存修復計画	日本歴史		605	97 ~ 105	1998年10月	ベトナム、日本
田中悦子	上海時代の尾崎秀実 「上海特電」を中心に	日本歴史		605	83 ~ 91	1998年10月	日中関係
神谷丹路	日本漁民の朝鮮への植民過程をたどる 岡山県和気郡日生漁民を中心として	青丘学術論集		13	49 ~ 130	1998年11月	日朝関係
坂本悠一	福岡県における朝鮮人移民社会の成立 戦間期の北九州工業地帯を中心として	青丘学術論集		13	131 ~ 252	1998年11月	九州、朝鮮
荒武達朗	1940年代山東省南部抗日根拠地の土地改革と農村経済	アジア経済		39(11)	31 ~ 50	1998年11月	日中関係
宮崎正勝	東アジアの中核海域ネットワークと日本 高等学校「日本史」の時代ごとに区別せずに行う主題学習の主題例として	釧路論集(北海道教大)		30	17 ~ 37	1998年11月	日本、東アジア
井上久士	中国共産党の捕虜政策と日本人反戦運動	近きに在りて		34	3 ~ 8	1998年11月	日中関係
武島良成	東亜青年連盟(アーシャ・ルーゲー)の軍事訓練	日本史研究		435	51 ~ 65	1998年11月	日本
洲脇一郎	華僑社会の形成と神戸・大阪の近代 幫・会館・買弁	ヒストリア		162	62 ~ 85	1998年11月	日中関係
田畑久夫	鳥居龍蔵の朝鮮半島調査 調査記録などの分析を通して	文化史研究(昭和女子大)		2	32 ~ 62	1998年11月	日朝関係
時野谷滋	所謂「創氏改名」の問題	藝林		47(4)	2 ~ 29	1998年11月	日朝関係
大島幹雄	シベリア漂流 玉井喜作の生涯		新潮社			1998年11月	シベリア
木村健二・小松裕(編著)	史料と分析 「韓国併合」直後の在日朝鮮人・中国人 東アジアの近代化と人の移動		明石書店			1998年11月	日朝関係
谷光隆	東亜同文書院「支那調査報告書」所収商業機関・商業団体・同業組合関係目次	紀要(愛知大・国際問題研)		110	195 ~ 245	1998年12月	日中関係
田代文幸	満州産業開発5箇年計画と満州電業株式会社	経済論集(北海学園大)		46(3)	109 ~ 130	1998年12月	満州
成田静香	ある中国人女性の神戸における医療伝道:金雅妹の前半生	人文論研(関西大学・人文)		48(3)	174 ~ 188	1998年12月	日中関係
宇野重昭・滝口太郎・別枝行夫(編)	大戦後の日中関係と国際環境	成蹊法学		48	387 ~ 401	1998年12月	日中関係
汪輝	日清戦争前日本の対清人材教育 荒尾精と上海日清貿易研究所	広島東洋史学報		3	72 ~ 78	1998年12月	日中関係
木畑洋一	イギリスの帝国意識 日本との比較の視点から	木畑洋一編『大英帝国と帝国意識』	ミネルヴァ書房		1 ~ 25	1998年12月	日本
河村湊	文学から見る「満州」「五族協和」の夢と現実		吉川弘文館			1998年12月	満州
天児慧・園田茂人(編)	日中交流の四半世紀		東洋経済新報社			1998年12月	日中関係
山本武利	特務機関の謀略 諜報とインパール作戦		吉川弘文館			1998年12月	軍事
萩原充	南京国民政府の華中・華南鉄道建設と日本	経済学研究(北大)		48(3)	100 ~ 117	1999年1月	日中関係

平井廣一	「満州国」特別会計予算の一考察 1932-1941	経済学研究(北大)		48(3)	80～99	1999年1月	満州
川瀬千春	「満州国」と国策宣伝の年画	中国研究月報		53(1)	1～19	1999年1月	満州
今井清一	20世紀における日本の中国研究 と中国認識(10) 著作から見た 尾崎秀実の中国認識	中国研究月報		611	36～53	1999年1月	日中関係
米山裕	二重性と同化論 日本人会研究 の新視角	立命館史学		558	340～354	1999年1月	日本
大林太良(他編)	日中文化研究 14 環境から考 える東アジア農業：歴史的展開 と現在		勉誠出版			1999年1月	日中関係
姜海守	植民地「朝鮮」における「国文学 史」の成立 趙潤済の「文学史」 叙述を中心に	西川長男・渡辺公三 編『世紀転換期の国 際秩序と国民文化の 形成』	柏書房		357～384	1999年2月	植民地期朝鮮
今西一	帝国「日本」の自画像 1920年代 の朝鮮同化論	西川長男・渡辺公三 編『世紀転換期の国 際秩序と国民文化の 形成』	柏書房			1999年2月	日朝関係
藤井健志	戦後台湾における天理教の布教 過程(2)	紀要(東京学芸大、 人文科学)		50	27～45	1999年2月	台湾
服部龍二	ワシントン会議と極東問題 1921-1922	史学雑誌		108(2)	1～33	1999年2月	極東
洪郁如	日本の台湾統治と婦人団体 1904～1930年の愛国婦人会台 湾支部に関する一試論	立命館言語文化研究		10(5・6)	159～177	1999年2月	台湾
斉藤治子	1934年ソ連の対独対日外交	帝京国際文化		12	19～47	1999年2月	日本、外交
時野谷滋	所謂「創氏改名」制度の制定まで	藝林		48(1)	2～38	1999年2月	日朝関係
松田吉郎	日本統治時代台湾の「蕃童教育 所」について 「蕃童教育標準」 制定期を中心に		紀要(兵庫教大)	19(2)	39～45	1999年2月	台湾
長澤秀	貝島炭礦と朝鮮人強制連行	青丘学術論集		14	155～200	1999年3月	日朝関係
柴田善雅	華北占領地における日系企業の 活動と敗戦時資産	紀要(社会科学、大 東文化大)		37	203～232	1999年3月	日中関係
伊原吉之助	ローズヴェルト大統領と第二次 世界大戦 第二次大戦後の米中 関係史・序論	紀要(帝塚山大・教 養)		57	35～86	1999年3月	米中関係
田中寛	日中戦争における旧日本軍の毒 ガス戦 中国戦場での使用の実 態について	紀要(社会科学、大 東文化大)		37	161～184	1999年3月	日中関係
咲本和子	「皇民化」政策期の在朝日本人 京城女子師範学校を中心に	国際関係学研究(津 田塾大)		25	79～94	1999年3月	日朝関係
鳴野雅之	清朝官人の対日認識 日清修好 条規草案の検討から	史流		38	1～68	1999年3月	日中関係
袁克勤	国民政府と「吉田書簡」の作成	史流		38	69～97	1999年3月	日中関係
二階堂裕子	在日韓国・朝鮮人のネットワー ク 大都市圏に住むある親族の 事例より	人文論叢(大阪市立 大・文学)		27	49～68	1999年3月	日朝関係
八島継男	わが国の対中国経済・技術協力 の歴史と展望	中国と東アジア		43	6～37	1999年3月	日中関係
萩原稔	昭和の北一輝 対中国和平論と 「国家改造」論の関係を中心に	同志社法学		50(6)	68～117	1999年3月	日中
大原美喜	関西大学草創期における清国人 留学生	年史紀要(関西大)		11	11～44	1999年3月	日中関係
黄文雄	日本領有期における台湾国民教 育の近代化 書房教育と公学校 教育の消長を中心として	百年史研究(拓殖大)		1・2	65～78	1999年3月	台湾
北島平一郎	朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦 解(5) 駁逆の明治維新 大日 本帝国植民地主等の系譜	法学論集(大阪経法 大)		43	61～94	1999年3月	抗日、排日
内藤正中	終戦前後における鳥取県の朝鮮 人	北東アジア文化研究		9	1～22	1999年3月	日朝関係

川勝守	環中国海地域間交流と明帝国冊封体制 沖縄県『校訂本・歴史宝案』による新研究	歴代宝案研究		10	1 ~ 22	1999年 3月	琉球、中国
一瀬昌夫	カナダの日系人 日系アメリカ人との比較において	紀要(帝塚山短大)		36	32 ~ 43	1999年 3月	日本
大林太良(他編)	日中文化研究 15 越境する新疆・ウイグル		勉誠出版			1999年 3月	日中関係
大林太良(他編)	日中文化研究 16 不老不死という欲望		勉誠出版			1999年 3月	日中関係
稲越功一	アジア視線		毎日新聞社			1999年 4月	アジア
中華民国台湾省文献委員会他監修中京大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編集委員会(編)	台湾総督府文書目録		ゆまに書房			1999年 4月	台湾
陳祖思	上海日本人居留民の子弟教育	小島勝・馬洪林編著『上海の日本人社会戦前の文化・宗教・教育』	竜谷大学仏教文化研究所		113 ~ 133	1999年 5月	日中
小島勝	上海の日本人学校の性格	小島勝・馬洪林編著『上海の日本人社会戦前の文化・宗教・教育』	竜谷大学仏教文化研究所		135 ~ 197	1999年 5月	日中関係
馬洪林	1937年以前の上海日本人居留民の社会と文化	小島勝・馬洪林編著『上海の日本人社会戦前の文化・宗教・教育』	竜谷大学仏教文化研究所		25 ~ 47	1999年 5月	日中関係
齋藤英里	矢内原忠雄とアイルランド 周辺からみた植民学	中村勝己編『歴史の中の現代 西洋・アジア・日本』	ミネルヴァ書房		257 ~ 283	1999年 5月	日本人
川島真	装置としての『台湾』と日本人の外縁 在暹『台湾人』国籍問題 1899-1900	日本台湾学会報		1	39 ~ 53	1999年 5月	台湾
濱下武志	東アジア世界の地域ネットワーク		国際文化交流推進協会			1999年 5月	東アジア
大庭三枝	オーストラリアのアジア帰属と対ECAFE/ESCAP政策 自己内包的「地域」の模索	アジア研究		45(1)	101 ~ 130	1999年 6月	アジア-オセアニア
熊本史雄	在満州国日本人小学校経営の満鉄への委託問題	外交史料館報		13	76 ~ 92	1999年 6月	満州
岸本美緒	「地域社会論」雑感	史海		46	1 ~ 10	1999年 6月	地域理論
安彦一恵・魚住洋一・中岡成文(編)	戦争責任と「われわれ」		ナカニシヤ出版			1999年 6月	戦争責任
小峰和夫	満州		御茶の水書房			1999年 6月	満州
韓哲儀	日本の満州支配と満州伝道会		日本基督教団出版			1999年 6月	満州
朴宣美	朝鮮社会の近代的変容と女子日本留学 1910 ~ 1945年	史林		82(4)	1 ~ 36	1999年 7月	植民地期朝鮮
木場明志	日中戦争下北京における中国人女子高等教育の試み 東本願寺系覚生中学校について	真宗文化		8	48 ~ 107	1999年 7月	日中関係
青井哲人	朝鮮の居留民奉斎神社と朝鮮総督府の神社政策 「勝地」としての神社境内の形成およびその変容と持続	朝鮮学報		172	69 ~ 115	1999年 7月	植民地期朝鮮
アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ・心に刻む集会実行委員会編	アジアの声 第12集		東方出版			1999年 7月	アジア総論 中国侵略
日本都市計画学会九州支部(編)	アジアの都市計画		九州大学出版会			1999年 7月	アジア
蘇崇民(山下睦男・和田正弘訳)	満鉄史		葦書房			1999年 7月	満鉄

水野直樹	朝鮮人の国外移住と日本帝国	『岩波講座世界歴史19』	岩波書店		255～275	1999年8月	朝鮮人
馬場明	1910年代の満蒙鉄道問題	国学院雑誌		100(8)	36～50	1999年8月	満州
除照彦編著	アジアにおける地域協力と日本 (名古屋大学国際経済動態研究センター叢書6)		御茶の水書房			1999年8月	アジア
日本貿易振興会(編)	グローバリゼーションの功罪とアジアの将来		日本貿易振興会			1999年8月	アジア
野添憲治編著	秋田の朝鮮人強制連行		彩流社			1999年8月	強制連行
板垣竜太	植民地期朝鮮における識字調査	アジア・アフリカ言語文化研究(東京外大)		58	277～316	1999年9月	植民地期朝鮮
河原林直人	植民地台湾における輸出産業の転換期 1930年代の包種茶輸出	経済学雑誌(大阪市立大)		100(2)	49～65	1999年9月	台湾
長田彰文	朝鮮独立運動と国際関係 1918-1922年	国際政治		122	23～38	1999年9月	朝鮮
後藤春美	初期国際連盟と阿片麻薬問題 日英両国の取り組みを中心に	国際政治		122	69～86	1999年9月	日英
陳文添	台湾省文献委員会収蔵之日治時期當案 兼述拓殖大学相關学校文書目録	百年史研究(拓殖大)		3	29～39	1999年9月	台湾
池田憲彦	後藤新平の異民族観・試論 主に東洋協会機関誌に収録されている諸稿から	百年史研究(拓殖大)		3	35～58	1999年9月	後藤新平
高木誠一郎	冷戦後の日米同盟と北東アジア安全保障のジレンマ論の観点から	国際問題		474	2～15	1999年9月	日米関係
朝日新聞戦後補償問題取材班	戦後補償とは何か		朝日新聞社			1999年9月	戦後補償
杉田米行	ヘゲモニーの逆説 アジア太平洋戦争と米国の東アジア政策 1941～1952年		世界思想社			1999年9月	アメリカ東アジア
春田哲吉	日本の海外植民地の終焉		原書房			1999年9月	日本植民地
毎日新聞社(編)	満州国の幻影		毎日新聞社			1999年9月	満州
藤原彰・姫田光義(編)	日中戦争下中国における日本人反戦活動		青木書店			1999年9月	日中
宋仁守(編)	アジアの中の日本 日本の中のアジア		法律文化社			1999年9月	アジア
洪郁如	明治・大正期植民地台湾における女子教育観の展開	中国女性史研究会編『論集 中国女性史』	吉川弘文館		244～261	1999年10月	台湾
江上幸子	日本軍の婦女暴行と戦時下の中国女性雑誌	中国女性史研究会編『論集 中国女性史』	吉川弘文館		262～281	1999年10月	日中関係
荒井功	アジアとヨーロッパの国際関係 1948～1970 社会ネットワークによる比較分析	久留米大学法学		36	131～208	1999年10月	アジア
樋口雄一	日本の地域社会と在日朝鮮人 神奈川県域を中心に	朝鮮史研究会論文集		37	5～20、270	1999年10月	在日朝鮮人
広瀬貞三	植民地期の治水事業と朝鮮社会 洛東江を中心に	朝鮮史研究会論文集		37	107～131	1999年10月	植民地期朝鮮
北村稔	「南京大虐殺」研究所説(上) 国民党国際宣伝処と戦時対外宣伝	東亜		388	33～42	1999年10月	南京事件
今村実	在日韓国・朝鮮人の母国の民族伝承について	北東アジア文化研究		10	27～45	1999年10月	日朝関係
辻弘範	植民地期実力養成運動における連統と転換 戴寧青年会幹部の地域有力者層による活動(1920～27)	朝鮮史研究会論文集		37	75～106	1999年10月	植民地期朝鮮
高成鳳	日本植民地鉄道と東アジアの「近代」(4) 朝鮮・台湾・中国東北(「満州」)の比較	法学史林		97(1)	143～185	1999年10月	東アジア

竹沢泰子	アメリカ合衆国におけるアジアとヨーロッパ アジア移民とヨーロッパ系アメリカ人の遭遇と葛藤	『岩波講座世界歴史 23』	岩波書店		111 ~ 134	1999年11月	アメリカーアジア
山内昌之	アジアとヨーロッパ 日本からの視角	『岩波講座世界歴史 23』	岩波書店		3 ~ 59	1999年11月	アジア
樺山紘一	アジアとヨーロッパ 1900年代-20年代	『岩波講座世界歴史 23』	岩波書店			1999年11月	アジア
岡本真希子	在台湾「内地」人の「民権」論 植民地在住者の政治参加の一側面	日本史研究		25	30 ~ 52	1999年11月	台湾
長田彰文	朝鮮三・一独立運動と日本政界運動への日本の対応と朝鮮統治の「改革」をめぐる政治力学		上智史学	44	55 ~ 88	1999年11月	朝鮮独立
アラン・M/ウィングラー (麻田貞雄・岡田良之助訳)	アメリカ人の核意識 ヒロシマからスミソニアンまで		ミネルヴァ書房			1999年11月	核問題
日本植民地教育史研究会	植民地教育史認識を問う		皓星社			1999年11月	植民地教育
中嶋嶺雄	中国・台湾・香港		P H P 研究所			1999年11月	中国・台湾・香港
三国恵子	在日韓国・朝鮮人の集住に関する研究 川崎市南部地域を例として	人口学研究		25	70 ~ 73	1999年12月	在日朝鮮人
飯嶋満	満州国における「軍警統合」の成立と崩壊	駿台史学		105	45 ~ 67	1999年12月	満州
山田朗	満州事変と昭和天皇	駿台史学		108	61 ~ 73	1999年12月	満州
内田知行	重慶国民政府と抗日期の朝鮮人独立運動	近きに在りて		36	9 ~ 26	1999年12月	日中朝鮮
酒井一臣	ワシントン会議への道 太平洋問題と「帝国」日本	法学政治学論究		43	707 ~ 736	1999年12月	帝国日本
鳥川雅史	アメリカの東アジア戦略と日米安保体制	歴史学研究		731	18 ~ 21、56	1999年12月	日米関係

〈2000年代〉

著者	タイトル	雑誌名	本の場合の出典	巻・号	ページ	年月	キーワード
相原茂樹	近衛篤磨のアジア主義：東亜同 会活動後編	社会システム研究 (京大・院)		3	189～214	2000年2月	アジア
山田千香子	カナダ日系社会の文化変容 「海を渡った日本の村」三世代の変遷		御茶の水書房			2000年2月	日本人、カナダ
太田孝子	植民地下朝鮮における龍谷高等 女学校	ジェンダー研究（お 茶の水女大）		3	105～130	2000年3月	朝鮮
園田節子	1874年中秘天津条約交渉の研究	相関社会科学（東大・ 総合）		10	52～67	2000年3月	天津条約
狭間直樹	五四運動と日本：親日派三高官 「罷免」問題をめぐって	東洋学報		72	573～592	2000年3月	五四運動
千紅	幣原外交における「経済中心主 義」：1925年の青島労働争議と 五・三〇事件の外交的対応をめぐ って	人間文化論叢（お茶 の水女大・院）		3	1～10	2000年3月	青島
古家信平	台湾南部の法師による開廟門儀 礼(上)	歴史人類		28	79～101	2000年3月	台湾
黒川勝利	シアトルにおける日系人帰還問 題	経済学会雑誌（岡山 大）		31(4)	253～275	2000年3月	日本人、アメリカ
ゾーヤ・モル グーン（藤本和 貴夫訳）	内戦と干渉戦争期ウラジオス トークの日本人（1918年-1922 年）	ロシア史研究		66	27～32	2000年4月	日本人、ロシア
伊藤隆・滝沢誠 （監修）	明治人による近代朝鮮論影印叢 書：第8巻 大院君・閔妃3		ぺりかん社			2000年5月	朝鮮
内海愛子・高橋 哲哉他（編）	戦犯裁判と性暴力：日本軍性奴 隷制を裁く—2000年女性国際戦 犯法廷の記録第1巻		緑風出版			2000年5月	従軍慰安婦
権仁燮	朝鮮と日本の関係史		明石書店			2000年5月	日朝関係
森戸睦子	大連“引き揚げ”を見届けた男： 高橋庄一郎の日中友好50余年		創土社			2000年5月	日中関係、引揚
今井駿	日中戦争期の龔德伯の日本観： 『中国必勝論』から『日本之末路』 へ(1)	近きに在りて		37	19～30	2000年6月	日中戦争
今井清一	成都基地のB29の対日爆撃とそ の環境	近きに在りて		37	5～18	2000年6月	日中関係
中根隆行	日露戦争後における朝鮮植民事 業の文化政学	文学研究論集（筑波 大）		18	1～24	2000年6月	朝鮮
南富鎮	近代日本の朝鮮人像の形成：「朝 鮮民族性」の由来について	文学研究論集（筑波 大）		18	25～44	2000年6月	日朝関係
鄭惠英	金東仁「赤い山」と万宝山事件： 1930年代の小説に現れた満州	文学研究論集（筑波 大）		18	63～77	2000年6月	満州
伊藤隆・滝沢誠 （監修）	明治人による近代朝鮮論影印叢 書：第9巻 大院君・閔妃4		ぺりかん社			2000年6月	朝鮮
金載昊	皇室財政と「租税国家」の成立： 韓国と日本の比較	社会経済史学		66(2)	3～23	2000年7月	韓国、比較
江旭本	台湾商工学校の学校生活：台湾 人学生の場合	拓殖大学百年史研究		5	76～87	2000年7月	台湾
服部龍二	中国革命外交と日米英：1928 ～1929	中国研究月報		629	39～49	2000年7月	中国
浅田正彦	日華平和条約と国際法(1)	法学論叢(京大)		147(4)	1～37	2000年7月	日中関係
アジア・太平洋 地域の戦争犠牲 者に思いを馳 せ・心に刻む集 会実行委員会編	アジアの声 第13集		東方出版			2000年7月	アジア総論 イン ドネシア
樋口雄一（編・ 解説）	復刻 戦時下朝鮮人労働員基 礎資料集 1～5		緑蔭書房			2000年7月	朝鮮人
肥沼茂	盧溝橋事件嘘と真実		叢文社			2000年7月	日中関係、盧溝橋 事件
満州国通信社 （編）	満州国現勢：建国一大同2年版 康德2～5年版		クレス出版			2000年7月	満州

山中昌之	イスラームと日本政治		中央公論新社			2000年7月	イスラーム
菅野直樹	鴨緑江採木会社と日本の満州進出	国史学		172	45 ~ 76	2000年8月	満州
坂本夏男	再考・盧溝橋事件における日中両軍衝突時の一検証	皇学館論叢		33(4)	1 ~ 17	2000年8月	日中関係、満州
小川原宏幸	日本の韓国保護政策と韓国におけるイギリスの領事裁判権：ベッセル裁判を事例として	駿台史学		110	1 ~ 30	2000年8月	日韓関係
武城正長	台湾海軍の近代化と1980年前後の欧州同盟	地域と社会 (大阪商大・比較地域研)		3	11 ~ 44	2000年8月	台湾
磯田一雄	日本の植民地歴史教科書に関する考察：「朝鮮」と台湾の「国史」(日本歴史)教科書を中心に	東アジア研究		29	3 ~ 16	2000年8月	朝鮮、台湾
韓桂玉	最後に残された日朝関係正常化の課題	東アジア研究		29	79 ~ 95	2000年8月	日朝関係
原田敬一	戦争を伝えた人々：日清戦争と錦絵をめぐる	文学部論集(仏教大)		84	1 ~ 16	2000年8月	日清戦争
徐鍾珍	齊藤実総督の対朝鮮植民地政策：「文化政治」期の宗教政策を中心として	早稲田政治公法研究		64	195 ~ 226	2000年8月	朝鮮
李京錫	竹内好のアジア主義論の構造及び諸問題	早稲田政治公法研究		64	227 ~ 257	2000年8月	アジア主義
五十嵐善之丞	南京事件の真実		文芸社			2000年8月	南京事件
衛藤藩吉(編)	共生から敵対へ：第4回日中関係史国際シンポジウム論文集		東方書店			2000年8月	日中関係
満鉄調査部(編)・満鉄会(監修)	満鉄調査部報		龍溪書舎			2000年8月	満州
山根幸夫(編)	近代中国・日中関係図書分類目録：天津図書館日本文庫蔵		汲古書院			2000年8月	日中関係
西里喜行	アヘン戦争後の外圧と琉球問題：道光・咸豊期の琉球所属問題を中心に	紀要(琉球大・教育)		57	31 ~ 72	2000年9月	琉球
石雲艶	日本における梁啓超	国学院雑誌		101(9)	19 ~ 34	2000年9月	日中関係
嵯峨隆	五四時期における戴季陶の対日観について：社会主義認識との関連で	東洋学報		82(2)	71 ~ 96	2000年9月	五四運動
山崎元一	日本における南アジア研究を中心に	東方学		100	178 ~ 187	2000年9月	東アジア
安田敏郎	日本語法律文体口語化と「満州国」：千種達生をめぐる	一橋論叢		128(3)	64 ~ 79	2000年9月	満州
小川原宏幸	日本の韓国保護政策と韓国におけるイギリスの領事裁判権：梁起鐸裁判をめぐる	文学研究論集(文学・史学・地理学)		13	77 ~ 93	2000年9月	日朝関係
今川幸雄	カンボジアと日本		連合出版			2000年9月	カンボジア
王勇	中国史のなかの日本像		農山漁村文化協会			2000年9月	中国
日本図書センター(編)	復刻 植民地年鑑 12 ~ 15		日本図書センター			2000年9月	植民地
鍾清漢	日本と中国における近代化を顧みて：洋務運動と明治維新	アジア文化		24	47 ~ 57	2000年10月	洋務運動
西成田豊	中国人強制連行政策の成立過程	経済学研究(一橋大)		40・42	43 ~ 103	2000年10月	中国、強制連行
ビン・シン	東アジアの近代化における洪沢栄一の役割	洪沢研究		13	64 ~ 68	2000年10月	東アジア
内田尚孝	塘沽停戦協定善後交渉と日中関係(上)	中国研究月報		632	1 ~ 15	2000年10月	日中関係
山田寛人	日本人警察官に対する朝鮮語奨励政策	朝鮮史研究会論文集		38	123 ~ 149	2000年10月	朝鮮
李明實	1920年前後における社会教育政策の転換：学校を媒介とする施策の展開	朝鮮史研究会論文集		38	151 ~ 173	2000年10月	朝鮮

岡本真希子	総督政治と政党政治：二大政党期の総督人事と総督府官制・予算	朝鮮史研究会論文集		38	31 ~ 60	2000年10月	朝鮮
申奎燮	在満朝鮮人の「満州国」観および「日本帝国」観	朝鮮史研究会論文集		38	93 ~ 121	2000年10月	朝鮮
石河捷治・平井一臣(編)	地域から問う国家・社会・世界：「九州・沖縄」から何が見えるか		ナカニシヤ出版			2000年10月	九州、沖縄
木村汎・グエン・ズイ・ズン・吉田元夫	日本・ベトナム関係を学ぶ人のために		世界思想社			2000年10月	ベトナム
田村重信他著	日華断交と日中国交正常化		南窓社			2000年10月	日中関係
中京大学社会科学研究所他(監修)	台湾総督府文書目録 第7巻		ゆまに書房			2000年10月	台湾
内藤正中	竹島(鬱陵島)をめぐる日朝関係史		多賀出版			2000年10月	竹島
前嶋信次著・杉田英明(編)	〈華麗島〉台湾からの眺望：前嶋信次著作選3		平凡社			2000年10月	台湾
満州国通信社(編)	復刻 満州国現勢：康徳6、8～10年版		クレス出版			2000年10月	満州
柳本通彦	台湾革命		集英社			2000年10月	台湾
小島勝	戦前の中国における浄土真宗の開教と日本人子弟教育：青島と大連を中心に	紀要(龍谷大・仏文研)		39	125 ~ 146	2000年11月	青島、大連
申英蘭	郁達夫の日本文学受容について：近松秋江から受けた影響を中心に	国語国文		69(11)	28 ~ 42	2000年11月	日朝関係
荒野泰典	東アジアの発見：「世界史の成立」と日本人の対応	史苑		61(1)	81 ~ 109	2000年11月	東アジア
三ツ井崇	白鳥庫吉の歴史認識形成における言語論の位相：朝鮮語系統論と朝鮮史認識をめぐる言節から	史潮		新48	68 ~ 88	2000年11月	朝鮮語
長田彰文	1920年米国議員団のアジア歴訪と日本統治下の朝鮮：朝鮮独立運動と日本の対応	上智史学		45	83 ~ 110	2000年11月	日朝関係
榎本美由紀	日本統治時期台湾の家政教育試論	広島東洋史学報		5	27 ~ 35	2000年11月	台湾
呉明上	台湾海峡危機(1995年7月～1996年3月)の構造(1)：「一つの中国」と「台湾独立」の狭間で	法学論叢(京大)		148(2)	35 ~ 58	2000年11月	台湾
金富子・宋連玉(編)	「慰安婦」戦時性暴力の実態 [I]：日本・台湾・朝鮮編		緑風出版			2000年11月	従軍慰安婦
西口清勝・西澤信善編著	東アジア経済と日本		ミネルヴァ書房			2000年11月	東アジア
日本植民地教育史研究会運営委員会(編)	言語と植民地支配		皓星社			2000年11月	植民地
葉石濤(中島利郎・澤井律之訳)	台湾文学史		研文出版			2000年11月	台湾
瀬戸武彦	青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(3)ドイツによる青島経営	学術研究報告(高知大)		49	59 ~ 86	2000年12月	青島
田中菜採子	日本の韓国併合・朝鮮統治と教育政策：日本人顧問政治期(1904)から朝鮮教育令改正(1922)まで	紀尾井史学		20	23 ~ 32	2000年12月	日朝関係
松本はる香	台湾海峡危機 [1954-55] における国連安保理停戦案と米国議会の「台湾決議」	紀要(愛知大・国際問題研)		114	173 ~ 194	2000年12月	台湾
谷光隆	五・四運動の翌年における排日貨幣の状況	紀要(愛知大・国際問題研)		114	1 ~ 33	2000年12月	五四運動
森久男	東亜同文書院教授鈴木沢郎の満州国調査旅行	紀要(愛知大・国際問題研)		114	31 ~ 52	2000年12月	満州
金鳳珍	朝鮮の開花と井上角五郎：日韓関係史の「脱構築」を促す問題提起	紀要(東大・東文研)		140	1 ~ 22	2000年12月	日朝関係

劉含発	満州移民事業の獲得形態と特徴	現代社会文化研究 (新潟大・院)		19	343 ~ 367	2000年12月	満州
孫江	日中戦争期における華北地域の 紅槍会：日本軍・八路群との関 係を中心に	東洋学報		82(3)	89 ~ 120	2000年12月	日中関係
山口公一	植民地朝鮮における神社政策と 朝鮮人の反応1936年～45年	人民の歴史学		146	14 ~ 32	2000年12月	朝鮮
徐鍾珍	1930年代朝鮮における宇垣一成 総督の植民地政策：神社政策の 導入を中心に	早稲田政治公法研究		65	189 ~ 227	2000年12月	朝鮮
李京錫	アジア主義の成立基盤の崩壊： 明治五年の「草梁倭館占拠事件」 を中心に	早稲田政治公法研究		65	229 ~ 266	2000年12月	アジア主義
石田徹	征韓論再考	早稲田政治公法研究		65	267 ~ 296	2000年12月	日韓関係
王智新・君塚仁 彦・大森直樹・ 藤澤健一(編)	批判 植民地教育史記		社会評論社			2000年12月	植民地
外務省(編)	日本外交文書：昭和期Ⅱ第一部 第三卷(昭和九年対中国関係)		外務省			2000年12月	日中関係
菊池実(編)	ソ満国境・関東軍要塞はいま： 日中共同調査から		かもがわ出版			2000年12月	日中関係
金富子・宋連玉 (編)	[Ⅱ] 中国東南アジア・太平洋 編		緑風出版			2000年12月	中国、東南アジア
佐々木揚	清末中国における日本観と西洋 観		東京大学出版会			2000年12月	中国
中川八洋	大東亜戦争と「開戦責任」：近衛 文麿と山本五十六		弓立社			2000年12月	大東亜戦争
中島利郎(編)	『台湾民報・台湾新民報』総合目 録1, 2		緑蔭書房			2000年12月	台湾
藤井忠俊	兵たちの戦争：手紙・日記・体 験記を読み解く		朝日新聞社			2000年12月	戦争
谷淵茂樹	日清修好条規の清朝側草案より みた対日政策	史学研究		231	38 ~ 60	2001年1月	日中関係
竹野学	植民地樺太農業の実態：1928年 ～40年の集団移民期を中心と して	社会経済史学		66(5)	83 ~ 100	2001年1月	樺太
黄彦(宋春美訳)	孫文の対日観に関する私見	孫文研究		29	34 ~ 56	2001年1月	対日観
馬場公彦	戦後東アジア心象地図の中の日 本	中国21		10	221 ~ 242	2001年1月	東アジア
天兄慧	日中関係21世紀への提言	中国21		10	43 ~ 60	2001年1月	日中関係
井尻秀憲	日中台関係の新視角	中国21		10	61 ~ 74	2001年1月	日本、中国、台湾
茅原郁生	安全保障から見た日中関係	中国21		10	75 ~ 96	2001年1月	日中関係
禹快濟(鈴木陽 二訳)	伝統文化の理解と韓・日両国関 係：朝鮮研究会の古書珍書刊行 を中心に	朝鮮学報		178	181 ~ 206	2001年1月	日朝関係
岡崎邦彦	21世紀を迎える日中関係：90年 代日中の諸問題と中国の対日外 交	東洋研究		139	29 ~ 56	2001年1月	日中関係
林采成	戦時期植民地朝鮮における陸運 統制の展開：国鉄輸送の計画化 を中心として	土地制度史学		170	1 ~ 17	2001年1月	朝鮮
森川正則	寺内内閣期における西原亀三の 対中国「援助」政策構想	阪大法学		50(5)	117 ~ 146	2001年1月	日中関係
李英美	朝鮮統監府における法務補佐官 制度と習慣調査事業(1)：梅謙 次郎と小田幹治郎を中心に	法学志林		98(1)	193 ~ 249	2001年1月	朝鮮
澤宗則・南埜猛	グローバリゼーションと在日イ ンド人社会	南アジア世界の構造 変動とネットワーク		13	143 ~ 175	2001年1月	インド
鄭承衍	日韓貿易構造と韓国の通貨・金 融危機：技術的視点からの考察	論集(金沢大・経)		21(1)	145 ~ 175	2001年1月	日韓関係
林田芳雄	鄭氏台湾政権の統治政策	論集(龍谷大)		457	133 ~ 179	2001年1月	台湾

伊藤昭雄・林敏 (編著)	人鬼雑居：日本軍占領下の北京		社会評論社			2001年1月	中国
倉沢愛子(編)	東南アジアしなのなかの日本占領：新装版		早稲田大学出版部			2001年1月	東南アジア
鹿錫俊	中国国民政府の対日政策 1931-1933		東京大学出版会			2001年1月	日中関係
日本図書センター(編)	復刻 植民地年鑑 16～19		日本図書センター			2001年1月	植民地
小林茂子	近代日本におけるアジア認識の形成と教育：新しいアジア認識の形成へむけて	紀要(東洋大・院・文学)		37	546～556	2001年2月	アジア
加藤聖文	幣原外交における満蒙政策の限界：外務省と満鉄監督権問題	紀要(早大・院・文学)		46(4)	47～58	2001年2月	満州
金俊昊	戦後日韓経済関係の分析と展望：2国間関係の地域経済統合への発展可能性	国際関係学研究(東京国際大)		14	1～17	2001年2月	日韓関係
鄭敬娥	60年代における日本の東南アジア開発	国際政治		126	117～131	2001年2月	東南アジア
樋口秀実	汪兆銘工作をめぐる日本海軍と日米関係	国際政治		126	185～198	2001年2月	日米関係
魯炳浩	韓国における丸山真男の研究動向：三人の丸山真男認識	社会システム研究(京大・院)		4	227～246	2001年2月	韓国
堀和生	植民地帝国日本の経済構造：1930年代を中心に	日本史研究		462	26～54	2001年2月	植民地
飯島渉・脇村孝平	衛生と帝国：日英植民地主義の比較史的考察に向けて	日本史研究		462	3～25	2001年2月	植民地、比較
松田京子	植民地主義と歴史の表象：伊能嘉矩の「台湾史」記述をめぐる	日本史研究		462	55～77	2001年2月	台湾
戸塚順子	「大東亜戦争」期における対外感の変遷について：「対中・対米観」を中心として	寧楽史苑		46	36～57	2001年2月	大東亜戦争
谷川雄一郎	「間島協約」締結過程の再検討	文学研究論集(文学・史学・地理学)(明大・院)		14	169～186	2001年2月	日朝関係
北村稔	「南京大虐殺」を再検討する	立命館大学		567	101～110	2001年2月	南京大虐殺
マリアンヌ・バーストードブルギエール(高嶋航訳)	時間解釈と日本の影響：中国近代における過去・現在・未来の概念	狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』	京都大学学術出版会		41～54	2001年2月	中国
ジョシュア・フォーゲル(八木毅訳)	中国における伝統の創造と日本の貢献：崔述の場合	狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』	京都大学学術出版会		55～71	2001年2月	中国
王晓秋(佐原陽子訳)	京師大学堂と日本	狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』	京都大学学術出版会		72～88	2001年2月	中国
狭間直樹	中国近代における帝国主義と国民国家：日本のアジア主義との関連において	狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』	京都大学学術出版会		9～24	2001年2月	中国、比較
戴天昭	台湾：戦後国際政治史		行人社			2001年2月	台湾
陳培豊	「同化」の同床異夢：日本統治下台湾の国語教育史再考		三元社			2001年2月	台湾
名越二荒之介(編)	世界に開かれた昭和の戦争記念館 第1巻：満州事変と支那事変		展転社			2001年2月	満州、中国
日本順益台湾原住民研究会(編)	台湾原住民研究概覧：日本からの視点		風響社			2001年2月	台湾
ルイーゼ・ヤング(加藤陽子ほか訳)	総動員帝国：満州と戦時帝国主義の文化		岩波書店			2001年2月	満州
趙聖九	1919～20年における日本の朝鮮統治政策の動向	青山史学		19	17～37	2001年3月	日朝関係
池端雪浦	明治期日本におけるフィリピンへの関心	アジア・アフリカ言語文化研究(東京外大)		61	203～230	2001年3月	フィリピン
吉次公介	朝鮮半島情勢と日米安保体制：南北首脳会談のインパクト	沖縄法政研究		3	33～52	2001年3月	朝鮮

吉野文雄	日本の対東南アジア経済政策	海外事情(拓殖大)		49(3)	43～58	2001年3月	東南アジア
澁谷司	台湾「第四原爆」をめぐる政治的混乱	海外事情(拓殖大)		49(3)	99～112	2001年3月	台湾
加納寛	1942年日泰文化協定をめぐる文化交流と文化政策	紀要(愛知大・国際問題研)		115	167～202	2001年3月	タイ
五十嵐真子	台湾社会と博物館：社会変化と博物館活動	紀要(神戸学院大・人文)		21	79～90	2001年3月	台湾
木全清博	日本の中国社会科学の歴史：1947～1999年	紀要(滋賀大・教育)		50	57～66	2001年3月	日中関係
古川隆久	張燕卿と「満州国」に関する覚書：『武部六蔵日記』を中心に	紀要(人文科学)(横浜市立大)		8	25～43	2001年3月	満州
趙軍李	李鴻章と近代中国対日政策の決定：1870年代を中心にして	紀要(千葉商大)		38(4)	1～28	2001年3月	日中関係
野間信幸	「台湾文芸」「台湾新文学」における広告	紀要(東洋大・中国哲学文学科)		9	51～85	2001年3月	台湾
西村一之	「社会にでる」ということ：台湾先住民アミ族のしごと観	紀要(日本女大・人間社会)		11	31～42	2001年3月	台湾
草野美智子・山口守人	明治初期における日本人の「台湾」理解：台湾出兵に同行した従軍記者、岸田吟香の関連記事分析を通して	熊本総合科目研究報告		4	15～28	2001年3月	台湾
横谷英暁	南方作戦への機動部隊投入への経緯	軍事史学		143・144	183～199	2001年3月	南方
C・E・ゴシヤ・立川京一	ベトナムとともに戦った日本人	軍事史学		143・144	218～232	2001年3月	ベトナム
新治毅	関東軍飛行隊と中国空軍：中国空軍建設に協力した日本人の記録	軍事史学		143・144	233～245	2001年3月	中国
原剛	日露戦争の影響：戦争の矮小化と中国人蔑視感	軍事史学		143・144	9～17	2001年3月	日中関係
陳足英・藤井隆至	合会：中国と台湾の庶民の相互扶助的な金融組織	経済論集(新潟大)		70	145～157	2001年3月	台湾
笹原十九司	日中戦争の記憶と歴史学：日本と中国における南京大虐殺の記憶をめぐって	月報(専修大・人文科研)		194	1～19	2001年3月	南京大虐殺
鶴田啓	日韓双方の史料からみる接触の場	研究紀要(東大・史料)		11	226～241	2001年3月	日韓関係
ロバート・エスキルドセン	明治7年台湾出兵史料について：在台北国立図書館台湾分館の収蔵物評価	研究紀要(東大・史料)		11	53～60	2001年3月	台湾
池内敏	竹島一件の再検討：元禄6～9年の日朝交渉	研究論集(史学)(名大・文)		47	61～84	2001年3月	竹島
セハス・モニカ	日本におけるアフリカ像をめぐると考察：東アフリカで国際協力活動を行うNGOメンバーの事例を中心に	国際関係学研究(津田塾大)		27	39～58	2001年3月	アフリカ
米谷均	近世前期日朝関係における「図書」の使用実態	史観		144	1～15	2001年3月	日朝関係
ロナルド・トビ	近世初頭のアイデンティティ危機：三国・万国と「日本」	史友		33	19～26	2001年3月	万国
杉浦清志	台湾における日本語教育管見：国立政治大学を中心に	人文論究(北海道教大)		70	131～142	2001年3月	台湾
海野福寿	韓国併合条約等旧条約無効＝日本の「不法な」植民地支配論をめぐって	駿台史学		112	91～107	2001年3月	日韓関係
川崎高志	日本留学期の周恩来と京都訪問についての考察	創大アジア研究		22	52～57	2001年3月	周恩来、日中関係
山田仁史	台湾及び東南アジアにおける独楽回しと豊穡	台湾原住民研究		5	71～100	2001年3月	台湾、東南アジア
上杉允彦	日本統治時代の「高砂族」の「自治組織」とその支配政策について(2)	高千穂論叢		35(4)	1～39	2001年3月	台湾
園田哲男	台湾経験四十年：台湾経済の発展を支える台湾繊維産業	高千穂論叢		35(4)	1～22	2001年3月	台湾

クリストファー・W・A・スピルマン	西洋における東アジアの研究の歴史：拓殖大学を国際的見地から比較する手がかり	拓殖大学百年史研究	7	97～117	2001年3月	東アジア
松尾章一	近代日本植民地統治史研究の現状と課題：台湾を中心に	多摩論集(法大)	17(2)	33～55	2001年3月	台湾
内田知行	日本軍占領下における中国山西省傀儡政権の財政的基盤	中国研究月報	637	1～24	2001年3月	中国
高橋強	孫中山と中国留日学生：弘文学院を通して	中国論集(創価大)	4	41～61	2001年3月	日中関係
白須浄真	大谷探検隊将来資料と旅順博物館と大連図書館：2000年9月の調査報告	東洋史苑	57	1～30	2001年3月	中国
林田芳雄	鄭氏台湾のフィリピン遠征計画	東洋史苑	57	33～63	2001年3月	台湾、フィリピン
土屋洋	創設期の山西大学堂と山西留日学生：清末山西鉱山利権回収運動の前史として	東洋史研究報告(名大)	25	328～343	2001年3月	日中関係
川上哲正	辛亥革命期における国粹主義と近代史学：日本近代との交錯の視点から	東洋文化研究	3	1～24	2001年3月	日中関係
後藤武秀	台湾に現存する日本統治時代の裁判所資料	東洋法学(東洋大・法学会)	44(2)	119～170	2001年3月	台湾
長谷川恒雄	バンコク日本文化研究所(1938)の日本語教育計画	日本語と日本教育	29	1～20	2001年3月	バンコク
星名宏修	「血液」の政治学：台湾「皇民化期文学」を詠む	日本東洋文化論集(琉球大・法文)	7	5～54	2001年3月	台湾
呼斯勒	満州国軍少将郭交通について：自治主義者・ソ連軍謀報員としての生涯	日本モンゴル学会紀要	31	107～127	2001年3月	満州
玉真之介	満州産業開発政策の転換と満州農業移民	農業経済研究	72(4)	157～164	2001年3月	満州
李英美	朝鮮統監府における法務補佐官制度と習慣調査事業(2)：梅謙次郎と小田幹治郎を中心に	法学志林	98(4)	127～190	2001年3月	朝鮮
石垣修	アジア太平洋戦争と下田	法政史学	55	53～74	2001年3月	太平洋戦争
明石陽至(編)	日本占領下の英領マラヤ・シンガポール	岩波書店			2001年3月	マラヤ、シンガポール
沖縄・韓国比較社会文化研究会(編)	韓国と沖縄の社会と文化	第一書房			2001年3月	韓国、沖縄
外務省編	日本外交文書：昭和期Ⅱ第二部第二巻別冊 日印会商報告書	外務省			2001年3月	インド
共同通信社写真	日中戦争 1	草の根出版会			2001年3月	日中戦争
小倉和夫	中国の威信日本の矜持：東アジアの国際関係再構築に向けて	中央公論新社			2001年3月	中国、東アジア
曾田三郎編著	近代中国と日本：提携と敵対の半世紀	御茶の水書房			2001年3月	日中関係
朝鮮人強制連行真相調査団編著	朝鮮人強制連行調査の記録：中国編	柏書房			2001年3月	中国、朝鮮
藤善真澄編著	中国華東・華南地区と日本の文化交流	関西大学出版部			2001年3月	日中関係
呉之桐	法文化における日本と中国：比較文化論の視点から	比較法(東洋大)	38	5～18	2001年3月	中国、比較
谷川雄一郎	内藤湖南と間島問題に関する若干の再検討	中国研究月報	638	39～46	2001年4月	間島
沈潔	戦時期の満州における女性生活の構図	歴史評論	612	18～33	2001年4月	満州
游鑑明(中島敬訊)	日本統治期台湾の女性と職：その変遷	歴史評論	612	34～46	2001年4月	台湾
エズラ・ヴォーゲル・橋爪大三郎	ヴォーゲル、日本とアジアを語る	平凡社			2001年4月	アジア
村田晃嗣	アジア外交の潮流と日本	海外事情(拓殖大)	49(5)	18～27	2001年5月	アジア

羅愛子	近代韓日関係史料とその活用について：国史編纂委員会所蔵および刊行資料を中心に	研究紀要（東大・史料）		11	137～153	2001年5月	日韓関係
天見慧	台湾問題の新段階と米中関係：陳水扁総督就任以後を中心に	国際政経論集（青山大）		53	47～64	2001年5月	台湾
鄭安基	戦時植民地経済と朝鮮紡績業（上）	東アジア研究		32	3～24	2001年5月	植民地
趙誠敏	「在日韓国・朝鮮人政策論の展開」の一考察：出入国管理特例法上の法的地位を巡って	東アジア研究		32	91～104	2001年5月	日朝関係
陳捷	日本における楊守敬の訪書活動	文学		2(3)	81～92	2001年5月	日中関係
山口公一	日本の歴史認識への韓国からのまなざし	歴史評論		613	40～53	2001年5月	日韓関係
鈴木満男	日本人は台湾で何をしたのか：知られざる台湾の近現代史		国書刊行会			2001年5月	台湾
東アジア地域研究会・中村哲（編）	現代からみた東アジア近現代史		青木書店			2001年5月	東アジア
古川久雄	植民地支配と環境破壊：覇権主義は超えられるか		弘文堂			2001年5月	植民地
伊藤幹彦	日本統治時代の政治思想：謝雪紅の政治思想	アジア文化研究		8	161～174	2001年6月	日中関係
干逢春	中国朝鮮族教育をめぐる中日両国の競争：1905～31年の「間島」を中心に	アジア文化研究		8	207～220	2001年6月	日中関係、間島
高吉嬉	日本における「韓国・朝鮮」論の新しい視座を求めて：知識と感性を結ぶ歴史教育のための一考察	紀要（東大・教育学研）		27	45～56	2001年6月	日朝関係
藤森智子	台湾総督府による皇民化政策と国語常用運動	法学政治学論究		49	55～86	2001年6月	台湾
載東清	台湾民族（ネーション）の想像と構築	問題と研究		30(9)	52～63	2001年6月	台湾
月脚達彦	近代朝鮮の改革と自己認識・他者認識	歴史評論		614	17～29	2001年6月	朝鮮
飯島渉	笹森儀助のまなざし：『台湾視察日記・台湾視察結論』（1896年）を中心に	歴史評論		614	2～16	2001年6月	台湾
中村義	アジア主義実業家論：白岩龍平と中国	歴史評論		614	43～55	2001年6月	アジア
姜再鎬	植民地朝鮮の地方制度		東京大学出版会			2001年7月	朝鮮
田村紀雄	日系カナダ人言論「検閲」廃止後の世論分裂 1945-46「追放」（Repatriation）問題	人文自然科学論集（東京経大）		112	29～50	2001年9月	日本人、カナダ
田村紀雄	1930年代カナダ日系労働運動 カナダ共産党日本人部の新聞「労働時報」を中心に	東京経大会誌		225	287～313	2001年9月	日本人、カナダ
イゴリ・サヴェリフ	極東ロシア地域における中国人・日本人 1884年～1903年の移民受入政策	ロシア史研究		69	44～60	2001年10月	日本人、ロシア
剣持久木	ファシズム論の射程 1930年代の日本とフランス	黒沢文貴・斉藤聖二・櫻井良樹編『国際環境のなかの近代日本』	芙蓉書房		325～362	2001年10月	日本、フランス、ファシズム
読売新聞20世紀取材班（編）	20世紀 3～10 大日本帝国、大東亜共栄圏、太平洋戦争、冷戦、高度経済成長、科学・思想、大衆社会、アメリカの世紀（中公文庫）		中央公論新社			2001年11月	日本、現代
寺田勇文	日本のフィリピン占領とキリスト教会	上智アジア学		19	123～148	2001年12月	フィリピン
原誠	日本占領下インドネシアにおける宗教政策：キリスト教の場合	上智アジア学		19	33～57	2001年12月	インドネシア
宗田昌人	植民地台湾における農民運動：台湾農民組合の盛衰を通じて	二十世紀研究		2	47～68	2001年12月	台湾

寺田元恵	日本占領下フィリピンのインド人社会：インド独立連盟を中心に	上智アジア学		19	187～212	2001年12月	フィリピン
関立	日清戦争以前における中国人の日本語観について	紀要(法大・教養)		120	1～26	2002年2月	日中関係
小谷賢	イギリス情報部の対日イメージ1937-1941 情報分析と現実とのギャップ	国際政治		129	186～201	2002年2月	イギリス、日本、イメージ
加藤聖文	満鉄史研究と山崎元幹文書：戦後における散逸の経緯と復元への試論	近代中国研究彙報		24	63～97	2002年3月	満州
三沢伸生	亜細亜義会機関誌『大東』に所収される20世紀初頭の日本におけるイスラーム関係情報	研究年報(東洋大・アジア・アフリカ文化研)		36	60～75	2002年3月	イスラーム
松金公正	日本植民地初期台湾における浄土宗布教方針の策定過程(上)	研究論集(宇都宮大・国際)		13	213～232	2002年3月	台湾
吉田建一郎	戦前日本の中国鶏卵に関する調査報告について	現代中国研究彙報		24	31～61	2002年3月	中国
山口隆正	日本横浜中国大同学校縁起	人文・自然・人間科学研究		7	71～76	2002年3月	日中関係
亀掛川博正	北洋海軍の成立とその対日戦略	政治経済史学		427	1～26	2002年3月	日中関係
貴志俊彦	日中通信問題の一断面：青島佐世保間海底ケーブルをめぐる多国間交渉のゆくえ	東洋学報		83(4)	33～57	2002年3月	日中関係
松田京子	領台初期における台湾原住民をめぐる法学的言説の位相：「帝国臣民」の外縁と「帝国」の学知	日本学報		22	23～37	2002年3月	台湾
林恵玉	東アジアにおけるマス・メディア史研究：日本統一下の台湾、満州における放送事情	年報(中央大・経済研)		32(1)	495～522	2002年3月	台湾、満州
陳禮俊	戦後台湾の人口、工業化および都市化	東亜経済研究		60(4)	31～47	2002年3月	台湾
李英美	朝鮮統監府における法務補佐官制度の慣習調査事業(5)：梅謙次郎と小田幹治郎を中心に	法学志林(法大)		99(4)	131～190	2002年3月	日朝関係
菊池一隆	抗日戦争時期における全日本華僑の動向と構造：大使館、及び横浜・神戸・長崎各華僑の位置	歴史研究		39	1～93	2002年3月	日中関係、華僑
弁納才一	戦後台湾の食糧事情：1946～49年の新聞を利用して	論集(金沢大・経済)		22(2)	175～203	2002年3月	台湾
橋重孝	オランダ領東インドにおける日本人の経済活動について：1910年～20年代の東ジャワの事例として	論集(金城学院大)		193	111～152	2002年3月	東インド
比較史・比較歴史教育研究会(編)	帝国主義の時代と現代 東アジアの対話		未来社			2002年3月	アジア
松村高夫	フレーム・アップとしての満鉄調査部弾圧事件(1942・43年)	三田学会雑誌		95(1)	67～92	2002年4月	満州
ピョートル・ポダルコ	親日派と傍観者 亡命ロシア人の目で見えた日本の光と陰	ロシア史研究		70	30～40	2002年5月	日本、ロシア人
白井勝美	冀察政務委員会と日本 [1935-1937]	外交史料館報		16	29～50	2002年6月	日中関係
吉村道男	駐在国公使報告等にもみる1935年前後の日本・タイ国関係の一面	外交史料館報		16	61～81	2002年6月	タイ
中村綾乃	ハーケンクロイツと日の丸のあいだ(上) 神戸ドイツ人社会からみるナチズム	みすず		495	17～33	2002年6月	日本、ドイツ人
高媛	「楽土」を走る観光バス：1930年代の「満州」都市と帝国のドラマ トゥルギー	吉見俊哉編著『岩波講座・近代日本の文化史 6 拡大するモダニティ』	岩波書店		217～253	2002年6月	満州
鈴木正弘	高桑駒吉の西洋史・世界史に関する通史的概説書	立正西洋史		18	32～41	2002年6月	世界史
陳正達	台湾の石油化学工業の成立過程と産業発展のメカニズム：第一ナフサクラッカーの建設を中心に	アジア研究		48(3)	32～58	2002年7月	台湾

許寿重	日本の在満朝鮮人教育政策 1932-1937: 問島の朝鮮人私立学校を中心に	一橋研究		27(2)	65 ~ 86	2002年7月	朝鮮人
堤和幸	清代台湾北部における米穀流通と襲戸	現代台湾研究		23	93 ~ 116	2002年7月	台湾
中村綾乃	ハーケンクロイツと日の丸のあいだ(下) 神戸ドイツ人社会からみるナチズム	みすず		496	14 ~ 21	2002年7月	ドイツ人社会
加藤洋子	第二次世界大戦・冷戦の遺産と21世紀の日米関係研究 日米の非対称性を中心に	国際関係研究(日大)		23(1)	47 ~ 63	2002年7月	日米関係
小幡尚	満州事変・日中戦争期における行刑の展開	海南史学		40	1 ~ 27	2002年8月	満州
橋本雄一	マレーシアにおける日系企業の進出と知的産業クラスターの形成	文学研究科紀要(北大)		107	113 ~ 169	2002年8月	マレーシア
浅田正彦	日華平和条約と国際法(2)	法学論叢(京大)		151(5)	1 ~ 43	2002年8月	日中関係
山口不二夫	王子製紙朝鮮工場の決算報告書 1930年上半期(下)	論集(青山学院大・国際政経)		57	245 ~ 265	2002年8月	朝鮮
若槻泰雄	「在日二世」が見た日中戦争		芙蓉書房出版			2002年8月	日中戦争
土井泰彦	対日経済戦争1939-1941		中央公論事業出版			2002年8月	日本
松永正義	40年代後半期台湾文学研究の資料と視角	一橋論叢		128(3)	136 ~ 148	2002年9月	台湾
梶居佳広	英米から見た日本の台湾支配: 戦間期領事報告を中心に	紀要(立命館大・人文科学研)		80	83 ~ 120	2002年9月	台湾
森田吉彦	日清修好条規締結交渉における日本の意図、1870 ~ 1872年	現代中国研究		11	60 ~ 73	2002年9月	日中関係
菊池実・伊藤厚史共著	中国黒龍江省に2つの「侵華日軍」遺跡博物館を訪ねて	考古学研究		49(2)	9 ~ 12	2002年9月	中国
陳慈玉(星野多佳子訳)	中国炭鉱業の発展と日本の対華投資	立命館言語文化研究		14(2)	17 ~ 30	2002年9月	中国
張力著(齊藤真司訳)	口述歴史の台湾における発展	立命館言語文化研究		14(2)	69 ~ 73	2002年9月	台湾
山腰敏寛	『ミラーズ・レビュー』誌上の五四運動: エドガー=スノー登場前史	立命館言語文化研究		14(2)	75 ~ 103	2002年9月	五四運動
小谷賢	日本海軍とラットランド英空軍少佐 1930年代における日本海軍の諜報活動とイギリス情報部	軍事史学		38(2)	63 ~ 76	2002年9月	イギリス、軍事
松尾展成	日独戦争、青島捕虜と坂東俘虜収容所	経済学会雑誌(岡山大)		34(2)	1 ~ 17	2002年9月	ドイツ
松尾展成	(資料)ザクセン王国出身の青島捕虜	経済学会雑誌(岡山大)		34(2)	37 ~ 55	2002年9月	ドイツ
大場四千男	昭和10年代中葉アメリカの対日政策とパワー・ポリティクス	経済論集(北海学園大)		50(2)	1 ~ 27	2002年9月	アメリカ、外交
イアン・ニッシュ(編)(日英文化交流会訳)	英国と日本 日英交流人物列伝		博文館新社			2002年9月	日本、イギリス
琴秉洞	朝鮮人の日本人観		総和社			2002年9月	日朝関係
ハルミ・ベフ(編)	日系アメリカ人の歩みと現在		人文書院			2002年9月	日本、アメリカ
俞辛焯	辛亥革命期の中日外交史研究		東方書店			2002年9月	日中関係
袁堂軍・深尾京司	1930年代における日本・朝鮮・台湾間の購買力平価: 実質消費水準の国際比較	経済研究(一橋大・経済)		53(4)	322 ~ 336	2002年10月	朝鮮、台湾
松金公正	日本植民地初期台湾における浄土宗布教方針の策定過程(下)	研究論集(宇都宮大・国際)		14	87 ~ 109	2002年10月	台湾
和田英穂	中国国民政府による対日戦犯裁判の問題点: 内田元陸軍中將の裁判を中心に	現代中国		76	159 ~ 168	2002年10月	日中関係
萩原充	1930年代の日中航空連絡問題	現代中国		76	84 ~ 98	2002年10月	日中関係

宮城大蔵	ふたつのアジア・アフリカ会議と日本・中国	中国21		14	135 ~ 156	2002年10月	アフリカ、中国
金洛年	日本帝国主義下の朝鮮経済		東京大学出版会			2002年10月	朝鮮
呉永才	台湾近代美術教育史研究：台湾近代教育の形成	鹿島美術研究		19	450 ~ 461	2002年11月	台湾
浅野春二	廟神の信仰と道教儀礼：台湾南部の醮を例として	国学院雑誌		103(11)	145 ~ 157	2002年11月	台湾
金民樹	対日講和条約と韓国参戦問題	国際政治		131	133 ~ 147	2002年11月	日中関係
辻村志のぶ・末木文美士	日中戦争と仏教	思想		943	168 ~ 189	2002年11月	日中戦争
長田彰文	朝鮮三・一運動の展開と日本による鎮圧の実態について：日本の史料に依拠して	上智史学		47	13 ~ 47	2002年11月	日朝関係
木場明志	「偽満州国」首都新京の日本仏教による満州仏教組織化の模索：1935(唐徳2年)の様相	大谷学報		81(4)	1 ~ 11	2002年11月	満州
尚大鵬	明治後期における中国人留学生に対する軍事教育：日本体育会を中心として	広島東洋史学報		7	47 ~ 60	2002年11月	日中関係
浅田正彦	日華平和条約と国際法(3)	法学論叢(京大)		152(2)	1 ~ 35	2002年11月	日中関係
松金公正	戦後日台仏教交流の変遷：日華仏教文化交流協会の成立と展開	野口鐵郎先生古稀記念論集刊行委員会編『中華世界の歴史的展開』	汲古書院		357 ~ 387	2002年11月	日中関係
池田敏雄	台湾の家庭生活		大空社			2002年11月	台湾
劉大年他(編)	中国抗日戦争史：中国復興への路		桜井書店			2002年11月	中国
李文行	日・韓近代化における明治維新と甲午改革の比較	紀要(横浜市立大・国際文化研)		8	269 ~ 298	2002年12月	朝鮮
柴田善雅	蘭領ジャワにおける日系農林業の活動：南国産業株式会社を中心に	東洋研究		146	1 ~ 41	2002年12月	ジャワ
桂川光正	青島における日本の阿片政策	二十世紀研究		3	23 ~ 43	2002年12月	青島
佐野方郁	鳩山内閣の中国政策とアメリカ：バンドン会議後の重光外務大臣と外務省アジア局第2課の中国政策の分析を中心に	二十世紀研究		3	45 ~ 74	2002年12月	中国、アメリカ
西横偉	東アジアから見た西洋近代美術：民国期の西洋美術受容と日本	日本研究		26	143 ~ 184	2002年12月	東アジア
裴炯逸(藤原貞朗訳)	朝鮮の過去をめぐる政治学：朝鮮半島における日本植民地考古学の遺産	日本研究		26	15 ~ 52	2002年12月	朝鮮
久保正明	バリ島防衛義勇軍錬成隊教官今石貞二郎(専部門16期)：インドネシア・PETA(義勇軍)外史として	百年史研究(拓殖大)		11	1 ~ 29	2002年12月	インドネシア
J・ヴィクター・コシュマン(野元美佐訳)	アメリカにおける日本研究 言語論的転回以降の人類学と歴史学	森明子編『歴史叙述の現在 歴史学と人類学の対話』	人文書院		245 ~ 256	2002年12月	日本、アメリカ、研究
柳澤治	戦前日本におけるナチス経済思想分析 ナチス政権掌握の同時代を中心に	政経論叢(明大)		71(1・2)	51 ~ 91	2002年12月	日本、ナチス
森明子編	歴史叙述の現代 歴史学と人類学の対話		人文書院			2002年12月	人類学、歴史学
陣内秀信	満州の植民地が語る日本近代都市計画の大いなる成果	アジア遊学		47	142 ~ 143	2003年1月	満州
小檜山ルイ	在日長老派宣教師書簡に見る日本ミッションと朝鮮ミッションの関係：韓国併合、105人事件前後を中心に	紀要(東京女大・比較文化)		64	1 ~ 22	2003年1月	日朝関係
黄彦(蔣海波訳)	孫中山と神戸	孫文研究		33	22 ~ 29	2003年1月	孫文、日中関係

山本裕	「満州国」における鉱産物流通組織の再編過程：日満商事の設立経緯1932-1936年	歴史と経済		178	21 ~ 40	2003年1月	満州
高光佳絵	戦間期の「グローバリゼーション」をめぐる日本海軍と英米の対応	一橋論叢		129(1)	41 ~ 64	2003年1月	日本、米英
栗原純	『台湾総督府公文類纂』にみる「台湾阿片令」の制定過程について	紀要（東京女子大・比較文化研）		64	41 ~ 63	2003年1月	台湾
河西晃祐	外務省と南洋協会の連帯にみる1930年代南方進出政策の一断面：「南洋商業実習制度」の分析を中心として	アジア経済		44(2)	40 ~ 60	2003年2月	南洋協会
岡本真希子	植民地支配下台湾の政治経験	アジア進学		48	14 ~ 21	2003年2月	台湾
駒込武	台湾における「植民地的近代」を考える	アジア進学		48	4 ~ 13	2003年2月	台湾
何義麟	台湾人の歴史意識：「御用紳士」幸願栄と「抗日英雄」廖添了	アジア進学		48	46 ~ 53	2003年2月	台湾
李承機	データにみる植民地台湾ジャーナリズムの発展	アジア遊学		48	22 ~ 29	2003年2月	台湾
三澤真美恵	植民地下台湾における映画上映空間：植民地期台湾映画史研究の可能性	アジア遊学		48	30 ~ 37	2003年2月	台湾
許佩賢	植民地台湾の近代学校：その実像と虚像	アジア遊学		48	38 ~ 45	2003年2月	台湾
清水麗	戦後日台関係：台湾外交の変容と日本	アジア遊学		48	94 ~ 101	2003年2月	台湾
鄭鳳輝	熊本県人の韓国における言論活動：自1880 ~ 至1920	海外事情研究		30(2)	99 ~ 136	2003年2月	韓国
佐藤正晴	日本の植民地下の台湾メディア：1930年代初頭の『台湾日日新報』を中心に	社会学・社会福祉学研究（明治学院大）		113	1 ~ 28	2003年2月	台湾
小倉紀蔵	日本・韓国・北朝鮮における近代化と朱子学	文明（東海大・文明研）		1	74 ~ 81	2003年2月	韓国、北朝鮮
石田憲	丸山眞男とレンツォ・デ・フェリーチェ 二つのファシズム論	小林正弥編『丸山眞男論 主体的行為、ファシズム、市民社会』	東大出版会		145 ~ 173	2003年2月	日本、イタリア、ファシズム
秋田茂	イギリス帝国とアジア国際秩序へゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ		名古屋大学出版会			2003年2月	イギリス、アジア
小野信爾	五四運動在日本		汲古書院			2003年2月	五四運動
判沢純太	法幣(リーガルテンダー)をめぐる日満中関係		信山社			2003年2月	満州
米山裕	20世紀前半のアメリカ西部社会と日本人移民	『欧米史上におけるマイノリティとその迫害・差別・救済の比較的研究』（科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告）			128 ~ 135	2003年3月	アメリカ、日本
和田英穂	国民政府による対日戦犯裁判の終結と日華平和条約	愛知論叢		74	33 ~ 48	2003年3月	日中関係
塚崎昌之	濟州島における日本軍の「本土決戦」準備：濟州島と巨大軍事地下施設	青丘学術論集		22	263 ~ 311	2003年3月	濟州島
曹龍淑	在朝日本人二世の朝鮮・朝鮮人に対する意識形成の研究：在釜山日本人を中心に	アジア社会文化研究		4	50 ~ 80	2003年3月	日朝関係
安達信裕	統治初期の台湾での同化教育について：国語教育を中心に	アジア社会文化研究		4	81 ~ 104	2003年3月	台湾
長場紘	日本人のイスタンブル体験	アジア遊学		49	70 ~ 80	2003年3月	イスタンブル
Yasuo Endo	Memory Divided by More than an Ocean: The Pacific War in Japan and the US	アメリカ太平洋研究（東大）		3	65 ~ 75	2003年3月	日本、アメリカ、太平洋戦争

李廷江	日本軍事顧問と張之洞 1898～1907	紀要（亜細亜大・アジア研）	29	1～46	2003年3月	日中関係
榎木瑞生	アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書：満州における仏教教団の活動	紀要（同朋大・仏教文化研）	22	1～22	2003年3月	満州
金丸裕一	戦前期日本による中国電力産業調査の諸問題	近代中国研究彙報	25	37～58	2003年3月	中国
布和	李鴻章と日清修好条規の成立：1870年代初めの清国対日政策の再検討	研究紀要（桜花学園大）	5	201～210	2003年3月	日中関係
林思敏	台湾総督府の南進政策：1910年代を中心に	言語・地域文化研究（東京外大）	9	123～142	2003年3月	台湾
山下靖子	ハワイの「沖縄系移民」と沖縄帰属問題(1945-1952)	国際関係学研究（津田塾大）	29	95～114	2003年3月	ハワイ、沖縄
林正子	民衆が見た植民地征服戦争・台湾：『風俗画報』と『点石齋画報』を中心に	史苑	63(2)	57～82	2003年3月	台湾
胎中千鶴	植民地台湾の死体と火葬をめぐる状況	史苑	63(2)	83～109	2003年3月	台湾
宮崎聖子	植民地期台湾における女性のエイジェンシーに関する一考察：台北州A街の処女会の事例	ジェンダー研究	6	85～108	2003年3月	台湾
趙寛子	日中戦争期の「朝鮮学」と「古典復興」：植民地の「知」を問う	思想	947	59～81	2003年3月	朝鮮
山添博史	ムラヴィヨフの対中対日外交：アムール川流域と樺太	社会システム研究（京大）	6	195～204	2003年3月	日中関係
孫安石	漢口の都市発展と日本租界	人文研究（神奈川大）	149	219～252	2003年3月	中国
猪股祐介	「満州移民」の植民地経験	相関社会科学	12	2～20	2003年3月	満州
堀地明	台湾における清代檔案資料のデータベース化とその利用	東方	265	11～15	2003年3月	台湾
若林正文	戦後台湾遷占者国家における「外省人」：党国体制下の多重族群社会再編試論・その1	東洋文化研究（学習院大）	5	121～140	2003年3月	台湾
林初海	1990年代台湾の郷土教育の成立とその展開：台湾人アイデンティティの再構築過程の一断面	東洋文化研究（学習院大）	5	91～119	2003年3月	台湾
中村平	台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈：1910年のタイヤル族「ガオガン蕃討伐」は「仲良くする」(sblag)なのか	日本学報	22	45～67	2003年3月	台湾
神田孝治	日本統治期の台湾における観光と心象地理	東アジア研究	36	115～135	2003年3月	台湾
朴美貞	朝鮮人男性のイメージと日本のまなざし：官展の入選作をめぐって	文化学年報（同志社大）	52	207～228	2003年3月	朝鮮
原田敬一	戦後アジアの軍用基地と追悼：台湾の場合	文学部論集（仏教大）	87	1～18	2003年3月	台湾
小松裕	近代日本のレイシズム：民衆の中国(人)観を例に	文学部論叢（熊本大）	78	43～66	2003年3月	中国
津吉優樹	台湾統治初期の初等教育についての一考察：日本教育史の視点から	法学研究論集（中京大・院）	23	35～156	2003年3月	台湾
廣瀬靖子	アメリカ議会と日本開国(補) 或る民間人の情報宣伝工作とその行方	紀要（いわき明星大・人文）	16	182～193	2003年3月	日本、アメリカ
油井大三郎	日米関係と戦争の記憶	紀要（聖学院大・総合研）	26別冊	18～27	2003年3月	日本、アメリカ
東山京子	台湾総督府文書の目録記述論について	台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』	中京大・社会科学研究所	412～99	2003年3月	台湾
Eldridge, Robert, D.	"Mr. Okinawa": Ohama Nobumoto, the Revertion of Okinawa, and an Inner History of U.S.-Japan Relations	同志社アメリカ研究	39	61～80	2003年3月	沖縄、日本、アメリカ

北政巳	19世紀西欧勢力とアジア太平洋 世界 アングロ・サクソンのインパクトを中心に	論集(創価大・経)		32(1・2・3・4)	17 ~ 32	2003年3月	アジア
台湾史研究部会(編)	台湾の近代と日本		中京大学社会科学研究所			2003年3月	台湾
何義麟	二・二八事件:「台湾人」形成のエスノポリティクス		東京大学出版会			2003年3月	台湾
島川雅史	アメリカの戦争と日米安保体制 在日米軍と日本の役割		社会評論社			2003年4月	日米安保
原暉之	日露戦争後のロシア極東 地域 政策と国際環境	ロシア史研究		72	6 ~ 22	2003年5月	ロシア
井村哲郎	「日満支インフレ調査」と満鉄調査組織	アジア経済		44(5・6)	47 ~ 66	2003年6月	満州
伊藤幹彦	1920年代の台湾政治思想:王敏川の政治思想	アジア文化研究		10	148 ~ 161	2003年6月	台湾
黄頌顯	日本統治時代の台湾総督府の政治政策:左翼路線の対立を中心として	アジア文化研究		10	162 ~ 176	2003年6月	台湾
大里浩秋	杭州日本租界について	人文研究(神奈川大)		149	153 ~ 178	2003年6月	中国
巖明	蘇州の日本租界と近代都市の形成	人文研究(神奈川大)		149	179 ~ 206	2003年6月	中国
山口建治	蘇州日本租界と片倉製糸:『蘇州市第一絲廠廠志』抄訳	人文研究(神奈川大)		149	207 ~ 218	2003年6月	中国
井潤裕	サハリン州公文書館の日本語文書	アジア経済		44(7)	59 ~ 75	2003年7月	サハリン
大沢武司	在華邦人引揚交渉をめぐる戦後日中関係:日中民間交渉における「三団体方式」を中心として	アジア研究		49(3)	54 ~ 70	2003年7月	日中関係
水田憲志	日本植民地下の台北における沖縄出身「女中」	史泉		98	36 ~ 55	2003年7月	台湾、沖縄
鮑家麟(伊藤徳子訳)	アメリカ及び台湾における中国女性史研究	女性史学		13	43 ~ 48	2003年7月	台湾、アメリカ
徐興慶	「両広独立」をめぐる中日交渉史:劉学詢と関連して	孫文研究		34	1 ~ 37	2003年7月	日中関係
磯田一雄	在満日本人小学校の中国語教科書:教材の社会的性格を中心に	成城芸芸		183	15 ~ 43	2003年7月	満州
石田憲	日伊外務省と反共主義的国際観 三国同盟の起源をめぐって	法学論集(千葉大)		18(1)	145 ~ 193	2003年7月	日本、イタリア、ファシズム
嵯峨隆	戴李陶の対日観と中国革命		東方書店			2003年7月	日中関係
藤本博・島川雅史(編)	アメリカの戦争と在日米軍 日米安保体制の歴史		社会評論社			2003年7月	日米安保
奈倉文二・横井勝彦・小野塚知二	日英兵器産業とジューメンス事件 武器移転の国際経済史		日本経済評論社			2003年7月	日本、イギリス
立命館大学日系文化研究会(編)	戦後日系カナダ人の社会と文化		不二出版			2003年7月	日本、カナダ
貴志俊彦	重慶国民政府による日本語プロパガンダ放送	アジア遊学		54	23 ~ 32	2003年8月	中国
山口不二夫	王子製紙朝鮮工場の操業管理と原価計算の展開:1935年-1943年(下)	国際政経論集(青山大)		61	103 ~ 130	2003年8月	朝鮮
溝口歩	1920年代英領マラヤ華僑と抗日運動:日本とのゴム事業をめぐる競合と共存	現代中国研究		13	83 ~ 99	2003年9月	マラヤ
高銘鈴	19世紀前・中期における台湾米穀の流通に関する一考察	東洋学報		85(2)	87 ~ 117	2003年9月	台湾
武藤秀太郎	平野義太郎の大アジア主義論:中国華僑北農村慣行調査と家族観の変容	アジア研究		49(4)	44 ~ 59	2003年10月	アジア主義
竹茂敦	1970年代初頭の台湾「断交外交」に関する一考察:セネガルとの事例を中心に	現代中国		77	40 ~ 52	2003年10月	台湾
小郡晶子	「満州国」政府による日本人移民政策実施体制の確立と「日満一体化」	現代中国		77	83 ~ 94	2003年10月	満州

吉澤文寿	日韓国交正常化以前の仮款交渉：1963-64年における日米韓の外交活動を中心に	朝鮮史研究会論文集		41	1 ~ 15	2003年10月	日韓関係
廣岡浄進	在満朝鮮人の「皇国臣民」言説：総力戦下の満州国協和会を中心に	朝鮮史研究会論文集		41	119 ~ 143	2003年10月	満州、朝鮮人
内田じゅん	植民地期朝鮮における同化政策と在朝日本人：同民会を事例として	朝鮮史研究会論文集		41	173 ~ 201	2003年10月	朝鮮
許寿童	間島における日本人教育：満州事変前を中心に	朝鮮史研究会論文集		41	229 ~ 256	2003年10月	間島
趙寛子	植民地帝国日本と「東亜共同体」：自己防衛的な思想連鎖の中で「世界史」を問う	朝鮮史研究会論文集		41	27 ~ 54	2003年10月	東亜共同体
ポール・トンブソン（酒井順子訳）	オーラル・ヒストリーの可能性と日本との関連	三田学会雑誌		96(3)	17 ~ 39	2003年10月	オーラルヒストリー
柳澤治	日本における「経済新体制」問題とナチス経済思想 公益優先原則・指導者原理・民営自主原則	政経論叢(明大)		72(1)	45 ~ 124	2003年10月	日本、ナチス
磯田一雄	日本統治下台湾における歴史意識とアイデンティティの一考察	東アジア研究		38	3 ~ 15	2003年11月	台湾
曾山毅	植民地台湾と近代ツーリズム		青弓社			2003年11月	台湾
福井純子	おなべをもってどこいくの：日清戦争期の漫画が描いた清国人	紀要（立命館大・人文科学研）		82	1 ~ 31	2003年12月	中国
廉徳瑰	第二次台湾海峡危機(1958)における暗黙の国共合作	軍事史学		155	4 ~ 19	2003年12月	台湾
薫世奎	戴李陶『日本論』の構造および文体	中国研究月報		57(12)	16 ~ 33	2003年12月	日中関係
昇亜美子	ベトナム戦争における日本の和平外交	法学政治学論究		59	191 ~ 222	2003年12月	ベトナム
劉秀慧	戦後台湾国際金融制度史論	紀要(法政大・院)		53	61 ~ 88	2004年	台湾
若林正文	台湾ナショナリズムと「忘れ得ぬ他者」	思想		957	108 ~ 125	2004年1月	台湾
佐藤一樹	日中開戦後における胡適の和平工作活動に関する考察	中国研究月報		58(1)	18 ~ 26	2004年1月	日中関係
呉文星	近代日本における学術と植民地：開拓すべきもう一つの新たな研究分野	東北アジア研究		6	5 ~ 10	2004年1月	植民地
鹿錫俊	東北解放軍医療隊で活躍した日本人：ある軍医の軌跡から	北東アジア研究		6	35 ~ 56	2004年1月	北東アジア
大石学	17 ~ 19世紀日朝外交の歴史的位	紀要（東京学芸大・社会科学）		55	169 ~ 180	2004年1月	日朝関係
栗原純	『台湾総督府公文類纂』にみる戸口規制、「戸籍」、国勢調査：明治38年の臨時台湾戸口調査を中心として	紀要（東京女子大・比較文化研）		65	33 ~ 77	2004年1月	台湾
林玉茹・李毓中（森田明監訳）	台湾史研究入門		汲古書院			2004年1月	台湾
山路勝彦	台湾の植民地統治：“無主の野蛮人”という言説の展開		日本図書センター			2004年1月	台湾
前田直樹	1950年代日・米・台関係研究と台湾所蔵資料	アジア社会文化研究		5	167 ~ 181	2004年2月	台湾
王泰升（鈴木賢訳）	台湾における法文化の変遷：不動産売買を素材として	北大法学論集		54(6)	241 ~ 271	2004年2月	台湾
三澤真美恵	植民地期台湾の映画普及における「文節的経路」と「混成的土着化」	言語文化研究（立命館大）		15(3)	39 ~ 52	2004年2月	台湾
許金生	日本の海南島占領期における鉄道開発活動について	言語文化研究（立命館大）		15(3)	79 ~ 86	2004年2月	海南島
池端雪浦・リディア・N・ユー・ホセ（編）	近現代日本・フィリピン関係史		岩波書店			2004年2月	フィリピン

王偉彬	中国と日本の外交政策：1950年代を中心にみた国交正常化へのプロセス		ミネルヴァ書房			2004年2月	日中関係
増田幸子	アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷		大阪大学出版会			2004年2月	アメリカ、日本、イメージ
大八木豪	日系アメリカ人のリドレス運動の生成過程	アメリカ研究		38	199～217	2004年3月	日本、アメリカ
松永正義	戦後台湾の「国語」問題	一橋論叢		131(3)	25～39	2004年3月	台湾
秋吉収	植民地台湾を描く視点：佐藤春夫『霧社』と頼和『南国哀歌』	研究論文集(佐賀大・文化教育)		8(2)	77～94	2004年3月	台湾
植野弘子	植民地台湾における民族文化の記述	人文学科論集(茨城大)		41	39～57	2004年3月	台湾
落合弘樹	朝鮮修信使と明治政府	駿台史学		121	1～20	2004年3月	日朝関係
伊藤之雄	近代日本の主君制の形成と朝鮮：韓国皇帝、皇族等の日本帝国への包摂	法学論叢		154(4・5・6)	65～98	2004年3月	日朝関係
内藤正中	昭和前期鳥取県の朝鮮人対策	北東アジア文化研究(鳥取短大)		19	1～29	2004年3月	日朝関係
吉次公介	日米関係史のなかのロバート・F・ケネディ司法長官訪日	沖縄法学		33	77～98	2004年3月	沖縄、日本、アメリカ
鈴木俊夫	日露戦争前夜の戦艦売却交渉マーチャント・バンクの武器取引	研究年報(東北大・経)		72	1～14	2004年3月	日露戦争
栗原純	台湾における日本植民地統治初期の衛生行政について：『台湾総督府公文類纂』にみる台湾公医制度を中心として	史論		57	1～23	2004年3月	台湾
檜山幸夫	台湾統治基本法と外地統治機構の形成：六三法の制定と憲法問題	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		13～266	2004年3月	台湾
栗原純	日本植民地時代台湾における戸籍制度の成立：戸口規則の戸籍制度への転用について	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		269～337	2004年3月	台湾
柏木一朗	明治30年前後における台湾の郵便事業と治安問題	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		343～391	2004年3月	台湾
本康宏史	台湾における軍事的統合の諸前提	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		395～443	2004年3月	台湾
鈴木敏弘	台湾初期統治期の鉄道政策と私設鉄道	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		447～476	2004年3月	台湾
呉文星	札幌農学校と台湾近代農学の展開：台湾総督府農事試験場を中心として	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		481～522	2004年3月	台湾
潘継道(白井進訳)	台湾の花蓮における日抛時期遺跡について	台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』	中京大学社会科学研究所		525～557	2004年3月	台湾
呉岳樺	近現代中国語における日本語からの外来語：その借用法と外来要素を中心に	文研会紀要(愛知学院大)		15	80～87	2004年3月	中国語、言語
森口準	韓国の被保護国化と保護国論	法政史論		31	28～47	2004年3月	日韓関係
清水稔	清末の湖南留日学生の動向について	論集(仏教大・文)		88	19～34	2004年3月	日中関係
国分良成(編)	現代東アジアと日本2：中国政治と東アジア		慶應義塾大学出版会			2004年3月	東アジア、中国
熊谷明泰編著	朝鮮総督府の「国語」政策資料		関西大学出版部			2004年3月	朝鮮
橋谷弘	帝国日本と植民地都市		吉川弘文館			2004年3月	植民地
台湾史研究会	日本統治下台湾の支配と展開		中京大学社会科学研究所			2004年3月	台湾
中野隆生(編)	都市空間の社会史 日本とフランス		山川出版社			2004年3月	日本、フランス、都市

姫岡とし子	ジェンダー化する社会 労働とアイデンティティの日独比較史 (世界歴史選書)		岩波書店			2004年3月	日本、ドイツ、ジェンダー
木畑洋一(編)	講座戦争と現代 2 20世紀の戦争とは何であったか		大月書店			2004年3月	戦争
和田正広・翁其銀	上海鼎記号と長崎泰益号：近代在日華商の上海交易 (九州国際大学教養学会叢書)		中国書店			2004年3月	日中関係
中根隆行	朝鮮における日本語教育政策と同化主義：日韓併合期の植民地教育をめぐるイデオロギー	青丘学術論集		24	173～206	2004年4月	日朝関係
和国博文	上海在留日本人の出版活動：島津四十起と金風社	アジア遊学		62	23～31	2004年4月	中国、上海
十重田裕一	改造社のメディア戦略と上海：第二次世界大戦前日本の「中国」言説の一側面	アジア遊学		62	32～39	2004年4月	中国、上海
河原功	戦前期台湾での初等教育：総督府編纂の国語教科書	東方		278	1～6	2004年4月	台湾
江夏由樹	中国東北地域における日本の会社による土地経営：中国史研究のなかに見えてくる日本社会	一橋論叢		131(4)	55～76	2004年4月	中国
飯沼雅行	朝鮮通信史・琉球使節通航時の綱引助郷：撰河両国を中心に	交通史研究		54	23～53	2004年4月	朝鮮、琉球
高原香介	ウィルソン外交と日本 その可能性と限界	創文		463	16～21	2004年4月	日本、アメリカ
西山順子	朝鮮戦争期の韓国女性従軍作家とその作品について	朝鮮学報		191	107～49	2004年4月	朝鮮
八木希容子	ドイツ海軍による日本海軍への軍事的接近 1937年から1939年まで	政治経済史学		453	1～23	2004年5月	日本、ドイツ、軍事
朴得俊(編) (槩相鎮訳)	日本帝国主義の朝鮮侵略史 (1868～1905)：征韓論台頭から乙巳五条約(保護条約)捏造まで		明石書店			2004年5月	日朝関係
崔文衡・朴菖熙(編)	日露戦争の世界史		藤原書店			2004年5月	日本、ロシア
白石昌也・伊東淳一	ホーチミン市における日本商工会の設立と初期の活動	アジア太平洋討究		4(6)	19～53	2004年6月	ベトナム
後藤乾一	初期インドネシア独立革命と日本外交官：斎藤鎮男「報告書」をめぐって	アジア太平洋討究		4(6)	73～85	2004年6月	インドネシア
昇亜美子	日本のインドシナ戦後復興政策と日米関係 1968年～73年	法学政治学論究		61	163～194	2004年6月	日米関係
関斗基	東アジアの実体とその展望：歴史的アプローチ	近きに在りて		44・45	32～42	2004年6月	東アジア
関斗基	東アジア近現代の社会変革：一つの試論としての研究ノート	近きに在りて		44・45	57～65	2004年6月	東アジア
北田晃司	植民地時代の台湾における都市システムの変容：朝鮮との比較を通して	人文地理		56(3)	1～240	2004年6月	台湾
倉沢愛子	日本の東南アジア占領：インドネシアの視点から	人民の歴史学		160	1～10	2004年6月	東南アジア、戦争
岩本憲児(編)	映画と「大東亜共栄圏」		森話社			2004年6月	大東亜共栄圏
海野福寿	伊東博文と韓国併合		青木書店			2004年6月	日韓関係
呉萬虹	中国残留日本人の研究：移住、漂流、定着の国際関係論		日本図書センター			2004年6月	日中関係
山田寛人	植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策：朝鮮語を学んだ日本人		不二出版			2004年6月	朝鮮
高原香介	ウィルソン政権と旧ドイツ領南洋諸島委任統治問題 米・英・日・英自治領の認識と政策的対応をめぐって	アメリカ史研究		27	85～100	2004年7月	日本、アメリカ、イギリス
鈴木信昭	朝鮮儒学者李晔光の世界地理認識	朝鮮学報		192	31～84	2004年7月	朝鮮

大太平洋一	日本統治時代台湾における日本人移民事業に関する研究動向：張素玠『台湾的日本人農業移民以官管移民中心』の研究成果の検討を中心に	東アジア地域研究		11	67 ~ 77	2004年7月	台湾
陶徳民	内藤湖南における『支那論』の成立：民國初期の熊希齡内閣との関連について	東方学		108	84 ~ 104	2004年7月	日中関係
中央大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委員会	台湾総督府文書目録第15巻：明治40年上		ゆまに書房			2004年7月	台湾
中見立夫	満州とは何だったのか		藤原書店			2004年7月	満州
江浦	中国直隸省の近代化(1900-1928)と「日本経験」：日本留学・視察者の歴史的役割	アジア太平洋論叢		14	55 ~ 78	2004年8月	近代化、中国
鶴田武良	日華(中日)絵画総合展覧会について：近百年來中国絵画史研究7	美術研究		383	1 ~ 33	2004年8月	日中関係
黄美娥	台湾古典文学史序説(1651 ~ 1945)	野草		74	58 ~ 94	2004年8月	台湾
柴田恵司・高山久明	長崎、中国などの竜舟競渡	海事史研究		61	42 ~ 61	2004年9月	九州、中国
山本正昭	泉州窯系磁器から見た琉明関係：消費地からの視点で	貿易陶磁研究		24	177 ~ 210	2004年9月	琉球
松浦正孝	汎アジア主義における「台湾要因」：兩岸関係をめぐる日英中間抗争の政治経済史的背景	北大法学研究		55(3)	21 ~ 72	2004年9月	台湾
小林英夫	帝国日本と総力戦体制：戦前・戦後の連続とアジア		有志舎			2004年9月	帝国主義、戦争
森田安一(編)	スイスと日本 日本におけるスイス受容の諸相		刀水書房			2004年9月	日本、スイス
歴史教育者協議会	東アジア世界と日本：日本、朝鮮、中国関係史		青木書店			2004年9月	東アジア
石井元章	エンリーコ・ジリオリーと日本	イタリア学会誌		54	78 ~ 105	2004年10月	日本、イタリア
渡辺祐子	田川大吉郎と中国：日本人キリスト者と日中戦争	紀要(中央大・人文科学研)		51	67 ~ 93	2004年10月	日中関係
王宝平	忘れられた日本研究著書『日本環海険要図誌』について	集刊東洋学		92	123 ~ 133	2004年10月	日本海
藤井賢二	李承晩ラインと日韓会談：第一次～第三次会談における日韓の対立を中心に	朝鮮学報		193	111 ~ 46	2004年10月	日韓関係
浅井良純	勸告併合前後における日本人官僚について：文官高等試験合格者を中心に	朝鮮学報		193	75 ~ 110	2004年10月	韓国、朝鮮
洪宗郁	1930年代における植民地朝鮮人の思想的模索：金明植の現実認識と「転向」を中心に	朝鮮史研究会論文集		42	159 ~ 186	2004年10月	朝鮮
姜徳相	関東大震災80周年を迎えてあらためて考えること	朝鮮史研究会論文集		42	21 ~ 32	2004年10月	日朝関係
山田昭次	関東大震災時の朝鮮人虐殺事件をとらえる視点	朝鮮史研究会論文集		42	33 ~ 43	2004年10月	日朝関係
海野福寿	日朝国交交渉と過去の清算 韓国併合条約等旧条約の効力をめぐって	朝鮮史研究会論文集		42	5 ~ 20	2004年10月	日韓関係
石川研	満州国放送事業の展開：放送広告業務を中心に	歴史と経済		185	1 ~ 16	2004年10月	満州
宮嶋博史・李成市・尹海東・林志弦	植民地近代の視座：朝鮮と日本		岩波書店			2004年10月	東アジア、朝鮮
日朝友好促進京都婦人会議(編)・上田正昭(監修)	日本と朝鮮の関係史：古代から現代まで、日朝友好促進京都婦人会議発足30周年記念講演集		アジェンダ・プロジェクト			2004年10月	日朝関係
北政巳	蘇格蘭土と日本・世界 ボウモア・ウィスキーと薊の文化(近代文芸社新書)		近代文芸社			2004年10月	スコットランド

小島勝	香港日本人学校の動向と香港本願寺	紀要（龍谷大・仏教文化研）		43	42～61	2004年11月	仏教
佐藤仁史	近代中国の地方誌にみる郷土意識：江南地方を中心に	史潮		56	29～51	2004年11月	中国、地方、郷土
金鳳珍	東アジア「開明」知識人の思惟空間：鄭観応・福沢諭吉・兪吉濬の比較研究		九州大学出版会			2004年11月	東アジア
呉満	雨森芳洲：日韓のかけ橋		新風書房			2004年11月	日韓関係
坂東宏	世界のなかの日本・ポーランド関係 1931-1945		大月書店			2004年11月	日本、ポーランド
中央大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委員会	台湾総督府文書目録第16巻：明治40年中		ゆまに書房			2004年11月	台湾
広川佐保	「満州国」初期における土地政策の立案とその展開	一橋論叢		132(6)	73～88	2004年12月	満州
杉野元子	南京中日文化協会と張資平	芸文研究		87	255～77	2004年12月	日中関係
張寅性	近代東アジア国際社会の公共性と「万国公論」	三谷博編『東アジアの公論形成』	東京大学出版会		129～162	2004年12月	東アジア
中島楽章	16・17世紀の東アジア海域と華人知識層の移動：南九州の明人医師をめぐって	史学雑誌		113(12)	1～37	2004年12月	東アジア
河原林直人	南洋協会という鏡 近代日本における「南進」を巡る「同床異夢」	人文学報(京大)		91	113～140	2004年12月	南洋協会
早瀬晋三	近代大衆消費社会出現の一考察 アメリカ植民地支配下のフィリピンと日本商店・商品	人文学報(京大)		91	141～170	2004年12月	フィリピン
田中隆一	「満州国」期ハルビン朝鮮人の「対日協力」	人文学報(京大)		91	97～111	2004年12月	満州
真栄平房昭	清代中国における海賊問題と琉球：東アジア海域史研究の一視点	東洋史研究		63(2)	36～70	2004年12月	東アジア、琉球
YOSHIKAWA, Hideki	An Okinawan Dialogue with Thailand: Lue Textiles in the North and Dugongs in the South	琉大アジア研究		5	89～101	2004年12月	琉球、東南アジア
保谷徹	オールコックは対馬占領を言わなかったか 1861年ボサドニック号事件における英国の対応について	歴史学研究		796	16～21	2004年12月	日本、イギリス
熊谷正秀	日本から見た朝鮮の歴史：日朝関係全史		展転社			2004年12月	日朝関係
渋谷由里	馬賊で見る「満州」：張作霖のあゆんだ道		講談社			2004年12月	満州
吉田光男	日韓中の交流：ひと・モノ・文化		山川出版社			2004年12月	日本、韓国、中国、東アジア
三谷博	東アジアの公論形成		東京大学出版会			2004年12月	東アジア
山本春樹ほか(編)	台湾原住民族の現在		草風館			2004年12月	台湾
小林英夫・福井紳一	満鉄調査部事件の真相：新発見史料が語る「知の集団」の見果てぬ夢		小学館			2004年12月	満州
松田吉郎	台湾原住民と日本語教育：日本統治時代台湾原住民教育史研究		晃洋書房			2004年12月	台湾
中央大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委員会	台湾総督府文書目録第17巻：明治40年下		ゆまに書房			2004年12月	台湾
東中野修道	南京「虐殺」研究の最前線		展転社			2004年12月	日中関係
小林隆夫	イギリスの巨門島占領(1885年)と対中日政策 I 1880年代半ばのイギリス東アジア政策(4)	紀要（愛知学院大・文）		35	31～41	2005年	イギリス、対中日政策

朴廷鎬	近代日本における治安維持政策と国家防衛政策の狭間 朝鮮軍を中心に	本郷法政紀要		14	229 ~ 271	2005年	朝鮮
大澤博明	日清天津条約(1885年)の研究(2)	熊本法学		107	135 ~ 264	2005年1月	日中関係
松浦章	日本の台湾統治初期の台湾帆船について	史泉		101	1 ~ 19	2005年1月	台湾
磯田一雄	初期台湾公学校の教育文化的考察 就学率の推移とその背景を中心に	東アジア研究		40	3 ~ 17	2005年1月	台湾
西尾昭・張君三	近代朝鮮の自主民権運動について: 独立協会の国会開設運動に関する一考察	同志社法学		303	197 ~ 255	2005年1月	日韓関係
小林博	日韓両国の金融システムとその比較	北東アジア研究		8	69 ~ 80	2005年1月	日韓関係
上水流久彦	台湾漢民族のネットワーク構築の原理: 台湾都市人類学的研究		溪水社			2005年1月	台湾
辻村志のぶ	明治期日本仏教のアジア布教とその思想: 「仏教アジア主義」試論	紀要(国学院大)		43	107 ~ 40	2005年2月	仏教、アジア
大坪聖子	貿易陶磁からみた琉球沖縄における東南アジア文化の受容: 南西諸島出土の沈船資料を事例に	紀要(早大・院・文学)		50(3)	87 ~ 97	2005年2月	東南アジア、琉球
ガンバガナ	汪兆銘と内モンゴル自治運動 日本の対内モンゴル政策を中心に	紀要(日本モンゴル学会)		35	17 ~ 28	2005年2月	モンゴル
板谷俊生	北九州と中国人留学生夏行について 明治専門学校創立から中国人留学生夏行入学の頃までを中心に	紀要(北九州市立・外国語)		112	29-59	2005年2月	北九州 中国人留学生
趙軍	日中戦争期間中の中国における「大アジア主義」: 留日同学会の言論と活動を中心として	駒沢史学		64	109 ~ 29	2005年2月	日中関係
片岡一忠	日清間の条約文書にみえる日清両国の官印: 清朝官印制度の変化の一鱗	駒沢史学		64	48 ~ 63	2005年2月	日中関係
石田肇	貴州省の日本人教習と陽明祠の三島中洲詩碑: 附 三島中洲と黎庶昌	駒沢史学		64	5 ~ 25	2005年2月	日中関係、教育
松田京子	1930年代の台湾原住民をめぐる統治実践と表象戦略: 「原始芸術」という言説の展開	日本史研究		510	152 ~ 79	2005年2月	台湾、表象
金丸裕一	「支那事変」直後、日本による華中電力産業の調査と復旧計画	立命館経営学		53(5・6)	574 ~ 596	2005年2月	日中関係
郭偉	武田泰淳と胡適 「十三妹」を中心に	立命館言語文化研究		16(3)	237 ~ 249	2005年2月	日中関係
黄東蘭	近代中国の地方自治と明治日本		汲古書院			2005年2月	近代化、中国
青井哲人	植民地神社と帝国日本		吉川弘文館			2005年2月	帝国主義、戦争
早川紀代	植民地と戦争責任(戦争・暴力と女性3)		吉川弘文館			2005年2月	帝国主義、戦争
長田彰文	日本の朝鮮統治と国際関係: 朝鮮独立運動とアメリカ、1910-1922		平凡社			2005年2月	帝国主義、戦争
奈倉文二・横井勝彦(編)	日英兵器産業史 武器移転の経済史研究		日本経済評論社			2005年2月	日本、イギリス
堅田義明	日露戦争とアメリカ社会 アメリカ人の人種認識と対外認識	NUCB journal of economic and information science (名古屋商大)		49(2)	107 ~ 117	2005年3月	日露戦争
夏日新(吉田真直訳)	楊守敬の日本訪書についてのいくつかの問題	アジア文化史研究(東北学院大)		5	11 ~ 35	2005年3月	
弁納才一	日本の青島占領支配時期における山東省物件調査について	近代中国研究彙報		27	25 ~ 56	2005年3月	山東
金丸裕一(編)	大東亜省刊行中国関係図書所在目録(稿)	近代中国研究彙報		27	81 ~ 88	2005年3月	日中関係

臧運祐	主要文書より見たる日本の対華政策：満州事変から盧溝橋事変にかけて	現代中国研究		16	107～17	2005年3月	日中関係
呉得智	台湾における改姓名政策に関する一考察	言語・地域文化研究(東京外大)		11	23～42	2005年3月	台湾
高紅梅	大連における傅立魚 ナショナルリズムと植民地のはざま	言語・地域文化研究(東京外大)		11	43～59	2005年3月	大連、植民地
ガンバガナ	綏遠事件と日本の対内モンゴル政策	言語・地域文化研究(東京外大)		11	81-101	2005年3月	内モンゴル
鈴木貫樹	大正日本の中国観 中国革命論を中心に	国際日本学研究(法大)		1	47～85	2005年3月	中国観
土屋好古	日露戦争関連記事索引作成のための覚書『ニーヴァ』(1)	史叢		71・72	141～180	2005年3月	日露戦争
真栄平房昭	東アジア海域史における海賊問題	七隈史学		6	1～18	2005年3月	東アジア
大友晶子	台湾、朝鮮の比較にみる植民地社会事業形成をめぐる一考察	社会科学研究(中京大)		25(2)	1～40	2005年3月	台湾、朝鮮、植民地
植野弘子	植民地台湾の日常生活における「日本」に関する試論：女性とその教育をめぐる	人文学科論集(茨城大)		43	1～17	2005年3月	台湾
李昇燁	三・一運動期における朝鮮在住日本人社会の対応と動向	人文学報(京大)		92	119-144	2005年3月	朝鮮、三・一運動
楊林凱	中国会社法の成立、展開および在り方について(上)：日本をはじめ諸国における社会報からの示唆を受けて	青山社会科学紀要		33(2)	47～77	2005年3月	中国
徐氷	清末の中国教科書に見る日本人像	中国21		21	105～24	2005年3月	日中関係、イメージ
陳雲	戦後日本の高度経済成長は社会思潮をどう変えたか：併せてその中日関係に対する影響について	中国21		21	125～46	2005年3月	日中関係
伊藤一彦	戦後日本における中国イメージの変遷	中国21		21	37～56	2005年3月	表象、イメージ
劉建輝	日本で作られた中国人の「自画像」	中国21		21	85～104	2005年3月	日中関係、イメージ、表象
湊照宏	植民地期および戦後復興期台湾における化学肥料需給の構造と展開	田島俊雄編『20世紀の中国化学工業 永利化学・天原電化とその時代』	東京大学社会科学研究所		99～123	2005年3月	台湾
岩井茂樹	明のまなざしと東アジア 明代中国の礼制覇権主義と東アジアの秩序	東洋文化(東大・東洋文化研)		85	121～160	2005年3月	東アジア
大木康	江戸と明の小説と図像をめぐる	東洋文化(東大・東文研)		85	79～100	2005年3月	図像、表象
辻弘範	解説 朝鮮総督府時代の農政	東洋文化研究(学習院大)		7	373～404	2005年3月	日朝関係
倉持順一	植民地朝鮮における同化政策と内地延長主義 三・一独立運動の発生と関連して	法政史論		32	23～33	2005年3月	朝鮮、三・一運動
浅井秀子	北部九州における都市空間と風水思想	北東アジア文化研究		21	73～84	2005年3月	九州
三浦泰之	近代日本の博覧会における「満州館」	北方文化			45～69	2005年3月	博覧会、満州
寺林伸明(訳)	孫継武・鄭敏(共著)『日本の中国東北に対する移民の調査と研究』	北方文化			71～90	2005年3月	中国、移民
鈴木正弘	清末における日本人著述西洋史教材の漢訳について(1)：徐有成等訳『歐羅巴通史』序・叙・跋・凡例の考察	立正西洋史学		21	29～36	2005年3月	日中関係、教育
宮嶋博史・金容徳	日韓共同研究叢書 近代交流史と相互認識(2)：日帝支配期		慶應義塾大学出版会			2005年3月	日本、韓国、共同研究
人間文化研究機構・国文学研究資料館アーカイブズ研究系	日韓近現代歴史資料の共用化へ向けて：アーカイブズ学からの接近		国文学研究資料館			2005年3月	日本、韓国、共同研究

村瀬守保	私の従軍中国戦線：村瀬守保写真集、一兵士が写した戦場の記録(新版)		日本機関紙出版センター			2005年3月	戦争
大塚和義・小泉格・丹羽昇	日本海学の世紀(4)交流の海		角川書店			2005年3月	交流、海
渡辺浩・朴忠錫	韓国、日本、「西洋」：その交錯と思想変容(日韓共同研究叢書)		慶應義塾大学出版会			2005年3月	日本、韓国、共同研究
藤田高夫	日中文化交流史研究の将来：日中学术交流史と比較中国学	紀要(関西大・東西学術研)		38	1～8	2005年4月	日中関係、教育
横手慎二	日露戦争史 20世紀最初の大国間戦争(中公新書1792)		中央公論新社			2005年4月	日露戦争
小林英夫・林道生	日中戦争史論：汪精衛政権と中国占領地		御茶の水書房			2005年4月	帝国主義、戦争
豊見山和行・高良倉吉	街道の日本史56 琉球・沖縄と海上の道		吉川弘文館			2005年4月	交流、海、琉球
彭瑞金・中島利郎・沢井律之	台湾新文学運動40年		東方書店			2005年4月	台湾
藤村一郎	吉野作造と中国国民革命：日中提携論における現実主義と理想主義	久留米大学法学		51・52	1～59	2005年5月	日中関係
土屋洋	清末の修身教科書と日本	史林		88(3)	62～96	2005年5月	日中関係、教育
呉密察・黄英哲・垂水千恵	記憶する台湾：帝国との相克		東京大学出版会			2005年5月	台湾
前川和也・岡村秀典	国家形成の比較研究		学生社			2005年5月	国家論
池谷望子・内田晶子・高瀬恭子	朝鮮王朝実録 琉球史料集成：原文篇・訳注篇		榕樹書林			2005年5月	琉球
日中韓3国共通歴史教材委員会	未来をひらく歴史：日本、中国、韓国＝共同編集 東アジア3国の近現代史		高文研			2005年5月	日本、中国、韓国、共同研究
日露戦争研究会	日露戦争研究の新視点		成文社			2005年5月	戦争
王栄	黄炎培による中国職業教育の開始 第一次日本教育視察の意義	アジア文化研究		12	197～210	2005年6月	日中関係、教育
人見佐知子	日清戦争期の婦人軍事援護団体：加東郡婦人報公会を事例として	史学年報(神戸大)		20	1～27	2005年6月	戦争、女性
古瀬啓之	戦間期における英国の東アジア国際政治認識 エリック・タイマンAffairs of Chinaを通して	社会文化形成		1	97～114	2005年6月	東アジア
古田博司	東アジアの近代の超克	中国		20	25～34	2005年6月	東アジア
丸川哲史	台湾ニューシネマにおける「外省人」のポジション	中国21		22	167～184	2005年6月	台湾
大出尚子	満鉄開拓科学研究所設立の経緯と調査研究活動	満族史研究		4	197～209	2005年6月	満鉄
三ツ井崇	植民地朝鮮における言語運動の展開と性格：1920～30年代を中心に	歴史学研究		802	19～29	2005年6月	日朝関係
三澤真美恵	日本植民地化の台湾人による非営利の映画上映活動	歴史学研究		802	30～42、80	2005年6月	台湾
貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅	「東アジア」の時代性		溪水社			2005年6月	東アジア
軍事史学会(編)	日露戦争 2 戦いの諸相と遺産		錦正社			2005年6月	日露戦争
原貴美恵	サンフランシスコ平和条約の盲点：アジア太平洋地域の冷戦と「戦後未解決の諸問題」		溪水社			2005年6月	太平洋地域
植民地文化研究会	「満州国」文化細目		不二出版			2005年6月	帝国主義、戦争
赤沢史朗ほか(編)	「帝国」と植民地：「大日本帝国」崩壊60年(年報・日本現代史)		現代史料出版			2005年6月	帝国主義、戦争
鳥田俊彦	関東軍：在満陸軍の独走		講談社			2005年6月	帝国主義、戦争

飯島渉	マラリアと帝国：植民地医学と東アジアの広域秩序		東京大学出版会			2005年6月	帝国主義、戦争
武田徹	偽満州国論		中央公論新社			2005年6月	満州
藁口一哲	開拓団の満州（語り継ぐ民衆史3）		新生出版			2005年6月	満州
高井ヘラー由紀	日本統治下台湾における台日プロテスタント教会の「合同」問題 1930年代および1940年代を中心に	キリスト教史学		59	109～141	2005年7月	台湾
今井就稔	日中戦争期華中の政治・経済・社会 日本国内の研究動向 (1981～2005)	東アジア地域研究		12	71～81	2005年7月	日中戦争
松浦章	台湾における海底通信線の創始	文学論集(関西大)		55(1)	47～80	2005年7月	台湾
須永徳武	第一次大戦期における台湾銀行の中国資本輸出	立教経済学研究		59(1)	75～103	2005年7月	台湾
金丸裕一(編)	資料『台湾電気協会会報』記事総目録(1932-1943年)	立命館経済学		54(2)	127～152	2005年7月	台湾
安井三吉	帝国日本と華僑：日本・台湾・朝鮮（シリーズ中国にとっての20世紀）		青木書店			2005年7月	日本、台湾、朝鮮
森田安一	日本とスイスの交流 幕末から明治へ		山川出版社			2005年7月	日本＝スイス関係
申明直・岸井紀子・古田富建	幻想と絶望：漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城		東洋経済新報社			2005年7月	韓国、朝鮮
張宏波	日本軍の山西残留に見る戦後初期中日関係の形成	一橋論叢		134(3)	125～146	2005年8月	山東
倉橋幸彦	杉本達夫『日中戦記 老舎と文芸界統一戦線 大後方の渦の中の非政治』	現代中国		79	123～125	2005年8月	日中戦争
轟博志	朝鮮における日本人農業移民 不二農村の事例を中心とした	言語文化研究（立命館）		17(1)	29～42	2005年8月	朝鮮、移民
若林良和	戦後の南方カツオ出漁と日本人 ソロモン諸島における混乗漁船の事例から	言語文化研究（立命館大）		17(1)	75～82	2005年8月	ソロモン諸島
菊地一隆	中国特務「藍衣社」の抗日活動とその特質 日中戦争の一段面	歴史科学		181	1～14	2005年8月	日中戦争
ポール・H・クラトスカ（今井敬子訳）	日本占領下のマラヤ 1941-1945		行人社			2005年8月	マラヤ
申明直	植民地朝鮮における都市小市民の結婚および家族文化について	海外事情研究		33(1)	35～60	2005年9月	朝鮮、植民地
張玉玲	ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティの形成過程 二世、三世および「リターン者」のライフ・ヒストリーを通して	研究報告(民博)		30(1)	57～91	2005年9月	在日華僑
小林隆夫	イギリスの巨門島占領(1885年)と対中政策 I 1880年代半ばのイギリス東アジア政策(3)	人間文化		20	191～206	2005年9月	日中関係
彭瓊慧	日本台湾統治時代初期における教育政策 台湾人の日本教育に対する受容態度から見る伊澤修二の位置	政治経済史学		469	1～36	2005年9月	台湾
大野太幹	満鉄附属地居住華商に対する中国側税捐課税問題	中国研究月報		59(9)	23～41	2005年9月	満鉄
荒木圭子	第一次世界大戦後における米国黒人の「日本」観：ガーヴィー運動を中心に	法学政治学論究（慶大）		66	69～95	2005年9月	日米関係、日本観
許金生	上海近代工業発展史上における日系雑工業の位置と役割をめぐって	立命館経済学		54(3)	74～89	2005年9月	上海
小林英夫	満鉄調査部「元祖シンクタンク」の誕生と崩壊		平凡社			2005年9月	満鉄
山本剛郎	日系アメリカ人コミュニティの形成・展開過程 カリフォルニア州Cortezの場合	紀要（関西学院大・社会）		99	87～104	2005年10月	日系アメリカ人

小林玲子	「韓国併合」前後における間島居住朝鮮人の法的地位と帰化政策	朝鮮学報		197	45 ~ 82	2005年10月	韓国併合
小川原宏幸	一進会の日韓併合請願運動と韓国併合「政合邦」構想と天皇制国家原理との相克	朝鮮史研究会論文集		43	183 ~ 210	2005年10月	日韓併合
山口公一	植民地期朝鮮における神社政策と宗教管理統制秩序 「文化政治」期を中心に	朝鮮史研究会論文集		43	57 ~ 91	2005年10月	朝鮮
阿部軍治	シベリア強制抑留の実態 日ソ両国資料からの検証		彩流社			2005年10月	シベリヤ抑留
松尾展成	日本=ザクセン文化交流史研究		大学教育出版			2005年10月	日本=ザクセン関係
拓殖大学創立百年史編纂室(編)	台湾と拓殖大学		拓殖大学			2005年10月	台湾
北野剛	日露戦後における大連税関の設置経緯 満州開放と経営体制の確立	史学雑誌		114(11)	87-104	2005年11月	日露戦争
倉沢愛子	20世紀アジアの戦争	倉沢愛子ほか編『なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』(岩波講座アジア・太平洋戦争第1巻)	岩波書店		199 ~ 234	2005年11月	アジア、戦争
金文京	東アジアの異類論争文学	文学		6(6)	42 ~ 51	2005年11月	東アジア
朱徳蘭	台湾総統府と慰安婦		明石書店			2005年11月	台湾
田畑則重	日露戦争に投資した男 ユダヤ人銀行家の日記		新潮社			2005年11月	日露戦争
日韓歴史共同研究委員会(編)	日韓歴史共同研究報告書		日韓歴史共同研究委員会			2005年11月	日韓関係
宋堯	文化革命期における日中文化交流 『人民日報』の報道を用いて	紀要(横浜市大・国際文化研)		12	171 ~ 196	2005年12月	日中
玄大松	韓国人の血・地・知、そして日本 韓国人のアイデンティティ・独島意識・日本イメージに関する実証分析	紀要(東大・東洋文化研)		148	75 ~ 141	2005年12月	韓国
陳虹彪	日本統治下台湾における初等学校国語教科書の考察 1937年以降台湾人生徒用国語教科書に着目して	研究年報(東北大・院・教育学研)		54(1)	63 ~ 80	2005年12月	台湾
何為民	満蒙をめぐる日中露関係 辛亥革命後から1917年を中心に	現代社会文化研究		34	281-297	2005年12月	日中露関係
中野聡	フィリピンから見た戦後日本和解と忘却	思想		980	42 ~ 56	2005年12月	フィリピン
文京洙	戦後60年と在日朝鮮人 “国民”の呪縛を超えて	思想		980	8 ~ 23	2005年12月	在日朝鮮人
蘇貞姫サラ	帝国日本の「軍慰安婦制度」論 歴史と記憶の政治的葛藤	倉沢愛子ほか編『戦争の政治学』(岩波講座アジア・太平洋戦争第2巻)	岩波書店		347 ~ 380	2005年12月	従軍慰安婦
小林知子	外村大著『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』	大原社会問題研究所雑誌		565	63-66	2005年12月	在日朝鮮人
金丸裕一	抗日・排日関係史料 上海商工会議所「金曜会パンフレット」第1巻~第5巻		ゆまに書房			2005年12月	上海
同時代史学会(編)	朝鮮半島と日本の時代史 東アジア地域共生を展望して		日本経済評論社			2005年12月	朝鮮、東アジア
塩出浩之	戦前期樺太における日本人の政治的アイデンティティについて 参政権獲得運動と本国編入問題	「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集(北海道大学スラブ研究センター)		11	21 ~ 46	2006年1月	樺太
青野正明	植民地期朝鮮における神社の職制・神職任用関連の法令 1936年の神社制度改変を中心に	人間科学(桃山学院大)		30	29 ~ 50	2006年1月	朝鮮、神社
木村健二	近代の長崎・対馬と朝鮮	歴史評論		669	43 ~ 53	2006年1月	長崎、対馬、朝鮮
千葉功	日露戦争研究の現状と課題	歴史評論		669	86-95	2006年1月	日露戦争

荒井信一	歴史和解は可能か：東アジアでの対話を求めて		岩波書店			2006年1月	アジア
近代日中関係史年表編集委員会(編)	近代日中関係史年表 1799-1949		岩波書店			2006年1月	日中関係
久保田優子	植民地朝鮮の日本語教育 日本語による「同化」教育の成立過程		九州大学出版会			2006年1月	朝鮮、植民地
竹中亨	ジャポニズムから世紀末の憂鬱へ 19世紀末オーストリアにおける日本観	Journal of History for the Public		3	1～18	2006年2月	オーストリア、日本観
安松みゆき	第二次世界大戦中の日独双方による日本のイメージ戦略の一考察 日本美術家フリッツ・ルムプフの活動を通して	紀要(別府大)		47	23～35	2006年2月	日独
土屋好古・加藤直人・松重充浩・小浜正子	「帝国主義の百年と東アジア・極東における政治・社会・思想の史的展開」成果報告書	研究紀要(日大・文理・人文科学研)		71	69～84	2006年2月	東アジア
井上勝生	札幌農学校と植民学の誕生 佐藤昌介を中心に	酒井哲哉責任編集『「帝国」編成の系譜』(岩波講座「帝国」日本の学知1)	岩波書店		12～41	2006年2月	札幌大学
梅森直之	変奏する統治 20世紀初期における台湾と韓国の刑罰・治安機構	酒井哲哉責任編集『「帝国」編成の系譜』(岩波講座「帝国」日本の学知1)	岩波書店		43～81	2006年2月	台湾、韓国
浅野豊美	保護下韓国の条約改正と帝国法制 破綻した日韓両国内法の地域主義的結合	酒井哲哉責任編集『「帝国」編成の系譜』(岩波講座「帝国」日本の学知1)	岩波書店		83～133	2006年2月	日韓関係
溥琪貽	台湾原住民族における植民地化と脱植民地化	倉沢愛子ほか編『帝国の戦争経験』(岩波講座 アジア・太平洋戦争第4巻)	岩波書店		267-291	2006年2月	台湾
近藤正己	植民者の戦争経験 総督政治下の台湾	倉沢愛子ほか編『帝国の戦争経験』(岩波講座 アジア・太平洋戦争第4巻)	岩波書店		3～30	2006年2月	台湾
駒込武	朝鮮における神社参拝問題と日米関係 植民地支配と「内部の敵」	倉沢愛子ほか編『帝国の戦争経験』(岩波講座 アジア・太平洋戦争第4巻)	岩波書店		59～88	2006年2月	朝鮮、植民地、神社
中村哲	東アジアを中心とする1930年代の歴史的な位置づけ	中村哲編著『1930年代の東アジア経済』(東アジア資本主義形成史2)	日本評論社		1～18	2006年2月	東アジア
井上和枝	植民地期朝鮮における生活改善運動 「新家庭」の家庭改善から「生活改新」運動	中村哲編著『1930年代の東アジア経済』(東アジア資本主義形成史2)	日本評論社		105～134	2006年2月	朝鮮、植民地
堀和生	1930年代日本・中国の経済関係 華北市場をめぐる抗争	中村哲編著『1930年代の東アジア経済』(東アジア資本主義形成史2)	日本評論社		19～40	2006年2月	中国
林満紅(青木敦子訳)	大東亜共栄圏 台湾人と台湾資金の新たな境界	中村哲編著『1930年代の東アジア経済』(東アジア資本主義形成史2)	日本評論社		41～84	2006年2月	台湾
磯田一雄	同化と皇民化の間 植民地教育における「文明化」と「日本化」をめぐって	東アジア研究		44	37-52	2006年2月	植民地
弓削俊洋	中国の歴史教科書における「抗日戦争」記述の変遷とその背景に関する考察(上)	論集(愛媛大)		20	39～58	2006年2月	中国
中村哲	1930年代の東アジア経済 東アジア資本主義形成史2		日本評論社			2006年2月	東アジア
楊孟哲	日本統治時代の台湾美術教育		同時代社			2006年2月	台湾
吉田裕	南京事件論争と国際法	笠原十九司、吉田裕編『現代歴史学と南京事件』	柏書房		68～93	2006年3月	南京事件

古川宣子	植民地期朝鮮における学校普及 実態と教育選択	紀要(大東文化大・ 社会科学)		44	105 ~ 131	2006年3月	朝鮮、植民地
越智道雄	日米関係の事件史	紀要(明大・人文研)		58	53 ~ 109	2006年3月	日米
里井洋一	日本・台湾・中国教科書にお ける台湾(牡丹社)事件・琉球処分 記述の考察	紀要(琉球大・教育)		68	49 ~ 68	2006年3月	台湾、中国
李承機	ラジオ放送と植民地台湾の大衆 文化	貴志俊彦・川島真・ 孫安石 編『戦争・ラ ジオ・記憶』	勉誠出版		133-155	2006年3月	台湾
金栄熙	植民地時期朝鮮におけるラジオ 放送の出現と聴取者	貴志俊彦・川島真・ 孫安石 編『戦争・ラ ジオ・記憶』	勉誠出版		156 ~ 179	2006年3月	朝鮮、植民地
貴志俊彦	東アジアにおける「電波戦争」の 諸相	貴志俊彦・川島真・ 孫安石 編『戦争・ラ ジオ・記憶』	勉誠出版		35 ~ 56	2006年3月	東アジア
孫安石	日中戦争と上海の日本語放送	貴志俊彦・川島真・ 孫安石 編『戦争・ラ ジオ・記憶』	勉誠出版		57 ~ 76	2006年3月	日中戦争
呉得智	日本統治下初期台湾における 「改姓名」への方策	言語・地域文化研究 (東京外大)		12	63 ~ 80	2006年3月	台湾
山本武利	日本軍のメディア戦術・戦略 中国戦線を中心に	山本武利責任編集 『メディアのなかの 「帝国」』(岩波講座 『「帝国」日本の学知』 第4巻)	岩波書店		281 ~ 319	2006年3月	中国
楊大慶	南京虐殺事件 原因論の考察	倉沢愛子ほか編『戦 場の諸相』(岩波講 座 アジア・太平洋 戦争第5巻)	岩波書店		181 ~ 214	2006年3月	南京事件
加々美光行	戦後日中関係の屈折した道のり より広い歴史的視点から	中国21		(臨増)	41 ~ 51	2006年3月	日中関係
小林英夫	東アジアの戦前と戦後——「大 東亜共栄圏」と「東アジア経済 圏」	東アジア近代史		9	65 ~ 69	2006年3月	
鈴木哲造	台湾総督府の医療政策——台湾 公医制度の形成過程とその植民 地的性格	東アジア近代史		9	88 ~ 114	2006年3月	
加藤聖文	戦後東アジアの冷戦と満洲引揚 ——国共内戦下の「在満」日本人 社会	東アジア近代史		9	115 ~ 142	2006年3月	
磯田一雄	在満日本人教育におけるアイデ ンティティ論	東アジア研究		45	39-54	2006年3月	在満日本人
鄭根埴	日帝下の検閲機構と検閲官の変 動	東洋文化		86	123 ~ 164	2006年3月	日本、帝国
朴憲虎	「文化政治」期における新聞の位 置と反検閲の内的論理 1920年 代の朝鮮語民間紙を中心に	東洋文化		86	37 ~ 62	2006年3月	朝鮮、植民地
韓基亨	文化政治期における検閲体制と 植民地メディア	東洋文化		86	63 ~ 96	2006年3月	朝鮮、植民地
韓萬洙	植民地期の韓国文学における検 閲と印刷資本	東洋文化		86	97 ~ 122	2006年3月	朝鮮、植民地
大浜郁子	台湾統治初期における植民地教 育政策の形成 伊沢修二の「公 学」構想を中心として	日本植民地研究		15	18 ~ 36	2006年3月	台湾、植民地
王京	教会大学と日中戦争 「北平私 立輔仁大学□(木偏に當)案」 (1925 ~ 1952) からみた戦時下 の学生収容	年報 人類学研究の ための非文字資料の 体系化(神奈川大)		3	250 ~ 259	2006年3月	日中戦争
並木真人	「植民地公共性」と朝鮮社会 植 民地期後半期を中心に	朴忠錫, 渡辺浩編 『「文明」「開化」「平 和」 日本と韓国』	慶応義塾大学出版 会		221 ~ 246	2006年3月	朝鮮、植民地
鈴木信昭	日露戦争と中国駐露公使胡惟德	歴史研究(愛知教育 大)		52	1 ~ 19	2006年3月	日露戦争
和田正広・翁其 銀	近代門司港と華商	和田正広, 黒木國 泰編著『華僑ネット ワークと九州』	中国書店		253 ~ 284	2006年3月	北九州

芦益平	孫文と福岡の人びと	和田正広, 黒木國泰編著『華僑ネットワークと九州』	中国書店		285 ~ 302	2006年3月	福岡、孫文
五十嵐真子・三尾裕子(編)	戦後台湾における(日本) 植民地経験の連続・変貌・利用		風響社			2006年3月	台湾
植村邦彦	アジアは(アジア的)か		ナカニシヤ出版			2006年3月	アジア
早稲田大学地域文化エンハンシング研究センター(編)	アジア地域文化の構築 21世紀COEプログラム研究集成		雄山閣			2006年3月	アジア
東アジア近代史学会	特集 現代にとっての日露戦争(東アジア近代史 第9号)		ゆまに書房			2006年3月	日露戦争
藤井一二	東アジアの交流と地域諸相		思文閣出版			2006年3月	東アジア
朴忠錫・渡辺浩(編)	「文明」「開化」「平和」日本と韓国		慶応義塾大学出版会			2006年3月	日韓関係
野村真理・弁納才一(編)	地域統合と人的移動 ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望		御茶の水書房			2006年3月	東アジア
小郡晶子	日本人移民政策と「満州国」政府の制度的対応	アジア経済		47(4)	2 ~ 20	2006年4月	満州、移民
片岡俊朗	日本とヨーロッパ(1914 ~ 1924年) 深井英五とJ. M. ケインズ	経済学論集(福山大)		31(1)	49 ~ 74	2006年4月	日欧
劉仙姫	転換期における日米韓関係(2) 完 プエプロ事件から沖縄返還まで	法学論叢(京大)		159(1)	53 ~ 73	2006年4月	日米韓関係
田村栄子	ヨーロッパ文化と(日本) モデルネの国際文化学		昭和堂			2006年4月	
藤井信行	「日英同盟」協約交渉とイギリス外交政策		春風社			2006年4月	日英同盟
末廣昭編	(岩波講座「帝国」日本の学知6) 地域研究としてのアジア		岩波書店			2006年4月	アジア
松浦正孝	日中戦争はなぜ南下したのか(1)	北大法学論集		57(1)	1 ~ 66	2006年5月	日中戦争
籠谷直人	19世紀の東アジアにおける主権的国家形成と帝国主義	歴史科学		184	4 ~ 13	2006年5月	東アジア、帝国主義
君島和彦	中村哲編著『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか 日・中・韓・台の歴史教科書の比較から』	歴史学研究		814	38 ~ 41	2006年5月	東アジア
三ツ井崇	植民地朝鮮におけるハンゲル運動と「伝統」「訓民正音」・植民地権力、そして「言語運動史」	歴史評論		673	57 ~ 76	2006年5月	朝鮮、植民地
外務省欧亚局東欧課作成・竹内桂(編)	戦時日ソ交渉史		ゆまに書房			2006年5月	日ソ
今井就稔	日中戦争後期の上海における中国資本家の対日「合作」事業 棉花の買付けを事例として	史学雑誌		115(6)	65 ~ 87	2006年6月	日中戦争
小林和夫	インドネシアにおける「創られた伝統」の萌芽と制度化の端緒 日本占領期ジャワにおけるゴトン・ヨロン(相互扶助)をめぐる	東南アジア研究(京大)		44(1)	55 ~ 77	2006年6月	インドネシア、日本占領
井上直樹	日露戦争後の日本の大陸政策と「満州史」 高句麗史研究のための基礎的考察	洛北史学		8	55 ~ 84	2006年6月	日露戦争
白永瑞	20世紀の韓国歴史教科書に見る東アジアの「近代」像	歴史学研究		815	14 ~ 17	2006年6月	韓国
松本健一	日・中・韓のナショナリズム 東アジア共同体への道		第三文明社			2006年6月	東アジア
田中秀雄(編)	もうひとつの南京事件 日本人遭難者の記録		芙蓉書房出版			2006年6月	南京事件
姜克実	満州幻想の成立過程 日露戦前の日本人満州認識	紀要(岡山大・文)		45	17 ~ 31	2006年7月	満州

島田昌幸	東京のフランケンシュタイン あるオーストリア＝ハンガリー 外交官の東京駐在 (1911-13年) (1)	紀要(学習院高)		4	43～64	2006年7月	日本、オーストリア・ハンガリー
川崎陽	戦時下朝鮮における日本語普及 政策	史林		89(4)	97～132	2006年7月	朝鮮、日本語普及 政策
劉仙姫	1970年の駐韓米軍削減決定をめ ぐる日米韓関係(1)	法学論叢(京大)		159(4)	30～54	2006年7月	日米韓関係
森靖夫	近代日本の陸軍統制と満州事変 (1) 1922～1933年	法学論叢(京大)		159(4)	74～102	2006年7月	満州事変
中村元哉	『日本史講座』とアジア史 中国 近代史の視点から	歴史評論		675	18～25	2006年7月	アジア
マーク・カプリ オカプリオ (中 西恭子訳)	近代東アジアのグローバリゼー ション		明石書店			2006年7月	東アジア
仲正昌樹	日本とドイツ2つの全体主義 「戦前思想」を描く		光文社			2006年7月	日独
谷淵茂樹	日清開戦をめぐる李鴻章の朝鮮 政策	史学研究		253	43～63	2006年8月	日清、朝鮮
カレン・ウィゲ ン	文化・権力・地域 東アジア地 域主義の新たな展望	年報(飯田市歴史研 究所)		4	100～118	2006年8月	東アジア地域
大日方純夫	日中韓3国共通歴史教材づくり における議論点 歴史叙述・歴 史研究とかがわって	歴史科学		185	23～31	2006年8月	日中韓
浜口裕子	1920年代前半の中国における反 日運動と日本 橋樑の論評を通 して	論集(政治・経済・ 法律研究)(拓殖大)		9(1)	32～43	2006年8月	反日運動
麻田雅文	中東鉄道警備隊と満州の軍事パ ランス 1897-1907年	『スラブ・ユーラシ ア学の構築』	北海道大学スラブ 研究センター	17	81～98	2006年9月	満州
佐藤公彦	1895年の古田教案 齋教・日清 戦争の影・ミッションナリー外 交の転換	アジア・アフリカ言 語文化研究(東京外 大)		72	66～123	2006年9月	日清戦争
馮青	日清戦争後の清朝海軍の再建と 日本の役割	軍事史学		166	47～65	2006年9月	日清戦争
鈴木仁麗	満州国興安省の初期統治構想と その転換	史観		155	56～75	2006年9月	満州
大月健	橋本傳左衛門と満州国関係資料	社会システム研究 (立命館大)		13	123～128	2006年9月	満州
正田康行	「大東亜共栄圏」における経済統 制と企業 満州を中心に	杉山伸也責任編集 『「帝国」の経済学』 (岩波講座『「帝国」日 本の学知』第2巻)	岩波書店		257～302	2006年9月	大東亜共栄圏、満 州
嵯峨隆	孫文のアジア主義と日本 「大 アジア主義」講演との関連で	法学研究(慶大)		79(4)	27～59	2006年9月	アジア主義
齋岡聡史	満州事変と鉄道復興問題 瀋海 線を巡る関東軍・満鉄・満州青 年連盟	法学政治学論究(慶 大)		70	267～297	2006年9月	満州事変
大阪経済法科大 学島間資料研究 会(編)	満州事変前夜における在間島日 本総領事館文書(下) 付・通商 局関係文書		大阪経済法科大学 出版部			2006年9月	満州事変
中野隆生編	都市空間と民衆 日本とフラン ス		山川出版社			2006年9月	日仏
日本会議事業セ ンター企画	これだけは知っておきたい大東 亜戦争		明成社			2006年9月	大東亜戦争
北川隆吉(監 修)・山口博一・ 小倉充夫・田巻 松雄(編著)	地域研究の課題と方法 アジア ・アフリカ社会研究入門 理論 編		文化書房博文社			2006年9月	地域研究
田中耕司・今井 良一	植民地経営と農業技術 台湾・ 南方・満州	田中耕司責任編集 『実学としての科学 技術』(岩波講座『「帝 国」日本の学知』第7 巻)	岩波書店		99～138	2006年10月	植民地、台湾、満 州
フョードロフ・ パーベル	冷戦終焉期における日ソ関係 (1985-1991) (上)	立教法学		71	93～223	2006年10月	日ソ関係
太平洋戦争研究 会	日中戦争がよくわかる本		PHP研究所			2006年10月	日中戦争

大沼久夫(編)	朝鮮戦争と日本		新幹社			2006年10月	朝鮮戦争
藤本一孝	大東亜戦争と現在の日本 陸軍最後の青年将校、傘寿の想い		展転社			2006年10月	大東亜戦争
箕原俊洋	カリフォルニア州の排日運動と日米関係		有斐閣			2006年10月	排日、日米
鈴木信昭	日露戦争と中国 ロシア駐在公使 胡惟徳の活動	史潮		新60	80 ~ 81	2006年11月	日露戦争
高橋龍三郎	アジア地域文化学の発展 総論	早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化学の発展 (21世紀COEプログラム研究集成)』	雄山閣		2 ~ 28	2006年11月	アジア地域
加藤聖文	満鉄全史 「国策会社」の全貌		講談社			2006年11月	満鉄
後藤春美	上海をめぐる日英関係 1925-1932年 日英同盟後の協調と対抗		東京大学出版会			2006年11月	日英同盟、帝国
永沢道雄	なぜこれほど歴史認識が違うのか 日中関係の光と影		光人社			2006年11月	日中関係
山田洋次他	別冊環12 満鉄とは何だったのか		藤原書店			2006年11月	満鉄
小林英夫	満鉄調査部の軌跡 1907-1945		藤原書店			2006年11月	満鉄
早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター(編)	アジア地域文化学の発展 21世紀COEプログラム研究集成		雄山閣			2006年11月	アジア地域
中見立夫	満州とは何だったのか(新装版)		藤原書店			2006年11月	満州
中村哲夫	日中戦争を読む		晃洋書房			2006年11月	日中戦争
李錬	朝鮮総督府の機関紙「京城日報」の創刊背景とその役割について	メディア史研究		21	89 ~ 104	2006年12月	朝鮮関係
宋亮	日中友好協会と中日友好協会	紀要(横浜市大・国際文化研)		13	119 ~ 144	2006年12月	日中
麻田雅文	「中東鉄道海洋汽船」と極東の海運	研究論集(北大・院・文学)		6	41 ~ 63	2006年12月	極東
岡部達味	日中関係の過去と将来 誤解を越えて		岩波書店			2006年12月	日中関係
梶居佳広	「植民地」支配の史的研究 戦前期日本に関する英国外交報告からの検証		法律文化社			2006年12月	植民地
松本郁子	太田覚眠と日露交流 ロシアに道を求めた伝教者		ミネルヴァ書房			2006年12月	日露
北川隆吉(監修)・北原淳竹・内陸夫他(編)著	地域研究の課題と方法 アジア・アフリカ社会研究入門 実証編		文化書房博文社			2006年12月	地域研究
菅野敦志	1950年代台湾における文化的脱植民地化と「日本」	現代中国		81	173 ~ 186	2007年	台湾
檜山幸夫	台湾総督府陸軍機密費関係文書について 台湾陸軍幕僚参謀長宮本照明少将手元文書を事例とする日本近代資料論的考察	社会科学研究(中京大)		27(1)	1 ~ 178	2007年1月	台湾
張静	中国知識人と太平洋問題調査会第3回京都会議	淡沢研究		19	3 ~ 25	2007年1月	東アジア、太平洋
吉沢誠一郎	五四運動における暴力と秩序	歴史評論		681	16 ~ 29	2007年1月	五四運動
山本有造	「満州」記憶と歴史		京都大学学術出版会			2007年1月	満州
田中宏・板垣竜太(編)	日韓 新たな始まりのための20章		岩波書店			2007年1月	日韓
細谷千博	綿麦借款と米・中・日 1933-34年	外交資料館報		20	369 ~ 380	2007年2月	

澁谷由里	「満州国」崩壊後の戦犯問題	紀要(富山大・人文)		46	37 ~ 57	2007年2月	満州
荒武達朗	日本統治時代台湾東部への移民と送内地	人間社会文化研究(徳島大・総合)		14	91 ~ 104	2007年2月	台湾、移民
森田光博	「満州国」の対ヨーロッパ外交(1)	成城法学		75	73 ~ 137	2007年2月	満州
やまだあつし	植民地台湾から委任統治領南洋群島へ 南進構想の虚実	浅野豊美編集『南洋群島と帝国・国際秩序』	慈学社出版		139 ~ 163	2007年2月	台湾関係、朝鮮関係
小林玲子	植民地朝鮮からの朝鮮人労働者移入制限差別問題	浅野豊美編集『南洋群島と帝国・国際秩序』	慈学社出版		165 ~ 198	2007年2月	朝鮮関係
游鑑明	日本統治期における台湾新女性のコロニアル・モダニティについて	早川紀代ほか編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』	青木書店		355 ~ 376	2007年2月	台湾関係
金世姫	満州における日本の門戸開放主義 1931 ~ 1933年を中心に	文学研究論集(明大・院)		26	141 ~ 160	2007年2月	満州
金丸裕一	抗日・排日関係史料 上海商工会議所「金曜パンフレット」別巻		ゆまに書房			2007年2月	抗日、排日
金丸裕一	抗日・排日関係史料 上海商工会議所「金曜パンフレット」第6巻~第11巻		ゆまに書房			2007年2月	抗日、排日
原田敬一	日清・日露戦争		岩波書店			2007年2月	日清、日露
三宅正樹	スターリン、ヒトラーと日ソ独伊連合構想		朝日新聞社			2007年2月	日ソ独伊
永井和	日中戦争から世界戦争へ		思文閣出版			2007年2月	日中戦争
清水寛(編)	十五年戦争極秘資料集(史料集成 戦争と障害者 第1冊『病床日誌』補巻28)		不二出版			2007年2月	十五年戦争
石田憲	膨張する帝国 拡大する帝国 第二次大戦に向かう日英とアジア		東京大学出版会			2007年2月	日英
池田浩士	大東亜共栄圏の文化建設		人文書院			2007年2月	大東亜共栄圏
内田知行・柴田善雅(編著)	日本蒙疆占領 1937-1945		研分出版			2007年2月	日中関係
藤田高夫	日中交渉史における時代区分の可能性	アジア文化交流研究(関西大)		2	313 ~ 322	2007年3月	日中
権容爽	岸内閣期の韓日関係と北朝鮮帰還問題	一ツ橋法学		6(1)	71 ~ 91	2007年3月	日韓、北朝鮮
マンガフ・アリウンサイハン	モンゴル・ソ連相互援助規定書の締結と日本・ソ連・中国	一橋社会科学		2	19 ~ 24	2007年3月	日本、ソ連、中国
瀬端源	小泉信三の象徴天皇論『帝室論』と『ジョオジ5世伝』を中心として	一橋社会科学		2	43 ~ 67	2007年3月	象徴天皇
竹中亨	明治期の洋学留学生と外国人教師 ドイツとの関係を中心に	紀要(阪大・院・文学)		47	1 ~ 24	2007年3月	日本、ドイツ
下地淳二	アメリカ日系社会における1924年移民法の位置づけ	紀要(人文社会科学・北海道東海大)		19	27 ~ 36	2007年3月	日本、アメリカ
鄭任智	日本の台湾領有時代における映画の諸相 郷土教育の視点から	紀要(早大・院・教育学)		別冊14(2)	105 ~ 115	2007年3月	台湾関係
山本一生	1920-1930年代における満州公学堂教員の意識変容 教育雑誌『南満教育』の分析を中心に	紀要(東大・院・教育学研)		46	31 ~ 42	2007年3月	満州
中里成章	日本軍の南方作戦とインドベンガルにおける拒絶作戦(1942-43年)を中心に	紀要(東大・東文研)		151	149 ~ 218	2007年3月	インド、日本軍
山内昌斗	英国サミュエル商会のグローバル展開と日本	経済研究論集(広島大)		29(4)	113 ~ 136	2007年3月	日本、イギリス
金瑛二	日本の歴史教科書における朝鮮史の記述 扶桑社版を中心として	研究論集(河合文化教育研)		4	71 ~ 87	2007年3月	朝鮮関係
徐勇著(井上徳子訳)	日中「軍閥」現象およびその解釈の比較研究	研究論集(河合文化教育研)		4	89 ~ 97	2007年3月	日中関係

松本脩作	(史料)戦時下の日印教会調査活動の一断面 新たに発見された第二次大戦中のインド・セイロン関係調査資料リスト	史資料ハブ：地域文化研究		9	110～131	2007年3月	インド
A・ラシド・アスパ(菅原由美訳)	南スラウェシにおける日本軍政 インドネシアにおけるオーラル・ヒストリー初期的研究	史資料ハブ：地域文化研究		9	132～140	2007年3月	インドネシア、日本軍政
栗原純	日本による台湾植民地統治とマラリア 「台湾総督府公文類纂」を中心として	社会科学研究(中京大)		27(2)	107～168	2007年3月	台湾、植民地
酒井恵美子	台湾総督府編纂国語読本の編集方針 使用語彙の選択をめぐって	社会科学研究(中京大)		27(2)	191～228	2007年3月	台湾
土肥恒之	帝政ロシアの地域史家たち	社会経済史研究		72(6)	89～94	2007年3月	地域史家
森田光博	「満州国」の対ヨーロッパ外交(2・完)	成城法学		76	61～164	2007年3月	満州
朴英璇	朝鮮総督府による改良韓紙と和紙製造法の普及	多元文化(名大)		7	75～87	2007年3月	朝鮮総督府
恩河尚	戦後沖縄における引き揚げの歴史的背景とその意義	東アジア近代史		10	10～30	2007年3月	沖縄
山本真	第二次大戦後、台湾海峡兩岸における人の移動とその背景	東アジア近代史		10	31～51	2007年3月	台湾
小林英夫	戦後東アジアにおける日本人団体の活動——引き揚げから企業進出まで	東アジア近代史		10	76～86	2007年3月	引き揚げ
堤和幸	日本植民地時期台湾における小作慣行と蓬萊米栽培	東洋史訪		13	1～19	2007年3月	台湾関係
竹中亨	世紀転換期におけるドイツの日本観 諷刺雑誌の挿画を材料に	武田雅哉代表『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究』(科研費報告書)	北海道大学大学院文学研究科		108～117	2007年3月	日本、ドイツ
大谷渡	記憶の中の台湾と日本 統治下において高等教育を受けた人々	文学論集(関西大)		56(4)	47～72	2007年3月	台湾
後藤新平	台湾出兵と琉球処分 琉球藩の内務省移管を中心として	法学政治学論究(慶大)		72	185～214	2007年3月	台湾出兵、琉球処分
古橋千明	英国における柿右衛門研究史(1) 19世紀から1940年代まで	論集(九州産業大・柿右衛門様式陶芸研究センター)		3	113～140	2007年3月	日欧関係
厳安生	中・日近代化における先見の効用 『特命全権大使米欧回覧実記』と『郭崇燾倫敦与巴黎日記』	論集(大手前大・人文科学)		7	1～22	2007年3月	日中
濱下武志	グローバリゼーションの中の東アジア地政文化 東アジア海域文化研究の課題	濱下武志、崔章集編『東アジアの中の日韓交流』	慶應義塾大学出版会		257～279	2007年3月	グローバリゼーション、東アジア
崔章集	「東アジアの平和共同体」 冷戦後期における日韓関係の「重なり合う意味空間」	濱下武志、崔章集編『東アジアの中の日韓交流』	慶應義塾大学出版会		3～48	2007年3月	東アジア、日韓関係
白石さや	東アジア大衆文化ネットワークと日韓文化交流		日韓交流		49～76	2007年3月	東アジア
山本武利(編・解説)	十五年戦争極秘資料集(宣撫月報 第8冊 通巻第61号 補巻25)		不二出版			2007年3月	十五年戦争
平川新(監修)・寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子・藤原潤子(編)	ロシア史料にみおる18～19世紀の日露関係 第2集		東北大学東北アジア研究センター			2007年3月	日本、ロシア
明石岩雄	日中戦争についての歴史的考察		思文閣出版			2007年3月	日中戦争
李彩花・鈴木正(編)	アジアと日本 平和思想としてのアジア主義		農村漁村文化協会			2007年3月	アジア主義
殷燕軍	日中講和の研究 戦後日中関係の原点		柏書房			2007年3月	日中関係
四方田雅史	戦前期日本・中国におけるメリヤス製造業 市場変動・需要の多様性への対応に着目して	アジア研究		53(2)	42～59	2007年4月	日中

岡田実	日中「戦後和解」プロセスと経済協力「1979年体制」をめぐる一考察	アジア研究		53(2)	76～90	2007年4月	日中
古川宣子	植民地近代社会における初等教育構造 朝鮮における非義務制と学校「普及」問題	駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』	昭和堂		129～164	2007年4月	朝鮮関係
北村芳恵	蕃童教育所における就学者増大の具体相 台湾総督府の就学督励とその現実的基盤をめぐる	駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』	昭和堂		165～193	2007年4月	台湾関係
李省展	帝国・近代・ミッションスクール ビョンヤンにおける「帝国内帝国」と崇実学校	駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』	昭和堂		227～263	2007年4月	朝鮮関係
長志珠絵	『満州』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場 女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に	駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』	昭和堂		337～377	2007年4月	日中関係
宇都宮太郎関係資料研究会(編)	日本陸軍とアジア政策(陸軍大將宇都宮太郎日記1)		岩波書店			2007年4月	日本陸軍、アジア
梶島有三	米ソのアジア戦略と大東亜戦争		明成社			2007年4月	アジア、大東亜戦争
清水寛(編)	十五年戦争極秘資料集 補巻28 資料集成 戦争と障害者 第2冊「病床日誌」知的障害者編(2)		不二出版			2007年4月	十五年戦争
石田憲(編)	膨張する帝国、拡散する帝国 第二次大戦に向かう日英とアジア		東京大学出版会			2007年4月	日本、イギリス、アジア
大友昌子	帝国日本の植民地社会事業政策研究 台湾・朝鮮		ミネルヴァ書房			2007年4月	植民地、台湾、朝鮮
望田幸男(編)	近代日本とドイツ 比較と関係の歴史学		ミネルヴァ書房			2007年4月	日本、ドイツ
満川亀次郎	奪われたるアジア 歴史的地域研究と思想的評論		書肆心水			2007年4月	歴史的地域研究
西村成雄、田中仁(編)	現代中国地域研究の新たな視園		世界思想社			2007年4月	中国
南龍瑞	「満州国」における豊満水力発電所の建設と戦後の再建	アジア経済		48(5)	2～20	2007年5月	満州
山本睦	ニューカッスル発日本行き 日英関係史におけるアームストロング社製戦艦にまつわる記号性	言語文化(同志社)		10(1)	44～60	2007年5月	日本、イギリス、軍事
平井健介	1900～1920年代東アジアにおける砂糖貿易と台湾糖	社会経済史学		73(1)	27～49	2007年5月	台湾関係
八木希容子	ドイツ海軍が期待した日本の役割 1940～1941年(1)	政治経済史学		489	1～18	2007年5月	日本、ドイツ
伊藤之雄・川田稔(編)	20世紀日本と東アジアの形成 1867-2006		ミネルヴァ書房			2007年5月	東アジア、日本
松村高夫	日本帝国主義下の植民地労働史		不二出版			2007年5月	植民地全般
平間洋一	第二次世界大戦と日独伊三国同盟 海軍とコミンテルンの視点から		錦正社			2007年5月	日独伊
曾田三郎	第一次世界大戦と日中関係	『地域アカデミー2006公開講座報告書』(広島大学大学院文学研究科歴史文化学講座)			47～57	2007年6月	日中関係
シュラトフ・ヤロスラフ	朝鮮問題をめぐる日露関係	スラヴ研究		54	183～206	2007年6月	日本、ロシア、朝鮮
内田尚考	冀察政務委員会の対日交渉と現地日本軍 「防共協定」締結問題と「冀東防共自治政府」解消問題を中心に	近きに在りて		51	2～12	2007年6月	日中関係
菊地一隆	抗日戦争時期における朝鮮華僑の動態と構造	近きに在りて		51	69～80	2007年6月	朝鮮関係
八木希容子	ドイツ海軍が期待した日本の役割 1940～1941年(2)	政治経済史学		490	27～46	2007年6月	日本、ドイツ
田嶋信雄	孫文の「中独ソ三国連合」構想と日本 「連ソ」路線および「大アジア主義」再考	服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部		3～52	2007年6月	日中関係

高光佳絵	ホーンベック国務省政治顧問の対日強硬化とアメリカの日中戦争観 1937～1938年	服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部		351～388	2007年6月	日中関係
高橋勝浩	日中開戦後の日本の対米宣伝政策 『正義日本』の宣明から文化事業へ	服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部		391～437	2007年6月	日中関係
加藤陽子	興亜院設置問題の再検討 その予備的考察	服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部		439～499	2007年6月	日中関係
李榮娘	原内閣における朝鮮の官制改革論	服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部		53～84	2007年6月	朝鮮関係
宮下隆二	イーハトーブと満州国 宮沢賢治と石原莞爾が描いた理想郷		PHP研究所			2007年6月	満州
石島紀之	ナショナル・ヒストリーを超える日中戦争史をめざして 一研究者からの提言	歴史評論		689	2～13	2007年6月	日中関係
富田哲	台湾総督府の「種族」・言語認識 日本統治初期の人口センサス・戸口調査・通訳兼掌手当	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		115～148	2007年6月	台湾関係
上田崇仁	『放送教本初等国語講座』に見る「国語」教育	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		149～176	2007年6月	朝鮮、台湾関係
上水流久彦	台湾の植民地支配にみる計開の資料的価値に関する一試論	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		177～210	2007年6月	台湾関係
山路勝彦	台湾で神として祀られた日本兵	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		229～256	2007年6月	台湾関係
松金公正	植民地期における日本仏教による台南地域への布教	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		287～330	2007年6月	台湾関係
藤井賢二	朝鮮引揚者と韓国 朝水会の活動を中心に	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		3～46	2007年6月	朝鮮関係
西村一之	台湾東海岸における漢人・アミ漁民と沖繩漁民の接触 植民統治末期から戦後初期を中心に	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		47～82	2007年6月	日中関係
服部聡	有田八郎外相と「東亜新秩序」	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		501～552	2007年6月	日中関係
山田寛人	植民地朝鮮における日本語教育の近代的側面 日本人から見た、朝鮮人にとっての日本語の意味	崔吉城ほか編『植民地の朝鮮と台湾』	第一書房		83～113	2007年6月	朝鮮関係
加藤陽子	満州事変から日中戦争へ		岩波書店			2007年6月	満州事変、日中戦争
子安宜邦・崔文衡	歴史共有体としての東アジア 日露戦争と日韓の歴史認識		藤原書店			2007年6月	日露戦争、日韓
川島真・服部龍二(編)	東アジア国際政治史		名古屋大学出版会			2007年6月	東アジア
波多野勝	昭和天皇とラストエンペラー 溥儀と満州国の真実		草思社			2007年6月	満州
服部卓四郎	大東亜戦争全史		原書房			2007年6月	大東亜戦争
服部龍二・土田哲夫・後藤春美(編)	戦間期の東アジア国際政治		中央大学出版会			2007年6月	東アジア
崔吉城・原田環	植民地の朝鮮と台湾 歴史・文化人類学的研究		第一書房			2007年6月	植民地、朝鮮、台湾
趙寛子	植民地朝鮮／帝国日本の文化連環 ナショナリズムと反復する植民地主義		有志舎			2007年6月	植民地、朝鮮
察易達	林献堂の台湾土着民族資料の成立及び人材養成に関する一考察：昭和期の「林献堂日記」を巡って	拓殖大学百年史研究		5	59～75	2007年7月	台湾
島田昌幸	東京のフランケンシュタイン あるオーストリア＝ハンガリー外交官の東京駐在（1911-13年）(2)	紀要(学習院高)		5	91～103	2007年7月	日本、オーストリア・ハンガリー
山下重一	1820-30年代における英米戦艦の琉球来航	国学院法学		45(1)	95～151	2007年7月	琉球、イギリス、アメリカ

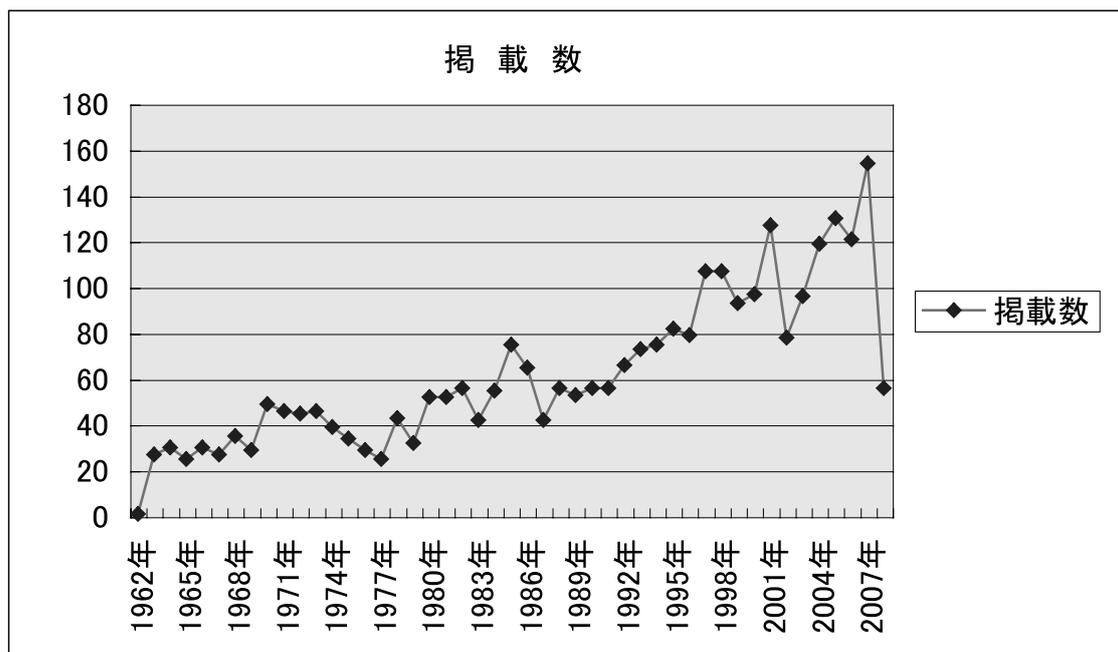
井内太郎	三浦按針 青い目のサムライの見た日本	地域アカデミー 2006 公開講座報告書 (広島大学大学院文学研究科歴史文化学講座)			5 ~ 17	2007年7月	日欧関係
井上寿一	日中戦争下の日本		講談社			2007年7月	日中戦争
宇都宮太郎関係資料研究会(編)	日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記		岩波書店			2007年7月	日本陸軍、アジア
小林秀夫	日中戦争 殲滅戦から消耗戦へ		講談社			2007年7月	日中戦争
植民地文化研究会(編)	植民地文化研究 史料と分析 「満州国」文化と台湾(6)		不二出版			2007年7月	植民地、満州、台湾
太平洋戦争研究会・森山康平	日中戦争の全貌		河出書房新社			2007年7月	日中戦争
潮巨人	司馬史観と太平洋戦争		PHP研究所			2007年7月	太平洋戦争
山本睦	ニューカッスル発日本行き 日英関係史におけるアームストロング社製戦艦にまつわる記号性	言語文化(同志社大)		10(1)	73 ~ 100	2007年8月	日欧関係
丸川哲史	台湾における脱植民地化と祖国化 二・二八事件前後の文学運動から		明石書店			2007年8月	台湾関係
吉田裕	アジア・太平洋戦争 (岩波新書新赤版1047)		岩波書店			2007年8月	東アジア、太平洋
内海愛子・上杉聰・福留範昭	遺骸の戦後 朝鮮人強制動員と日本		岩波書店			2007年8月	強制動員、日本、朝鮮
鄭任智	台湾の日本統治時代における社会郷土教育 台湾青年団体の発展を中心に	紀要(早大・院・教育学)		別冊15(1)	93 ~ 102	2007年9月	台湾関係
河合利修	第一次世界大戦中の日本赤十字社による英仏露国への救護班派遣	軍事史学		43-2	4 ~ 25	2007年9月	日本、イギリス、フランス、ロシア
坂井田夕起子	1950年代の日華仏教交流再開 玄奘三蔵の遺骨「返還」をめぐる	現代台湾研究		32	46 ~ 64	2007年9月	台湾関係
佐藤量	グローバル・シティと植民地都市 大連市の事例から	言語文化研究(立命館大)		19(1)	111 ~ 115	2007年9月	日中関係
武継平	「支那趣味」から「大東亜共栄」構想へ 佐藤春夫の中国観	言語文化研究(立命館大)		19(1)	259 ~ 270	2007年9月	日中関係
大出高子	「満州国」の博物館建設 国立博物館の成立過程と収蔵品	史境		55	48 ~ 63	2007年9月	日中関係
大澤武司	戦後東アジア地域秩序の再編と中国残留日本人の発生 「送還」と「留用」のはざま	年報(中央大・政策文化総合研)		10	35 ~ 51	2007年9月	日中関係
成田龍一	記憶にいた穴 「日中戦争」をめぐる	歴史評論		689	26 ~ 39	2007年9月	日中関係
川島真	戦後補償問題と歴史学の役割について 日中関係を中心に	歴史評論		689	40 ~ 51	2007年9月	日中関係
呉懐中	大川周明と近代中国		日本僑報社			2007年9月	日中関係
鈴木正崇	東アジアの近代と日本		慶應義塾大学出版会			2007年9月	東アジア
猪俣賢司	南洋群島とインファント島—帝国日本の南洋航空路とモスラの映像詩学—	人文科学研究(新潟大学人文学部)		121	191 ~ 123	2007年10月	南洋群島
土田哲夫	中国抗戦と対日宣戦問題	年報(中央大・経済研)		38	203 ~ 219	2007年10月	日中関係
大谷渡	記憶の中の台湾と日本(2) 統治下において高等教育を受けた人々	文学論集(関西大)		57(2)	27 ~ 57	2007年10月	台湾関係
土肥恒之	地域の比較社会史 ヨーロッパとロシア		日本エディタースクール出版部			2007年10月	アジア—ヨーロッパ関係
全相運	東アジア科学史の研究	科学史研究		243	172 ~ 176	2007年11月	東アジア

陳慈玉	戦後の台湾における石炭業 1945年-1980年 斜陽産業の一 例として	立命館経済学		56(4)	1 ~ 24	2007年11月	台湾関係
諸点淑	植民地朝鮮における日本仏教の 社会事業に関する一考察 真宗 大谷派の「向上会館」を事例とし て	立命館史学		28	51 ~ 81	2007年11月	朝鮮関係
富田武	満州事変前後の日ソ漁業交渉 国家統制下の漁区安定化へ	歴史学研究		834	47 ~ 63	2007年11月	日本、ソ連
松本武祝	植民地朝鮮における衛生・医療 制度の改編と朝鮮人社会の反応	歴史学研究		834	5 ~ 15	2007年11月	朝鮮関係
パールイシエ フ・エドワルド	日露同盟の時代 1914-1917年 「例外的な友好」の真相		花書院			2007年11月	日露関係
一之瀬俊也	旅順と南京 日中五十年戦争の 起源		文芸春秋			2007年11月	日中関係
水嶋都香	日中戦争とノモンハン事件 太 平洋戦争への道		第一書房			2007年11月	日中関係
胎中千鶴	植民地台湾を語るということ 八田興一の「物語」を読み解く		風響社			2007年11月	台湾関係
田中明彦	(日本の現代 2)アジアのなか の日本		NTT出版			2007年11月	東アジア
阮・クリーマ ン・フェイ (林 ゆう子訳)	大日本帝国のクレオール 植民 地期台湾の日本語文学		慶應義塾大学出版 会			2007年11月	台湾関係
笠原十九司	南京事件70年の日本と世界	歴史学研究		835	18 ~ 27	2007年12月	日中関係
アイリス・チャ ン(巫招鴻訳)	ザ・レイブ・オブ・南京		同時代社			2007年12月	日中関係
笠原十九司	南京事件論争史 日本人は史実 をどう認識してきたか		平凡社			2007年12月	日中関係
松浦正孝	昭和・アジア主義の実像 帝国 日本と台湾・「南洋」・「南支那」		ミネルヴァ書房			2007年12月	日中関係、台湾関 係
早川紀代他(編)	東アジアの国民国家形成とジェ ンダー 女性像をめぐって		青木書店			2007年12月	東アジア
本間はるか	幕末における北東アジア諸民族 の交流について——主に「サン タン人」とカラフトアイヌを中 心に	アジア文化史研究		8	11 ~ 46	2008年	北東アジア、カラ フト
菅野敦志	台湾に消えたもう一つの「国語」 運動——朱兆祥と「語文乙刊」	現代中国		82	171 ~ 187	2008年	台湾
礪玉璽	ドイツ・日本の青島進出とイン フラ整備 1897 ~ 1945年を中 心に	アジア研究		54(1)	78 ~ 94	2008年1月	日中関係
矢野久	日本の植民地労働者の強制労働 日独の比較社会史の観点から	三田学会雑誌		100(4)	103 ~ 130	2008年1月	強制労働
山本唯人	アジア・太平洋地域における都 市空襲地図の作成と中国調査報 告	『シンポジウム「無差 別爆撃の源流 ゲル ニカ・中国都市爆撃 を検証する」報告書』	政治経済研究所付 属東京大空襲・戦 災資料センター戦 争災害研究室		35 ~ 44	2008年2月	アジア
植野弘子	台湾における名前の日本化 日 本統治下の「改姓名」と「内地式 命名」	研究年報		42	97 ~ 108	2008年2月	台湾関係
岡本真希子	植民地官僚の政治史 朝鮮・台 湾総督府と帝国日本		三元社			2008年2月	朝鮮関係、台湾関 係
玉野井麻利子 (編)	満州 交錯する歴史		藤原書店			2008年2月	満州関係
山路勝彦	近代日本の植民地博覧会		風響社			2008年2月	植民地全般
弁納オー・鶴園 裕(編)	東アジア共生の歴史的基礎 日 本・中国・南北コリアの対話 金沢大学重点研究		お茶の水書房			2008年2月	アジア
林 満紅	日本政府と台湾籍民の対東南ア ジア投資(1895-1945)	アジア文化交流研究		3	455 ~ 485	2008年3月	台湾関係
高橋博子	原爆投下1分後 消された残留 放射線の影響	アメリカ学研究		42	1 ~ 19	2008年3月	原爆
スヴェン・サー ラ	ドイツと日本における「終戦」 「敗戦」「解放」の記憶	ヨーロッパ研究(東 大)		7	5 ~ 28	2008年3月	日本、ドイツ

鶴間和幸	講演 東アジア海の文明を求めて	学習院史学		46	61 ~ 72	2008年3月	東アジア
上田哲二	植民地都市の記憶 花蓮築港と楊牧	言語文化学(阪大)		17	183 ~ 196	2008年3月	花蓮築港
江藤名保子	中国の対外戦略と日中平和友好条約	国際政治		152	36 ~ 50	2008年3月	日中関係
趙軍	近代中国社会における対日世論の形成過程に関する考察 『申報』などの対日世論を中心として	国府台経済研究		19(3)	103 ~ 165	2008年3月	日中関係
儀我壮一郎	張作霖爆殺事件の真相	社会科学年報(専大)		42	29 ~ 44	2008年3月	日中関係
塩崎弘明	教皇庁の対東アジア外交政策 日本及び中国との外交関係樹立への道	人間文化研究シリーズ(長崎純心大・院)		6	1 ~ 40	2008年3月	日本、教皇庁
高媛	戦地から観光地へ 日露戦争前後の「満州」旅行	中国21		29	203 ~ 218	2008年3月	満州関係
並木頼寿	「東アジア」概念について考える	東アジア近代史		11	1 ~ 5	2008年3月	東アジア
横井香織	日本統治期の台湾におけるアジア調査——台湾総督官房調査課『南支那及南洋調査』の分析を中心に	東アジア近代史		11	34 ~ 66	2008年3月	台湾
黄東蘭	中国における「亜細亞」概念の受容	東アジア近代史		11	6 ~ 25	2008年3月	亜細亞
三ツ井崇	植民地朝鮮における言語運動と支配権力 その実態分析と研究史批判	東アジア研究(大阪経法大)		50	11 ~ 19	2008年3月	朝鮮関係
呉成哲	朝鮮の植民地学校の規律とナショナリズム	東アジア研究(大阪経法大)		49	59 ~ 71	2008年3月	朝鮮関係
許佩賢	戦時期台湾の学校生活における規律と戦後	東アジア研究(大阪経法大)		49	73 ~ 84	2008年3月	台湾関係
川口幸宏	植民地朝鮮における同化教育実践研究試論 国語教育とりわけ綴方教育を事例として	東洋文化研究(学習院大)		10	1 ~ 36	2008年3月	朝鮮関係
カーター・エックカート(松谷基和訳)	北米における韓国植民地研究 最近の傾向	東洋文化研究(学習院大)		10	291 ~ 302	2008年3月	朝鮮関係
マーク・エリオット(松谷基和訳)	ヨーロッパ、米国における満州学 過去、現在、未来	東洋文化研究(学習院大)		10	309 ~ 326	2008年3月	満州関係
松本武祝	植民地朝鮮農村に生きた日本人	東洋文化研究(学習院大)		10	521 ~ 544	2008年3月	朝鮮関係
張紋絹	植民地台湾における台北市の空間創出 盛り場「西門町附近」を中心に	日本学報(阪大)		27	17 ~ 42	2008年3月	台湾関係
加藤晴康	日本の中のフランス革命 「草莽崛起」から「民権」へ	年報(専大・歴史学研究センター)		5	1 ~ 9	2008年3月	日欧関係
宮崎聖子	植民地期台湾における青年団と地域の変容		御茶の水書房			2008年3月	台湾関係
白取道博	満蒙開拓青少年義勇軍史研究		北海道大学出版会			2008年3月	満州関係
伊藤定良	国民国家と地域を見る視覚	伊藤定良, 平田雅博 編著『近代ヨーロッパを読み解く』	ミネルヴァ書房		1 ~ 26	2008年4月	理論
伊藤定良	国民国家と地域形成 オーバーシュレジェンを中心に	伊藤定良, 平田雅博 編著『近代ヨーロッパを読み解く』	ミネルヴァ書房		255 ~ 288	2008年4月	地域 ドイツ
浅田進史	植民地支配移行期における青島の工業化と貿易構造 日本勢力圏・東アジア経済・世界経済のはざままで	三田学会雑誌		101(1)	89 ~ 105	2008年4月	アジア
飯田恭	日本とプロイセンの土地制度史的比較をめぐる新たな論点	歴史と経済		199	45 ~ 54	2008年4月	日本、プロイセン
齋藤俊博	九一八事変後の北平における抗日論調 『世界日報』の「社評」と「読者論壇」から	歴史評論		696	63 ~ 81	2008年4月	日中関係

北村良枝	日本植民地下の台湾先住民教育史		北海道大学出版会			2008年4月	台湾関係
春山明哲	近代日本と台湾 霧社事件・植民地統治政策の研究		藤原書店			2008年6月	台湾関係
野間晴雄、筒井由起乃、伊藤未帆	「地域」を研究する：地理学と地域研究に関するノート	關西大學文學論集		58(1)	61～96	2008年7月	地域、地理学
高橋健男	満州開拓民悲史一碑が、土塊が、語りかける		批評社			2008年7月	満州
桜井由躬雄	ハノイの空間と時間	アジア遊学		113	110～118	2008年8月	ハノイ
植民地文化学会、中国東北淪陥14年史総編室(編著)	「満洲国」とは何だったのか：日中共同研究		小学館			2008年8月	満州
家田修	学界展望 スラブ・ユーラシア学の構築——スラブ研究センター 21世紀COEプログラムの試み	アジア経済		49(9)	45～54	2008年9月	ユーラシア
高田竜登	18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易	西南学院大学経済学論集		43(1・2)	37～62	2008年9月	アジア間貿易
中嶋啓雄	アメリカ史における地域	秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア：地域から問い直す国民国家史観』	大阪大学出版会			2008年10月	アメリカ、地域
小林玲子	「韓国併合」後の間島における朝鮮民族独立運動に対する日本の取縮	朝鮮学報		209	35～82	2008年10月	日朝関係
岡部牧夫	南満洲鉄道会社の研究		日本経済評論社			2008年10月	満州
林祐一	日中外交交流回想録—関懐過去探望将来		日本僑報社			2008年10月	日中関係
秋田茂・桃木至朗	歴史学のフロンティア：地域から問い直す国民国家史観		大阪大学出版会			2008年10月	地域
早瀬晋三	歴史空間としての海域を歩く		法政大学出版局			2008年11月	海域
孝忠延夫、鈴木賢(編)	北東アジアにおける法治の現状と課題—鈴木敬夫先生古稀記念		成文堂			2008年12月	北東アジア
浅田進史ほか	近代東北アジアの誕生—跨境史への試み		北海道大学図書刊行会			2008年12月	東北アジア
趙景達	植民地期朝鮮の知識人と民衆—植民地近代性論批判—		有志舎			2008年12月	朝鮮、植民地近代性
朱徳蘭	台湾「慰安婦」問題—論争と研究	歴史学研究		849	20～31	2009年1月	台湾
小松憲治	グローバリゼーションの歴史的展望—その功罪を問う	日本大学大学院総合社会情報研究科紀要		9	233～244	2009年2月	グローバリゼーション
鈴木文	明治初期日朝関係と詩文応酬	史観		160	18～36	2009年3月	日朝関係
鶴岡聡史	満州事変と満州鉄道利権問題—東北交通委員会の設立を巡る関東軍と満鉄	法学政治学論究		80	101～132	2009年3月	満州
今井武夫	日中和平工作 回想と証言 1937-1947		みすず書房			2009年3月	日中関係
大里浩秋孫安石	留学生派遣から見た近代日中関係史		御茶の水書房			2009年3月	日中関係
川島真・松田康博・楊永明・清水麗	日台関係史 1945-2008		東京大学出版会			2009年3月	台湾

年 次	掲 載 数	年 次	掲 載 数
1962年	1	1986年	65
1963年	27	1987年	42
1964年	30	1988年	56
1965年	25	1989年	53
1966年	30	1990年	56
1967年	27	1991年	56
1968年	35	1992年	66
1969年	29	1993年	73
1970年	49	1994年	75
1971年	46	1995年	82
1972年	45	1996年	79
1973年	46	1997年	107
1974年	39	1998年	107
1975年	34	1999年	93
1976年	29	2000年	97
1977年	25	2001年	127
1978年	43	2002年	78
1979年	32	2003年	96
1980年	52	2004年	119
1981年	52	2005年	130
1982年	56	2006年	121
1983年	42	2007年	154
1984年	55	2008年	56
1985年	75	合計	2912



おわりに

以上の研究を通じて、「地域」のもつポテンシャルが一定程度示されたといえよう。地域に取り組む福岡大学の姿をプレゼンテーションする機会を用意したことで、今後さらに発展させていくための土台を構築することができた。また台湾調査研究については、観光、宗教、二二八事件、ポストコロニアルなどの様々な観点から、台湾におけるアイデンティティーに関する考察が展開された。この考察を今後さらに深めていく過程において、本報告書のもうひとつの成果である地域研究に関するデータベースも大いに貢献しうる。これらの研究成果は、本研究の課題のひとつであった「大きな地域」と「小さい地域」をつなぐ回路（理論）を見出すヒントを提供するものとなる。

最後に、本研究チームの残された課題について触れておきたい。「地域」に対する福岡大学の取り組みについては、現時点では、「地域」と向き合うさまざまな活動の「点（＝経験）」が示されたにすぎない。シンポジウムの開催やデータベースの公開を通じて示されたさまざまな「点」を、「線」として実際に連携させ、「地域」に開かれた交流をさらに深めていくことが今後の課題となろう。その意味で『地域と福岡大学』は、あくまで福岡大学と地域との関連を考えるための起点であり、次の取り組みへの「架け橋」にすぎない。シンポジウムの題目に「(1)」と付けた意味、『地域と福岡大学』を「地域」叢書準備号」と銘打った意味はそこにある。

台湾調査研究では、広範囲な問題関心にもとづいた一方で、調査期間が3日間という限定的なものであったことから、台湾の現地の人々の声を拾うことができなかつたし、大学図書館や博物館での資料収集を行うことができなかつた。今後はこれらを本格的に展開させることで「地域」としての台湾に注目し、東アジアという「大きな地域」とのつながりに関する理解を深めることを課題としたい。

データベース作成については、地域における歴史叙述の主体というべき問題が課題として残った。個々の研究者による地域史研究は別にして、例えば、地域史のオーソドックスな書物である自治体史の編纂は、大学研究者や学芸員、市民との協同の産物である。現在当たり前のように存在する自治体史も、こうしたスタッフの存在や協同関係なしには有り得ない。そこには高度経済成長や市町村合併などを契機とした、地域社会の変貌を前に記録化しておきたいという希求があったにせよ、それを可能にする物的条件もまた不可欠だったはずである。戦前まで遡れば、学芸員のような存在が現在のようにどこにでもいたわけではないことが確認できる。それゆえに、他方で、一般には流通しないため認知度が低いものの、個人レベルや民間史学の団体および刊行物、学校単位で編纂されたテキスト『郷土読本』といったものも、戦前期から既に存在している。これらもまた、地域レベルの歴史叙述の実践にほかならないだろう。これらは、研究論文を対象とした本データベースでは完全に抜け落ちている。ただ、おそらくこうしたものをも視野に含めることに対して予想される反応は、学術レベルで見れば取るに足らない、といったものだろう。しかしここでは、地域の人々が地域の歴史を語る、あるいは語り出すこと自体に意味を与えたい。そこでは、ナショナルな歴史と接点を有しつつ、それには包摂されない地域の歴史が展開されているはずである。いずれにせよ、地域の歴史研究がどのように行われてきたのかという問題に劣らず、どこで、どのような人々によって、地域の歴史が扱われてきたのかという問題も重要だと思われる。この点は、今後の検討課題としたい。

福嶋 寛之
森 丈夫

